

真・恋姫?無双 魏国 再臨 番外

無月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

本編に置きそうにない視点、番外編、説明(?)はこちらに投稿したいと思います。

こっちは気まぐれに投稿かと思えます。

# 目次

管理者【夢那視点】	1
ハロウィン	8
11/11	13
罪	21
11/22, 11/23【華琳視点】	27
オリジナルキャラ 設定	37
冬至	45
クリスマス	53
大晦日	62
正月	72
二月二日	82
二月三日	91
クリスマス 式	100
クリスマス 式 おまけ【樟夏視点】	110
鏡割り?	113
日常	121
(白) おせち【法正視点】	127
オリジナルキャラ設定 式	135
バレンタイン【白陽視点】	139
バレンタイン【青陽視点】	148
(白) 破恋多陰出―【桃香視点】	156
バレンタインデー 後日談【樟夏視点】	167
白き陽と逢引きを	177
兄上達による寝間着談義【樹枝視点】	185

一周年	192
七夕	196
海の日	202
土用丑の日	212
二周年	220
夏祭り	234
月vs桂花【桂花視点】	246
クリスマス参【華琳視点】	256
法正	265
シンデレラバスト	270
オリジナルキャラ設定 参	275
《報告者 宝譚》 他から見たあの子	283
～ 白陽	
秋桜	292
水仙と蓬	298
彗扇と槐	305
紅火【紅火視点】	312
策士【朱里視点】	321
雪の日	328
義兄弟の恋模様【樹枝視点】	337
彗扇と緋扇	346
作者登場回	357
～ 宝譚といっしょ	

## 管理者 【夢那視点】

『<sup>むな</sup>夢那』

父が私を呼ぶ声が聴こえた。

父が私を短く呼んで膝を叩くとき、私は父の膝に乗っていい。あの場所は私の特等席。

『夢那は凄いわ！ すぐに私を超えて、大陸一の占い師になるんでしょうね』

母が私を褒めてくれる。

見様見真似に占いをし、母を喜ばせたかった。

最初は全てが嬉しいだけだった。

でも私の占いはいつしか未来すら、視るようになってしまった。

それが始まりで、終わり。

私がただの『管輅公明』でいられなくなり、あの世界の無力な占い師でいられなくなった原因。

人には過ぎた才を持つてしまった私は、『時の管理者』となって生き

終わることのないこの世界を、ずっと見てきた。

繰り返される戦乱、たった一つの選択で変わる世界の色。

卑弥呼、貂蟬、許子将、華佗、そして私。

この五人が行い、導き、終わらせる世界。

だが、その世界にある変化が生まれた。

それが『北郷一刀』。

違う世界の平和な世からこの世界に、貂蟬と卑弥呼が招き入れた不確定要素。

彼が来たことで、この世界は色を変えた。

彼が訪れたことで、この世界の色は優しくなった。

そして私たちは、彼にいくつかの希望を賭けてみることにした。

一つの世界に、三つの可能性という種をまく。

蜀、魏、呉、それぞれに担当として貂蟬、許子将、卑弥呼が受け持ち、その最後までを見届けることを役目とした。

華佗はいつでも補助に入れるように待機し、私は世界全体を見守る。

それぞれが役目を持って、実験にも近いこれを行った。最初にひび割れたのは魏だった。

『歴史の強制力』などと言うのは建前、そんなものはこの世界にはない。

何故なら、この世界は彼の世界とは繋がってなどいないのだから。その次は呉。

同じではないが近い歴史を知っている彼がいるのならば避けられていた筈の孫策と周瑜の死。

そして、蜀。

これは見守っている私には、理解が出来なかった。

三つの内二つがひび割れている中で、この歴史だけは何故か傷一つもつかずに広がっていった。

「どういうことだ！　これは!!」

「……わからないわ、そもそもこれが初めての試みだもの」

私たちが時の管理を行ってから、意図的に歴史を作ろうとしたことはこれが初めてだった。

「どうして、すべてが満たされないんだ!？」

彼はどこであつても変わらない筈だろう?!」

「それはどうかしらね?」

熱くなつていく華佗に対して、私は逆に冷めていく。小さな球体の水晶を三つ取出し、そこに彼が今までしてきたことが映る。

「どういうことだ?!」

「落ち着きなさい。華佗。」

彼は変わらないわ、あくまで何も知らずに戸惑っているところを拾われるまではね」

拾われてからの彼の変化。

蜀は、良くも悪くも彼を変えることがない。

無知で、天だけの平和を知っている彼を『主人』とする。だが、彼自身の優しさと劉備の器によって、彼らは平和を手にしていく。

魏は、彼を大きく変えようとする。

無知であることを許さず、天での知識を広げようとはしない。そして、彼自身が自分が力不足だと実感し、向上しているように見える。呉は、彼を取り込もうとしている。

何を持つていようと、知つていようと彼女たちは興味がない。天の知識を利用する節はなく、むしろその血だけが目当てで彼の本質的なものに惹かれていった形だ。

「どうにかできないのか!! この運命を!」

華佗が言っているのはおそらく、ひび割れていく二つのことだろう。

「私たちには見守ることしか出来ないことは、あなたもわかっている筈でしょう?」

「だが……!! 彼は俺たちの被害者なんだぞ?!」

「そんなことわかっているわよ!!」

原因が不明とはいえ、私たちが彼を弄んでいることには変わらな  
い。

そして、三つ目の水晶の甲高い日々の割れる音に私たちは振り返つた。そこに映るのは白い満月、そして曹操と薄れかけていく彼。

『けれど、私は後悔していないわ。』

私は私の欲しいものを求めて…… 歩むべき道を歩んだだけ。

誰に恥じることも、悔いることもしない』

『……ああ。それでいい』

『一刀。あなたは?』

後悔していない?』

『してたら、定軍山や赤壁のことを話したりはしないよ。』

それに、前に華琳も言っただろ? 役目を果たして死ねた人間は誇らしいって』

『ええ……』

『だから、華琳……』

君に会えて良かった』

『……当たり前でしょう。この私を誰だと思っているの?』

『曹孟徳。誇り高き、魏……いや、大陸の霸王』

『そうよ。それでいいわ』

『華琳。これからは俺の代わりに劉備や孫策がいる。』

みんなで力を合わせて、俺の歴史にはない、もっと素晴らしい国を作ってくれ。

君なら、それが出来るだろう?』

『ええ……』

あなたがその場にいないことを死ぬほど悔しがるような国を作つてあげる』

『ははっ…… そう聞くと、帰りたくなくなるな』

『そう……』

そんなに言うなら…… ずっと私の側にいなさい』

『そうしたいけど…… もう無理…… かな?』

『…… どうして?』

『もう…… 俺の役目はこれでお終いだろうから』

『…… お終いにしなければ良いじゃない』

『それは無理だよ。』

華琳の夢が叶ったことで、華琳の物語は終端を迎えたんだ……

その物語を見ていた俺も、終端を迎えなくちゃいけない』

『…… 駄目よ。そんなの認めないわ』

『認めたくないよ、俺も……』

『どうしても、逝くの?』

『ああ…… もう終わりみたいだからね……』

『そう…… 恨んでやるから』

『ははっ、それは怖いな…… けど、少し嬉しいって思える……』

『逝かないで』

『ごめんよ、華琳』

『一刀……』

『さようなら…… 誇り高き王』

『一刀……』

『さようなら…… 寂しがり屋の女の子』



『一刀……!』

『さようなら…… 愛していたよ、華琳——』

『……一刀?』

これ以上は見えてはいけないと思いつながら、私たちは目を離すことが出来なかつた。

魏の彼の、彼女たちの終端の形。

こんな終わりは認めない。

『北郷。』

貴様は、この戦いが終わつたらどうするつもりなのだ?』

『ウチ、その道を一刀と歩いていきたい。』

一刀と二人やったら何も怖くない』

彼女たちの言葉の節々にある、未来への言葉。彼女たちは彼がいることを信じ、変わらない…… いや、それ以上に明るい未来を描いていた。

ただの時の管理者になり下がり、全てを諦めていた私とは違う。

彼女たちはここに誰よりも強く、たくましく、美しく、儚く生きていく。

『華佗…… 私は今日から三十年ほど休暇をとるわ』

見届けた私は立ちあがり、華佗は何をする気だと目で問うていた。

「三十年偶然、彼の傍に居て、休み明けの三十年後に偶然、時の操作を間違える」

人間が世界の限界を試した報い、一つの世界に三つの可能性は入りきることは出来ない。

完成、一部欠損、欠損でようやく世界が保たれる。

だが、私はそんなものは認めない。

この歴史を歪ませたのは、私たちだ。

それなら私は、これからもつと身勝手になろう。

私が見たいと感じたことを、身勝手にも成し遂げてみよう。

「管輅…… お前……」

私が見たい。

彼と彼女たちが、誰よりも幸せになる姿を。

「フフツ、三十年間は彼を少しだけ独り占めしてくるわ。

三人にはよろしく言っておいて頂戴。華佗」

私はその後、彼の傍で『南雲 優希』<sup>なぐも ゆき</sup>として生き続けてきた。

本来なら私は彼に干渉するべきではなかったというのに、彼女たちのためとわかっていても努力し、懸命に生きようとする彼の姿。

そして、あれだけの経験をし、悲しみを背負っても変わらない優しさに私は惹かれた。

華佗には三十年などと言いはしたが、彼自身の準備が出来てからあの時代に戻ることは出来た。

時を操って彼を若返らせつつ、経験させたことと多くの知識を体に残すというのはさすがに代償を被ったが、それも私たちが彼にしたことと比べればとても安いもの。

この世界の魏に居た彼女たちの記憶を戻すことが出来たのは、奇跡だろう。

「管輅！」

「あら、いたのね。華佗」

「お前！…これほどの多くのことをして、大丈夫なのか?!

代償は……」

余計なことを語ろうとする華佗を睨みつけ、私はゆっくりと笑う。

「安いものよ、この程度。」

私たちが彼に、彼女たちにしてしまったことに比べればね」

空を見上げれば雲、私が偽名に使っていた彼女の名字。

北の郷に浮かぶ南の雲でありたい、一つの刀に優しさと希望を捧げたいと思った。

「お前は報われなくとも、か?」

何を言っているのかしらね? 私は報われていたし、報われているし、報われるわ。

愛した彼が私を『占い師』でも、『時の管理者』でもなく、たった一人の女として見てくれていたもの。

「フフツ、華佗。」

彼はね、確かに彼女たちと共に未来を見るために帰って来たけれど。もう一つ目的があるの」

「目的？」

そう、私だけが知っている彼のもう一つの目的。

それはとても欲深く、同時にとても欲のないささやかな願い。けれど彼は、それをささやかな願いで終わらせる気などない。

「……いずれわかるわ」

そう言っつて私は笑いながら、歩みだす。

彼が成すべきことを終えた時、それが彼のもう一つの目的が達成するだろう。

彼が作るこの世界の未来を見守ろう。

だけど、

『夢那、俺たちがこの国を平和にしたら、今度はお前も来いよ。』

時の管理者だって、人間だろ？

夢那には多くの時間の中のひとときかも知れないけどさ、だからっ  
ていつまでも独りぼっちになることなんてないだろ？』

言葉の責任は、ちゃんと取ってもらわないとね？

## ハロウイン

俺はいつものように午前の鍛錬を終えて、自分の部屋にして書類仕事を片付けていた。

だが、今日はおかしなことに白陽の気配がなく、城のどこを歩いてもみんなに会うこともない。

いや、仕事をしているのだからこんな日もあるんだろうが、凧たちにまで会わないのは少しだけ違和感を覚えていた。

コンッ コンッ

「どうぞ」

規則的に扉を叩く音に、俺は見ていた書簡から顔を上げずに適当に答える。

『トリックオアトリート!』

その声と共に入ってきたのは、俺の愛する者たちだった。

先陣を切るのは吸血鬼のような黒マントをまとった霞、服はそれに合わせた燕尾服。

その横に並ぶのは猫耳を付けた春蘭、さすがに着ぐるみを着ているわけではないが体全体を包んだ服をまとっていた。

「お菓子をくれても、悪戯するで♪ 冬雲くく♪」

「うぬ・・・ 恥ずかしい・・・」

俺の首に抱き着く霞と、その場で真っ赤にした顔を隠す春蘭の落差がとてもいい!

じゃなくて!

「私もいるぞ? 冬雲」

そうやって俺の顔を撫でていくのは、春蘭とそろいの衣装をまとった白猫の秋蘭。

似合いですぎ?!

「隊長・・・ その、私は反対したのですが・・・ 華琳様のご指示で」

「皆の衣装選びは沙和がしたの! 隊長、褒めてなの」

「いや、めっちゃ楽しんでたやん! てか、ごつつ珍しいことに自発的

「にやっつてたやろが！」

「そこには三匹の色違いの犬耳、犬尻尾を付けた、俺の大切な部下たちが立っていた。

風はサモエドのような白い耳、沙和は茶はやや大きめパピヨンのような耳、真桜はビーグルのような茶と黒の混じった耳。

何コレ、もう俺の部下、可愛すぎだろ……!!

でも、ワーウルフのつもりなんだろうなあ。

そう考えるとなんだかおかしくて、俺はおもわず口元を緩めていた。

「兄ちゃん！ 僕と流琉はキョンシーの衣装なんだよー!!」

「この後、甘いものが用意してあるのでみんなで食べましょうね？」

兄様♪」

全体的にだぼっとした服に、やや深めの帽子。顔の前には  
私は冬雲を愛する『我冬天喜？云』と書かれた札。

そんな二人のまつすぐな行為が眩しくて、俺は顔が熱くなるのを感じていた。

まったくこの子たちは、本当にまつすぐに俺に好意を向けてくれる。それがすごく嬉しくて、なんだか照れくさい。

「風を忘れていませんよね？ お兄さん？」

「はあ…… 本当にそれでいいんですか？ 風」

そう言って出てきたのは風、だがその格好はまるで『オレンジのでっかいカボチャの中心に人を突き刺してみました☆』というような衣装。

要するにただの着ぐるみなんだが、頭の上に乗った宝篋も胴体部分にカボチャつけてるし、しかもいつもの三角帽子が魔女帽子だし?! 芸が細かいすぎるだろ?!

誰が作った?! そして、何でそれが似合っちゃうの?! 風!?

そして、稟はメデューサの格好をしていた。

髪色に合わせて選んだらしく自然すぎて蛇だと一見わからなかったが、いつもは着ないだろうあでやかな衣装。それはまるでインドの踊子が着ていそうな、薄い布を纏っていてそれがとても妖艶だった。

裏って普段の格好からじゃわかりにくいけど、実はかなりスタイルいいよなあ。

「部屋が狭いわよー！」

そう言っただけで罵倒とともに登場したのは我らが猫耳軍師様である桂花だった。

三毛猫柄の衣装をまとった完全に化け猫になつて桂花の可愛さは異常だ……

「冬雲、驚いた？ この後はもつとびくりさせてあげるからね？」

「そうよ！ なんて言っただけで、ちい達が冬雲のためだけにハロウインの特別ライブをするんだから!!」

「しっかり聞いてくださいね？ あなたのためだけに歌う、私たちの歌を」

俺の前に次に来るのは三人の妖精、薄桃・緑・青の三色の妖精は俺の心を奪っていくかのように甘く優しく囁いて行った。

「フフ、これならば会議の間でも使えばよかつたかも知れません」

「同意ですね、姉さん」

『入りきらないからって、天井に張り付いてろっていう無茶振りをする姉さまたちは鬼ですか?!』

「姉ですが、何か？」

声が聞こえた方向を見ると、そこには二人のサキュバスと天井にも張り付いてたのは六人のサキュバス。それぞれが自分の真名にあわせた衣装と額から映える羊の角、背中には蝙蝠の翼までつけられていた。

綺麗だけど、何だろう。天井に張り付いているせいか、ドツキリ映像の方が近い気がする。

「冬雲ちゃん」

恥ずかしがって、ようやく前に出てきてくれた雛里はいつも来ている服とは違って真っ赤な服を着て、背中には少し引きずるようにして同色の鳥の翼をつけていた。

えっと、もしかして『鳳雛』っていうところから、フェニックスなのか？

いつも見てる服のせいで雛里には青よりの紫っていう先入観があったが、鮮やかな赤は驚くほど雛里の髪色に似合っていた。

「どう、ですか?」

雛里と共に前に出てきたのは斗詩。

全身に包帯を巻いた、木乃伊姿。だけど、顔はほとんど包帯をつけないように考えられて巻かれている。

ただ一つだけ聞くとしたら、中に服を着ているのかが心配になるような見た目なただけど?!

とうかみんな、揃いも揃って女の子がそんな恰好でうろついちゃいけません!!

でも、ごめん。すごく嬉しくて、声には出せない。

俺は今日、幸せすぎて本気で死ぬかもしれない。

「冬雲」

その声に俺が視線を向けると、そこには濃紺の魔女の衣装を着た華琳が立っていた。

黒も捨てがたいが、やはり彼女の金髪に似合うのは少しでも青に近い方がいい。とても綺麗だ。

箒を持ち、真っ黒な衣装の中にはリボンや飾りに赤が使われ、とてもいい。

だが、俺は困り果ててしまった。

「・・・俺、菓子なんて用意してないぞ?」

俺は今日がハロウィンだということを知らず、いつも通りに日々を過ごしていた。

仕事も立て込んでいたせいか、日課になっていた朝の散歩も出来ずに城からはまったく出ていなかったし、気分転換用に買い置きしておいた飴も底をついている。

苦笑交じりにそう言うのと全員が微笑み、華琳が代表にするように口を開いた。

「なら、あなたの今日という時間を私たちに寄越しなさい。

さあ、民もあなたのことを待っているわよ?」

「えっ?」

俺は華琳の口から出た予想外の言葉に耳を疑い、聞き返していた。

「隊長の衣装はこれなのー!」

そう言っつて沙和に手渡された衣装に驚きつつ、しっかりと受け取る。見ればそれは海賊が着るような派手な上着とシャツ、やや大きめのズボン。

「小道具もあるでえー」

真桜から渡されたのは三角帽子と眼帯、それから曲刀。

それを見て戸惑う俺に、『成功した!』とでもいうかのようにそれぞれが喜びを表現していた。

「まさか、ここ数日俺が忙しかったのって……」

「私たちがあなたにばれないように作り上げた祭りよ?」

「楽しまないと、許さないわ」

そう言っつて傲岸不遜に笑う彼女へと、俺は笑いながら叫んでいた。

「悪戯って、国規模でやったのかよ?!」

そう言いながらも俺は大人しく着替えた後、みんなに引っ張られるような形で町へと繰り出していった。



十一月十一日、それは天の世界で、あの有名なお菓子の日である。

向こうではそれほど好きというわけではなかったが、やはり食べられないとなるとどこか寂しいものを感じる。

あの心地よい音と食感、種類の豊富さ、こっちのお菓子も向こうのこの時代に比べればだいぶ進歩している。

が、やはりチョコ系のお菓子や西洋から入ってきたお菓子は当然のことながら存在しない。

「作ってみるかな・・・」

作るとなるとまず生地を焼くための釜が必要になる。それに関しては武器を作る窯よりも小型で、熾火が出来るように石造りにすれば出来る。薪が主流なここなら簡単に手に入るだろうし、生活の一部であることもあつて炎の扱いは子どもでも簡単にやっつてのける。

「釜はとりあえず、大丈夫そうだな」

必要なことを書きだして纏め、次は料理の方に移る。

そして俺は、こちらに来たとき持ち出した本の内、やや分厚い料理の本を取り出した。

まずは生地、これは小麦、砂糖、塩、牛乳とバター。バターは牛乳さえ手に入れば、季衣とか春蘭に手伝わってもらえればすぐに出来るだろうし、大丈夫そうだな。

「あとはチョコか・・・」

実はカカオ自体は、知り合いの商人に見せてもらったので確認済みだったりする。

この間、『珍しいものが入ったんですが、食べ方がわからない』とか言っていたから見せてもらったんだよな。数日間発酵させた後、天日で干せば香辛料とかと同じ使い道で食べられることを伝えたら喜んでくれて、いろいろ融通聞かせてくれるとか言ってたし。

ああ素晴らしきかな、人との繋がりが。

確か数日間発酵させた後、天日で干す。それを焙煎して、皮と胚芽

をとって、また焙煎して粉にする。これがカカオマスっていう奴だったんだよな？

んで、チョコを作る段階ではカカオバターっていう物はカカオマスを絞ってとれる油だからカカオマスは倍以上必要になる。これに砂糖と牛乳を入れて、滑らかなものになるまで濾す。二度の湯煎と冷却をしてから、型に流して冷やせば完成。

「……結構専門的な料理の本を入れておいてよかった」

流琉が喜ぶと思ってかなり専門的な知識が書かれたものにしたんだが、どうやら正解だったようだ。冷やすのも食糧庫の一角で半日も置けば、十分だろうし。

生地に香草を混ぜて塩だけでも、十分うまいものが出来るだろう。

「さて、行くか」

まずは、流琉と雛里に興味を持ってもらうところから始めないとな。

「新しい料理、ですか？」

「お菓子なんでしゅか？ これは」

見つけた場所は厨房、非常に珍しく二人そろって休日だったので、料理談義で盛り上がっていたところだったらしい。

そんな二人が準備してくれた賄い料理を食べつつ、俺は専門書をわかりやすく解釈しなおした書簡を渡して内容について簡単な説明を行った。

「ああ、天の国では結構人気のあるお菓子でな？」

チョコをかけないで、塩と香草を練り込んだだけのものもあるんだよ」  
流石の中にチョコを入れるのは技術的に難しいと思うから説明しなかつたが、二人は目を輝かせてくれた。

「面白そうだしゅ！」

釜作りは真桜さんに頼みましょう!!」

「厨房に増築をするとなると、華琳様に話をしなければなりませんね。冷蔵庫で少し冷やしたチョコを、焼いて冷ましておいた筒状の生地を刺しこんでもいいかもしれません」

「それ、凄くいいでしゅー！」

俺が何も言わなくても、トツ〇が誕生してしまっただど?!

俺はこの世界のお菓子に、とんでもない革命を起こしてしまったかもしれない。

なんて内心に平和的且つ阿呆な戦慄を覚えつつ、釜が出来たら他のお菓子も提案してみようと固く誓う。

パイとか、ピザとか、パンとか、饅頭と同じようなものだけど、あれは蒸したり、揚げたりしているから、釜の『焼く』っていう手段が出来たら結構いろいろ便利だと思うんだよなあ。主に食の面において。

「新しい物と探究好きなら華琳なら乗ってくれるだろうし、俺が言い出したんだからこの件の費用は全額俺が負担するよ」

実際、幹部の一人として警邏隊隊長だった時よりも遥かに多い額を貰っている。あることをするために毎月貯金はしているが、それを入れてもまだ俺の生活には余裕がある。

「じゃあ、私は今から華琳様に話してきますね！」

駆け出していく流琉を見送り、雛里は俺がわかりやすく書き直した書簡を凝視していた。

まあ、華琳、桂花、雛里はもう日本語が読めるから専門書を直接渡してもいいんだけど。それでも天にしかない道具が多いため、食材以外の器具は俺が代用品を考えるって形なんだよなあ。

「このチョコでいろいろなお菓子が作れるかもしれないですね……いつそこれを機に、砂糖やカカオが量産できるような土地を探してみましゅー！」

そう言つて雛里も、厨房を飛び出して行ってしまった。

「白陽……俺はとんでもない人たちに火をつけてしまったかもしれない」

俺の想像以上に、規模が広がって行きすぎて怖い。

いや、砂糖とか、香辛料とか量産出来たらそりゃ便利だけどね？

「……冬雲様が思いつきで言ったということは、伏せておきましゅー」

「頼む」

知られたら、華琳にどんな目で見られるかがわかったもんじやない。

「次は、真桜だな・・・」

白陽、どこに居るか知らないか？」

「真桜が仕事か生活（町）以外でどこかに行くとは思えません。

ならば、彼女の住（工）処（房）にいることでしょう」

俺が聞くと白陽が苦笑交じりにそう言ってくる。

三人が来てから、俺以外の前でも白陽はよく笑うようになった。

それは真桜が作ってくれた俺と揃いの仮面のおかげか、それとも風という親友を得たからか、あるいは沙和の楽しい空気染まってくれたのか。とにかく良い変化だ。

「工房に行くか」

「はい」

住処と称された工房へと珍しく二人で並んで、歩き出した。

「真桜ー、頼みたいものがあるんだけど」

「隊長やん、白陽と一緒に来るんは珍しいなあ」

「とりあえず、これ見てくれ」

投げた書簡を真桜はすぐさま開いて軽く読む。と、目がキラキラと輝きだした。

『釣れた』と確信し、思わずニヤリと笑う。

「んで、こんなん何に使うん？」

火が弱めな窯と思えばええんやろ？」

「うまいものを作るんだ！」

俺が胸を張ってやや大きめな声でそう言うと突然扉が開き、聞きなれた下駄の音が響く。

「うまいもんか！」

同じくらい大きな声で返事した霞が、そのままの勢いで俺に抱きついてきた。

「何で霞殿（姐）が来るんですか?!」

「冬雲の声が聴こえたからに決まっとるやんか！」

冬雲くく♪ 冬雲くく♪ 愛しとるくく♪」

じゃれついてくる猫のような霞の頭を撫でながら、真桜を見る。

「費用は全額俺持ち、勿論それが出来たら全員で完成した物を食べよう。」

雛里も流琉も乗り気で、俺がいた世界の菓子なんだけどな」

「ウチが隊長に頼まれることで、仕事以外断るわけないやんけ。」

ええよ、華琳様には通してあるんでつか？」

俺のその言葉に霞と同じようにじゃれついてくる真桜の頭を撫でながら、頭を撫でる。

「そっちはもう、流琉が行ってるよ」

「冬雲様、私も撫でてください」

珍しく白陽が何の脈絡もなく頭を差し出してきたので、同じように頭を撫でる。

そしてそれは、仕事帰りに真桜の元を立ち寄った風が来るまで続けられ、他にも数名の参加者が増えて収集がつかなくなったところを華琳の一喝によって強制終了した。

俺の腕は痺れて、しばらく上がらなくなってたけど。

釜が無事完成し、待ちに待った試食の日。

少人数の予定だったのに、結局将は全員参加の小規模な宴会になってしまった。

まあ、酒のつまみにもなるから間違っただけはないんだけどさ。

「これ、美味しいのー」

「でも、僕には足りない。一度に五本くらいまとめて食べたくなっちゃうよ」

味と量、その二つに沙和と季衣が話している姿はとても微笑ましい。

「釜ですかあ、少々危険かもしれませんが料理の幅が広がりそうですねえ」

「数名の者に使い方を伝授して、使う際はその者の指導の下に行えば

平気じゃないかしら？ 風」

視線を少しずらすと風と稟が食べながらも釜を眺めて、普及方法等の話をしていた。

「(ポキポキポキ)」

「フフ、姉者は可愛いなあ」

「(ぽりぽり)」

「私たちの姉さまだつて可愛いですよー」

食べることに夢中になつている春蘭と白陽を眺めて、秋蘭と藍陽はほのぼのしてるなあ。二人ともハムスターみたいで可愛い。

「この唐辛子を練り込んだものも美味しいですね」

「風さんが好きだろうと思つて、やってみたんでしゅよ」

ああ、なんかあの二人も和む組み合わせだなあ。

優しいクマさんとその肩にとまる小鳥みたいで、いいなあ。

「茶の味にしたら、うまいと思わないか？ 樹枝」

「そうだなあ、あとは胡桃クルミを食感に加えてみてもいいんじゃないか」

・・・内容的にはいい発想なんだけど、なんていうか味覚が老人よりだな。弟たちよ。

俺がそうして少し離れた位置から酒を飲みつつみんなを眺めていると、その隣に華琳が座ってくる。

その手にはチョコがついたものと、香草で味付けされた試作品の中でも基礎となる単純なものが並んでいた。

「考案者であるあなたが食べていないような気がしたのだけれど、気のせいかしら？」

「・・・みんなが食べるのを、眺めてるだけで十分だよ」

あの笑顔を見ていると、言つて良かったと思える。

何気ない一言でこうしてみんなが笑つていることが最高の報酬で、ご馳走だった。

「あなたも楽しむのよ。」

私たちと過ごす今も、これからも、この未来さきもね」

そう言つて俺の口へ無理やり菓子を入れた後、悪戯そうに笑つた。そして、華琳は俺が啜えている方とは逆の方向を啜えて突き進んで

くる。

まさか………?

いやいやいや?! 嫌じゃないけども!?

こんなことであのゲームが考案されるって、マジですか?

徐々に短くなっていき、それはたとえ俺が進まなくてもいつか辿り着く。

戸惑い、慌てる俺の表情を目の前で心底楽しそうに眺める華琳。

その距離はどんどん短くなっていき、距離が零になるのはもう目前に迫っていた。

「あ——・華琳が抜け駆けしとるう!!」

霞の大声が響き渡ったその瞬間、俺と華琳の口の距離は零になった時に注目が集まる。

まさかの全員がその光景を見て、空気が凍るのを肌で感じた。

昔ならばおそらく俺の命はなかっただろうが、恐る恐る静まりかえったみんなの方向を見るとそこには俺の元へと一直線の列が出来ていた。

しかも各々、自分が一番気に入ったのであろう試作品をその手に持って、だ。

列を作るのが、早すぎじゃないですか? みんな。

「何故?!」

「アンタと菓子の端から食べて、お互いに惹かれあうように近づいていく接吻するための行列に決まってんじゃない!」

頬を赤らめて、そう言ってくる桂花が超可愛い。じゃなくて!

「兄者、諦めが肝心ですよ」

「兄上………」

僕は兄上のことを尊敬していますが、なりたいたと思ったことはない理由の一端が今、わかった気がします」

肩を叩いてくる樟夏に、自分自身に納得がいくように何度も頷く樹枝。

お前たち…… そうやって余計なことをいうから、いつも痛い目にあってるんだぞ?

「大変ね、冬雲」

「・・・華琳、狙ったな？」

「何のことでしょうね？」

クスクスと俺の隣で笑う華琳へとそう言うと、彼女は楽しげに笑うだけ。その笑みがあまりにも綺麗だったから、わざと短く折った菓子を啜えて彼女の口元へと運んでそのまま口づけを交わした。

「愛してるよ、華琳」

「私もよ、冬雲。」

けれど、いいのかしら？

あなた、二週目をあの子たちに確定させてしまったわよ？」

華琳の視線を追いかけると、どこから出したのか番号を振った箸を使つて番号を決めている。

「みんなとすることは何だつて嬉しいし、これは俺には得しかないからなあ」

そう言つて笑つて、その日は菓子がなくなるまでみんなとはしやぎまくることとなつた。

この事から釜が普及し、多くの料理が作られることになるのだが、それはまた別の話。



## 罪

暗い　――　否、けしてそこは暗くなどない

寒い　――　否、そこには確かな温もりが存在し、寒くなどない。

寂しい　――　否、それは俺が見ることを拒んでいただけで、別の可能性<sup>幸</sup>が存在<sup>せ</sup>していた。

何故なら夢の中俺は、笑っている。

あの時の精一杯の笑みを貼り付け、触れれば割れてしまいそうな薄氷にも似た笑顔。

けれどそれも、けして作り笑顔ではなかった。

それでも俺は妻と息子、二人の娘に囲まれながら、笑う。

「おかえり、父さん」

「ただいま」

迎えてくれた息子へとそう答え、その後ろについてきた二人の娘が俺の脚に飛びついてくる。

「今日はカレーとサラダだよ、私たち三人だけで作ったの！」

「それは楽しみだなあ、三人とも怪我はしなかったかい？」

「してないよお〜！」

もう！　お父さんは失礼だなあ」

頬を膨らませる下の娘の頭を撫でながら、俺は玄関へと腰かける。

「冗談だよ」

膨らんだ頬を押し、空気が抜ける少しおかしい音に息子と上の娘も笑う。

そんな二人に下の娘がポカポカと軽く叩いて、抗議している。

「こらっ、三人とも。」

お父さんが玄関から動けないでしょう！」

「「はぁーい」」

優希の言葉に子どもたちは逃げるように、居間へと向かった。

多分、俺たちが行く頃にはテーブルの上には三人が盛ってくれたカレーとサラダが並べて、待っていてくれるだろう。

「ハハッ、元気なもんだ」

「あなたも笑ってないで、叱ってくれないと・・・  
それといつまでもスーツ姿で座ってないで、着替えてきてくださ  
い」

「出迎えてくれてるんだ、嬉しいじゃないか。」

ああ、三人で作ってくれたカレー・・・ 楽しみだしな」

その光景を一步下がったところから、冬雲俺が見ている。

在りし日の思い出、俺が身勝手にも捨ててきた家族。

本当の意味で俺は優希（妻）も、あの子たちも、見てなんていなかった。  
た。

どんな行動をしても、思いを抱いても、俺の考えの中には常に華琳  
たちが居た。

称賛の言葉も、資格を得ても、それは戻るためのおまけでしかなく、  
その努力すら俺は華琳たちから貰った物。

華琳たちに出会わなければ、俺は俺じゃなかった。

場面が突然切り替わり、別れたあの日を映し出す。

そして、そこで彼女が北郷俺一刀を背中に抱きつきながら囁いた。

「あなたの世界はここですよ？」

どこにも行かないで・・・ 私俺の傍にいて。

彼女たちではなく、私たちのことだけを考えて」

「ッ!!」

夢から逃げるように、俺は寝台から飛び起きた。

首元にまとわりつくようなべたついた汗、荒い呼吸、早い鼓動。

そして、夢だというのに今も耳に残るあの言葉。

「何が・・・ 『後悔もここに置いていく』、だ。」

少しも、忘れるなんて出来てないじゃないか」

華琳たちと別れさせられてからも、確かに流れた三十年。

恋をする予定のなかった天向こう側の世界、努力だけをして、会えずとも華

琳たちに人生を捧げようと思っていた。

だが、そんな俺を見透かすように彼女は北郷俺一刀の中に入ってきた。  
た。

「この世界を認め、俺が居なくなると言っても『子が欲しい』と望み、少しの間であつても、あなたの妻となりたい」とまで言った。

だから俺は、縊ってしまった。

彼女の優しきを利用し、捨ててきた。

「……くそっ」

壁に拳を叩き付け、やりきれない思いを自分に向ける。

『彼女を利用した』

それはどんな言い訳をしても、変わらないし、忘れてはならない。

「鍛錬に行くか……」

そこに留まる空気から逃げるように、俺は模造剣を持って中庭へと向かう。

今の俺は、華琳たちに縋る権利も、町を見てこの気持ちを曖昧にする権利もない。

これは俺がした罪への罰、一生背負うべきものなのだから。

深夜の誰もいない中庭、月と星だけが照らすそこで、俺は軽く体をほぐしてから、軽く素振り行つた。

そして様々な想定をしながら、体を縦横無尽に動かしていく。

『何のために強くなるのか?』

それはここに居るため、もう失わないため。

あの日をもう、繰り返さないため。

『どうして、彼女たちを捨てたのか?』

あの世界の北郷俺一刀という存在を消してでも、俺は彼女たちに会いたいと願つた。

『ならば何故、今も苦しむ?』

もうあの世界の誰もが北郷俺一刀を忘れ、俺が居なくなつた穴を他の何かが補正しているとわかつていても、あれは俺の罪。

俺が彼女たちを利用して、縋って生きたことがもはや存在しなかつたことになつても、それは俺が忘れていい理由にはならない。

「!？」

突然、背後から音がし、すぐ後に続く風切り音。俺は投擲された石を剣で落とし、その方向へと視線を向けた。

「見事ね、冬雲」

「華琳……」

月光の下、その輝きは失われることもなく、いつもの服装で華琳は立っていた。

「いつも通り、鍛錬とは思えぬほど素晴らしい動きだわ。

けれど、目と剣には迷いを宿していて、不安定のように映るのは私の気のせいかしら？」

そう言つて近寄つてきて、汗に濡れた俺の頬に触れてくる。

「……あなたは、何か私に隠していることがあるでしょう？」

俺の心を見透かす華琳の言葉に、頬に触れられた手を握る。

「何もないさ……」

誤魔化すように月を見ると、華琳が俺の顔を引き寄せてきた。

「あなたの様子がここ数日、おかしいとあちこちから心配の声があがっていることをあなたは知っているかしらね？」

「マジかよ……」

俺は模造剣を地面に差して、頭を抱えた。

本当にこのみんなは敏いし、俺のことをよく見てる。隠し事をするのだって難しいじゃないか。

「あなたが私たちと別れてからの三十年、何があつたかをまったく話さないけれど。」

それはどうしてなのかしらね？」

どうして、そんなにも俺のことがわかるんだろうか？

どうして一番傍に居てほしいとき、彼女は俺の傍に居てくれるだろうか。

何で俺の思いに、こんなにも寄り添ってくれるだろうか。

「きつと知つたら、華琳は俺に失望するぞ？」

苦笑交じりにそう言つと、頬をつねられた。

「馬鹿ね、私があなたに失望なんてするわけがないでしょう？」

あなたが私にみつともないところを見せるなんて、それほど山のよ

うにあつたじやない」

呆れたように表情をし、溜息まで吐かれる。

その通りだ、俺は本当に何も出来ず、多くを知らなかった。

そんな俺を警邏隊の隊長にまで厳しいながらも育ててくれたのは華琳で、みつともない所ばかりを見せてきた。

俺もそれを改めて思い出し、覚悟を決めた。

「華琳……聞いてくれないか。」

俺の罪を」

月と星、かつてこの世界から俺を奪ったものたちに見守られながら、俺

は天の世界で過ごした三十年という時間を語る。

そこに史実なんて話はなく、俺が過ごしてきた日常。

俺が継った女性と、俺がみんなを通してでしか見ることのなかった家族。

この世界で来ることで他人の記憶の欠片からすら存在しなくなつてしまった、あの世界の北郷俺一刀の人生だった物語。

「冬雲」

俺の話を聞いた後、華琳は俺の頬を張った。

あまりにも突然だったため俺は避けることも出来なかったが、なんとなくこうなることはわかっていた。

「あなたがしたことは夫として、父親として間違っている。

それはどんな言い訳を並べても、許されることではないわ。

たとえ誰が忘れたとしても、あなたという存在があの世界から消失していても、あなたはその罪を背負い続けなければならないことはわかっているわね」

「ああ、わかっているよ」

「けれど……」

華琳はその目から静かに涙をこぼし、張った頬をそつと撫でてくる。

「私は人としてのあるべき行動よりも、存在を否定された私たちを想

い、家族を捨ててでもこの世界を選んでくれたあなたが、帰ってきてくれたことが何よりも嬉しいのよ……」

それはとても神秘的な光景で、涙は月の雫のようだった。

「世界中の誰があなたを責めても、私たちにあなたを責めることは出来ない。」

あなたが帰ってきてくれたこと、そのことの恩恵を受けているのは私たちであり、あなたがそこまで私たちを想ってくれたことの証だもの。

あなたのその罪は私たちの罪でもある。

あなたが私の背負うものを一緒に背負うと言ってくれたように、その罪を共に背負わせなさい」

小さな華琳の手が俺を包み込み、彼女が傍に居ることで俺は安らぎを覚える。

「ありがとう、華琳」

今はただありきたりな感謝の言葉しか、出てこなかった。

あの世界からこの罪の存在すらなくなっても、俺はこの罪を背負い続ける。

俺が利用し、縫ってしまった、確かに家族だった彼女たち。

この思いすら身勝手なものであったとしても、具体的に何をやるわけでもないけれど、この世界で死ぬ最期の瞬間まで忘れないでいてみせる。

共に背負ってけると言ってくれた、愛しい彼女と俺の些細な変化すら気づいてくれるみんなと共に。

『一か月ほど休みが欲しい』

そうやって彼がどこかへと愛馬と共に飛び出していき、もうすぐその休みが終わる日。

そう、それはいいの。

彼が休みをどう使おうと彼の自由、私も冬雲が何かをしでかすとは思っていない。けれど……

「連絡の一つも寄越さないのは、どういうことかしらね？」

おもわず眉間に皺がより、目の前の事態に頭を抱えてしまう。

彼がいないからと言って回らない国ではない。それに彼自身、留守にすることで事前に緊急の書類は勿論、一か月の間に出るだろう不祥事等に備えて対策を練った書簡を白陽達に残していった。

彼らしい出来すぎた配慮だと思っただけけれど、致命的な問題が一つだけ残っている。

全員の士気が下がる。

誰もが仕事をやらなくなるわけでも、泣き暮らすわけでもなく、誰かが冬雲を探して駆け回るといふこともない。

あの時もそうだったように、誰もが仕事は仕事と割り切ってはくれている。

が、『冬雲がいない』ただそれだけで、流れる空気が違ってしまう。

「あからさまに仕事の効率が落ちるわけではないのが、せめてもの救いね」

そして、その空気を敏感に感じ取り、すぐさまこの考えに行き着いた私自身も彼がいないことに寂しいと感じていることを自覚していた。

「困ったものね…… あの子たちも、私も」

おもわず零れる苦笑に、おそらく明日あたり桂花から来るだろう『冬雲搜索嘆願書』への対処をどうすべきか考えていた。

いつそのこと、許可してしまおうかしら？

おもわずそんな八つ当たりとも取れるような悪戯が浮かび、口元が

弧を描く。

「姉者、書簡です」

「華琳様、言われていた書を持ってきました」

「入りなさい」

扉を叩き、外から樟夏と樹枝の声が響き、入室を許可する。

樹枝に書を置く位置を指示しつつ、樟夏の持ってきた書簡を受け取り軽く内容を確認すると、ふとあることに気づく。

そういえばこの二人だけは冬雲が留守をしてから、本当に変化がなかったわね？

どこに行ったかどうか霞たちが話していても苦笑するばかりで、心配する様子もなかったし……何か知っているわね。

おもわず注視していると、樟夏がこれまでの経験からか肩を震わせ、樹枝の脇腹を突いて急ぎ足で扉の方へと向かおうとする。

逃がさないわよ？

「黒陽」

「承知いたしていますわ」

私が短く名を呼べば、黒陽は出入り口の前に現れ、笑顔で樟夏たちが逃げるのを塞ぐ。

「緑陽」

「皆さまに、伝達してまいります」

その末の妹である緑陽も私が何をするかを言わずとも、次の行動に移っていく。

相変わらず司馬八達の働きぶりには惚れ惚れするわね、何かしらの褒美を検討しなければならぬわね。

「華琳様…… 私たちが何も知らない場合はどうするつもりですか？」

冷や汗を流しつつ、窓や出入り口に視線を彷徨わせている。

樟夏は私が緑陽に指示した時点で、諦めたように虚空を眺めているわね。本当に諦めるのが早いわ、まあ逃がすつもりはないのだけだ。

「あら、樹枝。



何の話をしているかわからないけど、私はまだ何も言っていないわよ？

つまりあなたは、何かを知っているというわけね？」

三兄弟揃って、何をするつもりだったかが気になるわね。

というか、私たちに黙ってという所が一番気に入らない。

「……黙秘します！」

「黙る、のね。」

あなたはどんどん埋められない墓穴を自ら掘っているわよ、樹枝」

私は笑顔で二人を見つつ、扉の向こう側に聞こえた複数の足音にさらに笑みを深めた。

流石ね、緑陽。どれだけの人を呼んだのかしら？

「冬雲様の行先を知っている者がいると聞いたのですが？」

「こちらであっているでしょうか？」

扉を使わずに最初に降り立ったのは白陽であることに、私はおもわず目を丸くした。見れば黒陽も同じような顔をし、樹枝は頭を抱え、樟夏は悟った瞳から一筋の涙をこぼした。

「兄上……彼女にも言っていなかったのですか……」

「いや、仕方ないと思います。思いますけどね？ 兄者。」

「私たち、死にますよ？」

扉の向こう側の音と白陽の言葉に最早諦めたのか、二人は隠すこともなく呟く。

「しよおおおかあああー！！！！」

「樹枝！！ アンタ、冬雲のことを知っているならどうして何も言わなかったのよ?！」

「そや！ ウチらがどんだけ心配してるか、知ってるやろ!!」

「冬雲さんの居場所を知っているんだったら、早く教えてください!!」

第一陣、突入。

先陣をきったのは春蘭、桂花、霞、斗詩。これは想定できたわね。しいて付け足すなら風がいなかったことが意外だけれど、それは場所の関係かしら？

そう思っていると樟夏と樹枝の間に素早く何か放たれ、避けた壁

に小さな穴が開いていた。

あらあら、噂をすれば、ね。

「気を小さくまとめ、鋭く、それでいていつもと変わらない威力で打つべし」

「いやいや?! 風! 気持ちわかるんやけど、それ使うんはやり過ぎやろ!」

「そうなのー、華琳様のお部屋を壊しちや駄目なの。外でやるべきなのー」

「そうだよー、僕たちの攻撃は派手なんだから」

第二陣は風、真桜、沙和、季衣。

それにしてもあの技は見たことがないわね? 白陽とも随分親しみみたいだし、彼女に影響でも受けたのかしら?

あれが出来るのならその内武器がなくとも、気で物を斬るぐらいはやってのけそうね。

「華琳様、失礼します」

「面白いことを聞いたので、あとを他の方々に任せてきたのですがあ……風達必要ですか?」

「冬雲殿のことですから、全員招集がかかったのと同じでしょう」

「雛里ちゃん……? その書簡は一体なんですか?」

「何でもないでしゅよ? はい、二人の絡み強めのもつと高度な趣味の方々専用の本なんて書いてましえんよ?」

比較的冷静な秋蘭、風、凜、流琉、雛里がのんびりと入ってくる。けれど、この子たちが一番やることに容赦がないのよね。

雛里は、自分の創作の使い道をわかってきたわね。良い事だわ。

「さあ、樟夏、樹枝。

話してもらえるわよね?」

「断固拒否します!!」

二人の言葉に全員が驚きながらも、笑みを浮かべる。

「これは男と男の約束であり、兄上の望み」

「兄者が普段しない隠し事をここに居る全員した理由、察していただきたい」

非常に珍しく真剣な顔をする二人に私たちは顔を見合わせてから、最終的に全員が私を見た。

全員が手を出さなかったということは、『それなりの理由があることを認めつつ気になってはいる。最終的な判断は私に任せる』と言ったところかしらね？

「・・・その一件、私たちに黙っていたけれど、私たちは関連しているのかしら?」

「黙秘します」

「その言葉は便利ね？」

そして、聞いている側はとても不便な言葉だわ。桂花、春蘭

「はい！ 華琳様」

桂花と春蘭が私には笑顔を向けながら、鞭と大剣で風を切るような鋭い音を鳴らす。

桂花の鞭も相当なものね、武将としては戦場には立てなくても護身術としてはいいかもしれないわ。

「樹枝！ 今だ!!」

「おう!!」

二人が私たちの隙を見て窓から飛び出して中庭へと走り出すけれど、そつちには彼女たちが居るのよ。

「ぎーんねーん賞」

「参加賞程度は許してもよろしいのでは？ 紅陽姉さま」

「青陽姉さまは優しいですね」

「在ってないような賞は、全て残念賞でいいんじゃないですか?」

「灰陽姉さまと橙陽姉さまは厳しすぎですよ、最下位くらいはあげましょうよ」

「二」藍陽が一番厳しいからね（わ・です・よ）?!「二」

そんな言葉を言いつつ、紅陽と灰陽が樟夏を押さえつけ、青陽と橙陽が樹枝を縛り上げ、藍陽がこちらに合図してくる。本当に手際がいいわね。

「二ッ!!」

二人の元に行こうとした瞬間、風と白陽が同じ方向を見る。

「凧！」

「白陽、行きましよう！」

そう言つて二人が駆けだして行く。

「二人とも!! どこ行くんや?!」

そんな二人に声をかけたのは霞、真桜は苦笑いしながら二人を追いかける。

「姐さん、あの忠犬二人が走るんは一人のためしかあらへんつて」

「そうなのー」

二人に続いて第一陣、二陣組はまた走り出していつてしまふ。残つたのは私と第三陣組、そして司馬の七人。あとは縛られて動けない樟夏と樹枝のみだった。

「……はあ」

「華琳様……」

秋蘭の気遣うような声に、私は大丈夫よと手を振る。

「お兄さんは凄いですねえ、ここに居なくとも私たちをここまで振り回してくれます」

風は心底楽しそうに微笑み、いつものように飴を舐める。

「華琳様、私たちも向かいましょう」

勿論、そこのお二人に話を聞きつつ」

稟もどこか嬉しそうにしながら、そう提案してくる。流琉はそれを聞いて、二人を担ぎ出す。

「歩きますから、降ろしてください。お願いします」

女の子に担がれて運ばれるなんて、外聞が……」

「はははは、何を言ってるんだ? 樹枝」

樹枝の言葉に流琉が降ろしかけたところで、樟夏が何かを悟つたように笑いだす。そこに在るのは諦め。

……面白いから運びながら聞きましょう」

流琉に視線で指示しつつ、私たちは移動を始める。

「何が言いたい? 樟夏」

「同性愛のネタにされている私たちが、何をいまさら外聞を気にする必要があるんだろうか?」

世は無常、それこそ真理でしょう?」

「世は無常でも、理不尽でもそこで諦めたら終わりだろうが!

大体、お前がそういう言い返しもせずに諦めたように笑っているから、俺の言い分が照れ隠しにとられて酷くなってるんだだろうがあ!!」  
「それは聞き捨てならない!

お前のその女顔が事態を悪化させてる面もあるでしょう!!

ええ? 樹・枝・ちゃ・ん?」

「言つてはならんことをお!!」

「あなたは兄者の部隊の牛金か、あなたの実家から連れてきた部隊にでも愛の告白でもされればいいんですよ!」

「兵の中でも筋骨隆々の奴を、何故名指しする?!

そして、それは洒落にならないからな! 樟夏!!」

・・・面白いし、非常に興味深いけれど、そろそろ黙らせましょうか。

「黒陽、風、黙らせて頂戴」

「はい」

「はあい」

黒陽が樟夏の首を軽く絞め、宝譚が樹枝の耳元で何かを囁いただけで二人は気絶する。

黒陽はともかく、宝譚は何を言ったのかしら? とても気になるわ。

「流琉、樟夏は私が背負おう」

「あつ、ありがとうございます。秋蘭様」

秋蘭と流琉のいつも通りのやり取りを見て、稟が私を見て笑う。

「さて、静かになりましたし、少し足を速めましょうか」

どの子にも言えることだけど、この子も随分強かになったわね。

「そうね、急ぎましょうか」

私たちはそう言って、おそらくは彼が戻ってきただろう所へと駆け出した。

到着すると冬雲は何かを荷台に乗せて慎重に運び、全員を連れて戻

ろうとしていたところだった。

「華琳、この事態は一体何なんだ？」

そんないつもと変わらぬ彼の言葉に溜息が零れ、転がっていた小石を額へと投擲するがそれは軽く受け止められた。

「あなたのせいよ。」

この一か月、一体何をしていたのかしら？」

「俺？ 対策練った奴とか、仕事も済ませてきたんだが？」

それにここじゃ、見せにくいから城に戻ってからでいいか？」

肝心なところは、わかっていないのはどうしてなのかしらね？  
まったく。

そんな彼を好きな私たちも、大概なのだけど。

「ええ、あなたの口からちゃんとした理由が聞けるといいうなら、いくらでも構わないわよ」

そう言つて、彼の隣に並んで歩きだす。

手が塞がっているため腕を組むことも、手を繋ぐことも出来ないけれど、それでもいい。

彼がいる。傍に居る。私の隣にいる。

それだけがこんなにも幸せで、暖かな気持ちが溢れてくる。

「機嫌がよさそうだな？ 華琳」

こちらを見ずにそう言つてくる彼に、私はすぐさま返した。

「あなたが私の傍に居るからよ、冬雲」

「それで？ 一体何をしていたのかしら？」

「俺が正座をされていることもだけど、樟夏と樹枝が気絶しているのは何でだ?!」

玉座を使うのも日常になってしまったわね、この人数が揃うと中庭かここしか入りきらないのよね。

「あなたがいなくて、士気が下がっていたことへの罰。と言ったところかしらね？」

「・・・すまん、二人とも」

「話が進まないわ。」

何をしていたのか、簡潔に言ってくれるかしら?」

私がそういうと冬雲は大事そうにさつき荷台から降ろし、傍に置いておいた荷物をその場に広げた。

そこに並べられたのは多くの陶器の杯(さかずき)、しかもそれぞれに異なる絵が描かれており、その総数は二十五。

「冬雲? これは・・・」

「その・・・ 今日と明日が天の世界では『良い夫婦の日』『良い夫妻の日』っていう日でさ、みんなに贈りたくて知り合いの職人に頼み込んで教えてもらったんだ。

本当は夫婦茶碗を作りたいんだけど、それよりも杯の方が使ってくれることが多いだろ? だから、絵も少し前から樟夏にならつて、俺が作ってみたんだ。

あんまりうまくなくて、申し訳ないんだけどさ」

そう言つて頭を掻いて、照れくさそうに言う彼に全員がそれぞれの反応を見せる。本来なら抱きついて喜びを表したい者もいるだろうが、せつかく作ってくれた杯に氣遣つてそれは出来ない。

「あなたは本当に・・・ 私たちの心を掴んで離さないわね。

皆、宴の用意を。張三姉妹も呼び、酒宴を開くわよ。

冬雲が贈ってくれたこの杯で、飲み交わしましょう」

『はっ!!』

私の言葉に皆が散っていく。

その中で言葉をかける暇もなかった様子の冬雲は忙しなく視線を彷徨わせ、私はそんな彼の傍に歩み寄る。

「それで? 私の杯はどれなのかしら?」

「これだよ」

そう言つて迷わず差し出してきた杯には、見慣れない黄色い花が描かれていた。

「これは花なのかしら?」

「ああ、向日葵っていう夏に咲く花なんだ。

太陽の方を向いて、まっすぐ育つ。華琳みたいな花だよ」

頬が熱くなるのを感じ、私は誤魔化すように問う。

「それで二十五個、私たちの分しかないけれど、あなたの分の杯はどうしたのかしらね？」

「あー……」

試作品の段階でうまくできたのは樟夏と樹枝にやって、俺の分は考えてなかった……」

「はあ？」

「うまくできるかわからなかったし、この一か月は本当に華琳たちに贈る物のばっかり考えてたからなあ。」

自分の分を用意する余裕なんてなかったんだよ」

「呆れたわね……」

彼らしいその言葉に溜息を吐きながら、私は愛しい将来の夫を抱きしめた。

「あなたの分は、私が今度作ってあげるわ。」

楽しみにしていなさい、冬雲」

その言葉に嬉しそうに笑いだす彼を、全員が戻ってくるまで私はそうして独り占めし続けていた。



## オリジナルキャラ 設定

### 【曹操陣営】

・司馬八達

### 《共通》

武器全員小剣・投擲用暗器多数

髪色は青みがかった白 隠密時は冬雲と揃いの鬼の面（面の色は真名の色）

また左右の色が異なることもあり、姉妹愛は強い

姓：司馬シバ 名：朗ロウ 字：伯達ハクダツ 真名：黒陽コクヨウ

瞳：黄（左がやや濃い）

武器：『雨過天晴』  
ウカテンセイ

### 《備考》

主に華琳に従っている。華琳、春蘭、秋蘭、樟夏との付き合いは長く、両親の死後曹家に従うことを決断したのは当主である黒陽である。春蘭や秋蘭のように言葉にしないのは、自分があくまで太陽の『影』であることに重きを置いているためである。

姓：司馬 名：懿イ 字：仲達チュウダツ 真名：白陽ハクヨウ

瞳：青・黄

武器：『招雷降雨』  
シヨウライコウウ

### 《備考》

真名である『白陽』はポプラの中国名であり、司馬八達の真名は彼女の名に沿う形で命名。読者の人気が高いのもあり、彼女視点にて番外を一本予定している。また、司馬八達のデートフラグが14にて立っている。番外にて凧と共に忠犬として輝き、凧とは親友になることが容易に想像できる。

姓：司馬 名：孚フ 字：叔達シュクダツ 真名：紅陽コウヨウ

瞳：黄（右やや赤寄り）

武器：『風雨凄々』  
フウウセイセイ

### 《備考》

基本、雛里に従っている。が、青陽と共に黒陽と白陽が不在時にそ

の穴を埋めることが多い。まだまだ突然の事態には弱く、本編にて雛里の友達発言には激しく戸惑っていた。

姓：司馬 名：尙キ 字：季達キタツ 真名：青陽セイヨウ

瞳：青（右やや薄い）

武器：『和風細雨』

備考：基本、桂花に従っている。が、紅陽と共に黒陽と白陽が不在時にその穴を埋めることが多い。紅陽の手綱を握るように黒陽と白陽から密かに任されており、下四人への指示は青陽が行っている。

姓：司馬 名：恂ジュン 字：顕達ケンタツ 真名：灰陽カイヨウ

瞳：黄（右やや濃い）

武器：『時雨之化』

姓：司馬 名：進シン 字：恵達ケイタツ 真名：橙陽トウヨウ

瞳：黄（左やや赤寄り）

武器：『櫛風沐雨』

姓：司馬 名：通ツウ 字：雅達ガタツ 真名：藍陽ランヨウ

瞳：青（右はほぼ紺）

武器：『黒風白雨』

姓：司馬 名：敏《《ピン》》 字：幼達ヨウタツ 真名：緑陽ロクヨウ

瞳：青（右やや黄混じり）

武器：『雨奇晴好』

〈下四人のまとめ備考〉

灰陽をまとめ役とし、この四人は現段階では特定の誰かの傍に侍るということをしていない。その自由さを活かし、現状は他の領地への偵察・情報収集を行い、風達などへ書を送る役目を担っている。

姓：曹ソウ 名：洪コウ 字：子廉シレン 真名：樟夏ショウカ

髪：直毛で金色

瞳：青（だが、細目のためわかりにくい）

武器：双刃剣『霧影無双』

《備考》

口癖は『無常だ・・・』、名の由来は『昇華』から来ている。が、

あまりにも字面が良すぎることに、『夏』の一字を入れたいがために変更。また、同時期に樹枝が既に存在したため、その相方として残念なことに……

樹枝が居なければ、弟分として普通にかっこいいだけの彼も存在していたかもしれない。

姓：荀ジュン 名：攸ユウ 字：公達コウダツ 真名：樹枝キシ

髪：栗色の短髪（スポーツ刈りに近い）

瞳：新緑

武器：棍『理露凄然』

#### 《備考》

口癖は『理不尽だー！』、名の由来は『騎士』から来ている。が、樟夏同様に字面が良すぎるため変更。名よりも先に設定が完成していたため、その生まれすらも理不尽そのもので。文武両道と察しの良さ、女顔ではあるが美形であり、主人公となれた可能性すらある。とても残念な子である。

姓：牛ギユウ 名：金キン

髪：なし 禿頭

瞳：樹枝しか映っていない

#### 《備考》

曹仁隊・副隊長であり、本編・番外ともに名前のみ登場。が、22にて部隊を任されていたことから冬雲の信頼は厚く、黄巾の乱にて冬雲の行動を見ていち早く部隊を動かし、援護を行うなどその実力も窺える。

が、今後本編にて明かされる秘密がある…… もっとも瞳からわかるが。

#### 【劉備陣営】

姓：関カン 名：平ヘイ 真名：愛羅アイラ

髪：黒の短髪だが、日に焼けやや茶混じり（首のあたりに触れる程度  
の長さ）

瞳：明るい茶

武器：偃月刀『碧蛇下弦』

《備考》

愛紗とはほぼ真逆の性格だが、根は真面目で優しい似た者姉妹である。ただこれまでのことにより、原作の愛紗以上に愛羅の方が表現下手。

『羅』とは織物の一種であり、元々は小動物を捕獲する網を意味する字である。姉の愛紗との共通点を持たせるために名づけたが、今後活かすこともあるかもしれない。

【孫陣営】

姓：孫ソン 名：堅ケン 字：文台ブンダイ 真名：舞蓮ウーレン

髪：紅梅色の腰まで伸ばした長髪（だったが、陳留に渡る際に肩のあたりでバツサリと切る）

瞳：金

武器：大剣『南海霸王（ナンカイハオウ）』

《備考》

雪蓮と小蓮の奔放さは母譲り、蓮華の生真面目さは父譲りだと呉をプレイした時から思っていた。年齢による経験の差もあり孫家の衝動もそれなりに押さえられ、為政者としても優秀。現在は陳留にて過ごし、冬雲をからかつては周囲の女性陣の競争心を刺激させる毎日である。

真名：秋桜シュウオウ 故人

髪：金 背中中央までの長さ

瞳：海色

武器：大剣『東海武王』トウカイブオウ 細剣『西海優王』セイカイユウオウ

《備考》

舞蓮の亡き夫。当初はここまで登場する予定はなく、前話にて登場していた『柳』と被らないように書いていた。舞蓮曰く『海のような男』、雪蓮曰く『よくわからない人』とあるように、孫家を語るうえでなくては困るほどその存在は大きくなった。番外に登場予定あり。

姓：太史タイシ 名：慈ジ 字：子義シギ 真名：柘榴ザクロ

髪：萌黄色　ほぼスポーツ刈り

瞳：深緋

武器：爪『猛爪硬牙』  
モウソウコウガ

《備考》

名前のみ登場。出番はまだ先であるが、雪蓮と同様に問題児であり、日々蓮華の頭痛の種となる。雪蓮と勘と柘榴の快樂主義が合わさり、自然と事態は大きくなる。が、その一方で笑いの輪もまた大きくなる。叱られ説教をされても懲りた様子はなく、その行為と運んだ笑いによつて民との距離は近く、好まれている。

姓：諸葛ショカク　名：瑾キン　字：子瑜シユ　真名：槐エンジュ

髪：亜麻色　腰までの長さ

瞳：葡萄色

武器：なし（しいていうなら妄想）

《備考》

名前のみ登場。水鏡女学院卒業生であり、朱里の実姉。『残念三軍師』の一角であり、『夢現の諸葛瑾』。他二名も登場予定だが、名前すら未登場。が、蜀編の黄巾の乱前後にてその一角が登場予定である。呉に仕えているのも、『一番落ち着いて本が読めそう』という理由からである。

【涼州陣営】

姓：馬バ　名：騰トウ　字：寿成ジュセイ　真名：浅葱アサギ

髪：黒髪に白髪が数房混じる　翠同様に一本に括っている

瞳：橙

武器：十字槍『柳暗花明』  
リュウアンカメイ

《備考》

翠の母であり、蒲公英の叔母。蒲公英の悪戯は浅葱仕込みであり、その被害者もとい実験台は翠と柳である。部下である多くの者に武を仕込んだ『涼州の母』だが、実の娘である翠との距離は掴みかねている。病の件に関しては『調子が悪い』程度にしか話していなかったため、本編であれほど怒られた。

真名：柳 故人<sup>リュウ</sup>

髪：茶の長髪 翠同様に一本に括っていた

瞳：常磐色

武器：槍 無銘

《備考》

浅葱の亡き夫。槍働きよりも馬の世話を得意とし、亡くなった今も育てた馬たちは涼州の民を支えている。人にも、馬にも分け隔てなく優しさを向け、穏やかに笑うのが常の男であった。浅葱曰く『草原のような男だった』とのことであり、強気の女に尻に敷かれるような男であったことが窺える。

【董卓陣営】

姓：徐<sup>ジュ</sup> 名：庶<sup>ショ</sup> 字：元直<sup>ゲンチヨク</sup> 真名：千里<sup>センリ</sup>

髪：赤 後ろで一本のおさげにしている

瞳：白

武器：足装備武器 『疾風怒濤』<sup>シツプウドトウ</sup>

《備考》

詠と共に董卓軍の軍師を担う。軍略は詠ほどではないが、政も柔軟にこなすため仕事は多い。武はあくまで自衛のためであり、武官ほどの力はない。霞の良き理解者であり、月が『董卓軍の癒し』ならば、千里は『董卓軍の遊び心』である。  
日々、ツンと堅物<sup>詠</sup>、鬼神<sup>華雄</sup>にワンコ<sup>電</sup>、恋命<sup>恋</sup>を笑わせながらも手綱を握る。

【その他】

姓：管<sup>カン</sup> 名：輅<sup>ロ</sup> 字：公明<sup>コウメイ</sup> 真名：夢那<sup>ムナ</sup>

《備考》

『南雲 優希』と彼女は同一人物である。彼女に関しては今後、番外にて明かされていく。今は『外史の管理者』としての任を捨て、本職である占いをしながら大陸を渡り歩いている。

本編に登場は、旧魏メンバー集合時から終盤を予定している。

姓：司馬 名：微キ 字：德操トクソウ 真名：水鏡ミカガミ

《備考》

水鏡女学院の長。『臥龍』朱里『鳳凰』雛里『麒麟』千里を始め、三人の先輩である『残念三軍師』を育て上げた猛者変人である。軍略、政、あらゆる物語を等しく『知識』として認め、自らの糧とし、おそらく大陸に居ながらにして、誰よりも大陸を他人事のように傍観する者である。

姓：波ハ 名：才サイ

《備考》

『数え役満姉妹』の親衛隊・隊長。

『職探しに失敗したあの日、俺が偶然目を向けた先に女神たちが居た。その歌は、声は俺の心を慰め・・・』(波才の日記より抜粋)  
彼を書く際に某週刊誌の眼鏡の彼が浮かび、真名を冗談で決めてあるがその名が明かされる日は来ない。

名：夕雲シユウユン

《備考》

華琳が用意した駿馬の中から、冬雲自身が選んだ馬。体は白く、鬣は赤茶。本編にて名馬以上の働きをし、言葉等を理解しているように見られる。

この馬に関しての詳細は今後、番外にて語る予定があり。

姓：馬バ 名：元義ゲンギ 故人

《備考》

十常侍の手駒として、黄巾の乱の中心に居た人物。

利用され、欲に目がくらんだだけの盗賊。

冬雲によつて殺された五名の内のいずれかであるが、おそらくは最後に斬られた男だと思われる。

付け足し 〈武器〉

・四海王剣シカイオウケン

三本の大剣『東海武王』『南海霸王』『北海賢王』と、一本の細剣『西海優王』。

この四本は孫家に伝わる宝剣であり、現在は順に雪蓮、舞蓮、蓮華、

冬雲が所持している。

・曹命彩鞭ソウメイサイベン

桂花の自衛用の武器。銘の中にある「彩」はその種類の多さを指し、現在、軽傷・衝撃・捕縛・気絶が確認されている。

・連理レンリ

赤き星が落ちた際、真桜が作ることを決意した細剣。その材料は可能な限りの隕鉄を集め、鍛えられた。作り始めた当初はもう一本作る予定だったが、費用と材料の関係で一本となった。



## 冬至

冬至。

それは日照時間が最も短い日であり、南瓜を食べ、柚子湯に入り、一年の無病息災を祈る日である。昔は太陽の恵みが少ないことから『死に一番近い日』とされ、厄払いの意味で体を温め、栄養の多い南瓜を食べていたらしい。また、地域ごとにいろいろ習慣があり、『ん』がつく食品を食べて幸せになるという地域もあるとのことだ。

「無病息災・・・みんなには健康でいてほしいなあ」

珍しく休みだし、誰かと過ごしたかったが全員あいにく仕事があった。

かといって何もしないのは嫌だったので、やってもばれない程度の量の仕事を片付けつつ、もうすぐ冬至であることを思い出したというわけだ。

「しっかし、『ん』がつく食材を使って、安く済みそうな料理なんてあったかなあ？」

柚子湯は風呂の関係上、入ることが出来る者は限られてくる。だが、将だけで祝うというのもあれだし、どうせなら兵や民にもそう言った風習が広まればいいと思う。

「冬雲様？　また何か、お考えですか？」

俺が考え込んでいたことが気にかかったらしく、白陽が影から出てきて問うてくる。

「ああ、もうじき、日照時間が短い日があるだろう？」

その日は天の世界では『冬至』って言って、南瓜を食べたり、柚子湯に入るんだよ」

「ああ、『一陽来復』のことですか」

「『一陽来復』？」

聞いたことのないその言葉に首をかしげると、白陽は頷いた。

「はい、こちらではその日に鬼が出ると信じられています。

ですので、悪しき鬼を祓うため赤豆粥を炊くのです。」

また、この寒い時期に年長者の方々のため、市場には漢方が多く出回りますね」

赤豆・・・小豆のことか？ ていうか、節分に似てるような？  
そして、流石儒教の国。年長者に対する敬意や思いやりに溢れている。

「・・・なあ、白陽。

このすぐ後にもある天の世界の行事の準備も兼ねて、手伝ってくれないか？」

こちらの文化を活かしつつ、俺の世界のちよつとしたものを足せたらいい。

ましてやそれが、みんなの健康を願うものなら尚更だ。

「私があなた様の頼みごとを断ることなど、出来る訳がありません」

白陽の微笑みに気分を良くした俺はすぐさま立ちあがり、財布の身を確認してから扉へと向かう。

「独断で行われるのですか？」

「いちいち仕事増やしたりして怒られたくないだろ？」

それに、たまには俺がみんなを驚かせたいんだよ」

訓練後の食事として配布する形にするか、それとも炊き出しのようにして城の前で行うか、想像は膨らむ。

実行するとしてもつと計画を詰めなきやならいだろうが、まず俺は食材確保へと市場へと歩き出した。

天の世界の中国では『柚子』というと、日本で言う『ザボン』が出てくるため一応調べてみたが、どうやら天の世界でのあの小型の柚子がちやんとあつたのでほつとした。

さすがにあのでっかいのを風呂に浮かべるのはちよつと・・・

まあ、柑橘類ではあるし、似たような効果は期待できただろうが。

それを白陽に確認してから、俺は知り合いの商人へと蓮根と人参、牛蒡（ごぼう）、里芋とこんにやく。そして、柚子、南瓜、鶏肉、粥に使う小豆と米を頼み、他の調味料も別の店で注文しておく。残念ながら材料が一つだけ手に入らなかったが、それは仕方ないだろう。

そして、数日後のある別の行事のためにもいくつかの食材も頼んでおく。

「これで材料の注文は出来たな」

財布以外何も持たずに飛び出したため、材料は裏覚えだったが確かこれで合っていた筈だ。何度か作っているから作り方は覚えているし、問題はないだろう。

「秘密裏に行くのでしたら、我が家の厨房をお使いになりますか？

設備は城には劣りますが、不便はないかと思われまます」

隠密装束ではなく、町に出る用の普段着に着替えた白陽と並んで歩くとその手は自然と繋がれ、白陽の数歩前を歩く。

「そう、だな。」

「そうさせてもらうか、ありがとうな。白陽」

「いえ」

そう言っただけで微笑み、俺の腕へとさりげなく自分の手を絡めてくる。そうした仕草も可愛らしくて、俺も笑う。

作るところはこれで決まった。あとは時間だが鍛錬が終わった後、昼の時間がいいかもしれない。

問題は作り手の数だが……秘密裏に行くなら自分だけでやった方が手っ取り早いだろうしなあ。

それにこここのところ包丁を握っていないため味に自信がないし、一度は試しに作りたい。

「うーん……」

考えつつ、なんとなく市へと目を移すと昼時だからか人が多い。活気があって何より、こうした市を見てると華琳の治世が如何に素晴らしいかがわかっておもしろい。崇めたくなくなるよな。

「なら、ぜひ崇めてもらおうかしら？ 冬雲」

「ハハハ、そりやもう毎日崇めてるっていうか、どうして俺の愛する女性みんな俺にはもったいないくらい美人で何でも出来て、如何に素晴らしいのかを後世に書き残したいくらいだな」

「そう、なら残しなさい。」

私もあなたが如何に私に愛され、何を成したかを綴り、その血を私

の名と共に残り続けなさい」

「そりゃ光荣だ。」

愛してるよ、華琳」

そう言つて俺の目前へと迫つた唇を俺は拒むこともなく……つてあれ？

「何で華琳がここに居るんだ?!」

寸前まで迫っていた唇が離れ、舌打ちと共に華琳が俺を見ていた。

「先程までの言葉は無意識だったのですか……兄者」

おそらく護衛としてついてきたのだろう樟夏は呆れたような顔をしているが、それに対して応えることは決まっている。

「俺が華琳たちを愛しているのは当たり前だろう？」

それを恥じることはないし、むしろ俺の存在意義と言つてもいい！」

「そこまで言いますか?!」

驚く樟夏を見つつ、視線は華琳へと向ける。

「それで冬雲、あなたは休みに大量の食材を買う注文をしながら、一体何をしていたのかしら？」

何かを知っているような口振りと言ひ、最初から見ていたとしか思えない。それを確認するように樟夏へと視線を向けると、露骨に目を逸らされた。

……まさか、城を出たあたりから尾行されてたのか？ 専門職である白陽に気づかれずに？

そう思い、今度は華琳の影へと目を移す。

白陽の出し抜くことが出来るのは、この大陸中を探しても黒陽ぐらいだろう。

そうすると悪戯つ子のように笑い、こちらへと少しだけ舌を見せる黒陽に確信した。

「白陽……」

「姉さんは一時期、引き籠りに近い状態で修練ばかりしていましたので……」

そして、姉さんほどの実力は私にはまだありません」

悔しそうに言う白陽の頭を撫で、気にしなくていいことを示す。俺も気づかなかったしなあ。

「冬雲、白状するか、しないのか。選びなさい」

そう言っただけこちらを見る華琳に、俺は手を降参するように手をあげた。

華琳が認めるような店は入れるような状況になかったので、河原の近くで腰を下ろして事情を説明した。

「なるほどね……」

それで、作り手は一体どうするつもりだったのかしら？

「寝ないで作れば、どうとでもなると思っただよ。」

それに勝手にやったことも含めて、俺が説教されるだけだしな」

そう言っただけ笑い、立ちあがると華琳に膝を蹴られてまた座らされてしまった。何か言おうとして華琳を向くが、華琳は俺のことをまっすぐ見つめて口を開いた。

「あなたが勝手にしようというのなら、私も勝手にあなたのことと一緒にするわよ。冬雲」

開き直ったような言い分、それはまさに子どもの理屈だった。

勝手にする人間に対して、さらにそれを『一緒に行く』という自らの勝手に押し付ける屁理屈。

以前の華琳なら、こんな子どもっぽい理屈は出なかったんじゃないだろうか？

それが何だかおかしくて、その変化を愛しく思う。

霸王らしくある華琳ではなく、年相応の華琳がそこには居た。

「作り手はそうね…… 他は秋蘭と流琉、雛里、そして私が入れば兵たちにも行きわたるほどの料理を作れるでしょう。」

粥ともう一品、それはあなた主導で動かなければいけないのをわかってるわね？

「ああ、わかってるよ。」

天の世界のある地域の郷土料理で、その日に食べると幸せを運ぶとされている『ん』がづく食材がたくさん入ってるんだ」

白陽たちの見守る気配を感じながら、俺はそうして喋りながら華琳と共に城へと歩いてゆく。

どちらともなく手を繋ぎ、何気ない料理や行事の話をして、計画を詰めていくだけの時間はとても幸せだった。

冬至の当日、まだ日が昇っていない早朝から灯りと調理する炎に照らされながら、厨房は戦場と化していた。

料理の説明をしたら、俺はもっぱら食材を切る係を任された。

まあ、正確な舌とか、炎の加減とかは四人に任せた方が絶対うまくなるし、気にしてないけど。

既に粥の準備を始め、同時進行で里芋を茹で始めている。

茹でている間は華琳が鍋を見守っている間、三人で人参、蓮根、牛蒡、鶏肉をそれぞれの大きさに切る作業に入る。

「それにしても、いいのか？ 三人とも」

蓮根をいちよう切りにしつつ、俺は三人へと聞いた。

「何がだ？ 冬雲」

牛蒡を乱切りにする秋蘭の手並みは鮮やか、流石十人前は軽く食べる春蘭の世話をしていただけのことはある。

「いや、巻き込む形になっちゃってさ」

やや早く手が動き、サクサクと蓮根特有の切り心地を感じながら口を動かした。

「兄様は時々、変に遠慮しますね……」

「おやつの時とかは、呼ばなくてもきますもんね」

鶏肉を担当する流琉と、人参を担当する雛里も参戦してくる。

おやつの際は仕方ないと思うんだ。だって二人が料理してる時って厨房から凄い良い匂いがするし、二人のおやつは一つの魔法。

その手から生まれる料理は人を幸せにし、笑顔にすることが出来る。その料理もさることながら、作ってくれた二人が笑顔で『美味しいですか？』なんて聞かれたら、至福だろう？

「あわわあゝゝゝ……！」

「兄様！ 全部、口に出てますからね?!」

真つ赤になった二人を見て、俺は笑みを浮かべつつ、材料を切り続けると秋蘭がこちらを黙って見ていた。

「うん？ 秋蘭、どうかしたか？」

「私もおやつを作るべきかと、真剣に考えていただけだな」

そう言つて笑みを浮かべつつ、手を止めない。

秋蘭の料理、それもいいなあ。

「俺は大喜びだけだな、みんなの料理が好きだし。

食べ比べとか、みんなでするのも楽しそうだよな？」

組をわけて料理を作つたり、全員が評価者になつて優勝者を決めたら、それだけでいい行事になる。

いつか平和になつた時、国も、陣営関係なくそうしたことが出来たら楽しいだろうなあ。

そんなまだまだ遠い先のことを思い描きながら、俺はとりあえず手元にある大量の蓮根を切り続けた。

完成し、厨房にて兵たちに振る舞う。

筑前煮も粥もなかなか好評のようで、今のところ不満の声も上がっていない。まだ量もあるし、問題があるとするならあの一角だな。

「美味しい！」

野菜ばかりで微妙かなと思つたけど、何杯でもいけちゃうよー！！

「(がつつがつつ)」

料理を褒めつつ、食べまくる季衣と、黙々と食べ続ける春蘭。

・・・残つてる材料で何か別の料理、作んなきゃ駄目かな？

昼は大抵外で食べる風たちや、文官の仕事で来れないみんなにも持つていきたいし、別に分けとくかな。

まあ、おかずには多すぎるから料理できなかつた南瓜は流琉と雛里が、試作品でプリンを作ってくれたんだけど、それは今回食べれなかつたみんな用、かな？

そう言つて俺は厨房からみんなの笑顔を眺め、目を細める。

こんな些細なことで人は笑顔になれる。料理や、日々の改善を行う

ことなら華琳も大抵は賛成してくれるから、これからもちよくちよくこうしたことを行うのは楽しいかもしれない。

「冬雲」

俺を呼ぶ声に振り返り、そこにはいつも通り華琳がいた。

「華琳、お疲れ」

「あなたには今夜、この件を行ったことについて特別報酬が与えられるわ」

予想外の言葉に俺は目を丸くしていると、華琳は指を鳴らす。そうするとどこからか現れた樟夏と樹枝が俺の肩を押さえた。

「樹枝？ 樟夏？」

華琳、一体これはどういうことだ？」

「兄上、許してください。」

しかしこうしなければ、牛金の詩が…… 詩があああー！！

「フフフフ、今度の絡みは華佗殿との話を聞いたときはもう、フフフフフ……」

樹枝の悲しげな叫びと、樟夏の遠い目をした笑いが漏れる。

二人が、壊れてる?!

「さあ、今夜は私たちと冬雲の混浴ね」

どこか声を弾ませている華琳と二人の声に挟まれ、俺は喜ばいいのか、何をしたと聞けばいいのかわからずに苦笑することしかできなかった。

「ハハハ、ほどほどにしてくれよ？」



## クリスマス

『クリスマス』

そう、クリスマス。

あの赤鼻のトナカイに乗って、老人が空を駆ける日であり、世界的に有名な聖人の誕生日である。

豆知識となるがイタリアではこの日を『ナターレ』と言い、親戚や家族と過ごす日であり、一月六日までイタリアではクリスマスが続くらしい。

およそ二週間のクリスマス、これを知った時はおもわず楽しげで羨ましいと思ったものだった。

俺はまずこのクリスマスの一か月前に、行いたいことをまとめた企画書を書き、華琳に提出。

許可が出たことを確認してから、作りたい物にかかる費用を仕事の休憩時間を利用して算出。人手も手配し、飾りつけは暇なときに遊んでいる子どもたちに頼んで作ってもらった。

折り紙は手先を器用にさせるし、飾りも作れる素敵な遊びだと実感した。何より本が好きな子たちでも簡単に人の輪の中に入って行ける。遊びまわるのが得意な子と仲良くする姿は、とても微笑ましかった。

ツリーの方はこれを飾りつけして、町のあちらこちらに飾るだけとなる。

それが終わった後、俺はまず天和たちの元へと走った。

「というわけでさ、『冬』を元にし、子どもだって口ずさめるような曲を頼めないかな？」

俺は入ってすぐに三人へと、事情を説明して深く頭を下げた。

「冬雲さん、とりあえず頭をあげてください。」

せっかく来てくれたあなたの顔が見れないのは、私たちが嫌です」  
人和の手に導かれて俺は頭をあげると、天和は笑って俺を抱きしめる。

「うーん、久しぶりの冬雲成分補充」

「いつから俺の体は、成分表示化されるようになったの?!」

天和の発言に突っ込みつつ、難しそうに考え込んでいるのは地和だった。

歌に関して任されているのは地和であり、天和は歌唱力、人和はその他の雑事を任されている。あの時も俺がしていたのは支援者（スポンサー）である華琳と繋ぐことと、公演の場の用意だった。

「難しい、かな? 地和」

「……そうね、冬雲の季節だし。」

少し書いたつていいわよね」

小さく何かを呟いて、地和は筆を手にして何かをその場に書き綴る。その集中力は仕事をしているときの華琳を彷彿させ、声をかけることも憚られるほどだった。

「人和…… 地和のこれって何なんだ?」

とりあえず、今は声をかけてはいけないことはわかったため、小声で人和に確認すると苦笑しつつ首を振られた。

「地和姉さん、曲を考えている時（こうなると）は何も聞こえないので」  
「でも、この状態のちいちゃんなら大丈夫。」

大船に乗った気持ちでいてね、冬雲」

そう言つて俺を抱きしめて離さない天和と、さりげなく右腕から離れない人和。そして、その耳元に天和がそつと囁いた。

「あの調子だと、もしかしたら冬雲への愛の歌になるかもだけどね」

「?! 嬉しいけども!」

そういうのは俺にだけ、みんなに広めたいから!

頑張つて、そうじゃないようにしてくれよ?!」

真つ赤になり、熱くなる顔を隠すようにして俺は立ちあがった。

「じゃ、そういうことで歌の方は頼むよ!」

また来るから!

それから、大好きだ!!」

俺はそう言つて、真つ赤な顔のまま外に駆け出していった。

顔の火照りが落ち着くのを待つてから、今度は流琉の部屋へ。

「入るぞ？ 流琉」

戸を数度叩いてから、その場で声をかける。

「あつ、兄様。どうぞ」

返事が返つてきたのを聞いてから扉を開けるとそこには、そこには……

チャイナ服を纏った季衣と流琉、その色合いは赤と青。

季衣はいつも二つに括っている髪をお団子にまとめ、流琉は短めの髪をうまくまとめ一つのお団子にしていた。

互いが尊敬する春蘭と秋蘭を意識したのだろうその衣装は、色気と言う面においては物足りないが、可愛らしさと言う面において最上級の威力を発揮していた。

何この子ら、可愛すぎる!!!

冷めたばかりの顔が熱くなるのを感じ、音を立てながら口元に手を当てる。

「すごく可愛いぞ……二人とも」

目を逸らしつつそれだけ言い、半ば目的を忘れかける。懐に用意しておいたケーキの作り方を書いた書簡を置く。

生クリームの作り方は何故か雛里が知っていたため任せたが、本来生クリームは非常に手間がかかるものだど記憶している。殺菌していない牛乳を放置し、脂肪分と水分にわけ作業が困難を極めるため、天の世界ではまず家庭で牛乳から作ることはしないだろう。

「その、クリスマスっていう行事でな？」

作ってほしい菓子があつて、考えてくれるだけでいいから頼む。

材料とかの経費は俺に言ってくれればいいし、そのほかに何かあつたら、俺に言ってくれ」

春蘭とかで見慣れている筈のチャイナ服、だということになんだろう。二人が着ると健康的で可愛いのに、見ていることが後ろめたい。露出度的には普段着と変わらない筈だというのに、何故だろうか？

「はい！ 勿論、やらせてもらいますね！」

「僕も手伝うよ！ 流琉」

直視しないように気をつけながら、料理に関して思い出したことを付け足しておく。

「ああ、それからくれぐれも竈の使用には気を付けるようになる？」

「慣れてきたとはいえ、油断は禁物だぞ？」

「はい、兄ちゃん」

「はい、料理に油断は禁物ですからね」

わかっている様子の二人に俺は頷いて、次の場所へと向かった。

「沙和！ 知り合いの衣服系の店で、仕立てが早い店ってあるか？」

町中を駆けまわってようやく目当ての人に出会い、肩を掴んで詰めよった。

「隊長、こんなところで情熱的なのー」

俺のその様子に顔を真っ赤にして、そう呟く沙和に俺もまた赤くなる。すぐさま手を放し、少し距離をとる。

急いでたからって、俺は何やってんだ?!

「こ、これはー！ いや、好きだけど、慌てていて…… その」

「隊長…… いつものおふざけやん。」

何、真にうけとんねん」

その横には真桜が並び、呆れた視線を送ってきたので俺が改めて沙和を見ると沙和は楽しげに笑っていた。

「ふざけたのもあるけど、隊長大好きなのー!」

「沙和？ 風に言いつけますよ?」

そうして沙和が抱きつこうとした瞬間、白陽が影から飛び出し笑顔と手で顔を押しさえつける。

「それは勘弁なのー!」

許してええ、白陽ちゃん」

「ならば、この書簡に書いてある意匠をあと一か月以内に作れるように手配してください。

大量生産、大きさはそれぞれ用意し、人手等も風に言っておいてください」

白陽が、三人に会ってからどんどん逞しくなっている気がする。

弱みを握って、仕事をごり押しして……

どうやら同じことを思っていたらしい真桜も苦笑し、俺も笑う。

「それじゃ、寒いけど警邏頑張ってくれよ。」

これで、あったかいものでも食つとけ」

「おおきに。隊長」

そう言つて手を振りつつ、その場を後にした。

とりあえず俺も昼に食べるものを買ひ、白陽を追い出すように諸々の準備を頼んで、ある場所へと向かった。

クリスマス当日、一か月前から準備した甲斐があつて、町はいつも以上の賑わいをみせ、俺はおもわず頬を緩める。

俺自身は贈り物の準備のために徹夜明けだが、何とか全員分完成させることが出来た。材料であるものから手配することにも、創り方を覚えるのにもは相当な時間がかかったが、それは仕方ないだろう。今夜にでもそれぞれの部屋の前にこっそり置いておけば、作戦成功だ。

「眠い……」

白陽に休みを与え、追い払うようにして一人の時間を作ったので、影に彼女の気配はない。

徹夜明けは食事をとる気分にもなれずに、とりあえず町を見に来た形だ。

「ああ、だけど楽しそうでよかった」

昨日の昼間に二人を手伝ったクッキーを子どもたちに配るのも順調に行われているようで、広場には子どもたちの笑顔が溢れていた。

が、わずかな胸の痛みを感じ、俺はそこから目を逸らす。

「……それにしても、眠いな」

俺は怪しい足取りで、音のない方へと吸い込まれるように歩いて行った。

草と土の香り、それからやわらかな感触と優しい匂い。そして、暖かな手の感触に目が覚める。

「……起きたかしらっ」

目をわずかにあけるとそこに居たのは、夢那。

「メリークリスマス、私の旦那様」

寝ぼけながら、俺は彼女が優希であることを知る。そして、この事実を俺は目が覚めた時には忘れてしまうのだろう。

「・・・俺の部屋、執務机の二重底の一番奥に二つほど贈り物がある。

よかつたら、受け取ってくれないか？ 夢那」

その贈り物は優希ではなく、彼女のためのもので再会した時に同じものを渡そうと思っていた。

それだけ言うと彼女は一瞬だけ驚いたような顔をしてから、幸せそうに笑んで唇が近づいていく。夢と現実の境のような中で、俺の彼女だけのほんのわずかな時間がそこには確かに流れていた。

「ありがとう、冬雲」

それだけを聞いて、俺は再び眠りへとおちていく。

忘れてしまっただろうこの時を今だけは心に焼き付けて、また出会えるその日を願い、俺は眠りの中へと落ちていった。

「隊長！ こんなところで寝られていたら、風邪をひいてしまいます！！」

次に俺を起こしたのは風の声、見れば空は暗く、丸一日眠ってしまったようだった。地面で寝ていたせいと体は痛く、だが何故だか心には温かなものだけが残っている。

良い夢でも、見ていたのかもしれない。

「おはよう、凧」

「そうではなく！ 隊長が居ないので皆心配しています！！」

白陽に至っては、城中のあちこちを隠れることも忘れて走り回っているほどですよ！」

珍しく怒る凧に俺はなんだか笑ってしまっただけ、その手を任せて歩いていく。

「それは悪かった。

最近、忙しかったからついな」

「そうですね、この一か月本当にあちらこちらに走り回られている姿を、誰もが見ていました。

ですがだからこそ、隊長はこの行事を誰よりも目に焼き付けなければならぬのです。

何より、宴会の準備をして城にて、隊長を待っています」

雪がはらはらと振りだし、俺は上着を脱いで凧の肩にかける。体が冷やすのは体に良くないし、体調を崩してほしくないからなあ。

「隊長は・・・ どうして、こういうことを普通に・・・」  
「うん？ どうした？」

冷えるから、少し急ぐか。あんまり時間をかけると、歩きにくくなるだろうしなあ」

頬を赤らめる凧の冷えた手を取ろうかと考え、やめる。凧だったら、俺の冷えた体を心配しかけない。

「隊長！」

突然俺を呼び、その場に立ち止まる凧に俺も立ち止まる。

「どうした？ 凧」

「・・・ここのところ、何かを物思いにふけることが多かったように思ったのですが、気のせいでしょうか？」

とても寂しげで、後ろめたそうにされていたような気がして・・・  
今もどこか寂しげに見えたので、その心配になってしまった」

不安げで、心配をする凧の言葉に俺はまるで心を見透かされたような気がした。

「・・・俺は、あっちにも誰かを置いてきた。そのせい、かな」  
雪を掌にのせて、少しだけ笑う。

こんな日くらいは、多くを我慢してくれているこの乱世の子どもたちに贈り物をしたという気持ちもあっただろう。

だがそこには、確かに俺の後悔や後ろめたさから生まれたものも含まれている。

「俺って、身勝手に我儘なんだよ。凧。

結局全部、捨てて来たものすらここに欲しいと願ってる。無理なものにな」

数歩ずつ歩いて、凧へと振り返る。

本当に、俺は我儘だ。置いてきたというのに、捨ててきたというの

に、あの子たちもここにいればいいと思ってしまっている。

「思うことすら俺の身勝手に、後悔することも俺の気持ちを楽しむためのだけのものなのに」

「それは違います！ 隊長!!」

俺の手を痛いほど握り、まっすぐに目を見てくる黒みを帯びた赤。その目があまりにも真剣で、俺は目を逸らすことが出来なくなっていた。

「想ってあげてください！ どうか、忘れないでいてあげてください!!」

それがたとえ誰に自己満足だと映っても、私は…… 私たちはわかっていきます！」

まるで自分のことのようにその目を潤ませて、俺の手を包んでくれた。

「同じ場所にいなくても、忘れられることは、思われないことは……」

そこに居た者の存在を否定されることと同じだと、思います」

一つずつ選ぶように慎重に選ばれるその言葉は重く、実感がこもっていた。

それはおそらく、俺が居なくなつた日の後に考えてしまっていた考えの一つだったのだろう。

俺が消えたことは、どれほど深く彼女たちを傷つけたのかなど、俺には想像することしか出来ない。

「苦しくても、辛くても、悲しくても、想っていてあげてください。隊長。」

共に背負うなどとは力不足な私では言えませんが、私は隊長の傍を絶対に離れません。

だから、隊長。一人で頑張らなくて、抱え込まなくていいんです。隊長のことを支えたい者はたくさんいるんですから！」

雪の降る寒い中だというのに、俺は温かさに包まれたようなそんな錯覚を抱く。その嬉しさを誤魔化すように、俺はおもわず尻を抱きかかえてしまった。

「た、隊長?!」



「俺、結構重いぞ？」

それでもいいのか？」

こんな俺、いろいろ抱えて面倒事を増やす俺をそんなことを言ってくれるような心の広い人たちはほんの一握りだろう。

「と、当然です！」

隊長はそれを、私たちに当たり前のようにやってくださったんですから、どうか今度は私たちにあなたを支えさせてください!!

心からお慕いしています。隊長」

その言葉が嬉しくて、俺はそのまま風を抱えて町を通って見せびらかすように城まで駆けていった。

## 大晦日

『大晦日』

一年の最後の日であり、別名『大つごもり』。日本では年神を迎える行事が行われることで有名だ。

もつともこれを知る前の俺にとっては何越し蕎麦や新年に向けてのおせちなど、食事の印象が強い。おせちや蕎麦は比較的太りにくそうなものばかりがあるのだが、クリスマスとも日にちが近いこともあってそのまま食べ、米をつけて凝縮する形の餅は小さなものでもかなり米が必要というのもよく言われていたことだった。

一年と終わりであるこの日は、この一年頑張った自分を労うようにのんびりするのが天の世界での俺の日課だった。

が、やはり大陸では天の世界で『旧正月』と呼ばれる旧暦の一月下旬から二月上旬に祝うらしく、なんら生活に変わりはない。

「でも、したいなあ。」

大晦日らしいこと」

とりあえず、部屋の掃除を簡単に行い、大掃除は済んだ。

が、俺が知る限りでの年末の行事の大半は、天の世界の技術だから出来たことが多い。

炬燵とか作ったら、誰も仕事をしなくなりそうだから華琳にシバかれそうだし。法被は既にあるので防寒対策も上々、というよりも衣服系に関しては異常に発達しているのだから、俺の知識が入る余地などそれこそ濃い趣味の物ばかりだ。

しめ飾りとか、鐘とか作っても、微妙だろう。

というか、俺を始めとして煩惱を消したら存在自体消え去りそうなのが数名いるんだが……主に食欲とか、趣味に対する知識欲とか、性欲とか。

「冬雲が失礼ことを考えているような気がしたわ」

「メツソウモアリマセン」

扉を叩く音こともなく入ってきた華琳の言葉に即答しつつ、俺は華

琳を見た。いつもならば仕事を行っている時間だし、そんな時間ここに来るのは非常に珍しい。

「今日は休みなのよ。だから、付き合いなさい。冬雲」

どうやら顔に出ていたらしく、問いに対しての単純な答えが返ってくる。そして相変わらずの清々しいほど傲岸不遜な物言い、だが俺は再び珍しいと感じた。

「俺は仕事あるぞ?」

そう、俺が仕事だとわかっているにも関わらず、華琳からそんなことを言ってくることは今までなかった。

仕事に対してはこの国の誰よりも厳しく、サボりなどすればそれこそ恐ろしいほどの量の仕事を与えてくるような華琳が、わざわざ俺に我儘を言いに来るとは思ってたなかった。

「あなたがいつものように片付ければあと四半時で終わる量だった筈よ、それまではここで待つわ」

……… なんとというか、俺のことを熟知してらっしゃる。

呆れつつも、書簡を片づける手を止めず、白陽によつて華琳に茶などが用意されていた。

華琳も俺の部屋だから気を使うわけもなく、寝台に寝転んだり、日記に手を付けようとしたりするなどいつも通りだった。

あつ、俺に日記を勝手に読んで顔を赤くしてる。

「と、冬雲!」

あなたは日記に何を書いているのよ?!

稟みたいに顔を真っ赤にして照れる華琳なんて、なんて珍しい。思わず顔がにやけるだろう?

「何って…… そりや日々あつた楽しいこととか、みんなが如何に可愛いとか、料理がうまかったとか、大したことは書いてないと思うんだが?」

「……… 白陽、あなたはこの日記の中身を知っているのかしら?」

俺に話しても無駄だと思ったのか、華琳は白陽に問い、問われた当人は満面の笑みを浮かべた。

「存じております」

何だよ?!

喉まで出かかったその言葉をどうにか飲み込み、書簡に集中することを心がける。が……

「あら? 照れることはないじゃないですか。華琳様。」

華琳様が詠まれている恋の歌も同じような内容でしよう?」

「当然でしょう、愛する者を思つて歌を詠む。」

そのどこかおかしい所があるのかしらね?」

黒陽から知らされたその一言に俺は耳を疑い、おもわず顔が熱くなるのを感じた。勿論、続いた華琳の言葉にも、だ。

「なら、俺が日記にそういう言葉を残してもおかしい所はないよな」

「……!! ええ、そうね」

互いに赤くなつた顔を向けぬようにしつつ、周囲の温度が上がつたような気がする。つていうか、黒陽と白陽も生暖かく見守つてるよね?」

いつものように影に隠れるくらいの配慮してくれよ!

そんな部屋の温度が数度上がった状態で何とか仕事を切り上げ、俺は華琳に連れられるがまま市へと向かう。

「それで? 何か買うのかよ?」

「あなたが以前言つていた、おせち料理と年越しの料理を教えなさい」  
「はっ?」

驚きのあまり間拔けな声を出してしまい、華琳を見る。

「私たちとは違い、暦が二月ふたつきほどずれていて、その日のための料理を食べるつて言つていたじゃない。」

その料理を皆に振る舞いたいから、あなたも手伝いなさい」

「……わかつたよ、華琳」

苦笑しながら、華琳の手を取つて、市を歩く。

いつも通りの市の賑わい、俺がこうして出歩くことは珍しいことではない。仕事の関係上以前より、確実に回数は減つてはいるが、やはり将の中では多い方だろう。

「さて、華琳と楽しい逢引きだ」

俺がそう言つてニヤリと笑いかけると、華琳は呆れるような、幸せなようなそんな笑顔を見せてくれた。

「買い物するだけでは子どもじゃないのだから、はしやがないの」

「夕飯の買い物、こうして華琳と出来ることが嬉しいんだよ」

立場的に難しいことだとわかつていても、やっぱり好きな人と手を繋ぎ、腕をからめて歩くことはそれだけで嬉しい。

「まったく…… あなただって言う人は……」

何よりも何気に俺がクリスマスマスに渡したマフラーを巻いてくれるところとか、酒宴の時は決まつて俺が贈った杯を使つてるところとか、嬉しくてたまらない。

ヤバいな、顔のにやけが止まらない。

「使つてくれてありがとな、そのマフラー」

照れくさくて、喧騒に紛れそうな小さな声でそれだけを言う。

贈り物は贈った側の自己満足な部分が多いが、やはり使ってもらえるとその喜びが増すような気がするの、俺だけだろうか？

「……あなたが贈つてくれた物だもの、当然じゃない」

俺と同じような小さな声で言われたその言葉は、確かに俺の耳に届いていて、さっきの言葉が華琳に聞こえていたことを知る。

なんとなく互いに顔を会わせられなくて、俺たちは互いの手だけをしっかりと握つたまま、俺たちはそのまま買い物を終えた。

寄り道して帰リたかつたが、料理のことを考えるとそれも出来ず、両手どころか背中すらも物がいっぱい状態でとつと城に戻つて料理をすることが決まつた。

見慣れた厨房、そこには助つ人としていつも通り流琉と雛里、秋蘭の三人が居て、料理をするときには必須の人手が揃つていた。

まあ、季衣とか春蘭とかが人の十倍は食べるから、量を用意しなくちゃいけないっていうのが一番大変なところではある。今回はあらかじめ料理に関して俺が訳して記しておいたものがあつたので、それを使用。

おせち料理で時間のかかる黒豆だけを仕込み、早々に蕎麦打ちに移

る。

「兄様、一つ聞いてもいいですか？」

蕎麦粉と小麦粉を手早く混ぜ、水を混ぜ合わせたら、パンのように一つの塊にしてこねる作業をしながら、流琉が聞いてくる。

「これって結構、手間のかかる料理ですけど、どうして兄様が作り方を知っていて、手際がいいんですか？」

素朴な疑問を突かれ、俺は少し驚く。

まあ、確かに前の俺に比べればいろいろなことが出来るようになってるし、それをどうしてかと聞かれると…… 答えるににくい。

「それは確かに…… 縫い物もそうだったが、お前はともいろいろなことには精通しすぎていないか？」

「釜とかの知識もそうだしゆ！」

「こことあちらではいろいろ異なる中で、すぐさま別の形に意見をまとめるなんて尊敬してしまいます」

流琉を後押しする形で二人もそう言ってきて、俺はおもわず苦笑いしてしまう。

そんなに凄くないんだがなあ……

「それは確かに不思議ね、どうして男が興味のなさそうな食事、ましてや衣服にまで精通しているのかしらね？」 冬雲

栗きんとん用の栗を向く作業をしていた華琳まで加勢し、俺はやや苦笑いする。

「……衣服に関しては天の世界で当たり前にあったんだよ、綺麗な女の子に着せたり、空想上の物語に出てくる子に着せたりすることがさ。」

だから、普通に暮らしているだけでまったく興味を抱かない人以外、多少は知ってるのが当たり前なんだよ」

それでも知ろうとしなければ、知ることは出来ないというのは伏せておこう。主に俺のために、そして天の世界の男の面子のために。そんな趣味ばかりの人間ばかりだと思ったら、天の世界が幻滅されかねないしなあ。

「つまりあなたは、興味があつた。ということね？」

華琳の言葉に俺の手は止まり、冷や汗が出てきた。  
だがみんな、考えてみてほしい。

華琳の美しい金髪にウサギ耳をつけ、『不思議の国のアリス』のような服を着たら？

秋蘭のあのしなやかな鹿のような体に黄を基調とし、橙や桃色の花が咲いた美しい振り袖を着せたら？

流琉の可愛い見えた目に着ぐるみを着せ、あるいは料理用のエプロンを着てもらって『おかえりなさい』なんて言われたら？

雛里の普段かぶっている帽子にあわせて、魔女の衣装を着せ、さらにそこに魔法の杖小道具を足したら？

脳裏に描かれていく、みんなの美しい姿。

うん、好きであつてもしようがないと思う。

ていうか、今ここに居るみんなだけを考えたが、他のみんなでも余裕に考えられる。

もともと可愛い大切で大好きな人たちが、さらに自分好み可愛らしい格好をする。

それを嫌いな人間などいるわけがない。

「冬雲……」

秋蘭が俺の考えを読むように呆れたような表情をしているが、仕方ない。

何故ならみんなの素材が良すぎるし、それをさらに着飾りたいと思うのは人の性さがだと思ふな。

俺は今なら沙和と共に語り合い、うまい酒が飲めそうさ。

「華琳だって、好きな子たちを着飾るのは好きだろう？」

俺だって、大好きなみんなが綺麗な服を着て嬉しそうにするのが好きなんだよ」

「それはわかるわね」

華琳の目が一瞬怪しく光り、獲物を見るような目がしたが、気のせいだと思いたい。

が、それがゆるぎない事実だというのなら、俺一人だけにはしない。「どうせなら男女を含めて衣装を考えたり、市場を賑わせるために民

とかも見学できるような会場を使って衣装を見せる場を作ったりするのもいいかもな。

樹枝や樟夏、男は少ないから俺を含めて参加になるだろうし、天和たちとか他のみんなが出ることで結構盛り上がるんじゃないか？」

全員を巻き込む形、なおかつ市を賑わせるといふ目的(建前)を使つて、立案へと持っていく。

そして、義弟たちよ。お前らも巻き込まれてしまえ。

樹枝はもしかしたら、女装させられるかもだけどな。

「悪くない案だわ。今度、時機を見て開催しましょう。

フフフ、あなたもなかなか頭が回るようになってきたわね。冬雲」俺はそれにただ笑うだけに留め、秋蘭は呆れ、雛里はどこか感心していた。ここで余計なことを言わないのが、樹枝たちとの違いだろうな。

「それで兄様、料理や陶芸はどうしてですか？」

流琉が話を変えるように言ってきたので、俺は生地を被せて寝かせる準備をしてから軽く手を払う。

「やることなく、暇だった。

だから、体を鍛える片手間にいろんなことを学んでみたんだよ。

伝統工芸や、料理やら、一通り出来そうなことはやってみた。これがまた楽しくてな、何より一つの作業に集中することが出来たよ」

集中力もついたこともだが、贈り物を手作りできることが学んできてよかったと思わせてくれた。今も少しずつ作っているものがあるが、それは完成するのも渡すのも大陸が平和になってからだろう。

「まつ、そのおかげでみんなを喜ばせることも出来てるし、こうして一緒に厨房に立てるから、俺としては良い事尽くめだけどな」

「もうっ！ 兄様は・・・大好きです」

そう言つて俺へと抱きついてくる流琉をしっかりと抱きとめて、髪を乱さないように優しく撫でる。

「俺も大好きだよ、流琉」

面子が面子なだけに抱きついて来たり、嫉妬することもなく、その場に温かな空気が流れた。



そうして大した問題もなく、順調に宴会の準備が行われていった。

全員が揃い、いつも通りの無礼講。

酒を飲み、料理を食べ、天和たちが歌い、樹枝と樟夏に将の誰かが絡み、牛金が突然侵入して樹枝と取っ組み合いやど突き漫才をする。

ああ、いつも通りだ。

後半がおかしい？ 日常だ。

「お兄さん、飲んでますかあ？」

大きな酒瓶を抱えて持つてきて、俺の杯へと景気よく注いでいく。俺もそれを受け止めつつ、そのまま呷った。

「まあまあ、かな。」

霞と飲む速さを合わせてたら潰れそうだから、加減して飲んでるよ」

「霞ちゃんは底無しですからねえ、あれに合わせられる人なんているんでしょうかあ？」

クスクスと笑う風の杯にも酒を注ぎ、風は俺の肩にもたれかかるようにして酒を口にする。

「うーん、お兄さんと飲むお酒は美味しいですよ」

俺へとさらに体を寄せながら、目を細めて酒を傾ける風はとても幸せそうで、おもわず俺も笑顔になってしまう。

「蕎麦は美味かったか？ 風」

「咽喉越しが良いですねえ、今回は温かい物で食べ、なおかつ何も乗せていませんでしたが、いろいろと工夫すればまだまだ増えそうですねえ。」

「お店にするのも楽しいかもしれませんが」

「……華琳しかり、軍師のみんなはすぐさま市場に乗せようとするよな。いや、当然と言えば当然なんだけど。」

「大根をおろした奴とか、山芋をかけるとうまいんだ。」

「今度、季衣にでもよさそうな料理人を見つけてもらって、実行に移すか」

季衣なら小麦粉系を使う料理が得意な人を知っている可能性は高

いし、季衣が知っている時点でそれなりの腕前を持つ者という証拠。基礎となる味が出来ていれば、あとは個々の工夫次第だ。

「そうしましょー、華琳様に任せたら、いつまでも広まらずにわずかな料理人しか出来ない技法になってしまえますからねえ、

民に広めるのなら、その方法が一番ですねえ」

風も領き、不意に頭の上に何かが足りないことに気づいた。

「風、宝譚はどうした？」

「あちらですよー」

見れば樹枝が牛金相手に逃げ回り、時々攻撃しているのを囁し立てているらしく、春蘭たちもそれに対して野次を飛ばしたり、完全に芸扱いだ。

「樹枝もよくやるなあ・・・」

笑いつつ、そろそろ二人揃って完全に酒の入った桂花の説教が始まることだろう。

「楽しいでしょう？ 冬雲殿」

そう言つて俺の左隣に稟が座り、微笑みながら酒を注いでくれた。それを飲みつつ、俺は宴の全体を見た。

料理がなくなつたからか追加の品を作りに行つたのであろう流琉と秋蘭と雛里、ひたすらに食べまくる季衣、華琳の傍を離れずに樟夏の首を絞めつつ、樹枝に野次を飛ばす春蘭。

司馬八達と何やら情報交換するのは風たち、歌い続ける天和たち、牛金に加勢をしだすのは霞。斗詩は酔いつぶれてしまい、俺がさつき部屋まで送つた。

「ああ、楽しいなあ。

とつても、楽しいよ」

みんなと過ごせた今年も、最高の年だった。

時間が曖昧な今はただ、全員が笑つていてくれるこの時を幸せに思う。

そしてきつと、彼女たちとこうして過ごせる日々は、俺にとって最高の日であり続けるのだろう。

「愛してるよ、みんな」

今年最後か、今年最初の一言を俺はみんなへとそつとつぶやいた。

## 正月

『正月』

それは旧年が終わったことと、新年が新しく始まることを祝う日である。

正月といえば、大抵の人は三箇日までを正月だと思いがちだが、実際は一月が終わるまでが正月となっている。

また、親戚一同が集まったり、お年玉を貰えたりと子どもの頃はやたら楽しみだった思い出がある。

おそらくは日付が変わり、新年が開けただろう頃。

俺は早速宴の中央にて膝で丸くなった春蘭を撫でている華琳を眺め、新年の行事を行う。

「あうー、気持ち悪いです……」

冬雲さん？ 華琳様を見つめて、何をしているんですか？」

「おつ、起きたか。斗詩。」

新年の行事として、初日の出を拝んでるんだよ」

宴会場に戻ってきた斗詩に隣を叩いて、来るように促しつつ、水を差しだす。

酒が飲めない人などはないが、酒と同量の水を飲むことで悪酔いや潰れることを防ぐことが出来るらしく、俺の提案で宴の片隅には水を置いてもらうことには成功していた。

「ありがとうございます……」

初日の出って…… 本物の太陽はまだ出ていませんよ」

水を受け取りつつ苦笑する斗詩に、俺は得意げになって笑って見せる。

「あつてるさ。」

魏の日輪はあそこに出てるんだからな、眩しくて綺麗だろ？

みんな、朝日に照らされて、とっても楽しそうだ」

華琳太陽の周りで楽しげに酒を飲み、料理を食し、それぞれが楽しんでいる光景が広がっていて、それを眺めながら飲む酒は最高に美味しい。

料理も勿論美味いが、これ以上の酒の肴はそうはないだろう。

「そうですね。」

それにしても皆さん、お酒強すぎですよ……」

俺に同意して優しく微笑む斗詩は、そつと俺の体にもたれかかってきた。

「まったくだ。」

霞なんてずつと飲んでるから、折を見て俺が水を飲ませに行かないやいけないくらいだしなあ。

まっ、俺は弱いけどな」

斗詩の言葉に同意しつつ、俺は朝用に出されつつあるおせち料理の食べやすそうな豆をよそつて斗詩に差し出す。

「嘘を言わないでください。」

結局、ずつと宴会場にいられたのなら、十分強いですよ」

豆を食べつつ、溜息を吐くようにそんなことを言う斗詩に俺も食事をつまみつつ、答えた。

「コツがいるんだよ、みんなの速さに合わせて食べたり、飲んだりしたら体がもたないだろ？」

だから、たまに立ちあがって酌をしに行ったり、ふぎけてあの芸の中に混じったりしてればいいのさ」

流星に度が過ぎた牛金は俺が強制的に沈黙させ、疲れ切った樹枝と樟夏に久々に尊敬の目で見られたな。

「……慣れ、ですか？」

「じゃないと俺の場合、酔い潰されて何されるかわからないしなあ」

ニヤツと笑って答えると斗詩も笑顔になり、髪を梳くようにして撫でて肩を抱いた。

「確かにそうですね」

クスクスと笑ってくれた斗詩をそのまま腕に抱きながら、あまり変わりようのない宴を眺めた。

華琳は…… 春蘭が寝てたところに秋蘭が増えてるよ。

羨ましいなあ、正直あそこに混ざりたい。

風と稟、桂花は……なんかさつきこつちを見た後に作戦会議開いてるのは何故だ？

樹枝と樟夏は二人して隅で寄り添いあうように酒飲んでるし、あれは愚痴ってんな。みんなが居るところだとよした方が身のためだと思うんだが。

天和たちは今日も公演があるとかで行っちゃったし、人和にはある一件に関してお願いされたけど……どうすっかなあ。

流琉と雛里は結局季衣の腹を満たすために厨房に立っていて、司馬八達も『私たちが仕事をしないわけにはいかないでしょう』とか言つて途中で仕事に戻ってしまった。

霞……お前はどんだけ、底無しなんだ？そして、凧、沙和、真桜、どうしてそれに付き合つて平気になのかを、俺に教えてくれ。

懐に入れておいた人和によって渡された書簡を見て、眉間に皺を寄せていると斗詩が俺の顔を覗きこんでくる。

「どうかしましたか？

その書簡は……」

書簡に軽く目を通し、内容を理解した斗詩は笑いたいのだが、笑つてはいけないような困った顔をされた。

「た、大変ですね、冬雲さん」

「……ありがとう」

苦笑されたので、俺も苦笑で返すしかない。

「何よ？ その書簡は！

というか、宴会の場に書簡を持つてくんじやないわよ！ 仕事中毒者!!」

突然降ってきた言葉とともに書簡が奪われ、その手の主に視線が映り、そこには桂花が仁王立ちをしていた。

よりにもよって、一番この書簡を見てはいけない人物に見られた……!?

「何々、『役満姉妹、幻の四人目企画』……?」

芸名は海和ちゃん、人員は……」

一通り読んだ桂花は怪しく笑って書簡を懐にしまい、それとは入れ違いに算盤そろばんを出して弾き始める。

「この仕事、私と華琳様が進めるわ。」

あなたは天和たちとの仲介を任せるから、衣装も、掛け声も、人員もこちらで用意するとだけ伝えておきなさい」

正直、嫌な予感しかない・・・

というか、人和もこれを見越して、直接華琳達じゃなく俺に渡したんだろう。

「ああ、わかったよ・・・」

「それから・・・ 膝掛け、ありがとう」

立ち去る間にそれだけを言って、風と稟の元に足早に戻っていく桂花は凄く可愛いと思う。

「膝掛けて、桂花さんは違う物にしたんですか？」

「クリスマスの時、いつも頭巾を被ってるお桂花にマフラーはつけにくいと思ったから、少し大きめにして膝掛けにも使えるようにした」  
実際つけてみるとわかるんだが、頭巾を被った上にマフラーを巻くと首が絞まるような息苦しきがある。

だから、多少手間はかかったが、桂花の物は倍の大きさにし、折りたたんでもマフラーに使える物にした。

「頭巾をしないと落ち着かないだろうし、無理してつけてもらいたいわけじゃないからな。」

なら、普段から使える物の方がいいと思ったんだよ」

文官としての仕事の多いし、首元と足が温かいだけで作業の効率はずいぶん違うだろう。役に立っているようでよかった。

「・・・冬雲さんは、どうしてそう言う気遣いが細やかなんでしょね。」

さつき、よそつてくれた料理も、私が食べやすいものを選んでくれたんですよね」

なんだか凄く優しい目で見られ、俺は気恥ずかしくなって目を逸らしてしまう。

「俺が食べたかったただけかもしれないぞ？」

流琉が煮てくれた黒豆が美味しいから、ついでに斗詩にもよそつた。それだけ！」

「ふふ、そういうことにおいてあげますね」

必死に誤魔化す俺を斗詩は微笑ましそうに笑って、立ち上がる。

「流琉ちゃん、雛里ちゃんを手伝ってきますね」

「酔い潰れてたんだから、無理はするなよ」

「もう、冬雲さんの意地悪！」

俺は仕返しのもりで返しつつ、そう言っただけで笑いながら厨房へと向かう。斗詩を見送った。

まったく、俺の好きな子はどうしてもこんなに可愛いんだ？

「さて、冬雲。」

やっとウチが冬雲を独り占めする時が来たでえ！」

そう言っただけで俺の肩に絡みついてくるのは酒臭い霞、その割には意識がはっきりとしているらしくいくら飲んでもまったく酔わない不思議な体質でも持っているんじゃないかと思う。

「俺としては嬉しいけど、それは厳しいだろ。」

宴会場の中で二人つきりにはなれないし、ここでしたらどうなるか……」

絡みついてきた霞の腕をとり、とりあえず隣に座らせて水を渡し、いくつかの点心をよそう。水を飲み、俺がよそつた点心を美味しく食べる霞におもわず顔がにやけた。

「だから、今から行くんよ。」

馬走らせて、二人で綺麗な景色でも見に行こつ！」

諦める気のないらしい霞は、目を輝かせて話を続ける。

俺も二人での逢引きはしたいけど、難しいとも思うんだよなあ。

「あんなあ……そんなのすぐにばれて、みんなに追いつかれちゃうぞ？」

「ウチと冬雲やったら平気やって！」

ウチの黒捷と冬雲の夕雲やったら、それこそ華琳の絶影か、本気出したん秋蘭にしか追いつけへんわ」

華琳と秋蘭が本気を出しそうで怖いから、言っただけだなあ……



酒を飲んで咽喉を潤しつつ、今年の干支が馬であることを思い出し、腰をあげた。

「夕雲を思いつきり走らせていいなら、その提案に乗る」

みんなは怖いけど、黒捷と夕雲が本気を出して走れば。それこそ誰も追いつけない。

あとは俺たちがしがみついているだけでいいし、二頭の散歩のおまけで綺麗な景色を見ることが出来たら御の字だろう。

「ええよ。」

黒捷も鈍ってるみたいやし、思いつきり走らせてやりたいんや」

言うが早いか、俺が立ち上がろうとした瞬間に霞に腰を持たれ、肩に担がれた。そして、霞が滅茶苦茶悪そうな顔をして、息を吸う。

わーい、今年二度目の嫌な予感が、到・来！

「アハハハハ、今日の冬雲はウチのもんや！

とれるもんならとってみい!!」

その言葉とともに宴会場が殺気立ち、一斉にこちらを見る。

だが、全員が見る先にあるのはまるで荷物のように肩に担がれた俺と、得意げな顔をしているだろう霞の姿。

「今年初めの宣戦布告、ね? 霞」

華琳の言葉が静かになつた宴会場に響き、誰かが少し動くだけでそれがやたら大きく聞こえる。

酔っていた春蘭と秋蘭がゆらりと立ち上がり、武官だけでなく文官である筈の稟や風からも穏やかではない気が流れる。

怖っ!?

ていうか、本当に稟たちって軍師なのか?! 何でこんな殺気を出せるんだよ!

「ヒヤハハハハ、どんな殺気も今なら怖ないわあ!

行くで! 冬雲!

舌噛まんように、しっかり口閉じとくんやでえ!」

言うが早いかその身を翻して駆けていく霞と、それを追ってくるみんなの地鳴りにも似た走る音。

しかし、下を向き、上下に揺れるような感覚に襲われるこの体勢は

酔う。とりあえず、酔いを多少防ぐために顔をあげると、後ろからくる親の仇でも見つけたかのような全員の顔におもわず表情が強張る。突っ込みたいけど、突っ込んだらすぐに舌を噛みそうな気がして出来ないな。

「兄上は年が明けようと、暮れようと変わらないんだなあ」

「兄者の運命なのだろうな．．．．． そしておそらく、我々も」

「縁起でもないことを言うな！」

あいつが蘇ってくるだろうが!!」

宴会場を去る間際の義弟たちの会話と、その影に忍び寄る見慣れた部下の後姿を見たことは気のせいだと思っておこう。

お前たちも頑張れ、義弟たちよ。

霞にかっさらわれ、突然の事態にもかかわらず、状況を察してくれた愛馬たちには頭が下がる思いです．．．．．

「ありがとう、夕雲。」

お前じゃなかったら、絶対逃げきれてなかったよ．．．．．」

走りながらそう囁くとさらに速さが増し、俺自身が本当に乗っているだけの状態だった。

城を出た辺りまではわかったが、それ以降の道はどうも馬二頭が決めているらしく、霞はもう楽しんでるだけだな。

「気が済むまで走りや！ 黒捷!!」

朝日に照らされ、黒馬と共に駆けるその姿は雄々しく、美しい。

『人馬一体』、まさにそれを体現している霞の姿に思わず見惚れてしまふ。

戦場を共に駆け、命を預け、生死すら共にすることもある愛馬。

騎馬隊の者たちの愛馬へと駆ける思いは、恋人や親類に向ける感情によく似ていた。

「綺麗だなあ．．．．．」

そんな俺の言葉の思いを察してくれたのか、夕雲は立ち止まって、その光景を見せてくれる。

「二つ不安があるとすれば、城に戻る時だな．．．．．」

「そりゃないわ。」

華琳や、白陽も、他のみんなも似たり寄ったりやし、だーれもウチを責めることは出来んよ。

今日はたまたま、ウチが先手を打てただけや」

俺がそう言つて頭を抱えていると、汗を拭いながらこちらに駆け寄ってくる霞の姿があった。

流石にあれだけ馬に任せて動いていれば、汗くらいはかくか。

「はあ……汗くらいは拭けよ。まだまだ寒いんだから、風邪ひくぞ?」

この時期でも真桜と霞は二人して、そんな格好でいつも風邪ひかない心配してんだからな?」

手拭いで顔についた汗を拭きつつ、軽く注意をしとく。

冬場でも上着を羽織ってくれないからせめてマフラーを贈ったんだけど、『もったいない』とか言つて使つてくれないんだもんなあ。

「ほつれたら直すし、ボロボロにしてもまた作るからさ。」

マフラーもちゃんと使つてくれよ」

そう言つて頭を撫でると、霞は赤くなつた顔を隠すように俺の胸に顔を押し付けてきた。

「……冬雲は卑怯や、いつつもこういう不意を打ってくる」

「そんなつもりはない。」

そんなこと言つたら、さつき黒捷と一緒に駆けてた霞だつて……言いかけた言葉が流石に恥ずかしいものだど気づき、やめる。

が、仕返しとばかりに霞がすぐさま顔を上げ、俺の胴へと腕を回してきた。

「おう、なんやなんや? 言うてみ、この色男。」

ウチに見惚れでもしてたんか?」

その腕を払うことも出来ず、人をからかう時の霞の表情も好きだと思ふのは惚れた弱みだろう。

だから、熱くなる頬を手で隠しつつ、俺は白状することに決めた。

「ああ、そうだよ!」

朝日に照らされる中で、まるで黒捷と共に舞うように戯れる霞に見

惚れたよ！」

一息で言いきって、霞を見るとさつきよりも顔を真っ赤にしていた。

言っちゃ悪いが、霞が照れるところって滅茶苦茶珍しいよな。俺が知っている限りだと、他のみんなの前でも見せたことないんじゃないか？

「あー！ もう……冬雲やなあ。

年暮れても、明けても、なーんも変わらへん。

どこ行っても、それこそ馬鹿と一緒に死んでも治らへんとかやう？

この天性の女つたらし！」

えー……これって褒められてるか微妙じゃね？

俺が微妙そうな顔をしていることに気づいた霞は、真っ赤な顔をしながら黒捷に飛び乗った。

「けどウチらは、そんな冬雲に惚れたんや。

あん時の一刀に惚れて、帰ってきた冬雲に惚れた。

ウチらはみーんなして、同じ男に二度惚れたんよ」

そう言って笑う霞の笑顔はとても綺麗で、俺はまた見惚れてしまった。

「まっ、ずいぶん他所の女も惚れさしとるようやけど……それもしゃーないやろ。

華琳が惚れた男で、あん時のみんなを惚れさせた男や。それに……」

その言葉を聞きながら、夕雲の背に乗った俺の横を通り過ぎ様とした瞬間。

突然、俺の頭をその手にしっかりと掴んで顔が近づけ、唇を奪われた。

「ウチが惚れた男や。

大陸中の女が欲しがっても、ウチは驚かへんよって」

そう言っただけでやりと笑って、黒捷と共に駆け抜けていった。呆気にとられた俺は、一度膝を叩いてから夕雲を翻した。

「ちよつと待て！」

言い逃げなんて卑怯だろうが!!」

「冬雲もよくやることやーん。」

仕返ししたかったら、ウチに追いつくか、捕まえるかをしてみー!」

「その言葉、後悔させるからな! 霞!!」

この追いかけてここが日暮れまで続き、城に帰った時にみんなから笑顔で説教されたのは言うまでもない。

二月二日

「二月二日、か……」

午後の鍛錬を終え、小休止を兼ねて城壁から城下を見下ろす。  
景色の良さと、ここで作った思い出もあつてか、ついつい足を運んでしまう。

今日は二月一日、天の世界で言う中国の旧正月で賑わいを見下ろしつつ、あのオタク文化が作り上げた名称を思い出す。

「でもさ……」

コレを言ったり、やったりしたら、俺を見る目が今後、いろいろな意味で厳しくなるような気がするんだよなあ」

それにこの国を治めている華琳と若干異なるとはいえ同じ髪型をする、というのも問題のような気がするんだよなあ。

「冬雲、どうかしたのかしら？」

噂をすれば影、慣れって怖い。

影に心配がなくても、背後に突然立たれても、殺気が向けられるか、不意を打たれるかをしない限りは驚かなくなってきた。

「いや、俺がいたところにあつた祭日ともいえない日が、明日だったことを思い出してさ」

「あなたのいた世界は、ずいぶん行事が多いのね。」

呆れるような、羨むような声。俺にもそれは苦笑するしかない。

まあ、世界中はともかくとして、俺の周りには娯楽として『○○の日』というのを楽しむくらいは平和だった。

「俺がいたところってさ、縁起担ぎや語呂合わせが多かつたんだよ。」

『言葉には力が宿る』なーんて言って、土地名を付けたりな」

そもそも毎日『先負』、『大安』、『友引』など決まっていたし、『毎日が記念日』を地で行くのが日本。だから、他国から入ってきた行事が変化して楽しむものになるのもむしろ必然だろう。

「それで？」

話を逸らしている気がするのだけれど、明日は何の日なのかしら？」

「……呆れると思うぞ?」

「この二月の間で多くの行事があつたのだもの、これ以上呆れることはないわよ」

「ですよー」。

和洋折衷、日本独自に変化した文化など、それこそ山のようにあつたし、その次の日に行われる行事と、その次の行事も話してはある。呆れられても当然だよなあ。

「ツインテールの日」

隣に腰かけた華琳の髪に触れながら答えると、ジト目をして、『呆れるを通り越して少し引いている』といった顔をされた。

「俺が作ったわけじゃないぞ?!」

ツインテールは華琳の髪方だからと言って、作るなんて権力もなければ、噂を流すように同好者たちの会を作ることなんてしてない。

「そこまでは思っていないけれど…… 本当にあなたの世界は妙な日があるのね」

否定が出来ない。

むしろちゃんとした祝祭日より、現代はそういう語呂合わせと趣味に偏った日の方が多い気がする。

「まあ、だよなあ。」

それにあの世界の子どもにとって祝祭日なんて、義務になつていた学ぶことをサボる口実みたいなもんなんだよ」

「贅沢なものね」

「俺も今はそう思うよ」

学ぶことが当たり前で、『知る』ということの楽しさを感じない。だというのに比較はされ、楽しくもないことに理不尽な差を見せつけられる。

それがどれほど恵まれた環境なのかも知らずに、祝祭日という休みの口実を見つけては喜んでいた。

「さてっと、書簡仕事も残ってるし、俺はもう行くぞ。」

明日は久しぶりの休みだし、午前と午後はのんびり過ごすとするよ」

立ち上がりつつ、華琳を見る。

いつもと同じ二つに縛り、巻き付けられるような金の髪。それを飾るは紫というには少し鮮やかなりボン。華琳の美しさに俺は目を細めてしまった。

「ええ、私はもうしばらくここに居るわ」

「そっか・・・ じゃあ」

羽織っていた上着をかけ、それに華琳が少しだけ虚を突かれたように目を丸くしたのに俺はおもわず笑みをこぼした。

「二月はまだ冷える。」

華琳が風邪でも引いたら、桂花と春蘭を筆頭に城中が大騒ぎだ」

筆頭軍師と、将軍が筆頭とはこれいかに。

二人とも前よりは落ち着いて入るが、華琳のこととなると次元が違いうしなあ。まあ、俺もただけど。

「あなたは騒いでくれないのかしら？」

俺を試すように問いかけ、その顔に悪戯つ子のような笑みを浮かべていた。

わかってるのに、聞いてるだろ。絶対。

「俺は話を聞いた瞬間、医者に走るさ。」

体が冷えきらないうちに戻ってくれよ、華琳」

「ええ、ありがとう。冬雲」

華琳のその言葉を背に聞き、俺は自分の部屋へと戻った。

そう、あの時までには今回は何もしないよなとか、思ってたんだよ。流石に行事も立て込んでたし、天の行事に合わせて行動していたらそれこそ仕事が回らなくなる。

そう思ってた俺はいつも通り軽い朝の体操を兼ねた訓練を行って朝を行っていた時、変化が訪れた。

「おはようございます。冬雲様」

「ああ・・・ 白よう？」

いつもとほぼ同じ頃合いに白陽が水桶と汗拭き用の布を持ってくる。



だが、髪がいつもと違い、髪留めによって少し額を出すようにしていた。

「やはり、似合いませんか？」

「そんなことはない！ 断じてない!!」

むしろ超似合ってる！ だから今度、髪留めを買いに市に行こう！

が、せっかく綺麗なその姿が飾りも何もないために活かしきれない。

くそつ、俺の馬鹿。白陽が近くにすぎ、なおかつ物を欲しがらないからって、そう言った品を渡すことを忘れるなんて、不覚！

「……」

詰め寄った俺を呆然と見上げ、俺と目が合うとその顔が瞬時に真っ赤になった。

「あの…… そこまでしたいただかなくとも。」

私など着飾っても、木偶が服を着ているのと同じですから」

今、凄く前の風を思い出したな。

なら、とるべき行動は一つ、無理にでも外に出そう。

今度の休みにでも沙和たち連れて、服を選んでもらおう。俺には女物の服のこまごましたことはわからないからな。

「白陽は自覚と自信がなさ過ぎるんだよ。」

瞳も、髪も、誰に対してでも真剣にあらうとする心の在り方すら、綺麗なのに。

それを他の者が知らないで、白陽を誤解したままなんてもったいない」

言いながら、俺はそつと白陽の髪を撫で、青と黄の色の異なる美しい瞳を久しぶりに間近で見る。

「ほら、やっぱり綺麗だ」

「きよ、今日はこれで失礼します！」

顔を真っ赤にしながらも、いつもと変わらない速さでその場から走り去ってしまった。

白陽とは触れ合い程度は何度もしているが、こうしたやり取りは初

めてだったかもしれない。そう考えるとなんだか俺の頬も熱くなってきた、濡れた布を顔に押し付けた。

が、脳裏に浮かぶのは珍しく真つ赤にして照れる白陽の姿で、運動後であること以上にさっきの出来事が俺の体温を高くしている気がした。

「やれやれ、お兄さんは本当に女ったらしですねえ」

「まったくだぜ！」

この色男が、爆発しちまえ！」

聞き慣れたのんびりとした平坦な声と、その後続くのは言ってる内容も声も喧しい宝譚の声だった。

「その女ったらしを惚れさせた奴らが何言ってる……」

反論をしようと振り返ると、ツインテールの風がそこに立っていた。

言葉を失い、手に持っていた布を落とす。

まさか、白陽はツインテールの目を華琳に聞き、なおかつ自分の髪では結べないからあんなことをしたのか？　だとするなら白陽、健気すぎるだろ?!

今すぐに白陽を抱きしめに行きたい衝動に駆られながらも、風の似合いすぎているツインテールが俺の動きを封じてしまっている。

「おにーさーん？　どこ行っているのですかー？」

帰ってきてくださいねー？」

「駄目だぜ、風。」

こいつぁ、本気で見惚れてやがる」

「それはそれは、照れてしまいますねー。いやん？」

いつもと服装は一切変わらない。だというのに、どうして女性とは髪型一つ、衣服一つで魅力が異なるのだろうか？

風のさらさらの髪を二つにまとめただけ、前髪は普段と変わらな

い。  
仕事や、生活を送るうえで人と接触しないなんて出来はしないし、今日のこの後仕事があるのなら、誰かに見せることになってしまう。

だが、この姿を俺以外の男に見る。だと？

想像しただけで心がざわめき、自分勝手極まりないと自覚しているが見た奴をべに走りたいな。

心の奥底から湧き上って来る独占欲を押さえつけながら、俺は風を手招きして膝の上に乗せた。

「どうかしましたかあ？ お兄さん」

わかっているような口振りで、俺はリボンをほどき、別の髪型へと変えていく。指に引っかかることはなく、それなのにさわり心地は猫の毛のように柔らかで、ずっと触っていたい衝動に駆られてしまう。髪が多いからいろいろ出来るし、とりえず大きな一本の三つ編みにしよう。

「これは俺だけにしか見せないでほしいんだよ。

ていうか、見せたくない」

「独占欲、剥き出しかよ?!」

「俺だって、恋する一人の男だ。独占欲ぐらいあつて当然だろ?」

宝譚の直球なツツコミに俺はおもわず苦い顔をするが、とっさに思いついた反論言いつを振りかざす。

「相手が多すぎる、ハーレム野郎だけどな!」

「どこでそんな言葉を拾ってきやがった?! この電波塔が!」

俺、普段の生活になるべくカタカナも、日常的に使われてる英語もどきも使わないようにしてるにも拘らず、宝譚から飛び出したのは俺にとって最大の禁句ワード単語。

「そうですね、宝譚。」

お兄さんは、好意を持った複数の女性に囲まれているのではなく、お兄さんが好意を持った女性が我慢できなくなつて傍に居るのですから。

偶然、そこに放り投げられたわけでも、意味なく愛されているわけでもありません。あの鬼のようなしごきに耐えきり、今も努力する。そう出来た者だけが辿り着けるところがあるのです。

それに華琳様を始め、この陣営にいる誰もが優しさしかない者には惹かれはしませんよお?」

「褒められてる、のか?」

若干、意味合的に俺があつちこつちで女性を釣り上げてきたとも取れるぞ？ 特に前半。

「褒めていますよ。」

お兄さんがお兄さんであったからこそ、風達は恋をして、傍に居たいと思ったのですからあゝ」

会話をしながらも、俺の手は三つ編みを作っていく。単純作業だが、風の髪の長さでは時間がかかる。

会話が途切れ、しばらくの沈黙と、その作業を風は何も言わず、されるがままにされていてくれた。

「やっと終わったな。」

風、もういいぞ？」

「ぐー……」

静かだと思ったら寝てるし、宝篋も風の腹のあたりで目を閉じて眠り、その姿はとても和む。

時間が経ったとはいえ、まだ早朝。食堂が開くまでまだあるし、とりあえず風は部屋に送り届けないと駄目だな。

「冬雲殿、おはようございませす」

「稟？ 随分早いな？」

風を両手で抱き上げ、立ち上がると機を見計らったかのように稟が現れた。

いつもの髪型である結び方ではなく、髪を降ろした姿で。しかも衣服はいつもの文官服じゃなくて、何でチャイナドレスなんですか？

赤を基調として、いつそ派手とすら言えるほど黄色や青、緑の花々が咲き誇る。そして、それが滅多に見ることのない稟の姿とあわせり、俺を魅了した。

誰の仕込みだ？

華琳か？ 沙和か？ どちらにせよ、グツジョブ！

「風を部屋まで送られるのなら、途中までぐー一緒してもよろしいでしょうか？」

「ああ、勿論。

その・・・髪型も、服も凄く似合ってるぞ?」稟

「あ、ありがとうございます・・・」

互いに顔を赤くしながら、稟は俺の隣でぴたりと寄り添おうとしたとき、突然手に抱いていた風が目を開き、にやりと笑った。

「奥手ですねえ、稟ちゃんも、お兄さんも。」

見ているこちらが、じれったくなってしまうのですよ」

「風?! 聞いていたのですか?!

というか、起きているのなら自分で歩きなさい!」

風の言葉に稟が怒りで顔を真っ赤にし、風はそれに余裕の笑みを浮かべていた。

「せっかくのお兄さんの腕の中ですから、嫌ですねえ。」

滅多にないのでですよ、お兄さんのお姫様抱っこは」

「そんなことは知っています! ですから、羨ましいんです!」

稟がその発言に気づいていないようで、風は俺へと目配せをしてくる。

まったく風は、友達思いだよなあ。

風をおろし、油断しきっている稟を抱き上げるとその体は驚くほど軽かった。

「ちやんと食事とつてるのか?」稟。

軽すぎて心配になっちまうぞ?」

「きゃつ? その突然すぎて・・・もう、きゆう」

抱き上げられた稟は顔を真っ赤にして、鼻を押さええたり、とにかく顔を隠すようにして、そのまま俺の腕の中ではたりとねむ・・・って気絶じゃね?!

「稟?!」

「あーあー、嬉しさと恥ずかしさのあまり気絶してしまいましたねえ。」

まあ、鼻血を噴きださなくなった分だけ進歩したということ・・・

このまま、稟ちゃんのお部屋に行って、今日は三人でのんびり過ごしませんかあ? お兄さん」

稟を倒れる主原因は間違いなく俺だが、その背を押した風は悪び

れることもなくそんな提案をしてくる。

まあ、断る理由はまったくくないんだけどな。

「ああ、今日は三人でのんびり過ごすか」

「ではでは、参りましょう」

そうして俺の二月二日は始まり、穏やかに終わっていくのだった。

二月三日

『節分』

立春の前日であり、冬から春へと変わるこの日はかつての大晦日である。日本で行われていた豆まきなどは「追儺ついな」と呼び、それらは厄払い、厄除けのために行われる。ついでにいうなら豆を落花生にしたり、鰯の頭を終に刺す魔よけは実は近代の物であったりする。

また、『運を巻き込む』、『縁を切らない』という意味を込め、恵方を向いて巻き寿司を丸かじりするようになった。

まあ、行事はいろいろあっても、俺には当たり前だけど仕事があるわけで。

午前の訓練を終わらせて、適当に昼を済ませたら、書簡を片づけるために部屋へと戻る。

俺の生活の一つの流れになりつつが、それでみんなとの毎日が成り立っていると思うとおもわず笑みがこぼれた。

「さてっと…… 今日書簡はどんだけあるんだ、か？」

そう言って扉を開くと俺の部屋の片隅に山と積まれた書簡、どう見ても普段の倍以上の量が積まれていて、おもわず目を疑う。

「……白陽」

「はっ」

「今日の俺の仕事、あの量であってるか？」

「華琳様を始め、文官の皆様方も仕事の面においての冗談は好まれないかと。」

真桜たちはその辺りがおおらかではありますが、風がいる限り書簡を溜め込みはしても月末には間に合わせるかと思えます」

白陽のいつもの冷静な声を聞きながら、俺はいくつかの書簡を手にとって眺める。その詳細はここ二月ふたつきの行事に関する諸費用、来年に向けての企画案及び『数え役満☆姉妹』の衣装案、公演案等々……

うん、書簡の量で冷や汗をかいたのっていつ振りだろうな？

でも、俺がその行事を増やしていることもあり、何とも言えない。

「というか、言ったら真剣な顔で懐かしいお説教が待っている気がする。」

「経理関係から片づけるか・・・」

計算だけの書類をいくつか手に持ち、机へと向かう。

「ああ、白陽。」

衣装の件は沙和にも意見を聞きたいから・・・」

「警邏の仕事を終えた後、こちらに来るよう伝えてまいります。」

天和さんたちの意見、希望などは既にこちらに。また、護衛である親衛隊たちからも、熱烈な愛好者たちから寄せられた希望をまとめた意見書が提出されています」

俺は白陽のその言葉に軽い頭痛を覚え、眉間に手を当てる。

いや、あの親衛隊を正式な護衛の意味を兼ねた隊にしたのは俺だし、そういう希望書とかあれば確かに便利だ。が・・・

「趣味と仕事、どっちのつもりで提出したんだろうなあ？」

いくつかの露出度が多い衣装に印をつけ、製作者の名を脳裏に記憶していく。

「親衛隊にはどうやら、俺直々に再教育が必須みたいだな」

怒りとは裏腹に声が弾み、口角が上がる。

さあ、どうしてくれようかなあ？

男色の多い樹枝の部隊との共同訓練でもいいだろうし、貂蟬と華佗に頼んで健康診断をしてもらってもいいかもしれない。

「その際は私もお手伝い致します」

どうやら先に赤の印がついていたのは白陽が見て、駄目だったものらしい。

「ああ、その時は頼む。」

それじゃ、白陽は警邏隊との連携が必要な書類を頼んでいいか？」  
「お任せください」

そう言うってから、俺たちは山と積まれた書簡を少しずつ減らす作業に入ってた。

そうして書簡と格闘し続けてどれほどの時間が経っただろうか、途



中白陽がお茶を淹れてくれたり、雛里が差し入れとして甘い物を持ってきてくれたりと休憩を挟みつつ、衣装の案以外の物は何とか処理が出来た。

「衣装の案は・・・正直専門外なんだがなあ」

むしろ初めから沙和に任すべきだろ、これ。

最高の物を作ろうとし、額が高くなってしまう華琳でも、天の世界でのやや偏った知識を持つ俺でもなく、そういうのを財布の都合とも知識の面においてもちゃんとした物を作るのは沙和だろうに。

「まあ、仕方ないか。」

まだ寒いし、袖のある衣装で、なおかつ見栄えのする意匠・・・  
いっそのこと、長めの靴下と防寒対策に毛糸のブレザーを着せて、制服姿でもありか。統一感を簡単に出せるしな。

そう考え、いくつかの案を言葉で書き記し、筆を置く。

「あーあ、眠いなあ」

白陽の気配はなく、窓から移る夕焼け空と鳥の声、遠くからは子どもの遊ぶ声が聞こえてくる。

まだ完全に平和とは言えない大陸の片隅に、確かに存在する一時（ひととき）の平穏。

「別に行事なんてなくても、こうした日々が『幸せ』っていうんだろうなあ」

今日が節分だろうと、立春だろうと、彼女たちと居られる日々ほど尊いものはない。

けど俺は欲張りだから、もっともっと最高の幸せが欲しいし、笑ってほしいと願うのは傍に居る者だけではない。

「華琳の欲張りなのが移ったかな？」

ぼんやりとそんなことを考えながら、眠気に任せ、気づけば俺は目を閉じていた。

「――者、その担ぎ方の名称を知っているか？」

「うむ？ 知らん」

眠りにつきりながらも聞こえてくるその声は、おそらくこの世界で

一番聞いているだろう二人の声。

わずかに目を開けるとまず移ったのは赤い布、位置的には腰、か？  
両手両足共に重力に従ってぶら下がり、俺の腰当たりはしつかりと  
右手で固定され、足には左手が添えられている状態。

それから導かれる担がれ方の名は一つだけしか、俺は知らない。

「春蘭・・・」

「おお！ 起きたか。冬雲」

嬉しそうに弾む声に俺も嬉しくなるんだけどもさあ・・・

「俵担ぎは、ないんじゃないか？」

もう『俺をどこに連れていく気だ?!』とか、『担ぐなよ!』とか言わないから」

荷物の運び方をされるとちよつと悲しい。だからと言ってお姫様抱っこされても嫌だけど。普通に背中がいいと思う。

「うむ？ まあ、起きたなら自分で歩け！」

「へいへいっと」

降ろされつつ、適当に返事をする。辺りを見るとすっかり日は落ち、静かな時間が始まろうとしていた。

二月の初め、まだまだ肌を指すような冷たい風が吹いていた。とりあえず、二人に風が当たらないように風上に壁となるように移動しつつ、俺を見て意味深な笑みを向けてくる秋蘭は見ない振りをした。

「とにかくついて来い！」

「首に絡みつくな！ 危ないだろうが!!」

「私がこけるようなへマをするとでも思っているのかー?」

春蘭の腕が首へと周り、倒れないように注意はしておく。

じゃれついてくる春蘭、俺の横をただ静かに笑みを浮かべながら歩く秋蘭、そうしているといつだか華琳の茶菓子を買った日を思い出し、懐かしい気持ちになる。だが、同時に影にいる白陽に気づき、笑みが深くなった。

「何が笑っている？ 冬雲」

秋蘭が俺の心を見透かすかのように問いかけ、俺の笑みは深まる一方だった。

「うーん？ 嬉しかっただけだよ。」

こうして、ただみんなと毎日を過ごせるのがさ」

あの日の続きでありながら、そうじゃない。

変わらないものがあったて、変わったものがある。

その変化は決して不快ではなく、俺をさらに幸せへと運んでくれることばかり。

やり直しでなく、続きでもない。

過去からありながら、なおも紡がれる新しい『今』が嬉しい。

「これからも、この先も、こんなたくさんのことが広がって行けばいいな」

春蘭は俺の言葉に不思議そうに首を傾げ、秋蘭にも同様の顔を向けられた。

えっ？ 何故だ？

「冬雲、貴様は馬鹿か？」

『『いけばいい』じゃなく、華琳様の下で私たちが築いてく。」

だろう？ 冬雲」

華琳に次いで傍に居た二人からの予想外の言葉に、俺は目を開いてから、額に手を当てた。

華琳の影響力もあるだろうが、この二人も俺の手を最初に引っ張ってくれた人だということを思い出す。

「ああ…… そうだな」

そうして話しながら、俺は二人にある場所に連れていかれた。

見慣れた玉座の間、用意されている宴会料理。

が、全員が決められた場所に並び、一人一つ巻き寿司が用意されていた。ただ、海苔は高価なためか漬物で包んである。

海苔の量産は難しいし、量産するなら呉と協力しなければ不可能。海苔は出来なくても、効率のいい漁のやり方で今度話し合いの場を作らないとなあ。

「言ってくれたら、手伝ったのに……」

人数分の巻き寿司の手伝いくらいは出来ただろうし、宴会場の準備

も何か飾ってあるわけではないが手伝えることはあつただろう。

「まあ、それはあとで説明するわ。」

それで冬雲？ ある方向をむいて食べるものらしいけれど、どの方向を向けばいいのかしら？」

「あー、すまん。恵方まではわからん。」

その年の幸せがやってくる方角を向いて食べるんだけど、あんまり意識してやったことがないから知らないんだ」

確か五年おきぐらいにぐるぐる回してる筈なんだけど、節分って巻き寿司食べるぐらいしかなくて、恵方なんて気にしてなかった。

というか、実際その方角を向きながら、巻き寿司食べる人なんているのか？

テレビとかじゃやってたけど、ネタにしか思えなかつたんだよなあ。

「あなたの知識が久しぶりに中途半端になったわね・・・」

一昨日見たばかりの華琳の呆れ顔だが、知らないものは知らない。適当なことを言つて、あとから言及された方が厄介だし。

「でしたら、華琳様。」

私たちにとつて、幸せがやってくる方向を向いて食べるのはいかがでしょうか？」

誰よりも早く華琳に提案した桂花は、そのまま何故か俺を指差す。

うん？ 俺がどうかしたのか？

「名案でしゅー！ 桂花さん」

その意図を最初に汲み取ったのは雛里らしいが、俺には何が何やらまったくわからん。

何を基準にその方角を決めたんだ？

「あらら、桂花ちゃんから珍しい言動と行動をとっていますよ？ 稟ちゃん」

「明日は電でも振るのかしら・・・？」

「聞き捨てならないわよ！ 風、稟」

軍師戦争が勃発しかけてるけど、俺には事態が呑み込めないんだが？

とりあえず、説明を求めるために視線を樹枝に向けてみる。

「兄上？ どうしてそんな不思議な表情をしてられるんですか？」

「いや、状況が全くつかめないんだが？」

「……兄者のそれは、もう病気の域に達していますね」

状況がつかめないまま義弟二人に呆れられ、突然俺の背中に誰かが乗った。重くはないからいいが、この寒い中で肌を出しているのを俺は二人しか知らない。

「真桜、何だよ？」

「隊長が意味を気づいてへんようやから、可愛い部下が直々に教えたろおもてなあ」

そう言うってから真桜は俺から離れ、親指を上へ、人差し指だけをまっすぐ伸ばした形で俺を指差した。

「隊長が居（お）る方向から、ウチらの幸せはやってくるんや！」

俺はその場で真っ赤に染まったんじゃないだろうかと思うくらい、顔が熱くなって、周りを見渡す。見れば俺を見ながら、黙々と巻き寿司を食べてる凧と白陽がいて、さらに熱くなってきた。

「樹枝、樟夏」

「何ですか？ 兄者」

「顔がもう引くくらい真っ赤ですなー、兄上」

もうそのまま床に額を当てて、無理やし冷ますしかない。ていうか穴を掘って埋もれたいくらいだった。

「嬉しくて恥ずかしくて、死にそう……」

「爆発してください。兄者<sup>上</sup>」

「もう、みんなの可愛さに撃沈してるけどな……」

「爆散しろ!!」

俺がそうしているうちに華琳が傍に来ていたらしく、そのままの状態を横に向けた。

「冬雲、今回はあなたを呼ばないで進めた理由があるのよ」

小さく切られた巻き寿司を俺に見せるようにして食べながら、華琳は口元をほころばせた。

「これを作ったのは誰だと思う？　冬雲」

「えっ？」

「いつもと同じ、華琳や流琉達じゃないのか？」

「勿論私たちが手伝いもしたわ。」

「けれど、巻き寿司はその具もほとんど春蘭が作ったのよ」

「えっ?!」

驚きの情報に思わず声をあげてしまい、春蘭を探す。

秋蘭の背に隠れるようにしてこちらを見ている春蘭が、すごく可愛い。

「食べておあげなさい。」

あなたのために、あの子はずいぶん頑張っていたのよ?」

華琳に促され、俺は巻き寿司を手を早速食べる。

漬物は美味しいし、巻きも固すぎることもない。中の具の玉子焼きも  
うまいし、他の野菜もうまい。

「ちよつと褒めてくる」

「いつてらっしやい」

「姉者、いつまでも隠れていないで、前に出たらどうだ?」

俺が来て何をするかを察した秋蘭が春蘭を前に押し出そうとする  
が、春蘭は嫌々と首を振って、秋蘭の背に隠れてしまう。

「何この生き物、超可愛い・・・!!」

「むう・・・ その、どうだったのだ?」

不安そうに顔を隠し、上目づかいで聞いてくるとかさあ!

「最高にうまかった!」

「今度また作ってもらってもいいか?」

右手で春蘭の頭を掻き撫でて、空いてる左手も秋蘭を撫でる。

絶対料理のことで苦労したのは秋蘭だろうしな、あと樟夏。

「ぬ・・・ あ、杏仁豆腐もうまくなつたんだ。」

華琳様にも褒められるほどに・・・

「こ、今度の休みにでも作ってやる!　心の準備でもしておけ!!」  
「ならば私は、その日の昼でも担当しよう。」

我ら姉妹の料理をしつかり堪能してもらわなければ。

な？ 姉者」

二人らしいその言葉を聞きながら、俺はもう今から次の休みが待ち遠しくなってしまう。

「ああ、早く次の休みにならないかな」

変わってないのにちゃんと変わっている二人を見守り、いつものように宴を楽しむみんなを見て、俺はまた幸せを実感するのだった。

## クリスマス 式

今年もまた年の暮れであり、同時に去年から行事として始まったクリスマスもまたやってくる。

去年同様、俺主導によりクリスマスによって街は賑わい、真桜率いる工作部隊<sup>冬桜隊</sup>によって用意されたクリスマスツリーが飾られ、今年は茶店や飯店の協力も得て子どもたちにささやかなお菓子を渡すことが出来た。

さらに赤い服に身を包み、本来は馴鹿<sup>トナカイ</sup>だが夕雲や数頭の馬に協力してもらい、角や鈴などの飾りつけをした状態で鱧<sup>そり</sup>を引いてもらった。そして、その鱧に乗るのはたくさんのお菓子を詰めた白い袋と、赤と白、付け髭を装備した『魏の三兄弟』と呼ばれる俺、樟夏、樹枝の三人である。他にも同様の装備の有志達を集い、数班に分かれて近隣の村の子どもたちへと贈り物を届けることが出来た。

一部では『赤の遣い』サンタ』という認識で広まりつつあるが、それもいいだろう。

子どもたちに贈り物を渡し、ささやかな一家団欒や楽しみを作るのが目的なのだから由来はさしたる問題ではない。どんなことがあろうともひとときの平和と安らぎ、そして笑顔をもたらすために毎年やってくるこの行事を可能な限りずっと続けていけたらいい。

「やっぱり、いいよなあ」

子どもたちの笑顔も、街の賑わいも、昼間にあつた光景を思い出して自然と声が弾み、頬が緩んでしまう。

「昼間に子どもたちの笑顔を運べたのはいいですが、兄者。

何故、私達はこんな夜更けまでこの格好をしているのでしょうか？」

「樟夏に深く同意です……」

加えるなら、どうして僕だけ下履きの丈が短いんですか？」

今は日がすっかり落ち切った夜、多くの者が眠りについていいるだろう時間。

そんな時間にもかかわらず、俺たちは昼間と同じ格好のまま城の



前の大通りに佇んでいる。

「下履きの長さは・・・沙和にでも聞いてくれ。俺は関与してないだけ言っておくぞ。」

というか、昼間は普通の奴を履いてたよな？ あれはどうした？」  
昼間は確か普通に長いのを履いていたし、子どもたちからも女に間違われることもなく上機嫌だった。何より、女装でないことが普通に嬉しかったのかもしれない。

サンタ服も丈を短くするなり、下をスカートにするだけで女物になることは誰にも言わなかったんだが、沙和が勝手に作っちゃったし。このままじゃ沙和が服飾関連で一つのブランド創り上げそうだな。大本が俺の知識とはいえ縫製関係の人脈は華琳以上、本人も手作りであるいろいろ作ってるみたいだし。今度、沙和主催でその手の行事を任せしてみるか。

天和たちも協力してもらえらるだろうし、一つの商売にしたら華琳達も含め多くの人を巻き込むこともできるだろう。何より服は生活になきやいけないものだ。うん、近いうちに企画書を用意しよう。

「いえ、一度着替えた時にどこかへ行ってしまうって、これしか残ってなかったんですよ・・・」

それと兄上、なんか脳内で惚気ていませんか？」  
「惚気？」

ただ俺の愛する者は何にでも秀でていて、凄く可愛いと思ったただけだぞ？」

ついでにその才能を生かせる場を行事や、仕事として向けられないかと思案していただけのことだ。

正論と欲望、ついでに仕事をごちゃ混ぜにしたものだが。

「それを惚気っていうですよ!!」

「そうかあ？ ただの事実なんだが」

背負った白い袋に入れてある荷物の中身を確認し、全員分あることを確認する。

今回は全員に髪飾りや首飾り、腕輪などを用意してみたんだけど、気に入ってもらえるといいんだが。

「それで兄者、一体何をするといいんです？」

「まだどこかへ贈り物でも届けるのですか？」

その姿を見て不思議そうに首を傾げて問うてくる樟夏へと、俺は笑った。

「ああ、この国で一番幸せにならなきゃいけない人たちにまだ渡せてないからな。

毎日頑張ってるみんなにサンタが来ないなんて、おかしいだろう？」  
「だったらやっぱり、俺がサンタになるしかないじゃないか。」

なんてつたつて俺は、みんなの笑顔が見たくてここに戻ってきた赤の遣いなんだから。

「はあ・・・ 兄者はどこまでいっても、兄者ですね・・・」

「そこが兄上のいいところなんですけど・・・」

「それで具体的にはどうするんです？」

ほとんどの人がもう眠っている時間にした理由もあるんですよな？」

「なんかこの二人が溜息ついて俺が見ることって、実は多いよな。褒めてんのか、貶されてるのかはいまいちわからないが。」

「サンタは夜、枕元に贈り物を置いていくのが向こうでの常識だったんだよ。」

「それに俺が直接渡してもいいけど、こっそり置いていって驚かせたんじゃないか」

「サンタとは、刺客か何かだったのですか？」

「いや、贈り物をする時点で刺客とは・・・ だが、侵入者には違いがない。天の国とは侵入者すら許すほど寛容だったのですか？」

「・・・うん、まあこういう反応になるよな。」

「向こうでもある程度の年齢になると誰でも考えることだし、子どもに夢を与えることに犯罪とか考えだすのは正直どうかと思うが仕方ない。」

「というのは建前で、親たちが『自分たちが贈った』っていうのは夢がないだろう？」

「だから、サンタっていう夢に溢れる存在が来たってことにしたんだ」

よ。

それに目を開けたとき、枕元に贈り物があるって嬉しいもんなんだよ」

照れくさかったんだろうな、親も。

たまにしかこんなこと出来ないし、誕生日とかだと理由を付けて渡しやすい。だけど、それ以外に何か子どもを喜ばせるような特別な日を用意したかったんだとしたら、なんだか大人も見栄っ張りな子どものように笑ってしまう。

外国の多くの風習を受け入れ、それを日本人らしく楽しい行事にしてしまったクリスマス。

料理を食べ、団欒し、子どもが欲しがっていたものをこっそりと渡す。

もはや本家とは異なるそれは、日本が毎日を楽しく過ごすための手段の一つでしかないのかもしれない。

「いや、兄上の場合そんなことをせずとも直接渡せばいいというだけで、わざわざこんな面倒なことをしなくても……」

「……まあ、わかっちゃいるけどな」

樹枝の言うのはもつともだが、起きた時に贈り物が置いてあった時の感動は言葉に出来ない。天では当たり前にあつた子どもの頃のささやかな幸せを、華琳達にも届けてあげたい。

「この時点でもう何を言ってもやめる気はないのでしようが兄者、一つだけ確認してもよろしいでしょうか？」

その贈り物を、将全員の寝室に侵入し、枕元に、置いて行くのですよね？」

「当然だろう？」

樟夏の問いかけに俺が首を傾げれば、二人は一瞬絶望的な顔になった後叫んだ。

「それ、私<sup>僕</sup>たちが見つかった場合、問答無用で飛ばされませんか?!」

「……多分大丈夫。」

寝室に入るのをするのは俺だけで、二人には荷物を見てもらおうだけだから」

俺はそれを否定することが出来ず、気まづくなって二人から目を逸らす。

「それもですが、兄上が入っても捕食する可能性がある方は約一名いるのですが、そちらはいかがなされるので？」

樹枝のその言葉に額に冷たい汗が流れ、それを拭いつつ、俺は視線を明後日の方向に向けて誤魔化した。まさか、贈り物の希望を書いた紙の全てに俺の名前が書いてあったなんて言えるわけがない。

「舞蓮は扉の前に置いておくことにするか・・・」

とりあえず全員分装飾品を用意したけど、数名は贈れないものもあるし」

「それはどういう意味ですか？ 兄上。

形がないものでも？」

「雛里の第二希望が『樟夏と樹枝の絡み合い』、舞蓮は『檻の鍵』、斗詩は『思い出』だからなあ」

「ちよつと待待ってくださいとうか!! 特に最初と最後!」

「最初はわかるが、三番は酒宴を開いたり、街を一緒に歩くだけでもいいだろう?」

予定を立てなきゃいけないからすぐに出来ないことではあるが、そんな大声で止めに入ることじゃないと思うんだが。

「いや、絶対そつちの意味ではないでしょう!」

彼女が希望している『思い出』の意味するところは、絶対夜に闇に行うことでしょう!!」

「兄上はどうして頭もいい筈だというのに、こう言った時妙な鈍さを発揮するんです?!」

『思い出』という単語でそこまで想像するこいつらも男なんだなとしみじみと思い、生暖かい目を送ってやる。

俺はそこまで発想がかなかつたし、華琳じゃあるまいしと思ったからな。華琳の場合、春蘭たちのご褒美は未だに『闇に來なさい』だし。

「僕私達らが生暖かい目で見られることが納得いかない!!」

「二人ともあんまり騒ぐと迷惑だから、声は控えめにな」

二人に軽く注意をしながら、そろそろ呼んでおいたあいつが来ると思つて周りを見渡す。時間には正確だし、仕事となれば真面目な男だから平気だとは思うんだが。

「兄上？ 何を待っているのですか？」

「みんなの分とはいえ結構量があるから、昼間の臍代わりになるものがそろそろ来るはずなんだよ」

まあ、樹枝にとっては悪夢のような存在なんだが。

「また馬ですか？」

「昼間あれだけ仕事をしてくれた夕雲たちを起こしたら、蹴られるだけで済むはずがないな」

年の暮れに今年の干支に蹴り飛ばされるとか洒落にならん。

「隊長！ お待たせしました!!」

この牛金、荷物持ちの任をやらせていただきます!!」

「ああ、頼む」

相変わらず声がかく、逞しい体格から目を逸らしつつ、俺は荷物を渡し、固まっているだろう樹枝たちへと目を向けようとしたが、その瞬間樹枝が俺へと掴みかかってきた。

「何でよりによってこいつなんですか!!」

しかもなんですか!? あの恰好は!!

警邏隊に捕まりますよ?!」

樹枝の発言に俺も恐る恐る牛金の衣装を見る。

体全体に張り付くように作られた茶一色の上下が合わさった上着、防寒として羽織っているのは赤と緑、白の外套。頭には昼間馬たちがつけていたものと同様の角が飾られ、鼻には赤い球体までつけている。

うん、これは想像以上に酷い。

ここまで来るともはや視覚の暴力、子どもたちがこんなものを見れば笑うか、泣き出すかの二択だろう。

沙和・・・俺は確かに宴会の芸に用いるとは言ったけど、ここまで張り切ってくれとは思わなかった。誰が喜ぶんだ、こんなもの。

「樹枝には悪いと思うが、俺の隊の奴はほとんど子持ちで今日はすぐ

に帰らせた後なんだから仕方ないだろう」

俺の隊って、何故か他の隊に比べると妻帯者が多いんだよなあ。

「樹枝ちゃん！」

さあ、俺をこの鞭で打ぶつてくれ！　そして、共に行こう！！

たとえこの恋が茨に囲まれ険しい道であっても、この心に宿る真っ赤な華は君のために咲いている！！

そして共に実らせよう！　愛という奇跡の果実を！！

「散ちつてしまえ！　そんな華あああー！！」

そんな果実が実る可能性は未来永劫存在せんわあああー！！

実るかどうかは別として、咲くぐらいは許してやれよ。樹枝。

別に咲くだけなら迷惑かからないだろう、咲くだけならだが。

「恋と愛とは似て非なるもの。」

そこにあるのが下心か、ちかんむりかの差だけじゃないですか。樹枝」

恋と愛とは似て非なるもの、か。うまいこと言うなあ。樟夏。

しかし、恋にあるのは下心か・・・　漢字を考えた人は凄いな。

もつとも心があるのだからそこにあるのは下心だけじゃなく、真心も、恋心もあると言ってるようなものだが。

「樟夏！　お前は他人事だからといって適当なことをおお！！」

「あー・・・　そろそろ出発するから、口喧嘩しててもいいから声小さくしてくれよ？」

三人に軽く注意をしてから、俺は歩き出す。

さあ、みんなに笑顔と幸福を運ぶとしようかな。

と意気込んで行ったのはいいんだが・・・

「どうして誰もいないんだ・・・？」

それぞれの部屋を訪れ、贈り物を置いてくるまでは実行できた。

が、部屋には誰もいなく、それも足を運んだ将の全員が留守だった。

「まさかみんなに何かあったんじゃないか・・・？　いや、でもこんな時間だし、執務室も確認してきたし。じゃあ、みんなは一体どこに・・・」

真冬に外に出るようなことはないだろうし、刺客なんていた場合は

みんなの場合は返り討ち。ありえそうなのは仕事だが、この行事に関しては俺が指揮しているからみんなには普段の仕事しかない筈。

「樹枝、私はオチが読めました」

「オチとか言うな、樟夏。」

だが、同意」

「お前らも少しは慌てろよ！」

おもわず怒鳴ると、二人はどこか冷めた目をして俺を見ていた。何故だ。

「布団は冷え、乱れた様子もない状態。」

そこから考えられるのは、寝所を使われなかったということ」

「そして、私達が訪れたのは魏の主戦力である将の部屋であり、そこに刺客をやるなんて言う愚かなことをする者はこの大陸には居ません。

何より私達が訪れていない部屋の数は限られた現状、答えは出ているようなものでしょう」

やってらんねーという表情を隠しもせず、二人は深い溜息をつく。だから何故だ。

「まあ、わからないでしょうから兄者は早々に部屋に戻られたらいかがでしょうか？」

贈り物を置いてくることは出来たんですし、私と樹枝はこれから独り者らしく二人で酒でも飲んできますので」

「じゃあ、俺も……」

「妻帯者が独り者を笑って楽しいですか？ 兄上」

「ま、まだ妻じゃない!!」

こんな乱世の真っ只中に結婚なんて出来るわけがないし、それはもつと幸せになった時にと決めている。

あの時の続きのようで、続きではない日々を。

あの時に出来なかったことを、今度は俺から言わなくちゃいけないんだ。

「あー、もう！ 何か想像して幸せそうに笑うとか、その反応すら今日は腹立つんですよ！」

僕なんて一時期務めたところではずっと女装だし、男に告白される

し、予定されてる番外じゃもつとすごい事される予定だし・・・」

「樹枝?! 最後の言葉の意味がよくわからないぞ!」

「うっさい! 兄上の馬鹿ー!」

真桜さんの発明みたいに爆ぜろー!」

「ちよつ! 真桜が発明品爆発させる頻度つて実はそんなに多くないからな!」

昔なんて二回に一回だったのに、今なんてほとんど無に等しい。

まあ、また自分だけの独自作品を作りだしたら頻度が戻るだろうが、今はまだ大人しい方だ。

「兄者も突っ込むところがそこですか・・・」

それでは私は樹枝の自棄酒に付き合ってきますので、兄者は今日の疲れもあるでしょう。部屋で休んできたらいかがです? 明日も普通に仕事はあるんですから。

まっ、ゆっくりも出来ないでしょうし、明日仕事が出来るとは思えません」

「うーん・・・それもそう、だな。

じゃあ、今日はすまん。俺の我儘に付き合わせて、これで適当に飲んで来い」

最後の言葉の意味が分からなくて首を傾げてしまったが、付き合ってくれた礼として樟夏にいくらか放り投げながら、俺は二人に促されるがまま部屋へと向かう。

まったく、何だというのだろうか? まるであの言い方じゃ、俺の部屋に何かあるみたいじゃないか。

「おっと、その前にもう一つやるべきことをしておかないとな」  
頑張ってる良い子には等しく訪れる、それがサンタの役目なのだから。

寄り道をして誰もいない自室への扉を開けたその瞬間

『メリークリスマス!!』

綺麗に揃った声を追いかけるように炸裂音が響き、灯りが部屋を映し出す。



そこには俺の愛しい女性たちが勢ぞろいし、笑顔を出迎えてくれた。

「さあ、冬雲。」

聖なる夜をあなたと共に過ごしましょう」

ああ、まったく・・・ これだから、華琳には敵わない。

「ああ、メリークリスマス」

彼女たちに会えた奇跡。

最初はきつと気まぐれな神の悪戯にすぎなかったこと、それでも・・・

「この出会いに、聖なる夜の祝福を」

彼女たちとの出会いこそが、この世のどんなものよりも最高の贈り物だったんだ。

## クリスマス 式 おまけ 【樟夏視点】

兄者と別れ、私と樹枝は行きつけの酒場へと入り、いつもの席へと着きました。

「とりあえず、乾杯」

「ですね」

互いに杯をぶつけ合い、労い合い、酒を傾けます。

「それにしても、兄上はどうしてああも鈍いのだろうな？」

知識とかそう言うのは鋭いし、女心にはそれはもう気遣いが細やかだというのに」

「思うに兄者は自分が姉者たちに好意を抱かれていることは理解していても、自分がそれ以上を求めるということがあまりにも少ない。

自分が何かをすることで姉者たちを笑顔にすることを好み、その笑顔を傍で見ていることこそが兄者の幸福なのだろうな。

そして、それ以上に自分が姉者たちに傍に居ること以上の幸福を貰おうとは思っていない節がある」

「いつそ歪と言っていいほどに、兄者は姉者たちから何かを求めることをしない。

むしろ自分が捧げることが当たり前だというように、何をすることも躊躇わない。

「常々感じている違和感ではあるが、おかしなことだ」

「いずれ兄者の口からそのことを聞けるとは言え、この違和感はどうしようもないかと。

ですが、そんな兄者を支えるために私たちがいるんでしょう」

兄者の無茶が過ぎないように、そして姉者たちを支えようとする兄者が崩れてしまわないように私達が支える。

雲が日輪を支え、多くの季節や華を守るといふのなら、私達は雲を支える大樹であろう。

「そうだな。

兄上がいることによって生まれた幸福を僕たちが守る。もつとも・・・」

そう言つて樹枝は周囲を見渡し、苦笑いをする。

「この光景も恒例行事になるかと思うと、気が重くなるが」

「……それは同意します」

酒場には私たち同様独り者たちが集まり、普段は女性客も見られるところだというのに今日にいたつてはほとんど見かけることがない。もしかしたら女性客は別の酒屋で飲んでるのかもしれない。

酒場に流れる空気はさながら通夜のようにであり、自棄酒を飲む者、男同士で騒ぐことでしか己を慰めることが出来ない者とそれぞれでした。

今日は一部の警邏隊員を除いて早上がりの筈なのですが、なんとなく様でしょうね。そもそも恋愛対象がない私が言つてもいいかはわかりませんが。

「兄者の隊は妻帯者が多いのは、兄者の気にあてられたのでしょうしね……」

ただ会話しているだけの中に、共に居るのが誰であろうとも幸せそうに微笑み、時に初々しい恋人のように、時に長年連れ添つた夫婦のように映る兄者たちの姿は誰であろうと羨ましいと思つてしまう。

「だからと言つて、僕に対して妙な視線を向けてくるのは勘弁してほしいんですがね！」

そんな中、女性と間違われていたのか、はたまた女性がいないことによつて女に近ければだれでもよかつたのか、妙な視線が樹枝へと集中しています。

もつとも樹枝が今、睨みを利かせたのでいくらかは散りましたが、その視線に対して恍惚とした表情をする者が増えましたね。

樹枝を見ていると、自分が女顔に生まれなくてよかつたと感じる毎日です。

「樟夏？ お前今、妙な感謝抱かなかつたか？」

「気のせいじゃないですか？ 樹枝。」

それよりも兄者からいくらか貰つたことですし、今夜は飲み明かすとましよう」

「お前のその誤魔化したような笑いの真意も、きつちり聞かせてもら

うがな！」

「じゃあ、面と向かっていつてあげましょうか！ 樹・枝・ちゃ・ん!!  
ついでに牛金でも呼んであげましょうか！」

少しはこの辛気臭い空気が消え、盛り上がるでしょうしね!!」

互いに掴みかからんばかりの距離で怒鳴り合い、私達は日頃のうっ  
ぷんを互いにぶつけ合う。

「洒落にならんわ！」

というか！ あのおぞましいものをこの酒場に召喚した場合、最悪  
乱闘が起きるだろうが!!」

「いいんじゃないですか？」

暗く沈んでいるよりかは、明るく乱闘であつても喧嘩騒ぎ。今日に  
限つては理由を離せば警邏隊も大目に見てくれるでしょう。

では、呼びますか！ ぎゅ……」

「お前は僕を殺す気か！」

そんな馬鹿騒ぎをしながら、クリスマスの夜は更けていきました。

「ふう…… 流石に飲みすぎましたかね……」

途中で樹枝と別れ、痛む頭を押さえながら自室へと入ると、寝台の  
横にあったのは置いた覚えのない綺麗に包装された袋と見慣れた字  
で書かれた短い言葉。

『メリークリスマス』

サンタより』

「ああ…… これは確かに嬉しいものですね」

おもわず呟き、口元に笑みを浮かべてしまいました。

おそらくは兄弟三人共にお揃いであろう、雲と大樹を模した意匠を  
施された短刀（守り刀）をこれから定位置となる腰へと差し入れ、気  
合いを入れる。

「さて、今日も頑張りましたようかね」

鏡割り？

「羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹……」

それは誰が言い出したかはわからない、意味のないことを繰り返すことにより睡眠を誘発させるといふ魔法の呪文。今は年の暮れ、去年は宴会で夜を過ごしたが今年は年始にある張三姉妹によるある催し事のために俺は仕事に追われていた。衣装は沙和が、連絡の取り合いは藍陽が中心となってやってきてくれるおかげで順調かつ素晴らしき速さで情報が行きかっているのだが、やはり会場に関するこまごまとした管理は行事の責任者である俺に行きついたわけだ。

「まあ、昔もやってたし、別にこの仕事は嫌いじゃないけどな」

三人の要望もあつたとはいえ、他の仕事もあることから反対の声すら上がっていた。だが、俺自身も『これは他に譲れないから』と言つて無理を押し通した。

三人が作る舞台を陰から支え、仕事の最中やややり遂げた後に見えるものは多くの人たちの笑顔。あのえも言われぬ快感は言葉に出来ないし、むしろ好きといつてもいいだろう。

「だからといって、寝なければ怒られるんだけどな」

白陽は勿論その仕事に関わる全員が部屋に勢揃いして、俺に説教していくことがあつて以来、俺は時間を決め半刻だけ仮眠をとる。

仮眠を半刻だけでもとっておけば『一度は寝たと言いつても出来るし、それを白陽がいない間に済ませたとさえ言えばほとんどは誤魔化せる。

そのために俺はわずかな仮眠を取るために椅子にもたれかかり、呪文を呟いていた。

「羊が四匹、羊が五匹……」

「冬雲の後ろに虎が一匹♪」  
「!？」

俺を後ろから突然抱きしめた褐色の肌に驚きながら、その手を払うことも出来ずに俺は首だけで振り返る。そこにいたのは想像通りの舞蓮であり、楽しげに髪を揺らして俺の背中を占領していた。

まったく、子どもみたいに嬉しそうな顔して……これじゃ振り払うことも出来やしない。

「冬雲、今日もお仕事なのー?」

そんなことしてないで私とお酒を飲んだり、食事をしまししようよー。

そうしてゆつくりと行く年の流れを感じた後に、初日の出を拝みながら私を食・べ・て♪」

「年の初めからみんなにぶっ飛ばされるぞ……舞蓮……」

おそらくは俺も無事では済まないだろうが。

「別にいいんじゃない? 年の初めから楽しそうで♪」

そうしたら私と一緒に、元旦からどこかへ愛の逃避行しましょ」

俺の首へとさらに絡み付きながら、楽しそうに笑う舞蓮の目は本気だった。だから部屋に格子を付けられるんだよ……

「ところでみんなはどうしたんだよ?」

「うーん? な・い・しよ♪」

ちよつと忙しいみたいだから、その間は冬雲は私の物よ」

「はあ……つたく。」

俺の唇を奪えなくても、俺がお前とそうした関係にまだなれないってわかってても……」

俺が何を言いかけたのかわかったのか、舞蓮は鼻で笑い、やや伸びた俺の髪をぐしゃぐしゃにしながら、やや大きな声で話し出す。

「ばっかねえ。」

冬雲があの時『一生』なんて言ったらそりゃ私も何とかするし、怒ってたかもしれないけど、あなたは『まだ』って言ったし、今も『まだ』って言ったのよ?」

なら、私の答えも蓮華も変わらないわよ。いいえ、正しくは違うわね」

どこまでも楽しげに、何よりも楽しむように。

「あなたのその考えを変えさせるくらい、あなたを私でいっぱいにしてあげる♪」

「残念ながら、冬雲様は華琳様のものであり」

冷たい声、白陽よりもどこか厳しい目で舞蓮を見下ろしながら、彼女は言葉を区切り、俺と舞蓮の間に立った。

「私のものです」

いや、それは違う。

俺が叫びたいのをぐつとこらえ、黒陽は瞬時に舞蓮を縛り上げる手腕は見事としか言いようがない。

「流石は虎、油断も隙もない。」

さあ、冬雲様。華琳様を初めとした皆様があちらにてお待ちしております。

私と共に参りましょうか」

流れるような動作で俺の手を取りながら、舞蓮をその場に転がして放置とは華琳との付き合いの長さを感じさせるものがあつた。

が、そうはいつでもこのままは可哀想だし、それに俺に対してここまで一途に感情を向けてくれる舞蓮のことは正直嫌いじゃない。

「舞蓮、そのさ・・・」

「何？」

跪き、舞蓮の顔の近くへと寄ってから、俺は頬をかく。

紅梅色の髪、虎のような金の瞳、褐色の艶やかな肌、何よりも時には直球すぎてこちらが困ってしまうほどのまっすぐな感情。

俺は抱いているこれはまず間違いなく好意であり、それに全く恋情が含まれていないかといったら嘘だろう。

それでも俺は決めてしまったことを破るつもりはない。

でもそれは、まっすぐな想いを否定したいわけでも、どうとも思っていないわけではない。

「俺はあれを破るつもりなんてないけど、これはいつものお礼ってことで」

だから俺はその額へと、唇を落とした。

舞蓮を一瞬呆然とした後

「場所がちがーう!!」

不平不満を爆発させた。

なんでそうなる?!

「では、私と正しい位置で接吻をいたしましょうか」

言葉と同時に俺の唇を奪い、見せびらかすように舞蓮へと得意げに笑って見せる事も忘れない。

「もう！ 華琳たちばっかり、ずーるーいー!!」

私もそこに接吻<sup>唇</sup>ーーー!!!」

「では改めて、参りましょうか。冬雲様」

右腕を俺に絡ませながら、左手では舞蓮を引っ張っていく黒陽にどこかへと連行されるのに俺は黙って従っていくしかなかった。

『かつがみわり！ かつがみわり！』

会場らしきものから聞こえるのは俺が話した行事の一つ。

だけど鏡割りそんなに盛り上がる行事だったっけか？

ていうか、鏡餅は飾る風習があるけど、飾った初日には割らないんだが。

「隊長！ お待ちしておりました!!」

俺を迎えてくれたのは満面の笑みの凧であり、俺はそれを撫でながら改めて周りを見渡した。

「右やー!」

「左なのー!」

「かましたれー!!」

「よいしょー!」

「ぎやー!」

沙和と真桜が茶々を入れ、霞が勢いよく指示を出したところで、斗詩が槌を振り下ろす。

激しい打撃音と歓声が行きかう中央を見れば、見えたのはまず餅。

「えっとう？ あんなにでっかかったっけか？ 餅って」

そんな音へと俺はおもわず首を傾げ、目を軽くこすってから再度視線を向け直す。

「はい、では次の方」

「あつ、私です」

「では鉢巻と回転を」



風が促し、流琉が手を挙げ答え、稟が鉢巻で目を隠し、縛った後にその場で数回回転させる。

ん？ うん……？ えっと？ これって？

「風、これは何の行事だ？」

俺が問えば、風はむしろ不思議そうな顔をして答える。

「鏡割り、ですよね？ 隊長がおっしゃっていた」

割る対象が餅じゃなくて、頭になってるんだけど？

西瓜割りの方が近いんじゃないかな？

「エツト…… ドンナギョウジ、ナノカナ？」

「はー！」

この一年でもっとも問題を起こした者を餅の形にし、根性ごと叩き直す行事です！

魏の名だたる将たちがその資格を持ち、年の始まりの運試しとして目隠しと回転を加えた行事であり、餅となった者は根性を叩き直せ、将の皆様は年始から運を試すことの出来るまさに一石二鳥の素晴らしい行事だと思います!!」

「いろいろ混ぜた上に、全くの別物に!」

俺の言葉を疑うこともないきらきらとした純粋な目で見てくる風が目がとても眩しいけれど、天の世界にもそんな物騒な行事はありません。

そして三つほど並んだ餅をよく見てみると、みかんのところには見慣れた顔が並んでいた。

「世は無常だ……」

「理不尽すぎる!」

「せめて、せめて殴るなら樹枝ちゃんに!!」

「すいません!」

誰か横の男の頭をぶち割ってください!!」

……俺、仕事やりすぎて疲れてるのかな。

俺の弟たちと、副官が並んでる気がするんだけど？

「第一回、『新年行事・鏡割り』」

今回、餅を務めるのは魏の三大問題児である右から曹洪、荀攸、牛

金となっております」

目に手を当てていた俺の耳に流れた白陽の放送はあまりにも無慈悲であり、強制的に俺に現実を見せつけた。

気がする、じゃなくて真実だった。

でも、ごめん。三人とも。否定することが出来ないのは、普段の余計な一言の性かな？

「また、来年以降は一般兵も選出されることとなっていますので、皆様目に焼き付けておいてくださりますようお願いいたします」

何、この放送怖い。

というか、華琳がよく許可出したな?! こんな行事!

「華琳様は二つ返事でしたよ、冬雲様」

俺の横で涼しい顔で微笑む黒陽にどこか寒気すら覚えながら、後ろでやりたいとはしやぎだす舞蓮を見ないふりをする。

会場を見れば、公孫贄殿が公式の道具となっているらしい斗詩の槌

『金光鉄槌』を持ち、風に何かをささやかれていた。

「はい、次は白蓮ちゃんですよー」

「わ、私はやらないぞ! 樟夏もあそこにはいるんだぞ!

というか、樟夏が何故あそこにいるんだよー!」

「これまでの行いと言いますかー、いろいろとありましてー。

それにほら、白蓮ちゃん。これは遊びなのですー。おもいつきりやっちゃいましょうー」

「だからと言って出来るわけないだろー!」

「つい最近、樟夏さんのところでこんなものを拾ったのですよー」

「こ、これは・・・」

風とのやり取りは聞こえないが何かの書簡を渡したのがわずかに見え、何故か公孫贄殿が放つ気の色が傍から見ても明らかに変わったことが伺えた。

何を言った? 風。

そして、なんだその書簡は?

「さて、白蓮ちゃん。

浮気者にはー?」

「鉄槌を!!」

ああ、あれってまさか・・・

渡した書簡に察しがつき、俺は樟夏の冥福を祈った。

そして、迷いもない公孫賛殿の一撃が餅の一つを赤に染めた。

一般兵たちから歓声と、ある種のざわめきが生まれる中、次に槌を手にしたのはよりによつて白陽・・・

「アノトキノカリヲ」

「まさかの一年越し……?!」

というか、まだ根に持ってたんですか?!」

二つ目の餅が鈍い音と共に朱に染まり、俺は思わず目を背ける。

あの時ってまさか、最初に会った時のあれか? まだ根に持ってた

のか、白陽。

「じゃ、最後はわつたし!

この変態が……!!!」

いつの間にか縄抜けをしていた舞蓮が飛び入り参加し、三つ目の餅を赤く染めあげる。

俺はそれと同時に、回れ右をする。この行事を正しく修正するために。

「何とか出来るように最善を尽くす。

だから、すまん! 三人とも」

冷たい汗を流しながら、俺は中央にいるだろうみんなへと正しい鏡割りを説明するためにひたすら走った。

結果、修正出来ませんでした。

娯楽と、全体の引き締めには効果があり、行事としても有効だったため棄却出来なかった。

ただし、正式な鏡割りも行われるようになり、今回の行事の名称も『新年・根性叩き割り』に変更となった。

すまない、三人とも。力のない俺を許してくれ。

後日、白の遣いから『そんな鏡割りねえ!』という文書が来たが説明した結果、『曹仁さんでも、うまくいかないことがあるんですね』と

いう生暖かい返事が送られた。

今後、行事等の構成の際は必ず俺に話してもらおうようにしておくことを硬く心に誓った。

## 日常

天和たちの様子もここ一か月で随分落ち着いたし、急ぎの仕事もなくなった。乱の爪痕は徐々に癒え、民は穏やかな暮らしに戻りつつある。

「まあ…… 即席ではあるんだけどな」

「冬雲！ あんた、今日は休みでしょ!!」

「げっ……」

朝のまだ早い時間だというのに、後ろから聞こえたその声に反射的に声が漏れた。少しだけ気ますぐなくなって、俺が後ろを振り向く前背中を思い切り叩かれる。

「痛いって、桂花」

マジで背中に手形出来てんじやねえかってくらい、痛いんだけど?! 鞭を振るうのにこんなに力いるっけ？

「アンタが！ 華琳様に昨日休みだって言われたにもかかわらずに!! こんな時間から鍛錬してるからでしょうが!!」

耳を掴んで容赦なく引つ張る桂花に抵抗することが出来ず、おもわずへたり込む。つか、正論で言い返せません。

「いや、休みの日でも体動かさないと落ち着かなくて…… いつもこの習慣で体が勝手に起きたっていうか、その……」

毎日の習慣なんだが、この時間帯って起きてる人が少ないから知ってるのってごく一部なんだよなあー。

ん？ ってことはもしかして……？

「桂花、もしかして徹夜か？」

「違うわよ、アンタじゃあるまいし。」

いつもより早く目が覚めて、使ってた資料とか片づけようところを通りがかかったら、休みを言い渡されたにもかかわらずに鍛錬してる馬鹿が居たから寄ったのよ」

『アンタのことよ』と頭を小突かれ、汗をかくから上半身裸の俺を見下ろしてる桂花の目は少し厳しい。

が、それは溜息と共に弱まり、突然抱きしめられた。

「汗がつくぞ。桂花」

「かまわないわよ。」

どうせ、着替えるつもりだったし」

俺が座っているの、頭を包まれるような状態で、親が子どもをあやすようにそつと頭を撫でられる。

「つたく、休みくらいしつかり休みなさいよね。」

無理して倒れたら、それこそ迷惑よ」

心底呆れたような再び溜息をつかれ、いい音をさせながら俺の頭を思い切り叩く。

「大体アンタ、馬鹿の癖にこの所、頑張り過ぎなのよ！

書簡仕事を頑張るし、書簡仕事を取り上げたら天和たちのところに走るし、それがなくても他の仕事を見つけてやりだすし！ 合間合間でお茶入れたり、私たちのことは気遣ってくるし！ これだったら、前のぐうたらなアンタの方がまだこっちの気が楽よ！ でも仕事やってるから怒るに怒れないし、本当にもう!!」

その後ほぼ息継ぎなしで一氣にまくしたて、俺の顔を無理やり持ち上げて、鋭く睨みつける。

「つーか、昼くらいまで部屋から出ずに寝てなさいよ！ 目の下の隈が目障りよ!!」

そんな黒いのつけた顔で華琳様の前をうろつくことなんて、私が許さないわ！

見かけたってという話を聞いたら、寝台に叩き込みに行くから覚悟しておきなさい！」

「はい・・・ 昼まで大人しく寝ておきます」

久しぶりの桂花の罵声を、内心喜んで俺は変態かもしれない。

これは俺の勝手な予測だが、桂花は本当にどうでもいい人間に対してこんなことを言わないだろう。そこに居ることすら認知しないのが、彼女が心底嫌いな相手に対して行う手段だと思う。だからこそ、素直じゃないがその言葉に多くの優しさを含んでくれる桂花のことがとても愛しい。

「言質はとったわよ。」

私はもう行くから、とつとと寝に戻りなさい」

「桂花。」

心配してくれてありがとな」

そう言つて身を翻す桂花に俺は笑つて、その背中に声をかけると頭巾の猫耳が動揺したように少しだけ揺れる。

「そうよ・・・心配してんのよ、馬鹿」

そう言つて駆け足で去つていく桂花を見送り、俺は何だか懐かしい気持ちになつて笑つていた。

今の桂花は素直で、でもやっぱりどこか素直じゃなくて・・・俺はそんな彼女を

「愛してるよー！　桂花ー！！」

「朝っぱらから何言つてんですか?!　兄者!?!」

「うっさいわよ!!」

「理不尽すぎますよ?!　姉上ええええー！！」

あつ、二人がひかれて、殴られて、とんでいつちまった。

まあ、二人が飛んでいくのも恒例行事みたいなもんだし、ほつといても大丈夫だろ。門番とか、警邏隊のみんなとかがいつも拾つてきてくれるしな。

「さて、つと・・・俺も桂花に起こられる前に部屋に寝に戻らないとな」

ああでもやっぱり早起きはするもんだよな、桂花のあんな顔が見れたんだから。

水浴びと軽い食事を済ませ、俺は軽くなつた足取りで部屋に行くと人の気配がしたので、考えを巡らせる。俺の部屋に誰かがいるのは別段珍しくないけど、舞蓮じゃないとしたらよほどのことがない限り前もつて何かを言つてくれるはずだ。

「白陽も今日は強制的に休暇に出したし、紅陽と青陽が買物に連れ出すつて言つてたよな？」

華琳は昼間に俺の部屋に来るにしても大抵は仕事を絡めてくるし、うーん・・・まあいいか」

扉を叩かずに入ると、腹を襲ったのは二つの軽い衝撃。

「とーうん♪」

「遅いのよ」

濃い桃色の髪をした天和と、淡い青の地和。そして、俺の寝台の付近で本を片手に待っていたのは人和。

・・・何で三人がここに？

いや、確かにまだ活動は再開してないし、別におかしなことじゃないけど。

「冬雲さん、こちらへ」

優しい香りのする香がたかれ、人和が柔らかく微笑んで、綺麗に整えられた寝台へと俺を促す。

それだけでまるで麻薬のようで、俺は二人に手を引かれながら吸い込まれるように寝台へと横になる。

「昨日華琳様から使いが来まして、冬雲さんが休みであることを伝えられたんです」

「けど冬雲って『休め』って言われても休まないし、なんだかんだ言ってるちい達のところに来ちゃいそうだってことで、いろいろと任されたのよ」

「今日はね、私たち三人で冬雲に安眠をお届けしたいなって思ってる」

冬雲がぐっすり眠れるように私たちが作った子守歌を歌ってあげる」

俺って信用ねー・・・

いや、ある意味信用されてるんだろうけど、華琳は人のこと言えないと思うんだけどなあ。はあ・・・ まあ、俺にこっぴど休ませたんだから、華琳にもしつかり休んで貰うけどな。

「そんな顔しないでください。冬雲さん」

俺の目元を指でなぞりながら、どこまでも優しく人和の声が耳に響く。

「でも、冬雲も悪いのよ？」

休めって言っても休まないんだから」

言葉とは裏腹にどこか嬉しそうに笑って、地和は俺が動かないよう



に体へのしかかってくる。

「さあ、寝よう。」

珍しくちいちゃんじゃなくて私が作った、私たちの歌。

これまでと、これからを紡ぐ大好きなあなたの歌」

天和の言葉と視線を合図に、三人は俺に触れながら寝台の横で思い  
思いのところに触れながら、歌を紡ぎだす。

出会いはそう とても突然

あなたがいて あの方が居て 私たちと出会う それだけの単純  
なこと

でも歩いた道は 単純なんかじゃなくて

砂利があつて 橋があつて 池もあつて 時には断崖絶壁

そこに集いし 優しき花々

天も 地も 人も 照らされ 覆われ 救われて

笑つて 歌つて 広げていこう

あなたと あの方と 皆の誰もがこの先で笑つてる そう信じて

その傍らで 私たちは永久とわに歌い続けると誓うから

おかえりなさい

世界があなたを待ってたの

ほら あなたの周りで また笑顔の花が咲く

優しく 温かく 柔らかな 詩が生まれ 鳥が奏で

強く 勇敢で しなやかな 木々が力強く伸びていく

全てがあなたを歓迎して 笑顔があなたを包んでいく

この世界よ 永久とこしえに

愛する人よ 傍にいて

今度はもう二度と 繋いだこの手を離さないで

あなたに会えたその時から

あなたの傍を離れないつて 決めたから

ずっとずっと いつまでも

今度こそ続いてほしいと願うから

誰よりも 何よりも愛したその傍で

全ての者が かつて抱いた夢を乗せ

あなたと　あの方と　皆で紡ぐ優しき物語  
共に　共に　いつまでも  
愛してる　離れない  
だからそう　傍にいて

眠気からか、それとも歌にのせられたささやかな三人の願いが染み  
たのか、俺の目からは自然と涙が溢れ、その穏やかな調べから眠りの  
中へと誘<sup>いざな</sup>われる。

「約束するよ……」

俺はもう、ここから離れない。

(白) おせち 【法正視点】

一月一日、元旦の朝。

「気持ちのいい朝ね、林鶏」

「コケ」

早朝より旅の友として付き合いの長い愛馬の山葵わさびと林鶏を連れ、昇りくる朝日を眺める。

平原からそう離れず、しかしけして近くはない距離の崖の近く、私は一人そこに立つ。

快晴というにふさわしい空と、大陸中を照らさんばかりの太陽の光を浴びながら、私は杖を持ってその場に降り立った。

「今年も頼むわよ、二人とも」

「コケー」

「ピンツ」

鶏冠と頭を撫でつつ、持ってきていた花の一輪を何も無い足元へ放り、軽く手を合わせる。

先祖を想うこと、亡き人を悼むことを意味のないことと思う者は多いかもしれない。『もはやそこにいない者に手を合わせ、なんになる』という考えにも一理あるが……

「この行為はむしろ、残された者が心を整理する猶予なのかもしれないわね……」

忘れないこと、残すこと、そのすべてが建前だとするのなら、想うことは残された側がしたいからしていることにすぎないのかもしれない。

「せーいちゃーん!!」

「法正おねーえーちゃーん!!」

静穏に包まれていた空気は霧散し、わずかに顔をしかめた私とは対照的に林鶏も山葵も心なしか笑ったような気がする。そして、朝日の向こうで一瞬だけ見知った笑顔が映った気がした。

「わかってるわ」

言葉がなくともこの二人の言葉は私に伝わり、私もそれに当然のよ

うに答える。

「私はいつも、一人ではない」

二つの花が描かれた杖を持ち、私は振り返る。

「せいちゃん、ご飯作って」

自らの願望に正直な平へと私は迷うことなく杖を振り上げ、平に避けられるという無音の攻防を繰り返す。

もつともこれは、体を動かすことが得意な平に私が遊ばれているのが正確なだけけれど。普段から私を受けているのは、自分で私に叱られるようなことをしている自覚があるのでしょね。

「王平お姉ちゃん、まず挨拶なのだ。」

法正お姉ちゃん、林鶏と山葵も、明けましておめでとうございませなのだ！」

「張飛ちゃんに怒られちゃった。てへっ」

「ええ、翼徳。明けましておめでとう。」

よくここがわかったわね」

一切悪びれる事もなく舌を出す平を放置して、私が翼徳に挨拶すれば林鶏も山葵もそれに習い、体を寄せて触れ合う。

この子たちも私同様に人との触れ合いはあまり好まないのだけれど、珍しいわね。

「正ちゃん、ごっは・ん」

「あなたは少し黙りなさい。」

というよりも、自分で作ることが出来るのだから野の獣を狩ってくるなりすればいいでしょう」

昔からこの子の調理法は焼く一択であり、それ以外の調理法は存在しない。だが旅を行う上でも焼くことが出来れば大抵の物は食べられるし、果実等でも栄養はとれる。

「それがさー、関羽ちゃんが北郷の言葉一つで厨房に向かったと思つたら、厨房爆発させちゃって」

「・・・なんですって?」

厨房を爆発? 油等がある中で火が移り、ボヤが起ることは想定できても、何かが炸裂することまでは理解しがたいわね。

というよりも北郷、あなたは何を余計な事を言ったのかしら？

天の料理は興味深いけれど、まず知識を所持している自ら再現するところからでしょう。知らないこちらが再現できる可能性なんて微々たるものであり、そもそも食材もあるかどうか・・・いいえ、今論ずるべきはそこではないわね。

「翼徳、それ以外にわかっていることはあるかしら？」

「うーんっと、お兄ちゃんが『おぞうに』とか、『おせち』っていうよくわからないものを食べたいって言ったなら、愛紗お姉ちゃんが厨房へと走って行ったのだ。

そうしたら後を追うように愛羅が厨房に行って、そのすぐ後に厨房から黒っぽい煙が立って、凄い音が聞こえたのだ」

「そう・・・」

いろいろ言いたいことがあるけれど、まずは現場に向かうことが先決でしょうね。

「新年早々、お説教ね」

軽く杖を打ち鳴らし、私は流れるような動作で山葵へと乗り、平たちの横へと移動する。

「お姉ちゃんは新年早々、大変なのだ・・・」

「それはあなたもよ、翼徳。」

よく知らせてくれたわね」

私が頭を撫でると翼徳は首を振り、何かを否定する。私はそれがわからず首をかしげると、翼徳は子ども特有の天真爛漫な笑みを私へと向けてくれた。

「お姉ちゃんとも新年を祝いたかったのだ」

・・・この子はどうしてあの三人を見て育ったにもかかわらず、こんなにもいい子なのかしら？

「ご主人様、離してください！ 私には料理の続きが・・・」

「頼むからやめて！」

これ以上城に被害を出したら後が怖いし、それ以上に法正さんが怖い!!」

「あははは、この消し炭みたいな状態で料理の続きとか、愛紗ちゃんは何を作る気なのかなー?」

「はわわわ・・・ この惨状を見たら・・・ でもこの状況を隠しきるなんてこと、私達じゃとても」

私が城に戻り、厩舎へ寄つたにもかかわらず、どうやら惨状は大して変わることはなかったようで慌てふためく数名を私は後ろからしばらく眺めて、再び動き出す。

ああ、本当に頭が痛いわね。

「新年明けましておめでとー」

私はあえていつも通り挨拶をして、自分がそこにいることを示すと一斉に視線が向けられ、そこにいるほとんどの人間の顔が青ざめていく。

隅に転がっている者に目を向ければ、何かにうなされている関平が横たわっていた。

関羽が料理を始めたあたりで彼女が走って行ったということは、この事態が想定できたということ、それはつまりこの一件が関羽の実力であることの証明ね。

「これは、何事かしら?」

『すみませんでした!!!』

「誰が謝罪しろと言ったかしら?」

説明を求めている者に対して謝罪をしても、相手を困惑させるだけよ」

私がそういえばその場にいた全員が正座で姿勢を正し、若干体を震わせていた。何をそこまで怯える必要があるのかしらね?

「その・・・ 俺の故郷に今頃に食べる料理を食べたいと言ったら、説明する間もなく愛紗が飛び出して厨房で料理を始めたところ、突然爆発をしました」

「翼徳にもそこまで話してもらったわ。

けれど、その料理は一体何かしら? たしか『おせち』や『おぞうに』と言っていたわね。

それはあれかしら? 料理過程に爆発させる何かを作成する凶器

か何かなのかしら？」

そんな危険なものを食べているのだとしたら、北郷のことをいろいろと考え直す必要があるのだけれど。

未知なる料理自体には私も少々興味があるわね。

「違います！

天の料理はそこまで威力を發揮しないし、あれは完全に愛紗の実力です!!」

「ご主人様?!」

「だよー。

まさか厨房に行つてすぐに爆発音が聞こえるなんて、誰も想像できないもん」

楽しげに笑うべきところかどうかはわからないけれど、この子も随分凶太くなつたわね。そのやり取りを聞きつつ、私は被害が出たという厨房をちらりと覗き見る。

遠目から見ても厨房全体が黒く染まり、中にあった物の一部が使い物にならなくなっているのは明らか。食材等は保管庫においてあるものもあるため、全てではないにしろ普段使っていた物のいくらかが駄目になったことは明白だった。

もつとも私は離れにある部屋で料理をしているのだから、何の影響も受けないのだけれど。

「関羽、あなたは厨房をどうやってあはしたのかしら？」

「作業をしようとしたところで、粉をぶちまけてしまい、その後火をつけた瞬間爆発に……」

「粉塵爆発?!」

ていうか、そもそも俺の料理の説明も聞かずに何を作ろうとしたの?!」

「いや、その…… 申し訳ありません」

素直に謝罪を口にし、小さくなっていく関羽を見ながら、私は北郷へと視線を移す。

「その『粉塵爆発』という現象については後で話をしてもらおうとして、まずはあなた達をどうするかについてを言い渡しましょうか」

平と翼徳は私の背後で手製の菓子をつまみつつ、のんびりとその光景を眺め、私は全員を見渡した。

もつとも今回の件において、孔明にも、劉備にも非はなく、罰するべきはただ一人のだけけれど。

「関羽、あなたは今後一切厨房に入る際は誰かと共に入るようになさい。」

孔明、なるべく知識のあるあなたが同伴なさい。

劉備、あなたも少しは止める努力をなさい。

北郷、あなたは自分の知識を平気でひけらかすという危険性をいい加減理解しなさい」

『はい……』

最近では以前のように基礎的な事で叱ることも減っているし、少しずつであっても進歩は見られているにもかかわらずやはりどこか残念。詰めが甘いよ、この陣営は。

「まあいいわ、それで北郷。」

その料理は一体どんなものなのか、説明してもらえるかしら?」「はっ?」

それ以上私は言わず、北郷へと料理について問えば、不思議そうな顔をされる。

「何を不思議そうな顔をしているのかしら?」

未知なる料理、未知なる知識を知りたいと思うことはごく自然な事でしょう」

「え……? ああ、まあ確かにそうだけど」

「必要な物、あなたが知りうる限りのことをこの書簡に書いた後、先ほど注意した四名で厨房の片づけをなさい。」

翼徳、そこに転がる関平に関しては周倉を呼び、適当に世話を。平!」

「はいはい、もう言わなくてもわかってるよー。」

だってほら、私達って心の友って書いてしん・ゆ・うだもんね」

平の戯言を放っておき、私は北郷が書き上げた書簡を取りつつ、城を後にし、城下へとくり出した。



「これでいいわね」

書簡を再度確認しつつ、と言っても作り方などほとんど書かれていないそこに軽く目を落として、新しく書き出した書簡を傍らに置く。

「……それにしても贅沢な物ね。」

結局、半分も再現できなかった。魚は手に入りにくいし、海老も川海老で替わりが出来ているかは正直微妙ね」

使う素材はどれも貴重、餅も米の量を減らすことから考えると手間の割には食ベでがあるとは言い難い。豆を煮るのには時間がかかる上に、砂糖を使う量が多い。卵に海老を擦って入れる事も、昆布の乾物はかろうじてあるけれど、水で戻し、煮るという手間も多い。

「まあ、とりあえずはこれでいいでしょう」

再現できないというのならば、この『おせち』というものに込められた『験を担ぐ』ことを優先して料理を作ればいい。あとは私の創意工夫次第でしょうね。

「うっわー、美味しそー。」

さっすが、正ちゃん！」

私の方に顎を乗せる平を払うことも面倒になり、私は煮豆の様子を見る。こちらはまだかかりそうね。

けれど、これでは民には広まらない。ましてや子どもたちの口に入るなんて夢のまた夢……何か考えないといけないわね。

「正ちゃんん？」

「……なんでもないわ」

私は私の正しいことと思うことを、法が、規則が正しくないというのなら、私こそが何にも恥じないように正しく在ればいい。

誰に左右されることもなく、私が私で在ることにこそ意味がある。

「法正お姉ちゃん、厨房の方終わったらしいのだ」

私が思考を巡らせたとき、良い頃合いで翼徳が窓から顔を覗かせた。

「翼徳、良い所に来たわね。」

私は少し出かけてくるから、この料理を片付けておいてくれないか

しら？」

「うっわ、正ちゃん素直じゃないなあ。もう」

笑いだす平を相手にせず、私は上着を羽織って、翼徳とは入れ違いで扉へと向かう。

「お姉ちゃん、このご飯をみんなで食べていい？」

「私はあなたに任せたわ、あなたが誰と食べるかは自由よ。」

それと、そこにある書簡は孔明にでも渡しなさい。

夕方までには戻るわ」

そう言い残して私はある道具の作成を頼むべく、技術屋の元へと歩き出した。

## オリジナルキャラクター設定 式

### 【劉備陣営】

姓：法ホウ 名：正セイ 字：孝直コウチヨク 真名：???

髪：紺

瞳：紺

武器：杖『黎杖韋帶』  
レイジヨウウイタイ

### 《備考》

彼女の真名は本編にて明かすまで、設定でも『??』のままとさせていただきます。真名を『己の生き様、死に様を描くもの』と重要視し、真名を交わすことは滅多にない。が、白本編にて紫苑・璃々とは真名を交わしていることが窺える。

本編にて彼女に関して外見以外ではつきりと確認されていることは『残念三軍師』の一角であり、水鏡女学院の卒業生であること』『以前は蜀に勤め、紫苑たちと交流があること』だけである。

姓：王オウ 名：平ヘイ 字：子均シキン 真名：???

髪：深緑

瞳：深緑

武器：斬馬刀『豪快奔放』  
ゴウカイホンポウ

### 《備考》

法正ほど真名を重要視していないが、朱里達ほど容易に預けたりすることはしない。信頼すれば真名を交わすし、一方的に預けることもやってのけるのが彼女である。法正、諸葛瑾と同様に『残念三軍師』の一角であり、自称二人の親友。

突飛な発言が多く、文官として勉強していたにもかかわらず武官寄りのおかしな存在だが、どちらも人並みにこなすことが出来る。客将となる前は旅芸人をしながらあちこちを放浪し、自分好みの素敵な年上男性を探しつつ、布教活動を行っていた。

姓：周シュウ 名：倉ソウ 字：元福ゲンフク 真名：紅火ベニカ

髪：黒

瞳：紅

武器：曲刀『キエンバンジヨウ気炎万丈』

### 《備考》

真名の由来は『カラシコエ』の和名である『紅弁慶』。花言葉は『あなたを守る、切磋琢磨』。史実では関羽に仕えていたことで有名な将だが、貂蟬と同様に架空の存在として有名な将でもある。

愛羅の副官であり、賊上がりの元は農民である。そのためか『強い者が正しい』という考えを信念とし、自分を打ち負かした愛羅の強さに心酔している。また、自分より上の立場でありながら、弱い者は誰であろうと認めようとしない傾向にあり、時には法正にすら噛みつく場合がある。現在は必要な時のみ、礼儀を払えるようにやや改善された。

リンチ  
林鶏

### 《備考》

法正の愛鶏であり、名の由来は『からあげ油淋鶏』。

最強キャラと思われるが、鶏に対し武人として向き合うことが間違っている。家畜や普通の動物として対応すれば勝てる。ただ林鶏があまりにも人間らしいため、普段接している者の多くは彼を動物として向き合うことはない。というよりも、その態度から鶏であるにもかかわらず、鶏と思うことが出来ない。

これは林鶏に限らず、陣営内で強く思われがちな法正も所詮は文官であり、腕力等は一般人程度にしかないのが実情である。

### 【董卓陣営】

姓：高コウ 名：順ジュン 真名：芽々メメ芽

髪・音々音同様、明るい緑（短めの髪で一つ縛り、髪留めはレッサーパンダ）

瞳：黄

武器：双斧『マフ魔斧』『サクシン削心』

《備考》

史実でも陳宮と共に最後まで呂布に仕え、その忠誠は厚いこと有名である。

音々音と同じ恋盲信者であり、武官。音々音とは認め合い、信頼しあっている一方でどこか好敵手と見ている面がある。何より真名を預け合っていることこそが彼女たちが信頼しあっている証だろう。

姓：劉リュウ 名：宏コウ 真名：牡丹ボタン 故人

髪：淡い桃色

瞳：淡い緑

《備考》

霊帝・劉宏であり、『百花の王』と呼ばれる牡丹が彼女の真名である。娘である劉弁・劉協の真名はその咲き方から命名され、相手が違っても腹を痛めて産んだ娘たちを分け隔てなく愛し、姉妹として育て上げる。

また自分が殺されること・死ぬことを予期し、月を洛陽へと呼び、政治を任せるといふ英断を行った。公には病死とされているが、実際は遅行性の毒による毒殺であり、娘二人を月たちに任せ、この世を去った。

姓：劉 名：弁ベン 真名：八重ヤエ

髪：淡い桃色

瞳：淡い緑

《備考》

少帝弁であり、劉協の父違いの姉。

劉協にとつてはよき姉であり、月たちにとつて守るべき大切な友人であり主君。現在、公には死亡扱いとされ、月たちによって今は劉協と共に洛陽を離れている。

死亡扱いとした理由は霊帝に見た目が似すぎるが故に力ある者たちに狙われやすく、その方が安全と判断した結果である。またこれで愚かならば傀儡になる程度だったが、優秀であったがために霊帝のよ

うに謀殺される恐れがあつたため、本人も了承している。

姓：劉 名：協キョウ 字：伯和ハクワ 真名：千重チユエ

髪：やや濃い桃色

瞳：淡い水色

### 《備考》

献帝であり、『前日譚』が書かれる以前から名前のみ本編に登場をしていた。

が、真名を考えた当初、登場する予定はなく、『前日譚』ではそこに収まるのが当然のように違和感なく収まった。彼女が今後どうなるかは、今のところ作者のみが知る。

現在は公には母・姉の両名が死亡による精神的負荷による療養となっており、劉弁と共に洛陽を離れている。

### 【公孫賛陣営】

姓：公孫コウソン 名：越エツ 真名：赤根アカネ

髪：濃い桃色

瞳：茶

武器：大槍『驚天動地』キョウテンドウチ

### 《備考》

『前日譚』から登場し、今後本編にも登場予定である。反董卓連合には参加せず、姉たちの留守の間幽州を切り盛りしている。他陣営が留守の今、彼女が留守を務めている理由としては幽州という土地が異民族との関わりが深いため、その交流の仲介人としての仕事が残されているからである。

番外では彼女の性格が崩壊し、生来地味である筈の彼女がまるで春蘭のような豪快さを持つてしまったが、本編ではそうなる以前の彼女の姿が見られることだろう。

また、姉妹の真名を縦に並べると『蓮根』になってしまったのはただの偶然であり、真名の由来は文字通り『茜』である。

## バレンタイン 【白陽視点】

冬雲様曰く、天の国で本日は『ばれんたいでー』なる行事らしく女性から愛の告白を行ったり、家族や親しい友人へと贈り物を贈るなどをする日なのだそうです。

天の国では以前あの棒状の菓子を作成に際しに使用したちよこを贈りあうそうなのですが、かかおという素材はあまりにも高価なためちよこは一般に普及しにくいとのこと。

なので、今回は小麦等を使用して作成する杏仁餅シレンピンとよく似たくつきーなるものの作成へと取り掛かります。

今日は非常に珍しい事に我ら司馬家の姉妹全員が揃い、調理をすることになった。もっとも私以外の皆は調理の前に何やらお茶会をして、滅多に揃わない姉妹たちの会話をのんびりと楽しんでいる。

普段は仕事の関係で外に出ていたり、決まった誰かの傍に居ることが多く、お互いの非番が合わないことも多々ある。

ましてや、全員が揃うことなど稀。本当に貴重な、家族の時間。

私だけは冬雲様へのくつきーを製作するために先に調理場に立っています。姉妹たちの気配を後ろに感じて調理をしているだけでなんと温かい気持ちになってしまう。

振り返れば尊敬する姉と、可愛い妹たちの姿がある。

ただそれだけで私は今、とても幸せであることを自覚する。

「私の可愛い妹たちは、誰に渡すのかしら？」

口火を切った姉さんの言葉をやや遠く聞きながら、私はおもわず耳をすませてしまう。

姉さんが渡す方は数名想像できるし、仮に冬雲様がおっしゃられていた義理の物を渡すとしてもうまくやることでしよう。

ですが、私の可愛い妹たちが誰に渡すのか。

姉として非常に心配であり、気にかかってしまうこと。

なにせ私の妹たちはとても可愛らしく、家事も優秀、仕事も出来るというとても優秀な子たちですから、悪い男に引っかかってしまわな

いかと心配になってしまってもしょうがないことです。

「紅陽は樟夏殿でしよう？」

青陽、あなたは？」

「はっ?! そそそそ、そんなわけないじゃん！」

何言ってるの?! 黒陽姉様!! っていうか! 何で……」

ほう……? 樟夏殿、ですか。

私は生地を形を作り、窯へとそれらを入れて、火を眺めつつ、耳だけはしっかりとそちらへと向けておく。

「紅陽姉様、動揺しすぎです……」

私は姉妹で料理が出来ることが嬉しかったので、特に誰ということを決めていません。橙陽、灰陽は……

か、灰陽? その、あなたの後ろの…… あなたの部屋でよく見る薬の袋は、何かしら?」

「何って、青陽姉様。よくわかってるじゃん。

今、姉様が言った通り、薬の袋だよ?」

ああ、付け足すなら今回はちよつと新作混ぜてきたんだ。媚薬とか、一粒で一週間働けるかもしれない薬とか、いくつかはまだ実験段階だけだ」

「あなたは料理に何を混ぜる気なの?!」

青陽の悲鳴に近い言葉を聞きながら、片づける物がないかの確認のため軽く周りを見渡してから、次のくつきーがどんなものかいいかを冬雲様が書いてくださった書物をめくっていく。

本当に多くの菓子が書かれ、冬雲様の知識の量には改めて驚かされる。

日常のごくありふれた知識すら貪欲に取り入れ、この国に広く伝えようとしてくださるあの方は、料理人たちの間では革新的な現人神として称えられてもおかしくはないだろう。

料理に限らず、冬雲様の知識によって一般に広がったものは多く、多くの行事から服飾や装飾、新しい伝統が生まれている。そして、それらを後押ししてくださる国の体勢がこの国を武だけではない強さを付けていくのを、情報管理を務めている私達は肌で感じていた。



「あら、斬新でいいじゃない？ 何より、一風変わって面白いでしょう？」

橙陽、あなたは誰に渡すのかしら？」

「黒陽姉様！ 面白いで済んでいいことでは……！」

青陽の反論を聞こえないふりをしながら姉さんは、次に五女の橙陽にへと視線を向ける。私は作る物を決め、材料の計量を行いつつそれを聞く。

姉妹の中でも少々控えめな橙陽は、他の子たちよりも隠密の特に気配を消すことに長け、その一点において将来は姉さんを超えるほどの逸材となると私は思っているほどだ。

「私も、紅陽姉様と同じように樟夏様にお渡ししようかと思っ  
ています」

……ああ、樟夏殿。一体いつ、私の可愛い妹二人を誑かしたので  
しょうか。

私は今、貴方との話し合いの場を設ける必要性を強く感じます。

大丈夫です。殺しはしませんし、負傷はさせません。そんなことを  
してしまつたら冬雲様と妹たちが悲しんでしまうでしょうから、ただ  
真剣に話し合いをするだけです。そう、これはただの話し合いです。

「だから、私は別に……！」

「ひっそり、こっそり、私が渡したとは気づかれないように、影から見  
守りたく思います」

「いや、そこは堂々と渡そうか。橙陽」

「いいえ、私は樟夏様の影でいいのです。」

書簡仕事に夢中になつている時にひっそりとお茶や差し入れをし、  
鍛錬で負傷した日の夜にこっそり包帯を替え、影からあの方の生活を  
見守る。

それだけで、十分ですから」

「いや、堂々としてよ！ 橙陽!!」

「それって、冬雲様が前に言っていた『すとかー』では……。」

ああ、だから最近冬雲様に対し、『最近、視線を感じる』などという  
愚痴を漏らしていたのですか。冬雲様は心配なさっていましたか、起

こっぺしていることが別段攻撃的なことではないために現状維持とだけおっしやっていた件。

この一件は冬雲様に報告したのち、明かすかどうかの判断も仰がねばなりません。

「それじゃあ、藍陽。あなたは？」

「私は友人や家族に作るつもりですよ。それと敬愛の意味を込めて、冬雲様や華琳様、将の方々にも作ろうと思えますう。」

うふふ、私はまだ自分の恋愛よりも人を着飾ったりすることの方が楽しいみたいですう。

本当は沙和ちゃんと一緒になって、道行く逸材の子たちを着飾って歩きたいくらいですから♪」

・・・何でしょう、突然寒気が。

おもわず右手で左の肩を抱き、謎の寒気を誤魔化すように窯の様子を眺める。

焼きすぎて焦がしてしまったら大変ですが、焼きが足りない物を冬雲様に食べていただくことは出来ません。あと少し、といったところでしょう。

ならば、そろそろもう一つの方も混ぜ、生地ของการ作成に移らなければ・・・

「じゃあ、最後に緑陽。あなたは誰に渡すのかしら？」

いいえ、質問を替えたほうがいいかもしれないわね。

あなたは気になっている異性はいるのかしら？ 私達の大切な妹の妹」

材料の全てを入れ、丹念に混ぜ合わせる。これはむらがないように丁寧に行うことが重要であり、私は念入りに混ぜていく。

「その・・・私は、最近」

普段きつぱりと物事を告げる緑陽にしては珍しく言いよどみ、胸のあたりに手を当てて拳を握りしめていく。

「樹枝殿を見ると、胸が苦しいんです。」

黒姉様・・・これは何かの病気なのでしょうか？」

その言葉に自然と手に力が籠ってしまい、持っていた木べらが砕け

散る。

「……あの残念美少女もどきは、我が家の可愛い末っ子に何をしてくださったのでしょうか？」

「えっ…… 緑陽、趣味悪っ」

「紅陽姉様、それは素直に言いすぎです！」

白陽姉様?! 木べらが砕けて、生地に入っていますよ?!」

「んー……」

まあ、好きならとやかく言わないけど、念のため強心剤か、媚薬いる。」

「あらあら、この場合は花嫁衣装をどちらに…… それとも、二人分用意すればいいのかしら?」

「おめでどう、緑陽」

妹たちのそれぞれの言葉を聞きつつ、私は無事な生地を利用するために破片を拾ってからさらに目の細かいざるで濾す。さらに怒りから物を破壊しないように自分から遠ざけておくことを忘れてはならない。

さて…… 冬雲様へのくつきーを無事焼き上げたら、あのお二人のところへ話し合いをしに向かうとしましょうか。

「さ、さて! 私達もそろそろ調理へ入りませんか？」

他の方も夜には使うとのことですし、調理へ入らないと間に合わないのではないかと」

青陽が場の空気を変えるように立ち上がり、調理へと促す。全員異論はないらしく立ち上がり、調理場へと入ってくる。

それぞれが慣れた手つきで調理へと取り掛かりながら、無駄のない動きは心地よさすら覚える。

自分だけでなく、周りの行動を見つつ必要な物を置き、たまに声をかけ、軽く会話しながら笑い合う。呼吸することと同じように互いを気遣い、でもそこに息苦しさはなく、甘いお菓子の香りと窯の温もりがそこを包んでいた。

かつてならば、存在しえなかった優しい光景。

以前ならば姉妹中は変わらず良好だったとしても、姉さんはそれ以

上に成したい何かを持ち、私は妹たちを守るためならば手段を選ばない。妹たちを守りたいだけの私は、あの子たちの気持ち、『支えたい』と思ってくれていた思いすら見えないふりをしていた

周りの全てが敵、守るべきは姉妹と思っていた私には、料理など出来はしても栄養補給としかおもわず、かつてならこんな時間は不要と言って斬り捨てたことだろう。

そして、そんな私を変えてくださったのは……

「ちよつといいか？」

調理からほんのわずかに視線をあげ、開いた扉へと目を向ければそこにいたのは冬雲様であり、おもわず私は目を疑ったが、思い直す。そう、この方はいつも突然やつてくる。

出会った時も、今も、あの方は私たちの元へと訪れてくださる。

「冬雲様、本日は部屋にて書簡仕事をなさっていたのでは……？」

「いや、俺もバレンタイン用のクッキーを仕込みたいと思って、休憩を利用して少しだけ作りに来たんだよ。

生地を作っておけばあとは焼くだけだし、焼くだけなら結構ギリギリでも出来ると思つてさ」

「いや、それも確か先日行つていたので？」

「確か先日、これと同じ量かそれ以上の量をお作りなつていたような？」

「あれはまあ…… 行事を知つてもらつたための布教用つてところかな？」

子どもたちとか、茶屋に渡してもうないよ」

材料を置いてから、持つてきていた前掛けを羽織つていく冬雲様の作業はあまりにも手慣れていた。邪魔にならないように隅で作業を始めようとする冬雲様の補助をしようと思ひ、傍へと速足で近づく。

それにしてもご自分で持ち込まれた材料は随分多く、中には干果や種実類など飾りに使われるだろう物などが入っている。どう見てもこの量は十数人単位…… いいえ、下手すればもっと多くではないかと誰が見てもわかる量。

『冬雲様、まさか全員分お作りになる気ですか?!』

妹たち全員の言葉に冬雲様は照れくさそうに笑って、頷かれる。

「天の国で俺が住んでたところじゃ、ほとんど女性から男性に贈ることが多かったんだけど、別のところだと男性から贈るっていう習慣あったからな。」

それに毎回高価な物だと風とかなかなか受け取ってくれないし、その点食べ物なら気軽に受け取ってくれるだろう？

だから全部、手作りにしたいんだよ」

話しながらも次々と計量されていく材料を放り込み、混ぜ合わせていく作業には一切無駄がない。

「ふふっ、やはり冬雲様は冬雲様ですね」

姉さんの言葉がその場の全員の代弁となり、どこか呆れたような、生温いような空気が周囲を支配する。

冬雲様自身は言葉の意味がよくわかっておられないようですが。

「白陽も随分作るんだな？」

冬雲様の言葉に私は頷き、答えます。

「はい……」

その……友人にも贈っていいとのことですので、風や真桜、沙和にも贈ろうと思ひまして」

私がおずおずと答えると冬雲様は笑顔を浮かべ、まるで我がことのように嬉しそうに笑っておられます。私はなんだか恥ずかしくなり、つい顔を背けてしまう。

「照れなくていいんだぞ？　白陽」

私をからかうように優しい手が顔へと触れてきて、大きなその手をそつと左手で包む。

指先から辿るようにして冬雲様へと視線を合わせれば、私の世界を変え、全てを救ってくださった人がそこで笑っている。

あの日、この方が伸ばしてくださった手が私の生涯の道標となり、言葉の多くが私の世界に光りを与え、広がる世界を明るく照らした。

「あなたがくださったのですよ？　冬雲様。」

あなたが私にこの姉妹たちとの憩いの時間も、友も、仕えるべき国も……そして」

私も冬雲様と同じように、右手を顔へとそつと添える。

ああ、この胸の高鳴りも、心から溢れる想いも、幾千の言葉にしても尽きることのない全てを、この方に伝える方法が欲しい。

「人を愛し、愛されたいと望んでいいことを教えてくださいました」  
私はこの方を、心から愛している。そして、愛されたいと願っている。

「白陽……」

互いに見つめ合い、ここを調理場とすら忘れてしまいそうになる。

ああ、なんて心地よい。

「と……」

名を呼びかけた私と冬雲様の間に通り過ぎるのは、一つの影。

手にあるものをいくつか渡され、耳元で囁かれた言葉は『あれをおやりなさい』という簡潔なもの。

姉さん……？ 正気ですか？

本気で、先日あの会合で話されたあれを、よりによって私にやれと言うのですか？

「おつと…… 今のは何だったんだ？」

驚かれ、状況を理解しようと周りを見渡す冬雲様とは違い、完全に状況も原因もわかつている私は、姉さんから指示されたあれをやるかどうかを躊躇し、それどころではない。

だが、冬雲様が状況を確認している今、何より邪魔が入りにくいこの状況以外で私があればじつこうさせることが出来るのはこの瞬間しかないだろう。

「と、冬雲様！」

意を決して私は姉さんによって手渡されたくつきーを口に咥え、唇で差し出すように前へと差し出した。

「は、白陽……？」

一体誰がそんな入れ知恵を？!

華琳か？ 華琳なのか?! それとも黒陽…… いや、風か?!」

戸惑われる冬雲様に対し、私自身羞恥で顔が赤くなつていくのを感じる。

だが、今更引き返すわけにもいかず、私はさらにくつきーを差し出すように詰め寄っていく。

「冬雲様、どうぞ召し上がれ？」

姉さんの言葉に全てを察したような顔をした冬雲様は、覚悟を決めたように私を抱きかかえ、確認するように目で問うてきますが、私がこの方を拒むことなどありえませんが、

「じゃ、いただきます」

周りから黄色い悲鳴を聞きながら交わした口づけは、お菓子のようにとても甘く、幸せなひとときだった。

## バレンタイン 【青陽視点】

冬雲様の言っていた『ばれんたいんでー』という行事のくつきー製作のために珍しく姉妹全員が揃った今日、白陽姉様は早々に調理を行うのを見ながら、黒陽姉様の提案により私達はお茶をしながら会話を楽しんでいました。

それにしても、あの白陽姉様が冬雲様のために熱心に菓子を作っていく姿は微笑ましく、お茶を飲みながらも私達の視線は姉様の方へと向いてしまいます。

「なんかいいよね、白陽姉様のああいふ姿って」

紅陽姉様の言葉にその場にいる全員が無言で肯定し、私は空になりつつある皆の茶を足していききました。

冬雲様がこの地に来て、白陽姉様と出会って、あの黒陽姉様にすら変化を与えてくださった。

きつと冬雲様は『何もしていない』と言うでしょうが、あの方がしてくださったことは私達司馬家にとつてまさに天地がひっくり返ってしまうような変化でした。

姉様たちの心からの笑顔、私達下六人がいくら望んでも手に入れることの出来なったことをあの方はわずかな期間で成し遂げてしまわれた。以前、冬雲様を試すようなことをしてしまった理由の一つの中には、少々の嫉妬もありました。

ですがあの方は、そんな私たちすらも受け入れ、接してくださった。心根の優しい、素晴らしい方だということがたった一日で十分すぎるほど伝わってきてしまったのです。

「私の可愛い妹たちは、誰に渡すのかしら？」

お茶を飲みながら、黒陽姉様が言い出したのはそんな一言。

今回の行事から照らし合わせれば当然と言えば当然ですが、今の言いはまるで華琳様のようなだと思ってしまうました。先日何やら『恋する乙女たち会議』にて夜遅くまで何やら集まっていたようですし。

「紅陽は樟夏殿でしよう？」



青陽、あなたは？」

「はっ?! そそそそ、そんなわけないじゃん！」

何言ってるの?! 黒陽姉様!! っていうか! 何で……」

黒陽姉様の言葉に茶を噴きかけ、慌てて反論する紅陽姉様。ですが正直、共に行動することが多い私からしてみれば、あれで好意を隠しているつもりだということが少々驚きなのですが……

「紅陽姉様、動揺しすぎです……」

私は姉妹で料理が出来ることが嬉しかったので、特に誰ということ は決めていません。橙陽、灰陽は……

か、灰陽? その、あなたの後ろの…… あなたの部屋でよく見る薬の袋は、何かしら?」

動揺する紅陽姉様は可愛いですが、流石にあまり弄っては可愛そうなので一番近い妹たちへと話題を逸らすと、おもわず目を疑いたくなるような物が飛び込んできました。

そう、隠密であり趣味で薬関係に携わっている灰陽の背中にある袋。しかも丁寧に、試薬、媚薬、強壮剤など書かれ、明らかに料理に 入れてはいけない類の薬が置かれています。

「何って、青陽姉様。よくわかってるじゃん。」

今、姉様が言った通り、薬の袋だよ?

ああ、付け足すなら今回はちよつと新作混ぜてきたんだ。媚薬とか、一粒で一週間働けるかもしれない薬とか、いくつかはまだ実験段階だけ」

「あなたは料理に何を混ぜる気なの?!」

おもわず悲鳴のような声をあげてしまう私に対し、灰陽はけろつとした顔をしていて反省の色はまったく見えません。

というよりも、最近の風様と手を組んで仕事という建前があることを良い事にさらに薬の研究に勤しんでいるところがまた末恐ろしくもあります。

「あら、斬新でいいじゃない? 何より、一風変わって面白いでしょう?」

橙陽、あなたは誰に渡すのかしら?」

「黒陽姉様！ 面白いで済んでいいことでは・・・！」

楽しげに笑って流す黒陽姉様に私が反論しようとしても話題を変えられ、受け流されてしまいました。

「私も、紅陽姉様と同じように樟夏様にお渡ししようかと思っ  
ていま  
す」

控えめな橙陽の答えに、厨房から若干殺意のような物が膨らむ気配を感じて振り返りますが、白陽姉様は先程と何も変わらず調理を行っています。

ですが、よく見れば眉間には皺が寄り、表情が気持ち冷たくなった気がします。

私の気のせいであることを切に願います。

「だから、私は別に・・・！」

「ひっそり、こっそり、私が渡したとは気づかれないように、影から見守りたく思います」

「いや、そこは堂々と渡そうか。橙陽」

往生際悪く認めようとしないう紅陽姉様に対し、橙陽が言ったのはなんというか白陽姉様に近い考え方であり、私も胸をなでおろしたのですが

「いいえ、私は樟夏様の影でいいのです。」

書簡仕事に夢中になっている時にひっそりとお茶や差し入れをし、鍛錬で負傷した日の夜にこっそり包帯を替え、影からあの方の生活を見守る。

それだけで、十分ですから」

「いや、堂々としてようよ！ 橙陽!!」

「それって、冬雲様が前に言っていた『すとーかー』では・・・」

その後が続いた言葉に若干の冷や汗がこぼれ落ち、いつしか冬雲様が笑い混じりに話していた『すとーかー』という存在に類似していました。

もっとも聞いた話よりもはるかにささやかで、穏やかなものではありますし、大丈夫だとは思いますが。おそらくは、ですが。

「それじゃあ、藍陽。あなたは？」

次々と言葉を向ける相手を変えていく黒陽姉様は今まで見たこと  
もないほど楽しんでおられ、笑みが絶えることはありません。

それは妹として嬉しい限りなのですが、なんというか華琳様の色に  
染まられてきたような気がして若干の不安を覚えてしまうのは何故  
でしょうか。

「私は友人や家族に作るつもりですよ。それと敬愛の意味を込め  
て、冬雲様や華琳様、将の方々にも作ろうと思えますう。」

うふふ、私はまだ自分の恋愛よりも人を着飾ったりすることの方が  
楽しいみたいですう。

本当は沙和ちゃんと一緒になって、道行く逸材の子たちを着飾って  
歩きたいくらいですから♪」

・・・ 隠密の身軽さや素早さをここまで華やかなことに使おうと  
試みた者は、きつと後にも先にも藍陽ぐらいだと信じたいです。

つい先日、沙和さんと共に修行場で木偶人形相手に何をするかと見  
守っていれば、本当に通り過ぎ様に化粧等を施す練習をしていた時は  
凍りついてしまいましたよ・・・

『必殺・印象替えなの〜！』などと言う沙和さんと、悪乗りした藍陽  
が『これでああなたの愛する異性の心をしっかり掴んで離さない、お洒  
落は貴方を強くするう！』と叫んでいた時は、本当にどうすればいい  
かわからなかったです。

「じゃあ、最後に緑陽。あなたは誰に渡すのかしら？」

いいえ、質問を替えたほうがいいかもしれないわね。

あなたは気になっている異性はいるのかしら？ 私達の大切な未  
の妹」

「その・・・ 私は、最近」

珍しく言いよどむ緑陽にその場の全員が驚くように目を丸くし、何  
事かと耳を傾けていました。

私は少々疲れて、ぐったりしていますが。

「樹枝殿を見ると、胸が苦しいんです。」

黒姉様・・・ これは何かの病気なのでしょうんか？」

緑陽の発言に一瞬の間だけ場が静まりかえり、厨房から何かの破壊

音が響く。私が恐る恐る振り返ると、白陽姉様が生地を混ぜ合わせていた木べらを粉々にしていた。

一体どんな力が加われば、そのように木べらが砕けるのですか?!

「えっ…… 緑陽、趣味悪っ」

「紅陽姉様、それは素直に言いすぎです!」

白陽姉様?! 木べらが砕けて、生地に入っていますよ?!」

素直すぎる紅陽姉様の感想に注意を促しますが、白陽姉様も気にかかり、私は忙しくあちこちを見渡すこととなります。

「んー……」

まあ、好きならとやかく言わないけど、念のため強心剤か、媚薬いる?」

灰陽、あなたは妹に何を薦めているんです?

「あらあら、この場合は花嫁衣装をどちらに…… それとも、二人分用意すればいいのかしら?」

藍陽、そこですか?! そこなんですか、あなたという子は!!

「おめでとう、緑陽」

橙陽のまともな言葉が、疲れた心にしみわたるような気がします。

ですが、全体に流れる空気はよろしくないのです、私は手を叩いて次の行動へと促すことを決めました。

「さ、さて! 私達もそろそろ調理へ入りませんか?

他の方も夜には使うとのことですし、調理へ入らないと間に合わないのではないかと」

私の行動の目的をその場の全員わかっているようですが、異論はないらしく厨房へと向かってくれました。

それからほどなくして冬雲様が訪れ、黒陽姉様の悪戯や冷やかしを一通り見届けた後、自分のくつきー作成を進めつつ、軽く全体を見渡します。

黒陽姉様はいろいろな形の物を作りつつ、どこから仕入れたのか高価なちよこを混ぜ入れるなどしています。

「名前とかは恥ずかしいし、でも円形っていうのも単純すぎ…… で

も、心臓形なんて恥ずかしくて絶対無理だし・・・ あー・・・」  
紅陽姉様は形をどんなものにするかで随分と悩んでおられるご様子。

我が姉ながら、可愛らしい悩みでおもわず微笑んでしまいました。  
「おつくすり、おつくすり、楽しいーな」。

赤！ 青！ き・い・ろ！ どーれが当たりか、わかるかなー？  
媚薬！ 強壮！ 精力剤！ 当たったりがどつれだか、わかるかなー？

危険！ 危険！ むーらーさーきーはー、まっだまっだ出来ない  
性・転・換・剤！

灰陽の料理には不安しか感じられないけれど、この子の良心を私は  
信じます。

本当に駄目そうだった時は、絶対に止めますが。

「まず小麦を炒め、挽くところから始め、その後は砂糖などの甘味を徹  
底的に減らし、この後は新鮮な乳を手に入れに行かなければなりませんね・・・」

その後は私が渡したとわからぬように、時間等を見計らって樟夏様  
の寝室に置いてこなければ」

橙陽？ 砂糖を極力減らしてしまえば、ほとんど小麦の味が前面に  
出てしまうのでは？

新鮮すぎて素材の味が際立ってしまう気はするのですが、それは私  
の気のせいでしょうか？

~~~~~♪~~~~~♪

藍陽は歌を口ずさみながらご機嫌に形作り、その意匠はまるで本職  
の料理人にも負けないような可愛らしくされた人や動物などがあり、  
なんだかこの段階で食べるのが少しもつたいない気がします。

「さて・・・」

最後に緑陽へと視線を移せば、その手に抱えているのは岩塩の袋。  
ん・・・ 岩塩？

中の岩塩を一つ取出し、粗く削り・・・ 米粒ほども岩塩は大  
きすぎないかしら？

そしてどうしてそれを迷いもなく、生地へと混ぜ込んでいるの?!

「緑陽、それは……?」

「はい、青姉様。」

「これは樹枝殿への物です」

「えっと……それは塩を入れすぎじゃないかしら?」

言葉を選びながら、なおも入れられていく塩を見つつ、私は緑陽の顔が怪しく笑っていくのが見てしまいました。

「樹枝殿は、よく泣いておられるので塩分を補給した方がよろしいかと思ひまして。」

それに、その……私は最近、樹枝殿の泣き顔を見ると、心が温かくなり、もっと見たくなくなってしまいたいという衝動に駆られてしまふのです!」

「黒陽姉様! 緑陽が、緑陽が!」

樹枝殿によつて、加虐趣味に目覚めてしまいました!」

私はその事態に、おもわず黒陽姉様に泣きつくように飛び込んでしまいました。すると優しく受け止められ、頭を撫でられました。

「青陽、あれも一つの愛の形ならばいいんじゃないかしら?」

それに塩は過度に摂取しても喉の渴きを覚えるだけで、毒というわけではないのだしね。

緑陽。あなたも別段、樹枝殿を殺したいと思つているわけではないんでしょう?」

「はい、黒姉様。」

私は樹枝殿の困つた顔や焦つた顔、泣き顔、そしてその上で常の真面目な顔も心を熱くさせるのです。

その中でも特に、泣き顔が多いというだけで」

……なんとというか、それは樹枝殿の表情で一番泣き顔が多いということの意味するのでは?」

「それよりも、青陽。」

あなたもそろそろ形を作つて、菓子を完成させてしまいなさい。

他の子たちの面倒を見るのはいいけれど、自分のことを疎かにしては駄目よ?」

「は、はい」

黒陽姉様のその言葉に先程まとめていた生地を綺麗に整形し、窯へと入れていく。

そして、ふと考える。

「私はこのくつきーを誰に渡しませよう・・・？」

好意という意味では等しく誰しにも抱いているが、自分の想い人がこれと言って居ないことに気づき、おもわず溜息を零してしまいました。

(白) 破恋多陰出―【桃香視点】

「チョコ、欲しいなあ……」

「そっかー、ご主人様……」

うーん、このご主人様って呼び方、そろそろ違和感覚えてきたから変えちゃ駄目?」

ご主人様の発言を適当に流しつつ、なんか言葉に違和感を覚えて書簡をやりながら直していいかを聞くと何故かご主人様の方から嗚咽が聞こえてきちゃった。

あれ? 私、何かおかしいなと言ったかな?

「泣くほど嫌かな?」

だって私とご主人様の立場って対等だし、そろそろ呼び方変えてもいいかなあって思うんだけど、駄目?」

「俺の言葉を軽く流した上に、そのまま突き進むのかよ?!」

その突っ込みを聞きながらも私は書簡を書いていき、見直しをしてから次の書簡を手取る。

少しずつ豊かになっていくこの地も、だんだんとだけど形になっていってくれてるのがすごく嬉しい。

「んー……じゃあ新しい呼び方は『白いの』とか?」

「いや、今の俺どこも白くないからね?!」

上着ないし、曹仁さんみたいに髪が白いわけどもないし、それこそ俺が『白いの』なんて呼ばれる理由なんて……」

「流れてくる時の星の色が白かったんだよねー」

あと管輅ちゃんの占いでそうだったし」

上着とか別に赤の遣いの曹仁さんも着てなかったし、単なる名称っていう方が近いのかもしれない。

「いやでも、なんか距離感が遠い感じがして嫌なんだけど?!」

もー、我儘だなあ。

大体最近、林鶏と一緒に行動してるから民の間ではご主人様のことを白の遣いってちゃんと呼んでる人もいるだけだなあ。白の遣いの『白』を鶏の『白』と思ってる人が多くなってるけど。



「えー・・・じゃあ、北郷？」

「紅火ちゃんもそう呼んでるし」

「まさかの名字呼び?! 普通に一刀でいいじゃん！」

「それって俺が桃香のことを、『劉さん』って呼んでるのと変わらないからね?!」

私の呼び方が想像外だったみたいで、なんか悲鳴あげてる。

「というか、せっかく最近になってようやく仕事を出来るようになってきたんだし、手を止めたりしないでしっかりやればいいのに。」

「お姉ちゃんとしては、愛紗ちゃんの想い人を下の名前で呼ぶのはなんだか気が引けるんだよねー。」

でも、『弟くん』はまだ早い気がするし、うーん・・・」

「そんな、想い人だなんて・・・」

「って、それって桃香にとつて俺って、恋愛対象じゃないってこと?!」  
照れたり、驚いたり、忙しないなあ。

「愛紗ちゃんと競うつもりないし、それに貂蝉さんもいるから、私には特別に出る幕はないと思うんだよね。」

それにほら、私達の関係って恋愛とか以前に相棒みたいじゃない?」

妹の想い人をとる気なんてないし、貂蝉さんともやりあえるとは思えない。

それに一緒に並ぶ相棒にそういう気持ちを抱くのとって、なんか違う気がするし。」

「ご主人様のことが嫌いってわけじゃないよ?」

友達として好きだし、一緒に成長する相棒としては最高だと思う。けど、それは人生の相棒って意味じゃないよね」

「何、その丁寧なお断り?!」

「むしろ理由をちゃんと saying てる分だけ、心に刺さるんだけど?!」  
「んー?」

「お断りっていうか、もう恋愛対象なんて不確定なものじゃなくて、大事な家族みたいなものになっちゃってるから。」

「だから、恋愛対象に見えなくて・・・ごめんね?」

私が謝ると床に膝を折って頭を下げてる姿勢になってるけど、事実そうなんだもん。それに、誰かの恋人をやる前に私は二人の・・・ううん、みんなのお姉ちゃんや君主になることの方が今は大事だから。

「はい！ これで私の今日の分の仕事終わり!!」

じゃあ、私この後みんなとやることがあるから、先に失礼するね。北郷」

「それで通すの?!」

何度目かの北郷の悲鳴を聞きながら、私はみんなが待っている部屋に向かって駆けていった。

「みんなー、お待たせー!」

私が入っていくとそこには材料を丁寧に並べて待機している法正さんと王平さん、鈴々ちゃんと愛羅ちゃん、そして紅火ちゃんが居た。「待ってねえよ。」

「つか、マジでちゃんと仕事したのかよ?」

「わーい、相変わらず酷ーい!」

「これでも最近はいろいろと仕事できるようになったんだよ?」

「愛羅様が想い人に菓子作ったのを言いふらしが挙句、それを元にお菓子作り教室なんざ面倒なもんをやろうとする奴なんざ、この対応で十分だつっつうの!」

紅火ちゃんはそう吐き捨てて、愛羅ちゃんのところに行っちゃった。

「そんなに怒ることかなあ?」

愛羅ちゃんがこの日に間に合うように、日持ちする焼き菓子を曹洪さんに贈ったことを話しただけに・・・」

わざわざ商人さんに頭を下げて、自分の給金から頼んで丁寧にお菓子を焼いている姿はとつても乙女で可愛くて・・・ 二つ二つ自慢しなくなっちゃんだよね。

「桃香様?! 改めて言わないでください!!」

「えー?」

だって私の妹はこんなに乙女で、とっても可愛いことは隠すことじゃないし。

それに愛紗ちゃんは料理が出来ないのに、愛羅ちゃんは普通に料理が出来て凄い事もみんなに広まったらしいなって……」

愛羅ちゃんが反論してくるけど、事実だもん。

私達の中で一番女子力が高いのは、もしかしたら愛羅ちゃんかもしれない。

漢女力では貂蟬さんが一番だけどね！

「お、乙女?!」

こんな粗野な女を見てそんな、滅相もない！」

「全然粗野なんかじゃないってば、愛羅ちゃんは謙虚で可愛いんだから。」

お姉ちゃんがぎゅってしちゃうよ〜」

「させるか！」

つうか、テメエ！ また、愛羅様を辱めてんじゃねえ!!」

「痛い！ 頭を締め上げるのはやめてえー！ー！」

愛羅ちゃんがとつても可愛いから抱きしめようとしたら、私と愛羅ちゃんの間にくぐさま紅火ちゃんが入ってきて、私の頭を掴んで締め上げてきてすっごくいたあぁあー！ーい！

「翼徳、その粉をここに。」

王平、あなたは一人でさっさと作り始めるのはよしなさい」

「はーいなのだー」

「えー?」

だって私、普通に作り方知ってるし、窯とかもこの人数じゃ一気に焼けないからいいじゃーん」

「……それもそうね。」

料理に関して危険そうな関羽は今、厨房で孔明がつきつきりできていることだし。

では、翼徳。私達もこちらで始めましょうか」

「わーい！」

「そんなに慌てなくていいわ、ゆっくりやりましょう。」

今度は一人で作れるくらい、しつかり覚えて非番の日にやってごらんなさい。

ただし、窯を使う時は誰かに一声かけてから。火は危ないわ」「わかったのだ！」

「いい子ね」

私達がそんなことをやっているとなれば法正さん達は向こうでそんなやり取りをして、もうくつきーを作り始めちゃってる。

っていうか、朱里ちゃんと愛紗ちゃんが居ないと思っただらそのためなんだね。納得しちやっただ。

「最近、朱里ちゃんの料理上手なところを見ないで、趣味の方ばかり見てたからなあ」

仕事をやってからすぐに部屋に引き籠って、満足した顔でそれを法正さんに確認しに行ったりとかを見てると、料理上手とか他の趣味が霞んで見えるよね。

というか、朱里ちゃんにお菓子作ってるの見たことない気がする。

「法正さん、くつきーの作り方ってどうすればいいんですか？」

「そこに孔明が書いた書簡がある筈よ、説明通りに作りなさい。」

計量や材料を間違えなければ、それなりの物が出来る筈よ」

流石法正さん、一言多くて厳しいよね。

でも北郷は最近、そんな法正さんに他の子たちとは違う目を向けるんだよね。相手が法正さんっていう所でどうなるかはわかつちやうけど。

「はーい、わかりましたー」

「刃物は使わないのだから、くれぐれも妙なドジをして怪我はしないように。」

念のために、あなたは窯から一番離れたところで作業なさい」

「はーい……」

愛紗ちゃんの一件で法正さんはすっかり私達も危険なことをするんじゃないかって警戒して、厨房ではあまり火の回りに立たせてくれなくなっちゃった。

だから、私達の中で厨房に立ってるのは愛羅ちゃんと紅火ちゃん、

たまに朱里ちゃんと王平さん。ごくたまーに北郷も立つみたいけど、自分だけで食べてるみたい。

「えっと・・・まず、これとこれを測って・・・」

いくつかの粉と牛乳、あとぼたーっていう新鮮な牛乳を振って作った物を使いながら頑張っていると、なんだか他の人たちのも気になってきよろきよろと周りを見渡しちゃう。

あつ・・・粉、入れすぎちゃった・・・

まあ、いつか！

とりあえず、それを混ぜて混ぜて、生地にして固めておいて布巾でもかけておけば大丈夫！

「愛羅ちゃん」

「・・・樟夏殿はもう召し上がられただろうか。

うまく出来たとは思うのだが、やはり菓子ではなく他の贈り物の方がよかっただろうか・・・だが、好みがわからん以上、菓子の方が・・・私が声をかけても反応がなくて、その上どこか遠くを見ながら恋する乙女状態な愛羅ちゃん。

「うん！」

普段貂蟬さんと戦ったりして愛紗ちゃんよりもずっと純情な恋する乙女っぷりがすつごく可愛い!!」

「桃香様?!

一体何をおっしゃっているのですか?!」

「あつ、ごめん。」

声に出ちゃってた」

そう言いながら愛羅ちゃんが作ったらしいくつきーを見ると、とっても綺麗に形が整っていて、形は単純でも丁寧に作ったんだろうなっということが一目でわかる。

「愛羅ちゃんは器用なのに、どうして愛紗ちゃんは料理が出来ないんだろうね?」

「・・・正直なことは桃香様の美点ではありませんが、全てに対し正直であることが良い事だとは思われませんように」

意味がわからなくて首を傾げると、愛羅ちゃんはどうしてか苦笑し

ちやつた。

「私は姉上のように素直ではありませんし、それほど個人の武に優れているわけでもありません。出来ないところがあれば共に補い合い、支え合う。」

「それでよいではありませんか」

「うん！」

だから、愛羅ちゃんも何か困ったことがあつたらすぐに言つてね？無理したり、抱えたりしたら嫌だからね？」

前よりもずつとみんなのことが好きで、私に出来ることは大したことないかもしれないけど、誰かが抱えちゃったり、辛くなったりするのはもう嫌だから。

「ええ、勿論」

あの頃より優しく笑う愛羅ちゃんを見ると、なんだか幸せな気持ちになつて私はさらに笑つちやつた。

「オイコラ、愛羅様の作業の邪魔してんじゃねえだろうな？」

「してないよ!」

「というか、どうして私が邪魔してること前提なの?!」

「紅火、やめないか」

「チツ・・・了解です、愛羅様。」

それじゃ、窯の方に自分のもんを焼きに行くんで」

そう言つて紅火ちゃんが手に持っているくつきーは、愛羅ちゃんに負けず劣らず丁寧に作られていたちよつとびっくりしちやつた。

「紅火ちゃん、料理上手なんだねー!」

「はっ? 料理なんざ誰でも出来るだろ?」

「じゃねえと、食つていけねえじゃねえか」

紅火ちゃんは不思議そうな顔をして、私の横を通り過ぎて行つた。けど、ごめんね。私、あんまり料理得意じゃないんだ・・・

法正さんは相変わらず鈴々ちゃんに優しく教えてるし、王平さんは・・・なんか真剣に整形してるけど、何作ってるんだらう?」

「おー、劉備ちゃん。」

「ちゃんと自分の作つてる?」

「生地は出来たので、他の人たちのを見て回ってるんです。

それにしても、王平さんは凄いですね！

みんなの顔を作るなんて、器用なんですねー」

「んー？ そうかなあ？

まあ、旅芸人なんてしてると一人で食っていかなきゃいけないし、いくつかの芸を覚えておかなきゃいけないもんなのよ」

鬼の面をした曹仁さんと髪が長くて少しだけ厳しい顔をした法正さん、鈴々ちゃんと言紗ちゃん、愛羅ちゃんと紅火ちゃん、それに私の知らない人の顔があつたりもしたけど、どれもとっても可愛く出来上がっている。

でも、その中に一つだけ文字の物があつて、私はおもわず王平さんに尋ねてしまう。

「王平さん、その・・・」

「なーに？」

王平さんは特に気にしてないみたいだけど、この一字はちよつと・・・

「この『腐』って文字の書いてあるのは・・・ 誰ですか？」

「あー・・・ それは失敗しちゃったんだよね。

孔明ちゃんの顔の方もこつちに作つただけど、そつちもしつくりきたから残しておいたのー」

ぴつたりでしょ？ とまで言ってくる王平さんに、ちよつと苦笑いして目を逸らす。ここに居るみんなの分が並んだくつきーはなんだから可愛くて、今から食べるのが何だかもつたいたいなあ。

「そろそろ私も仕上げてきちゃいますね！」

「あいあい、適当にねー」

そう言つて王平さんから離れて、さつき作つておいた生地を伸ばして形を作つていく。なんだか不恰好だけど、焼けば大丈夫だと信じて私は窯へとくつきーたちを放り込んだ。

何とか愛紗ちゃんも含めたみんなの分が窯に入れて、後片付けをして、あとは焼き上がるのを待つだけ。

甘い香りがする窯をちらちらと見ながら、法正さんが入れてくれたお茶を飲んで待つてたら、廊下から誰かが駆けてくる音がして、扉が乱暴に開いた。

挨拶も無しに乱暴に開かれた扉に対して、法正さんは誰かを確認する前に、調理中は出入りを禁止していた林鶏へ迷いもなく指示を出す。

「バレンタインに俺だけ仲間外れとか酷い!!」

ていうか、桃香! 教えてくれてもいいだろ!」

当然、林鶏の蹴り技は北郷を襲って、その顔には足の跡がくつきり残っちゃった。

「だって、女の子だけの料理会に、男の人が混ざったら気まずいと思っ  
て・・・」

華佗さんはお仕事みたいだし、貂蝉さんはどうしてか朝から北郷の部屋から出てこないし」

「確かにそうだけど!」

でも、周りが女の子だらけでそれって今更じゃん!

っていうか、北郷呼びで定着させる気なんだ!」

「まあまあ、落ち着いてくだしやい。ご主人様。」

「これでも食べてください」

「ありがとう、朱里。」

これって・・・ みんなが作ったクッキー?」

「はい!」

いい笑顔で北郷に手渡してるけど、私はその独特な形のくつきーを誰が作った物か知ってるからね? 朱里ちゃん。

でもまあ、一応想ってくれてる子のからのくつきーだからいいのかな?

「まっずー!」

顔をすぼめて、全力で味を表現する北郷に愛羅ちゃんの隣の愛紗ちゃんが肩を落としてる。

ああ、やつぱり・・・

「すみません・・・ご主人様・・・」



朱里が手取り足取り教えてくださったのですが、何故か失敗してしまつて……」

「でも、食べれる物になつたんです！」

「凄い進歩なんですよ！」

「凄い進歩じゃないか！ 愛紗！」

申し訳なさそうにする愛紗ちゃんと、食べれない物の状態をどうにかした朱里ちゃんが熱論してる。

うん…… お疲れ様、朱里ちゃん。

北郷も手のひらを返すみたいに褒め称えてるし、素直だよね。

「そ、それでその…… 法正さんは誰に作つたのかなー？」

何故か急にもじもじしながら法正さんを見るけど、法正さんはお茶をすすりながら、鈴々ちゃんとかつきーを摘んでいた。

鈴々ちゃんは自分のくつきーを食べて、ちよつとだけ納得してないみたい。

その隣で王平さんが曹仁さんの顔の形をしたくつきーを、ちよつと人には見せちゃいけないような顔で食べてるのは見ないふりをするね！

「誰って、そんなの決まってるでしょう？」

「街の子どもたちによ？」

「ソ、ソウデスヨネー……」

法正さんですもんねー……」

何で答えがわかつてるのに、聞くんだろうか？

それに法正さんはどう見ても、北郷のことをよくても出来の悪い弟ぐらいにしか思つてないのに。

「まあ、北郷が来ちゃつたのはしょうがないし、せつかくだからみんなでお茶会しよつか！」

女の子だけのお茶会のつもりだったけど、北郷も仲間に入れてあげることにした。

「桃香って、もしかして俺のこと嫌いなの?！」

「だーかーらー、嫌いじゃないってば。」

ほら、愛紗ちゃんの隣に座つて座つて！」

とりあえず、北郷の背中を押しして愛紗ちゃんの隣に座らせて、お茶を入れてあげる。

「うわっ、これもまずい！」

ていうか、しょっぱい！」

「あつ、それ私が作った奴ー。」

私って、料理苦手なんだよねー」

「お茶もまずい！」

「そんなことを言う北郷は、辛子たっぷり乗せたくつきーを口に入れてちやうね♪」

「マジで勘弁してください！ 桃香さん！」

ここでへこたれたら、部屋で待ってる貂蟬さんを見たらどうなっちやうんだらうなあ♪

## バレンタインデー 後日談 【樟夏視点】

兄者曰く、本日は天の世界では『ばれんたいんでー』なる行事があるらしく、兄者はいつも通り忙しそうにしていました。

手製のくつきーを自ら作り、飯店や茶屋などへの働きかけなどをしながら、他の仕事を同時進行で行うなど、兄者は本当にいつ休んでおられるのかと心配にもなりますが、今日は既に朝から姉者たちによって部屋で捕縛され、強制的に休日を楽しんでおられることでしょう。「もつとも私達には普段通りの仕事がある上に、兄者を今日襲い掛かるつもりだった姉者を始めとした方々は自分のやるべき仕事を早々に片づけてしまっているという用意周到さを見せてくれますからね」

そして、配慮なのか、単純に邪魔者を追い払おうとしているためなのか、外回りの仕事ばかりを私と樹枝に担当させるなど、細やかな用意までされていました。

我が姉ながら・・・ 本当についてから準備していたのでしょうか。ここまで入念に準備されると、呆れを通り越して尊敬の念すら抱いてしまいそうです。

「しよ、樟夏様！」

私が突然かけられた声に振り返れば、そこには見慣れた隠密用の衣服ではなく、司馬家の表の顔である文官服姿。紫を基調とした服に紅と白を散りばめた衣服の姿はあまり見ることがないため新鮮で、わずかの間見惚れてしまいました。

「はっぴーばれんたいん！」

言葉と同時に何かを放り投げられ、私は戸惑いながらもその何かをしつかりと受け止めました。

「紅陽殿？ これは一体・・・」

「い、一応言つときますけど、義理なんかじゃありませんから！」

「は・・・？」

一瞬、言われたことを理解することが出来ず、私は先程とは違う意味で彼女を見つめることになりました。

「あーあ、もう・・・」

やっぱりそういう顔になるよね・・・ わかってたけど、やっぱり傷つくなあ」

言葉を口にした当の本人は真名の通り頬を紅に染め上げて、少しだけ私の反応に呆れたように、彼女は溜息を零してしまいます。

どこか悔しそうに、寂しそうなのその表情は、私が疑問を口にする前に明るいのへと変わってしまった。

「やーい、鈍感樟夏様。」

そんなんじや、せつかく出来た婚約者さんに愛想尽かされちやいまずよーだ」

「なっ?!」

私は兄者のように鈍くなど・・・ それにそんなことで白蓮殿は・・・」

ふざけながらこちらに舌を出して、すぐさま私へ背中を向けてしまいます。

「・・・よく言うよ、そっくりな癖に」

「今、なんと・・・?」

「何でもありません。」

それじゃ、私はそろそろ仕事があるのでこの辺で。

それにちよーつと仕事中毒者というか、愉快犯な妹見てこなきやいけないし」

そう言って立ち去ろうとする彼女は、何かを思い出したかのようにこちらへともう一度向き直りました。

「あつ、でもさ。」

私が渡したのは冬雲様の義弟でも、華琳様の弟としてのあなたじゃないって事だけははつきり覚えておいてほしいかな。

私は樟夏様が樟夏様だから受け取ってほしいと思ったんですからね?」

そんなことを言う彼女の優しげな表情は、まるで姉者が兄者へと向けるものによく似ていて、もし仮にそうだとしたら尚更私にはその言葉の意味がわからずに、ただ困惑するだけでした。

「はい？ 一体、それはどういう意・・・」

「だから、どうだってわけじゃないですけど！

それじゃ、私はこれで失礼します」

逃げるように去っていく紅陽殿の後姿を見送ることしか出来ず、私は先程投げられた青の包装紙で包まれ、金と赤の紐で縛られた物へと視線を移しました。

袋を開ければ、そこに入っていたのは手作りらしきくつきー。

菱形のそれを一つ口に運べば、優しい甘さが口の中へと広がりました。

「ああ、美味しい・・・」

立ち食いはあまり行儀としてよくないでしょうが、食べ物であるのならすぐに食べて感想を伝えることが礼儀でもあります。

あとで食べることを忘れ、食べ物が悪くしてしまうのは後味贈ってください側に対しても失礼ですからね。

「・・・それで樹枝、いつまでそこで隠れているんです？」

「隠れているというか、動けなかつたというか・・・ 声をかけようとしたら、突然背後から刃物を突きつけられていたというか・・・」  
何故か路地の隅で動かないでいた樹枝へと声をかけると、樹枝は冷や汗をかいて妙なことを言っています。

背後から刃物を突きつける？

この領地内でそんな物騒なことは司馬家の目がある限りは不可能の筈ですが・・・ 警邏隊等に伝えたほうがいいかもしれません。

「それにしても、先程のこともそうですが・・・」

随分見せつけてくれますねえ！ 人気者の樟夏殿!!」

汗を拭ってから改めて私へと視線を向ける樹枝は恨みがましい目をして、私を睨んできます。

「何のことですか？」

「その背中に抱えている物と、先程渡さればかりの手製のくつきーを持ちながら、まだしらばっくれるんですか！ このくそ兄貴は!!」

そう言っつて背中に背負っている物と手にあるくつきーを指摘されますが、私はおもわず溜息を零します。

「と言われましても、ほとんどがこの日を利用して渡してくる義理の物ですよ。

お祭りと同じ感覚で渡す方もいるでしょうし、兄者や姉者宛ての物も含まれています。恋愛感情だけでなく、敬愛も愛だと言って部下からもいくつかいただきましたしね」

紅陽殿の真意はわかりませんが、全てが全て私への純然たる好意のものであると言えるほど、私は自分に自惚れてはいません。紅陽殿はああおっしゃってくださいでしたが、私のことを曹操の弟・曹仁の義弟と見る者は少なくはないでしょう。

「大体、あなたも紙袋を持っているじゃありませんか……それは……」  
「樟夏……」

部下から『本命です』と熱っぽい視線を向けられながら、くつきーを渡された僕の気持ちが…… お前にわかるか？

受け取らなかつたら角が立ち、受け取っても襲い掛かれそうになるのを仕事をしながら町中走らされた僕の苦労が、わかるか？」

袋を持つ手を震え、悲しげな眼をこちらに向けてくる樹枝は溜息を吐き、視線を空へと彷徨わせます。

「ええ、わかっていましたとも……」

こんな行事で僕がまともに男扱いされないことなど、重々承知していましたとも。でも、夢を見たっていいじゃないですか！

にもかかわらず、朝から渡されるのは男ばかり。挙句街を歩けば、女性陣からは『誰に渡すの？』などと聞かれる始末…… 泣いていいですよね……！」

もはや悲しみの叫びを大きくすることで自分を慰める樹枝に、目頭が熱くなつてしまいます。

すみません、樹枝。

流星に私であつても、男の部下から本命は貰うことはありませんでした。

「樹枝…… いつか良い事ありますよ……」

励ましの言葉が浮かばず、肩を叩いてありきたりな言葉しか出てきません。

「良い事がないから悲しんでいるんだろうが！」

「というか、『いつか』っていつだ！」

「……それは神のみぞ知る、という所でしよう」

「だとしたら、僕がこうなっているのは確実に神の性だな！」

が、樹枝の願い虚しく、通りの向こう側から何やら嫌な駆け足が響いてきます。

「世は無常、か……」

私の眩きに樹枝は何かを察したのか、周囲を忙しく見渡し始めます。もつとも最早手遅れでしょうが。

「ぎーーーーーーーーーーーーーーーーーちゃんーーーーーーーーーんーーーーーーーーー!!!」

地に響くような野太い声と日に照らされる頭、兄者にも並ぶような体格の良さによって遠目からでも誰かは明らかです。

幸いな点はくりすますとは違い、普段の服装ということですが、今日はその手に何か大きな物を抱えていました。

「だから……この理不尽極まりない格差は一体何なんだ！」

気力を無理にでも引き出そうと叫ぶ樹枝の叫びは虚しく掻き消され、牛金は輝いた目をしながら私達の前で止まりました。

「樹枝ちゃん、受け取ってくれ！」

俺のこの樹枝ちゃんへの愛の結晶を！

そして、共に重なり合い、輝きを放とう!!

俺と君で、この大陸の奇跡の原石となるんだ！」

今回でこれを聞くのは二度目ですが、見た目に似合わず彼は実に詩人ですね。樹枝に向けた愛の詩なのしようが、彼が手がけた詩を公表すれば案外人気になるのではないのでしょうか？

情熱的な愛の告白、詩的な囁き、誰に向けたかを明らかにしなければ、素晴らしい詩人になるかもしれません。

「いらんわ！ そんな危険物!!」

つーか、そんなもんになるか、ボケエエエエー!!!」

牛金の手が届かないように距離をとりつつ、怒鳴り散らしていく樹枝の姿は正直あまり格好のつくものではありません。

が、それよりも私は牛金が大切そうに抱える樹枝と同じくらいの大

きさの薄い荷が気になり、おもわず首を傾げてしまいます。

「牛金殿、その袋の中身は一体何なのですか？」

大きい割には妙に薄いですが・・・？」

「よくぞ聞いてくださいました！ 樟夏様!!」

これは俺が冬雲様と真桜様にご教授いただいて作った、牛金特製一分の一樹枝ちゃんくつきーです!!」

言葉と同時に勢いよく包装紙がはぎとられ、姿を現したのは樹枝を模したくつきーであり、姿・形を似せられ、色さえあれば見分けがつかないほど見事な出来栄えです。

ですが・・・ その・・・

「ななな・・・」

くつきーを見て言葉をうまく発せずに、わなわなと震えだす樹枝は静かに拳を握りしめますが、私はまだ待てとその拳をそつと掴んで止めておきます。

まだ、状況を本人の口から聞いていませんからね。

「その・・・ 何故、その樹枝はほぼ全裸なのでしょうか・・・？」  
そこにあつたのは、胸と急所を手で隠すだけというほぼ全裸姿の樹枝を模したくつきーでした。

ある種の悪夢です・・・

いうか、よくこれの包装紙をこんな街中ではぎとることが出来ますね。牛金。

「はいー」

当初は服を着せるつもりだったのですが真桜様から助言を賜り、予算の都合もあつたので精巧な全裸の姿をくつきーにすることになりました!!

更衣室、部屋などは共に出来ないので再現は不可能かと思われていたのですが、何故か将の皆様からも応援をいただき、特に司馬家の司馬敏様のご協力くださり、完成させることが出来ました!」

真桜殿、あなたは一体何を言ったのですか?・・・いいえ、やはり何も言わなくて結構です。想像できますので。

というか、応援しているのが誰か八割がた想像できますが、樹枝の



全裸の姿で作るということで何か言いたい面もありますし、その大きさのくつきーを焼くことが出来る窯を作った時点で驚かされるとうか、ここまで行動されると応援する側の気持ちもわからなくもない自分がいることに困惑を抱くと同時に、納得してしまいかけている自分がいるのが怖いです。

「は、破壊してやるー！！」

僕の精神衛生上のために破壊してやるんだー！！」

ほぼ全裸の自分が目の前に現れるという通常ではありえないことをされている樹枝の怒りはもつともであり、今度は止めることもなく樹枝の拳がくつきーを襲う、はずでした。

「樹枝ちゃんのために作ったくつきーだが、それは駄目だ！

せめてそのまま一口食べてから、食べやすいように砕いて・・・」  
「どこの！ 世界に！ 全裸姿の自分の食べ物にかぶりつきたい阿呆がいるかあああー！！」

今日という今日は許さん！

そのくつきーを粉々にし、お前に引導を渡してやる！！」

「あははは、捕まえてごらんさーい。

早く捕まえないと、樹枝ちゃんくつきーと樹枝ちゃんと一緒に陳留一周追いかけてっこだー」

どこまでも本気の殺意をまき散らす樹枝に対し、牛金はくつきーを抱えて楽しげに走り出します。

樹枝への想いの発露をしているとついつい忘れがちになってしまいますが、流星は兄者の部隊の副隊長、胆が据わっていますね。

「今日という今日は・・・絞める！」

くつきーを持った牛金を樹枝が追いかけるという普段は決してみられないような光景を見送り、私が少しその場を離れました。

大通りをしばらく歩き、行事を楽しむ民たちを眺めていると、何やら裏の路地から不穏な声が聞こえてきました。

「今日は『ばれんたいん』、恋人たちが愛を囁き、想い人へと愛を告げる日。

そんな日に恋人も、想い人もいない恋愛貧民の諸君、集まってくれたかなー？」

「でも、安心してほしいのです。

そんな可哀想な皆さんにも風達がくつきーをあげましょう」

聞こえてきたのは灰陽殿と、風殿の声。

ほう、あの何を考えているかわからないお二人も、今日ぐらいはそう言った慈善事業のような優しさを他の方々に配っているのですね。いや、感心感心。

「あー、でも勘違いは駄目だからねー？」

私の愛はまだまだ研究に捧げられてるしー」

「風の愛はお兄さんに捧げてとづくに品切れなのでーす」

酷い言葉にも関わらず、周囲に集まった男性中心の集いは盛り上がりを見せ、『くつきー』や『美女』、『美少女』という言葉を連呼しています。

「あははは、でも大丈夫。

ちやーんと私達二人の手作りくつきーがあるし、今から配ってあげるからさ。

ちよつと色が鮮やかだけど、私達が作ったくつきーを食べてくれるよね？」

「表の子どもたちに紛れては取りにくいですからねー」。

それにこちらのくつきーは少しだけ大人用ですから・・・少々刺激的な味ですが、食べてからのお楽しみなのです♪」

茶目っ気たつぷり且つ笑顔で言っている筈のお二人の言葉に、寒気が止まらないのは何故でしょうか？

何よりあの真桜殿とは別の意味で研究狂いの灰陽殿と、悪乗りをする風殿・・・嫌な予感しかしません。

「さあさあ、お食べー」

「はい、こっちにも播くのですよー」

言葉と共に宙を待っていくのは、小さめの袋に包装された菓子らしきもの。

灰陽殿とよく似た白い大き目の服を纏った数名が同じように播き、

菓子はみるみるうちに姿を消し、私はその光景を見てると不意に灰陽殿と目が合いました。

「！

・・・ちえつ、紅陽姉様と橙<sup>とう</sup>ちゃんに怒られたくないし、やーめた」

一瞬、こちらを見て獲物を見つけよう目をしましたが、残念そうに何かを言っつて、何も見なかったように視線をそらしてしまいました。

「それに効果を確かめるだけの実験台は、これだけいれば十分だしね」  
♪

「おやおや、灰陽ちゃん。それはまだ秘密ですよー？」

いえ、少しばかりもう効果が出ているようですね」

そうして黒い笑みを向けあい、仲睦まじげに手を結ぶお二人に寒気を覚え、暖かさを求めて大通りへと戻ろうとしました。

裏路地を出る最後に見えたのは先程菓子を食べた同性同士が荒い息をして、互いの手を取り合い、人のいない場所へと向かっていくというおかしな状況。そして、二人は楽しげに笑い合い、言葉を言い放ちました。

「んー？ 性転換剤はまだやっぱり未完成かもね？

体じゃなくてまだ精神的にしか作用しないみたいだし、でもやっぱり効果だけは同じ人間で試した方が効率良いよねー」

安全確認はいくらでも方法あるけど」

「ですなぁ。」

ですが、媚薬などは完成したとみていいんじゃないですかー？」

「媚薬は不要だろうけど、強壯剤とか、精力剤は風ちゃん欲しがってたもんねー」

「お兄さんは優しすぎますし、数が数ですからねぇ・・・」

・・・私は何も見ていませんし、何も聞いていません！

そうです、そうに違いありません！

どうにか路地を抜け、私は太陽の暖かさを体中に体感しながら、先程見てしまった光景を振り払うように青い空を見上げました。

「さて、戻って白蓮殿と愛羅殿、それに紅陽殿から貰った物を食べると

しましよつかね」

そして、贈り主のわからないくつきーもですね。

愛する婚約者のくつきーを食べれる日がくるとは思っていなかった。歩調は軽快になり、頬が緩むのを自覚しました。

「はっぴーばれんたいん、白蓮殿」

今ここに居ない愛する婚約者へと、来月には何を返そうかと考えながら私は空へと囁きました。

## 白き陽と逢引きを

ある秋の日、俺がいつも通り仕事をこなしていると、お茶を入れに出していた白陽がお茶を置き、躊躇うようにしていた。

「冬雲様・・・その・・・」

「ん？ どうかしたのか？ 白陽」

白陽にしては珍しいなと思い、聞いてみれば、白陽は少し恥ずかしそうに下を向き、意を決したように口を開いた。

「その・・・ 次の冬雲様の休日を、私に・・・ くだいませんか？」

それはとても珍しい、彼女からの逢<sup>デート</sup>引きの誘いだった。

当然、俺が白陽の願いを断るわけもなく、用事がない事を念入りに確認し、俺は導かれるがままに紅葉の美しい山の中を歩いていった。

「白陽、そろそろどこに連れて行ってくれるかを教えてくれてもいいだろう？」

「まだ秘密です。」

いえ・・・ もつと言えば、あの場所に名などありはしない。というのが正確かも知れません」

俺の先を歩き、いくらかの荷を背負いながら、白陽は答えてくれる。が、その中身すら教えてくれない上に、大した重さではないからといって持たせてもくれず、本当に何も知らされずに俺は白陽の後をついていくだけとなってしまっている。

まあ、たまにはこういうのもいいか。

「冬雲様、退屈ですか？」

「いや、そんなことはないよ。」

でも、白陽がこんなことをするとは思わなかったな」

歩みを止めることもなく、こちらを振り返らないで問う白陽に俺は答える。

「らしくないことは重々承知ですが、今回はどうしてもあなた様に見ていただきたいものがあるのです」

「この紅葉だけじゃないのか？」

「はい。」

私がお見せしたいのは、この先です。

そして私の記憶が正しければ……冬雲様が話してくださいましたものと同じ筈です」

記憶を探るように顎に手を当てて、周囲を見渡す白陽に俺もつられて周囲を見渡すが、何を探しているのかわからない以上、あまり意味がなかった。

「でも、教えてくれないんだろ？」

「ええ、ついでからのお楽しみです。」

もし違ってもあの場所は、私のとっておきです。冬雲様ならばきつと、気に入ってくれださると思います」

そう言つて口に指を当て、悪戯気に笑う白陽はなんだか黒陽に似ていて、彼女たちの血のつながりを実感する。

「白陽しか知らないのか？」

考えたことが読み取られないうちに会話を振れば、白陽はあちこちの草や果実を袋に入れつつ、進んでいく。

「ええ、私だけです。」

昔この山に、薬草の類を取りに来た際、見つけました。

以後も何度かこの山には来ましたが、いつ来ても荒らされた様子もなく、おそらくは私だけが知っている場所です」

白陽はそう言つて振り返り、俺へと手を差し伸べてくれる。

「誰かに教えるのは、冬雲様が初めてです」

「……それは光栄だな」

白陽の手を取つて俺は笑い、道にもなっていない山を登り続ける。

「なあ、白陽。」

凧たちとは仲良くしてるか？」

普段は仕事だからすることのない日常的な会話を振れば、白陽の表情は心なしか硬くなってしまう。

「……冬雲様、私は三人の友であつて、いいんでしょうか？」

いえ、私は『友』と呼ばれていいのでしょうか？」

「えつと……？ それはどういう意味だ？」

俺には普通に友人に見えてただけで、違うのか？」

尋ね返す俺に白陽は表情を曇らせ、言葉にしてしまったことを後悔しているような様子が見て取れた。

が、それもわずかな間だけで、白陽は言葉が続ける。

「私にはこれまで一度も、友と呼べる存在がいまませんでした。

拒まれ、拒み、人と距離をとり、姉妹たちとすら一枚壁を作って生きてきました。

その結果が『人との触れ合いがわからず、どうすればいいかわからない』、人としてあつてはならない欠陥をです。

冬雲様、私は彼女たちにどう接することが良い事なのか、『普通』であるのかを知りません。

友という存在が、距離感が、話す内容などの全ても。そして、どうすることが正解なのかが、私にはわからないのです」

俯き、戸惑っているような白陽の手を俺は握り、逆の手で頭を軽く小突いた。

「冬雲様・・・？」

突然の俺の行動に白陽は戸惑ったような表情をするが、かまわな

い。というか、知ったこっちゃない。

「白陽、一度嫌な思いをして、その物事に対して怖がることの一体どこが欠陥なんだ？」

「！

ですが私は・・・ただ逃げただけです！

世捨て人のように全てから目を逸らし、自分の中に引き籠り、ただ息をする木偶のように・・・華琳様のように、姉さんのように、行動に移そうとはしなかったんです!!」

俺の言葉に白陽は驚いたように目を開くが、それでも自分を責めることをやめようとはしなかった。

嫌なことから逃げ出す。

そんなこと当たり前なのに、彼女はあまりにも真面目すぎて、それゆえに自分の全てを否定する。

「そんなことないだろう！」

白陽は確かに一度逃げたのかもしれない。だけど、風たちと初めて会った時に声をかけたのは白陽の方だったじゃないか！」

「それは……」

「わかってもらえないことを、異端視されることの恐怖を知った上で、白陽は三人に自分から手を伸ばせたじゃないか。

その後だってそうだ。

藍陽と沙和が友達になったのも白陽がいなかったら出来なかった縁で、三人が部屋に来る時だっていつも俺以外を探してるし、真桜の工房に入るのだって信用がないと入れないんだぞ？ 部品を踏み壊されたらたまらないって言ってるな」

俺は、嬉しかった。

白陽が自分から誰かに手を伸ばして、友達になって、俺以外の誰かに笑顔を向けてることが微笑ましかった。

「友達って、人から認められなきゃ友達じゃないのか？ 違うだろう？ 一緒に居ると楽しかったり、気楽だったり、馬鹿騒ぎ出来たり、ちよつとしたことで笑い合えたり…… そんな些細なことでもいいんだよ」

まだいまいち納得できていないような顔をしている白陽に、俺は静かに言葉を続ける。

「なあ、白陽。

この間のバレンタインデー、どうして白陽は三人にクッキーを作った？」

俺のなんともないような問いに白陽は何故か顔を赤くして、でも俺の右手はしっかりと白陽の手を握って離さない。

これに関しては、答えるまで離す気なんてない。もつとも、答えを言った後も話さないかもしれないが。

「……三人に、私にとってあなた達は大切な友人だと伝えたかったからです」

「渡した時、三人はなんて言ってた？」

「黙秘します！」



「それは残念」

真つ赤になつた白陽に声を荒げられ、俺は悪びれることもなく笑つた。

人との関係なんて、どうすることが正しいのかなんて、誰にもわからない。

誰だつて当たり前前に接しているのに、誰もが頷く万能の答えなんて存在しなくて、自分で見つけて、自分で納得するしかない自己満足の世界だ。

「それでいいじゃないか、白陽。

友達つて、そんなに固つ苦しく考えるもんでもないんだからさ。

それに凧はともかく、真桜と沙和が嫌なことを嫌つて言わないように見えるのか？」

「それは確かに、そうですね」

同時に浮かんだだろう二人が文句を言う姿に笑つて、その後も他愛もない会話をしながら山を登り続けた。

「冬雲様、そろそろ到着をしますので目隠しをしていただいてもよろしいでしょうか？」

「・・・必要なのか？」

「出来れば、ですが」

目隠しに一瞬戸惑うが、腹をくくる。

「・・・わかった。

今日はとことん、白陽に従うよ」

「ありがとうございます。では、手はこのままです。

足元は私が注意しますので、お任せください」

目元に布を当てて、自分で縛るとさつきまでと同じように右手と左手が重なり合つて、少しずつ進んでいく。

「ああ、白陽になら安心して任せられるよ」

「冬雲様はまったく・・・息を吸うようにそんな言葉を・・・」

溜息交じりにそんな言葉が聞こえたが、よく聞く言葉なので慣れているし、本当の事だから痛くもかゆくもない。

しばらく進むと目隠しされていてはわからないほど明るい場所に出て、秋にはあまり似合わないほんのり甘い花の香りが鼻腔をくすぐった。「花？」

「少々、このままお待ちを」

俺に杖らしきものを渡して待機させ、白陽が何やら動く気配がする。

多分、持って来た荷物のいくつかを広げているんだろうなあ。

「用意が出来ましたので、こちらへ。」

背を後ろに預け、視点を上に・・・目隠しは私が取りますのでそのままに」

介護されるような形で白陽にされるがまま、何かに背を預けて視点を上げる。

「では、どうぞ」

言葉と同時に目隠しが取られ、そこには真っ赤な椀と競うように満開の桜が視界を支配する。

赤や黄、橙に囲まれた中にあるその色は、本来は『淡い』と称される筈なのにどこか力強く、自らがここの主だともいうように悠然と咲き誇っていた。

「桜、なのか？」

嘘だろ・・・？ だってまだ、秋なのに・・・

それにこの国でこんな色をしている花は桃とか梅しか見たことがなかったし・・・俺は、知らなかった」

桜が見れたことへの驚きと、まさかの椀との共演に呆気にとられて、俺はその景色に目を奪われる。

椀にも負けぬ桜の強さと、わずかに風に揺れて舞う花びらに日本が愛した桜の儚さを感じて、涙が零れそうになる。

「はい、櫻うぐいすです。」

冬雲様がおっしゃっていた天の国の花である桜は、この国では秋に咲くのです」

舞う花びらを受け止めながら、白陽は隣に腰かけて俺と同じように桜を見上げていた。

赤と桜の色に包まれた白髪がよく映え、それはまるで天使のようだった。

「ありがとう、白陽。」

最高の贈り物だよ」

「喜んでいただけただけのなら、何よりです。」

私の手製で申し訳ありませんが、この後お弁当も用意してありますので」

何それ、最高の贅沢。

ていうか今回、本当に俺は何も出来てないなあ。

「申し訳ないどころか、何も準備出来なかった俺の方が申し訳ないぞ？」

俺がそう言えば、白陽は俺の頭を半強制的に膝に乗せて、髪を優しく梳いていく。

「いいえ、そのようなことはありません。」

冬雲様を独占しただけでなく、街から連れ出し、場所の詳細を秘密で押し通したのですから。

あなた様と過ごすこと、あなたを独占するということはそれほど価値があり、私を含めた皆の愛すべき時間ときなのです」

「……俺と逢引きするだけで、どれだけ苦労してるのかちよつと不安になつてきたんだけど？」

これ、何か方法考えた方がいいのか？

それとも俺本人は関わらないで華琳たちに任せ方がいいのか、若干迷うぞ。

「……この景色を思い出した時、将の皆さんを誘うことも、凧たちだけでも誘おうかとも考えもしました。」

ですが……」

白陽はまた桜を見上げ、桜の幹へと体を預けた。

「この景色を今しばらくの間だけ、冬雲様と私だけのものにしたかったです」

その言葉と同時に、桜が風で舞い上がり、散っていく。

「ああ、やっぱり……」

その光景すら白陽は知っていたかのように、花びらへと手を伸ばした。

「今年も、待っていてくれてありがとう。私の親友」

「風に舞い踊る桜を愛しげに見つめて、桜に包まれていく白陽の姿は綺麗で、目を閉じる姿はまるで桜の木と話をしているようだった。

きっと白陽をたくさん慰め、年に一度だけ会うことを約束した大切な物言わぬ友だったのだろう。

「ありがとうな」

両手で白陽の頬に触れながら感謝を告げ、顔を引き寄せ、唇を重ねる。

「冬雲様・・・ 突然すぎます」

頬を染める白陽があんまりにも可愛くて、金と青の輝きが桜に映える。

「金の稲穂の輝きと湖面を映したような青、優しい白き光り。

その後ろに桜が舞い散り、椀が赤を添える。

とつても贅沢な景色を独り占めだ」

俺が笑ってそう言うと、白陽もまた微笑んでくれた。

「この景色の元にいずれ多くの華が揃い、咲き誇っても」

再び唇が重なり合い、遠ざかる。

「この金の輝きと湖面の青、そして白き光りの合わさるこの景色は、生涯あなただけのものです。冬雲様」

## 兄上達による寝間着談義 【樹枝視点】

これは僕が女官服で洛陽の街を闊歩することになる少し前の出来事であり、まだ風殿達が来てから日が浅く、警邏隊が創設されてすぐの頃の事。

風殿を中心に警邏隊は作られ、そこから真桜殿が職人を集め徐々に組織として作られていく冬桜隊とうおう、入ったばかりの新兵を出迎える沙和殿によって順序良くことは進んでいっている。

が、一つの部隊が増えるということは相応に書簡が増えるということであり、特に創設には多くの人と物が行き交うもの。

わかりやすく言うと、書簡地獄の始まりです。

僕と樟夏が外に出て行う仕事が警邏隊によってなくなつた代わりに、その分の書簡などを片づけることを指示され、ここ数日は毎日のように兄弟三人が顔を突き付けて書簡の山と戦っています。

まあ、兄上も樟夏も仕事に関しては真面目ですから作業は至って順調ですし、資料なども取りに行きやすいように書庫からほど近い四阿で行っているのもこれといって困ったことは今のところないと言ってもいいでしょう。

もつともそれも・・・

「失礼するわよ、三人とも」

言葉と共に入室してきた華琳様によって、終わりを告げたのです。  
が。

各自挨拶もそこそこに自分の仕事へと集中しようとしていたのですが、華琳様は空いている席に座り、物憂げな溜息を一つ吐いてから、兄上へと視線を向けられた。

「ねえ、冬雲」

「うーん？」

兄上はそんな華琳様へとやや意識を向けつつも、書簡仕事から目を逸らさずに筆を動かしていきます。

「もつと夜が燃え上がるような下着が欲しいと思うのだけど、天にそうしたものはあるかしら？」

華琳様、あなたは真つ昼間から何を言つてらつしやるのでしょうか？

兄上がいらつしやつた天の国を、一体何だと思ひですか？

如何に恋人であつても、これには流石に兄上も筆を止め……

「ふむ……この辺とかどうだ？」

薄い絹とか触り心地のいい生地で作られた、天の国では『ネグリジェ』つて呼ばれてる物なんだが」

「これは……そそられるわね」

「これ以外にも、あつちで『パジャマ』つて呼ばれる服があつてな……」

「いえ、閨では結局脱がすのだから、下着の方を……」

「いや、それもいいだろうけど、脱がしていくことも一つの楽しみだと思わないか？ 華琳」

「っ！」

……流石ね、冬雲」

僕達が仕事をしている隣で衣服談義というか、夜のお楽しみ話を繰り広げているこの二人に僕は耐えられずに立ち上がった。

「ちよつと待てこら！」

何、当たり前のように作業中の書簡の中から『愛すべき女性たちに着せたい衣服 【寝間着版】』とか書かれたのを取り出してんですか!?

兄上!!

「つか、仕事の真つ最中だろうが!」

兄上の驚きの行動とそのまま平然と続けられることに非難の声をあげると、兄上は逆に不思議そうな顔をして僕を見つめ返してくる。華琳様も同様に、『何か問題があるのかしら?』と言わんばかりに僕へと視線を向けた。

「あつ、これな。」

沙和に頼まれて、天の国の寝間着とかを書きだしておいたんだよ」  
「それに仕事の件に関しては問題ないわ。」

あなた達の仕事の量を見計らつて、私はここに来たのだから」

「いやいやいや!」

その書簡に『愛すべき女性たちに着せたい衣服』つて書かれていた

のをしつかりと見えましたからね?!

どう見ても兄上の趣味且つ私物でしょうが!!」

すぐさまもつともらしい建前を並べる兄上に僕が叫べば、兄上はにこやかな顔をして微笑んだ。

ていうか! 華琳様も確信犯か!!

「だとしても、衣服という商売にはなるよな?」

「完全に開き直りやがった?!

いや、むしろ自分の趣味を実行する建前を盤石なものにしただと?!」

兄上の頭は良い方だとは思いますが、そういう所は華琳様とそっくりですよね!

「樹枝、もうその辺にしておいた方がよろしいかと」

怒りで興奮している僕の肩に手が置かれ、振り返ればそこには樟夏が立っていた。

「いや、お前も止めろよ!」

「正直、夜に着る衣服のことだけであなたが何故そこまで騒いでいるのかがわからないのですが・・・」

「何でお前はそう言う変なところでずれてんだよ?!

兄上たちが言ってる寝間着っていうのはどう考えても夜の闇で脱がして、美味しくいただくこと前提の衣服だろうが!」

「ああ、そういう・・・ はあっ?!

僕の説明に意味をようやく理解したらしく、樟夏は顔を真っ赤に染め上げ、華琳様と兄上へと視線を向けた。

が、向けられた当人達は気にした様子もなく、むしろ平然と話を進めていた。

「動物を模した寝間着を用意したら一般向けにも出来るし、なおかつとても可愛いとは思わないか?」

「そうね。」

こちらを襲ってきそうな肉食の獣たちに囲まれながら、こちらが襲う・・・ なかなか素敵じゃない?」

「あとは複雑な縫い方になるんだが、服のあちこちに飾りをつけたり

とかな」

「ちよつと待てや!!」

「その開放的な助平共が!」

「仕事のことは問題ないってわかっても、男が女とする会話じゃないだろうが!」

「意味を理解している時点で、あなたも相当なものだと思っただけど?」

「うぐつ!」

「気配などほとんどなかったにもかかわらず、当然のように華琳様の後ろで笑顔を張りつかせている黒陽殿に痛い所を突かれ、僕は口をつぐむ。」

「が、助け舟は思わぬところから流れてきた。」

「黒陽、そうからかってやるなよ。」

「樹枝だって男だしな、それぐらいは知ってもいてもおかしくない」  
兄上、その発言は正しいんですが、とてつもなく年寄りくさいです。  
というか、生暖かい視線でこつち見ないでください。」

「樹枝、樟夏。お前達も愛しい人が出来た時に着てもらいたい服の一つや二つ、あるだろう?」

「意見を聞かせてくれよ」

「そう話題を振りますか?!」

まさかそうして話題が降られるとは思っていなかった僕と樟夏は同時に声をあげ、そんな僕らを気にすることもなく、兄上は笑って僕らの意見を待っているようだった。

「というか、女性の前でそういうことを言わせるのって新手の拷問ですか?」

「いえ、華琳様も黒陽殿も恋愛対象としては絶対に見ませんし、むしろお断りですが。」

「うふふ、そっくりそのままお返ししますわ。樹枝殿」

「だから! どうして心が読めるんですか?!」

「そして、何も発言していませんが兄上の影に白陽殿もいますよね?!  
ツツコミは放棄ですか? それとも兄上ならば全てを肯定するっ



ていうんですか、あなたという方はあ！

「着せたい服というよりも提案なのですが、寝やすい甲冑というのはどうでしょうか？」

「それはどういうことかしら？」

華琳様が先程までの助平さを隠し、真剣な表情になり樟夏の言葉の先を促すと樟夏も言葉を続ける。

「睡眠をとる時は楽な格好が好ましいでしょうが、戦場ではそれが隙になりかねません。」

そのために暗殺や強襲から身を守るような、鎧としての働きもしながら睡眠をとれるような寝間着があると便利ではないでしょうか？」

「だから、そうじゃないだろうが！」

兄上達が言ったのはそんな実務的な意見じゃなくて、夜を共にする相手がどんな格好してたら最高かって話だったの!!」

「樹枝、あなたという人は……相手もいないのにそんなことを考えるなど、虚しくないんですか？」

言葉と一緒に呆れたような視線と溜息を一つ吐くと、樟夏はさらに言葉を続けた。

「ありもしない夢を語るよりもまず私達の身分という物を自覚し、暗殺などに備えるべきでしょう。」

互いにそれなりの名家ですし、人材を暗殺などで失いたくはありませんしね」

正しい事を言っているし、否定はできない。

だが、今この場においてはどこかずれた樟夏の発言にどう返すかを迷うし、マジでこいつ悟り開いて男をやめてるんじゃないって疑う。

「軽量化した鎧……確かに斬新な意匠ではあるけれど、むくの手に間取りそうね」

「だが、それもまた一興じゃないか？」

エビやカニもむく手間があるからこそ、旨味が増すものだしな」

「それもそうね……」

飾らない美しさからむく楽しみ、夢が広がるわね」

「もう、黙れよ。この助平共が！」

言葉に厭らしさはまったく感じず、その上で表情もあからさまに変えることもなく、普段の会話をしているのと変わらない表情でとんでもない会話をしている君主と義兄を誰かどうにかしてください。

「まあ、それとは別に樟夏の案は普通にありだな。」

俺は近々真桜の部隊と会うから、その時にでも提案してみるか」

「体の節々を守り、なおかつ首近辺を防がなければならぬ軽量の鎧・・・ 実用化出来れば、戦場においての睡眠がだいぶ改善されるでしょうね」

「だな。」

量産出来ればなおいいし、出来なくても同じような方法でもう少し防具の方に改良を加えられるかもな」

真面目なことも考えられるのに、さっきの助平な下心を見た後だと兄上達のことを素直に尊敬することが出来ない。

「樹枝はどんな服がいいんだ？」

「僕はその・・・ 僕にだけ見せてほしいので、外に出てもいい露出の少ない寝間着がいいですね。」

上着を羽織るような薄手のものが理想的です」

「あら？ 私達のことを助平と言った割には普通に答えるのね？ 樹枝」

僕の端的な答えに華琳様がからかうように微笑んでいるけれど、ここで恥ずかしがれば追撃をされかねないので僕は顔を逸らしつつ、自棄気味に大声で応えた。

「そりゃ、僕だって男ですからね！」

普通に女性の色っぽい格好は好きですよ！ 何か文句がありますか?!」

そんな僕の答えに三人が笑い、僕は不貞腐れた顔をしながら、書簡仕事へと戻っていった。

だがこの時、兄上達の会話に全く興味を示さずに的外れな発言したあの樟夏が話題に上がった寝巻を必要とすることも、衣服関連の書物が書庫の一角を埋めるほど増え、書庫が増築されることも、そしてこ

い。の話題が僕自身へと災いとなって降りかかることを、僕はまだ知らない。

## 一周年

それは、ある穏やかな日のこと。俺はいつものように仕事をしながら、書簡を書庫へと戻っていた。

「ああ、いい天気だなあ」

鼻歌でも歌いたくなるような陽気、青い空、強すぎず弱すぎない風は心地よく、木々の揺れる音も心地いい。

「なあ？　白陽」

「ええ、冬雲様」

そう話かければ頷き、影から出てくる白陽に頬を緩めながら、俺は珍しく静かな城内を台車を押しながら歩いて行く。

特に行事のない日、いつもの日々。

街にいるだろう凧たちでも誘って、一緒に食事をとるのもいいかもしれない。

「白陽、今日の昼・・・」

「今日の食事はこちらへ」

俺が言おうとしたことを珍しく遮り、どこか悪戯っ子のように笑う白陽がいた。その笑顔は何か面白いことを考えている真桜と沙和の表情と被って見え、おもわず笑ってしまう。

「白陽・・・真桜たちから悪戯まで教わらなくていいからな？」

「ふふっ、『類は友を呼ぶ』と申します。

そして私自身、冬雲様を困らせることを楽しく思っている面があるのも確かです」

「オイオイ・・・」

互いに笑いながら、白陽に引っ張られる形で手を引かれる。

最初の頃の白陽が嘘のように、凧たちが来てからよく笑うようになつてくれた彼女を嬉しく思った。

連れていかれたその場所は、中庭にある四阿。

そこには机が用意され、多くの料理と魏の将の全員が並んでいた。

「はっ？　これ・・・今日は一体何の日だよ？」

「あははは、やっぱりお兄さんですねえ」

俺が何を言うかをわかりきっていたというように風が笑い、他の面々も同様に苦笑していた。

「どういうことだ？」

華琳たちの誕生日・・・ ならもつと大々的にやるだろうし、なおかつあの真面目な華琳が仕事のある昼間にやることをよしとする筈がない。

「兄様、この状況を見て、何か思いつきませんか？」

「状況？」

中庭で机を並べられ、その上には多くの料理を彩りよく並べられている。椅子はない所を見るに、立食形式で料理を食べるのだろう。

うん？ 立食パーティー・・・？

俺が今より昔、そう今じゃない今の時に華琳たちに提案した・・・

「鈍いわねえ、アンタそれでも英雄って呼ばれてるのかしら？」

「そんなこと言われても・・・」

今日、何か祝いの日だったか？」

「・・・どうして兄者は、いざご自分の事となるとお忘れになるのでしょう？」

桂花に呆れられ、樟夏に溜息を貰ってしまうが俺には全く見当がつかない。

「まあ、無理もない。

当の本人にとってはもつとも忙しない日であったことだろう」

「ですが我々にとっては運命の日、と言っても過言ではない日です」

秋蘭と稟が優しく微笑みながら、俺を見つめてくる。

だが俺は二人からの言葉を受けて、さらに考え込んでいた。

「兄ちゃん、そんな考える事じゃないってば！

僕らがこんなに喜ぶことなんて、そんなに多くないんだよ？」

「まったく、貴様は馬鹿の癖に難しく考えるなど出来る筈がないだろう」

「だー！ 難しく考えることぐらい出来るに決まってるだろ!!」

春蘭の言葉に反射的に怒鳴り返すと、控えめに雛里が前へと出てき

た。

「で、ですから、これは難しく考えたら、答えが出ないと思います」

「冬雲さん、簡単に考えればいいんです」

簡単に？

これが俺に関連した何かであることは確かだけど、俺の誕生日なんてそんなに祝ってないっていうか・・・こっちの暦って若干違うから俺よくわからないってことで誕生日祝わないようにしてたんだよな。

「まだ、わからないんですか？ 兄上」

「隊長は鈍いなあ・・・」

「まっ、そこがええんやけどな」

樹枝の呆れ、真桜の溜息、何故かはある霞の嬉しい言葉が続き、助けを求めるように凧と沙和を見ると同じような様子だった。

「隊長！、自分のことをもつと大切にしないと怒っちゃうんだからね？」

「隊長はご自分を低く見すぎです」

えっ？ 何のことだかさっぱりなんだが？

「完全に降参だ。」

いい加減、教えてくれよ。華琳」

俺がそう言つて手をあげれば、華琳は深く溜息を吐いて、俺を見た。

「あなたがこの大陸へと舞い降りた日よ、冬雲」

「えっ・・・？」

あっ・・・！

『おめでとうございませす！』

華琳の言葉に俺が呆然とすると同時に俺達を囲むように炸裂音が鳴り響き、細かな紙吹雪が舞っていく。

わずかに残る火薬の匂いから察するに、真桜によるお手製クラツカーだろう。

「・・・まったく、こんなことのためにわざわざ」

「こんなこと？ 何を言っているんです。冬雲様」

俺の言葉を掻き消すようにあちこちから聞こえる祝いの声、それど

ころか場外からすら聞こえてくる祭囃子の音。

「あなたがあなたであつたから、私たちを変えてくださったあなただから、祝いたいと思つたのですよ」

そうして手で示された机上の一番大きなお菓子には、クッキーで作られた大きなプレートが立てかけられ、まるでお菓子の家のようなそこに大きく字が書かれていた。

『私たちと出会つてくれてありがとう』

「・・・ハハッ」

どんな言葉を尽くせば、この想いは伝えられるんだろうか。

そう思いながらも、俺が今言いたいことは一つしかなかった。

「ありがとう！ みんな!!」

## 七夕

『七夕』

それは今でこそ星に願いを託し、笹に吊るすお祭りとなつていますが、元は奈良時代に中国から日本に伝わった『乞巧奠』きこうでんという行事であり、織女しよくじよと牽牛けんぎやうの伝説の織女へと針仕事・手芸の上達を願う祭りであつたそうだ。

「だから、祭り自体は七月の終わりにやってたんだけどな」

そんな七夕の話をしつつ、俺は城の自室でも、玉座でも、四阿でもなく、沙和の私室兼裁縫部屋へと訪れていた。

「ふーん？ だから隊長も、今日じゃなくて月の終わりにお祭りをするの？」

あつ、隊長。そつちの布とつてー」

「ああ、この淡い紫のいいか？」

この時期は何かと雨が多いからな、それにお祭りやるなら晴れてる時の方がいいだろ？」

「うん！」

ちなみにこれは雛里ちゃんなの！」

「へえ？」

何を刺繍するんだ？」

「完成してからののお楽しみなの〜♪」

会話しているつていうのに、沙和の針仕事をする手は止まらない。その手の中で本当ならもっと簡単に雑に作られていく筈のてるてる坊主が、何故か魏俺の将達の顔をした可愛らしい人形として生まれていく。

「見事なもんだよなあ・・・」

形自体は普通のてるてる坊主と変わらないのだが、顔をちゃんと作り、下は無地のままで完成・・・だと俺は思つてたんだが、沙和は『それだけじゃ可愛くないもん！』とか言つて、顔と体部分を別々に作つて縫い合わせ、刺繍まで施されるといふなんとも贅沢なてるてる



坊主が俺の目の前でみるみるうちに作られていく。

「そーお？」

でもやっぱり、沙和がやってるのは趣味の範囲なの。

こう言うちよつとしたお人形は作れるけど、浴衣とかは作れないも  
ん」

刺繍を終えて完成したものが積み重なり、山となっている。

その中のいくつかを手にとってみれば、布をあわせて器用に髪型を  
表現された華琳のてるてる坊主はやや釣り目で、青い瞳がこちらを睨  
んでいるのがなんだか可愛らしい。

「これ、このまま商品化が出来そうだけどな。

むしろ俺が買い取って、飾っておきたいぐらいだ」

「もー、隊長はおだてるのが上手なのー。」

欲しいんなら、隊長にあげるよ?」

冗談としてさらっと流されたけど、俺は本気なんだけどなあ。

・・・今度、知り合いの商人に見せてみるか。

作った本人に許可取るのは難しいなら、向こうからくるような状況  
にすればいいわけだしな。

「それはそうと、隊長は七夕のお願いごとはもう書いたの?」

「・・・沙和は?」

俺は答えないで、あえてすぐに沙和に問いかけた。

「城門に飾ってあるのにかけるのはもう書いて、吊るしてきたのー。」

でも沙和は、それとは別に裁縫がもつと上達したいの。

今、職人さん達にも暇を見つけては教えてもらってるから、もつと  
もーつと上達したいの!」

作業が一段落したのか、俺の膝に乗って甘えてくる沙和の頭を撫で  
れば、沙和はさらに嬉しそうな笑顔になってくれる。

「お? そんなことまでやってんのか。」

何か作りたい物でもあるのか?」

触り心地のいい髪を撫でていると、沙和は部屋のよく見える場所に  
置かれている俺が以前のクリスマスに贈ったマフラーを指差した。

「隊長が手作りのまふらーを贈ってくれたみたい、沙和も隊長に

いーっぱい愛が籠った物を贈りたいの！」

もうあれを渡したのは随分前だっというのに、少し色褪せてほつれている程度だった。たったそれだけなのに大切に使ってくれているのがわかってしまい、なんだか照れくさくなって顔を背けた。

「隊長つてば、照れてるのー。」

かーわーいーいー」

人をからかってくる沙和の頬を弱めの力で横に伸ばし、上下に動かす。

「こっちはもう返しきれないほど貰ってるつての。」

これじゃ俺は、いつまでたっても利子の分だっけって払いきれないだろうが」

「ふっふっふ、沙和達の狙いはそれだったら、隊長はどうする？」

沙和は意地の悪そうな顔をするけど、頬を引っ張られた状態じゃまったく様にならない。

変顔すら可愛いって何だこいつ、天使かよ。

「なんだ？ 何が狙いだ？」

決め顔を変顔で台無しにしても可愛いって、天使なのかお前はー？」

ふざけながら沙和の頬をいじくりまわしていると、笑顔は段々と眉間に皺が寄りしかめっ面になっていく。

「むにゅあぁー！」

もうっ！ 隊長、やりすぎなの!!」

両手で頬を押さえつけられ、仕返しされつつ、沙和の瞳が俺を捕らえた。

俺も見つめ返せばさっきまでの不機嫌な表情を崩して、柔らかい笑顔で俺を見せてくれた。

「沙和達の狙いはね、隊長。」

隊長を愛の借金地獄にして、一生沙和達から離れられないようにすることなの」

頬を捕らえていた手が首へと伸ばされて、引き寄せられていく。当然、顔と顔はいつしか重なり合い、唇が自然と合わさっていった。

「だから沙和達は隊長の傍にずーっと居て、どう頑張ってもその借金が帳消しにならないぐらいしちゃうんだから覚悟するの！」

沙和による宣言に俺は苦笑し、もう一度唇を落とした。

「まったく・・・俺はとんでもない女達に捕まったもんだ」

だけど、それが嫌じゃない。むしろ、嬉しいと感じてしまう俺も大概だろう。

顔が離れて、俺の膝に乗ったままの沙和はしばらく俺の顔をじっと見てから、何がおかしいのか笑い出してしまふ。

「なーんちゃって、そんなの全部沙和達の方なの。」

隊長から返しきれないほどの愛も、宝物も、思い出も貰ってるんだもん。むしろ借金地獄なのは沙和達の方だよ？

返しても、返しても、全然なくならない。

だけど、もつともつと欲しいって思っちゃやうから、自分で借金増やしちゃうの。

今、一人で隊長を独占できてるのも三人が遠慮してくれて、いろいろ根回ししてくれてるんだろなあってわかっちゃやし、この独占料もかなーり高いの」

「具体的には？」

「うーん？」

お茶屋で三人に奢るの二回分くらい？」

「おい、意外と安いだろ。それ」

迷ったのは素振りだけで、即答する沙和にデコピンをしておく。

「てへ？」

反省の色が一切ない沙和に俺がもう一回デコピンをしようと指を構えたら、逃げるように立ち上がってしまった。

「織女と牽牛みたいに年に一回しか会えないなんて、沙和には絶対無理だもん。」

あの時、たーつくさん我慢した分、もう一日だって会えない日なんて作んない。我慢なんてしないもーん」

明るくて、人を楽しくすることがうまくて、お洒落が好きで裁縫が得意な可愛い女の子。

たまにちよつと悪戯が過ぎて、でもそれも許してしまいたくなるような雰囲気を持つている俺の可愛い部下。

「だから、行こ？ 隊長。」

みんなが今頃、城門で料理を用意して待ってるの！」

「ああ、そうだな。」

雛里と流琉が索餅さくべい作ってくれるって言ってたし。実は俺、索餅は食べたことないから楽しみにしてるんだよ」

沙和に手を引かれて、さっきのてるてる坊主を片手に立ち上げれば、その表情はすぐに膨れっ面へと変わった。

「もー、食い意地じゃなくて雰囲気にあつた言葉言ってくれてもいいじゃーん」

沙和の膨れた頬を押しして間抜けな音をたてさせながら、窓から少し見えた空を見る。

雲が多くてあまり星は見えないが、雨が降っていないところを見る限り今年も天の彼らも邪魔されずに済みそうだ。

「浅茅生あざぢふの小野の篠原 忍ぶれど あまりてなどか 人の恋しき つか」

日本で平安の頃に読まれたらしいある歌を口ずさむと、沙和は不思議そうな顔をしてこつちを覗きこんでくる。

「歌？ どういう意味なのー？」

「夏の情景と我慢出来ない恋心を表した、俺の国の恋歌だよ。俺には似合わないけどな」

前もそうだけど、どうにも俺には遠回しな言葉が似合わない。霞の時も大笑いされたし。

「なら、隊長の言葉で言ってほしいのー！」

「お、俺の言葉あゝ？」

沙和の無茶振りに少し考えてから、俺は口を開いた。

「俺は笹に願ひ事なんて書かなかったけど・・・ その・・・」

頭に浮かぶ言葉を一つずつ、迷いながらも口にすることを決意した。

「神頼みなんかじゃなくて、俺がみんなを幸せにするから！」

俺の傍に・・・これからもずっと居てくれないか？」

俺が覚悟して言いきつたら、何故かそこには不自然な静けさが降り立った。俺が何事かと思いい、目を開くと

何故か、そこには魏にいる全員が勢揃いしていた・・・

えっ？　ちよつと待て。今の言葉、聞かれた？

いや、事実だし、言葉に偽りなんてないけど流石の俺でも告白みたいな飾った言葉を聞かれるのはやっぱり恥ずかしいっていうか・・・

「旦那、あんたは漢だぜ！」

宝譚の言葉で聞かれたことを理解して、顔に熱が集中することを自覚する。

「兄者、参考にさせていただきたいと思えます」

「兄上らしい言葉だと思えますよ」

樟夏は真面目に、樹枝はニヤニヤとした笑いをこちらに向けてくる。

ていうか樹枝、お前はいつもの仕返しだろ。

「冬雲」

声からもわかる上機嫌な華琳に俺は動けなくなり、せめてもの抵抗として羞恥で真っ赤になった顔を両手で隠す。

「私を見なさい」

「いや、もうマジで勘弁してくれ・・・」

恥ずかしさで死ぬる・・・」

「それは困るわね。」

あなたにはこれからもずっと、私の傍に居て貰わなくちゃいけないのだから」

俺の指を一つずつ外し、映った青い瞳が俺を捕らえて離さない。

空の青も、海の青も、映像として美しいとされた天の国のどの技術ですら、この青には敵わない。

「さあ、私達を幸せにしなさい。冬雲」

## 海の日

「というわけで沙和！ 真桜！

お前達の力を貸してくれ!!」

仕事の昼休憩を利用して、俺は警邏隊の仕事をこなしていた二人の元へ走っていた。

「なんや隊長、告白でもしてくれるんか？」

「きゃ〜！

隊長からならいつでも嬉しいけど、心の準備が出来てないし、沙和どうすればいいの?！」

「お前達のそういう悪乗りするところも愛してるぜー！」

俺の言葉を聞いているのに聞こえないふりしてふざけるのは昔からだから、俺も悪乗りして答える。

周囲から若干痛い視線を貰っている気がするが、すぐさま逸らして日常戻るあたり、良くも悪くも慣れている。

「んで、なんや?」

またおもしろいことでもするんか? 隊長」

「行楽用の水着を作ろうと思って、二人に協力を仰ぎたい。

真桜には大き目の日除けの傘と泳げない人用に考えられた浮き輪の作成、それと水鉄砲っていう玩具を頼みたくてさ」

ふざけつつも、ちゃんと真面目になつてくれる二人に俺も休日などの開いている時間に考えていた、夏用の企画書を取りだしていく。

「わーい！ 衣装のお仕事!!」

俺が出した水着の書簡に目をキラキラと輝かせ、用意してきた矢立と何も書いていない書簡を手渡せば、目にもとまらぬ速さで筆を動かしていく。

普段の仕事もそれだけ頑張れば風にならねえんだぞ? 沙和。

「ふむ・・・完全に玩具やな。

でも、隊長のこういう誰でも遊べるものの案、ウチは好きやで?」

沙和と同じように手渡した書簡を見て、次々と何かを書きこんでいく真桜もどうやら乗ってくれるらしい。

「だろう？ どつちも誰でも遊べる・使えることを重視して製作に移ってもらいたい。」

その期間、俺が肩代わりできる仕事を行うように手配してあるし、今回は黒陽を通していくらでも俺を頼ってくれ。

それから実用化の見通しが立ってからの話なんだけど、商人達にはもう案ということで話は通してあるから、俺の名前で必要な物を買うように」

それに浮き輪は実用化出来れば、水害の時の救助道具にも出来る。水着はあくまで行楽用だが、多くなつたとはいえまだまだ娯楽の少ないこの世界の格好の商売になることは明らかだ。

「んで、その書簡にぎっくりとしたところは書いてあるから、細かい意匠やらなんやらは全て二人に任せる」

「よっしゃ！ 任せとき！！」  
「了解なの！」

藍ちやんと一緒にいろいろ作るから、楽しみにしておいてほしいの！！」

突然の申し出にもかかわらず、真桜は胸を叩き、沙和は快く頷いてくれた。

「んじや、俺はそれまでに何とか休みをもぎ取ってくるから、楽しみにしてくれ！」

「あ？ 隊長、それどういう意・・・」  
「俺はこれから行くところとやることがあるから！」

意外と鋭い真桜に指摘される前に俺はその場を後にし、ある場所目掛けて駆けて行った。

その日以降、俺はそちらの真桜達に準備を任せて、魏の将全員が同時に休暇を取るなどという、本来あってはならないことを実行に移すために仕事の多くを前倒しにし、どうしても出てしまいう日常業務の一部を信頼できる数名の部下が出来るように簡略化する作業へと追われた。

当然簡単な仕事ではないし、樹枝と樟夏にも事情を話し、一部だけ

協力してもらった。

が、あくまでこれは俺の私事であり、欲望であるため、二人には最低限の事しか頼まないと決めていた。真桜達に白陽ではなく黒陽を通すように頼んだのも、こんなことを俺がしていると云ったら白陽が止めることがわかりきっていたからだ。

「さあ、頑張るぞ」

黒陽に無理を言って白陽を遠ざけてもらっている以上、これは絶対に成功させなければならぬ。

全員での休暇を、何よりも —— みんなの水着姿を見るために

！

そして俺は、やり遂げた。

最終的には黒陽だけではなく、藍陽の力を借りて化粧で目の下の隈を誤魔化し、樟夏や樹枝が書簡仕事をしていることによつて俺の負担がいつも通りかのように隠蔽作業も無事行えた。

失敗したのは華琳と風の目だけは誤魔化すことが出来ず、事情を話すことになつてしまったが何とか説得し、書簡仕事の一部を任せると交換条件のもとで皆に黙つていてもらうように交渉も出来た。

「俺は、やり遂げた・・・！」

「兄者、嬉しくて拳を握るのは結構ですが、あれほどの仕事を後の割には異様に気力に満ちていらつしやいますね」

「みんなの水着が見れるからなー」

流石に目元の隈が酷いこともあり、日除けを理由に目元を隠すような仮面をつけてはいるが、疲れを押しつけるほどの期待感が俺を持たせていると言つても過言ではない。

「兄上、笑顔が鬱陶しいです。」

まあ、珍しいことに僕の分も男物を用意されましたし、それだけで十分なんですけどね・・・」

「・・・流石に水着までは嫌だと思つて、俺が別に発注しといたんだよ」「本気でありがとうございます・・・！ 兄上」

男三人でそんなやり取りをしながらも簡易天幕の準備をし、遊び場



とする予定の川の上流に網にいた西瓜の準備もしておく。

あとは食事だが、それは昼頃になってから釣りでもすればいいだろう。干し肉とかも多少持ってきたし、大丈夫だろう。

「あとは・・・ 枯れ木でも拾って、火の用意でもしておくか」  
「そうですね。」

川遊びは体が冷えますし、私が行ってきます」

「ああ、たの・・・」

樟夏！ 駄目だそっちは・・・!!」

そう言ってくれる樟夏の方へと振り返れば、樟夏の進行方向にあるものに気づき、俺は止めようと手を伸ばす。

「はいいいいいいー!?」

だが無情にも、注意の言葉も、伸ばした手も届かずに、樟夏の姿はその場から消え、小枝などが折れる音と底に落ちた衝撃音が響いた。

「樟夏ー!?」

「樹枝、足元に注意しながら進め！」

「じゃないと黒陽達が仕掛けた罠にかかるぞ！」

駆け寄ろうとする樹枝が樟夏の二の舞になる前に注意を呼びかければ、草をかき分ける音がわずかにゆっくりになりつつも、怒鳴り返される。

「何で罠仕掛けてんですか?!

何の用心ですか! あの腹黒隠密!

というより複数形って、姉妹でやりやがったんですかあの隠密姉妹!!」

「もう少し離れてるけど、そっちでみんなが着替えてるんだよ。」

んで、黒陽とか桂花とか稟が俺より張り切って覗き防止として罠を張ってた」

もつとも、その罠を張ることを許可したのは俺だが。

「見てたんなら止めてくださいよ! 兄上!!」

「義兄弟だろうが、実の弟であろうが、甥っ子だろうが、俺以外の男がみんなの裸を見るなんて許すわけないだろう?」

「涼しい笑顔で言ってますけど、身内に欲情とかありえませんかから!

つーか、あんな怪物揃いの人達を愛するなんて、この大陸じゃ冗上ぐらいしかいませんから！」

いろいろと言いたいことはあるが、俺はとりあえず樟夏救援のために樹枝に縄を投げておき、みんなが来るのを待った。

「待たせたわね、冬雲」

俺はその言葉に平静を装いながら、ゆっくりと振り返った。

まず目に入ったのは健康的な肌、そして胸元を覆うのは飾り気のない白い水着。

天の国ではビキニと言われる水着だが、露出の多い水着で強調されるのは必ずしも胸だけではない。肌の色は勿論、足や腕、体全体を魅せる素晴らしいものがビキニなのである。

「どうかしらっ？」

俺が何も言わずに見惚れていることをわかつているくせに、普段は巻いている髪を降ろした華琳が髪をかきあげる。

「ああ、流石華琳だ。

よく似合ってる」

何よりも金髪に青い瞳に水着の白がよく映えて、何とも言えない鮮やかな色合いを生み出していた。

「それは私だけじゃなく、あの子達にも言っておあげなさい。

何せ、私に気を使ってそこで順番待ちをしているのだから」

「みんな、華琳が好きなんだよ。

でも、まあ……」

草むらからこちらを覗いてくるみんなへと手招きをしつつ、俺は隣に来た華琳をそつと抱き寄せる。

「俺が一番華琳のことが好きだし、愛しているけどな」

「当然でしょう。」

あなたは、目元のそれがなければ満点だったのだけれどね」

「それを言わないでくれよ……」

やっぱり手厳しい華琳が俺の腕からするりと抜け、一人で先に川へと歩いていってしまう。

「兄ちゃん！」

「兄様」

俺が華琳へと視線を向けていれば、座っていた俺の首元へと季衣が抱き着き、甘えあぐねるように流琉が俺の前で止まる。

そんな二人の姿は胸から腹もすっぽりと隠すスクール水着であり、色は王道の紺一色のものと、縁を白で飾ったものを着ている。

沙和、お前の遊び心なのか、職人の遊び心なのか非常に気になるところだけどグツジョブ！

「二人もよく似合ってるぞ。」

川に入る前は、軽く準備運動することも忘れないようにな？」

まあ、この二人の場合はそんな心配しなくても大丈夫だろうが、念のためだ。

「大丈夫だよー、川遊びって僕ら得意中の得意だから。」

ね？ 流琉」

「うん。季衣は魚を取るの得意だもんね。」

その兄様、ありがとうございます。

だけど、無理はしないでくださいね？」

流琉の言葉に他の皆に気づかれていたことがわかり、ちよつと冷や汗が流れる。

「無理なんてしてないぞ？」

俺が、自分の見たいものを見るために躍起になっただけなんだからな。

みんなの水着姿も見れるし、楽しそうな姿も見れる。俺には得しかないな！

さつ、二人も真桜が用意してくれたこの水鉄砲を早速試してきてくれよ」

なるべく明るく元気に言いつつ、二人には竹で作られた簡単な水鉄砲を手渡し、あと綱も渡しておく。季衣にとっては漁をすることも遊びの括りだろうし、魚介系はすぐに食べられるから問題ないだろ。

「はいーい」

二人の元気な返事に満足げに頷いて、各々川へと入って遊んでいるみんなへと視線を向ける。

華琳とお揃いの色違いのビキニを着る春蘭と秋蘭。

色だけをお揃いにしてスクール水着姿の桂花。

胸元全てを覆うようになってるセパレートを着た風と稟。

サラシに褌という大胆な姿をした霞は次々とみんなへと抱きつきに行き、今はその手に下にロングスカートを履くパレオを纏った風が収まっていた。

雛里は太腿付近がスカートのように作られた、天の国で言う所の旧型スクール水着を纏って川べりで静かに涼を楽しんでいる。

その近くで泳ぎ続けているのは・・・なんとマイクロビキニを来た斗詩だった。

・・・いや、待とうか。

スクール水着とパレオ、ビキニは確かに書いたけど、マイクロビキニは俺も書かなかったはずんだけど沙和ああ?!

お前はどれだけ時代を先取りする気なんだよ?! お前のお洒落への情熱が怖い!

真桜は俺が依然教えた背泳ぎ要領で浮かび、流されないようにたまた水中を蹴ってはぼんやりとしている。

最後に沙和はそんな全員を眺めて、満足そうに頷きながら、浮き輪で浮かぶかと浮かんでいた。

流星は我らが魏国、統一感もまとまりもあつたものではない。

自由でありながらも、それぞれがお互いの邪魔にならない程度の適度な距離を取れているところが凄い。

でも離れすぎてはいないから、誰かに何かがあつた時はすぐに飛びだしていけるし。

「冬雲様、隣よろしいでしょうか?」

「ああ・・・って、どうして上着を着てるんだ?」

声に振り向けば、そこには居たのは白陽だけではなく、司馬姉妹全員が勢揃いしていた。おそらく下は水着なんだろうが、それぞれが真名を示す線の入った上着を纏って、簡易天幕の下に腰を下ろしていた。

「私達は日に焼けると赤くなってしまうので、もう少し陽射しが落ち

着いた午後にも川に入ろうと思います」

「あー・・・ 日焼け止めは流石に用意できなかったからなあ・・・」

白陽の説明に納得し、準備不足を痛感する。

用意しようとも思っただが、男にはあまりにも無縁な日焼け止めまで調べてはいなかったことが敗因だった。今度、灰陽にでも協力してもらって樹液とかでもあたってみるか・・・

「うーん・・・ なんかすまん」

「冬雲様が謝ることなんて何にもないですよ。」

こればかりは司馬家の体質みたいなもので、仕方ないですつて」

紅陽の言葉に他も頷いているが、やっぱり次までには何か用意しておかないとなあ。今はまだ無理でも、いつかはみんな海にも行きたいし。

「むしろ、冬雲様こそよろしいんですか?」

「ん? どういう意味だ? 青陽」

「皆さん、冬雲様が来るのを待っているようですが」

微笑みながら青陽が俺を見るが、俺はまた川で遊ぶみんなへと視線を向け直した。

太陽の光でキラキラと水面が輝いていて、そこにみんなが楽しそうにしている。

「見てるだけっていうのも、楽しいぞ。」

それに一人だけじゃないしな」

そう言っただけが司馬姉妹へと視線を向け直せば、八人それぞれの呆気にとられたような視線を貰う。

『はあ・・・』

「何で溜息?」

黒陽と白陽を覗いた六名に溜息を吐かれ、肩をすくめられたり、首を振られたりされるが誰も答えは教えてくれなかった。

「藍ちやーん!」

帽子かぶって、そろそろあれを実行に移したいの!!」

「ああ、もうやるんですか? 沙和ちゃん」

突然沙和がこちらへと手を振りつつ駆けより、藍陽の手を握る。

藍陽も全てをわかつているように天幕の中に置かれた荷物からいくつかのものを引つ張り出していく。

「樹枝ちゃんと樟夏様が穴から出てきたから、今が好機なのー！」

それに凧ちゃんも一直線上にいるから、霞お姉様のお願ひも一緒にやるの!!」

好機つて・・・一体何をやる気だ？

てか凧も？ しかも霞が頼んだって・・・

嫌な予感と同時に、本能が何故か止めることを拒んでいる。何故だ。

「は〜い。」

では沙和ちゃん、行きましよう〜」

手に持っていたいくつかのものを沙和に手渡し、藍陽と沙和は同時に走り出す。

偶然一直線上に並んだ樹枝、樟夏、そして凧の横を通り過ぎ、わずかに立ち上った砂埃が掻き消えた時、そこに現れたのは――

下には短めの下履きを履き、上は華琳達と同じようにビキニを纏わされた樹枝。

さつきまでは膝に届くほどの長さの下履きを履いていた樟夏は、かなり際どい長さの下履きへと変えられていた。

そして凧は・・・霞とお揃いのサラシと禪姿にされていた。

「なっ、なっ?! なっ?!」

「うっほー！」

ええ仕事しとるやん!! 沙和！」

最初のパレオは体の傷を気にした凧が選んだ物だったのだろうが、鍛え上げられて無駄のない体をした凧の姿はとてよく似合っていて、また霞と並ぶと色の対象でより映えて・・・ ああ! とにかく凄いいい!!

羞恥で顔を真っ赤に染め上げる表情がまた最高に可愛くて、目を逸らすことが出来ない。

「さ〜〜〜わ〜〜〜!!」

ら〜ん〜んよ〜ん〜んお〜!!」

怒りに震えて、危ない気を放ちだす凧に対し、沙和と藍陽は手を取り合って目と目で合図をしあっていた。

「こういう時は〜」

「振り返るんじゃないで、前へ逃げるものなの！」

さあ、凧ちゃん！ 次はどんな水着を着たい？」

そうやって沙和と藍陽が取りだし合ったのはフリル付きの可愛らしい水着と、今まさに斗詩が着ているマイクロビキニ。

さらに怒る要素増やしてどうするんだ?! 沙和。

「隊長も見たいでしょ?」

「当たり前だろ! あっ……」

おもわず漏れた本音に、沙和もしてやったりと笑っている。

おまつ…… 追いかける対象増やすのが狙いか!?

「た、隊長まで……?!」

でも、隊長が望むなら……」

赤くなりつつもそう言ってくれる凧が、もう犯罪じゃないかって可愛い。

どうしよう俺、幸せすぎて死にそう……

「正気に戻ってください。凧さん！」

ただ辱められてるだけですからね?!」

「っ！」

沙和と藍陽、そして隊長と霞様、覚悟してください!!」

恥ずかしさで蹲る樟夏とは違い、女装になれている樹枝は立ち直るのが異様に早かった。

「愛の逃避行や〜!」

「ふざけてないで逃げるぞ! 霞!」

「ふふふ〜、返り討ちにしましょうか♪」

「それ、いいね! 藍ちゃん」

そうして俺達は川を舞台に追いかけてっこを繰り広げることとなり、何故か将全員が参戦の鬼ごっことなるのを俺達はまだ知らない。

## 土用丑の日

『土用丑の日』

『暑い時期を栄養価の高い鰻で乗り越える』という習慣の歴史は古く飛鳥・奈良時代には既に存在していたが、これらが人々に広く知れ渡ったのは案外最近で、江戸時代からのものである。

知れ渡った説は多くあるが、中でも有名なものは説としては夏場に商売のうまくいかない鰻屋が平賀源内に相談し、『丑の日』と書いて張つたところ商売が繁盛した。そして、それを多くの鰻屋が真似たというものだった。

本来は『丑の日に「う」のつくものを食べると夏負けしない』ということもあり、牛や兎、瓜、梅干し、うどん、馬などを食べる習慣もあったらしいのだが、そちらは廃れ、鰻を食べるという習慣のみが残ったのが実情だった。

また蛇足となるが、栄養価としては鰻を食べることで夏バテや食欲減退に効果はみられるのは事実なのだが、鰻の本来の旬は冬で脂のノリなどを考えるといくらか味が落ちているというのも有名である。

「兄様ー！ 鰻を言われた通り、捌き終わりましたよー」

「おー、じゃあ俺はそっち行くわ。」

真桜、炭火の方は任せてもいいか？」

「まっかしときー！ 隊長ー！」

流琉の声に振り返り、俺は鰻の素焼きを真桜に任せて、厨房へと戻る。

厨房へと入れば、まだまだ大量にある樽に入れられた鰻がうねうねと気持ち悪いほど動き回り、俺は素焼きの終わったものを持って流琉の元へ向かった。

「こつちが捌き終わって、竹串を指したものです。」

それでそつちを蒸せばいいんですよね？」

「そうそう。」

そうすることで鰻の余分な脂が落ちて、美味しくなるらしいんだ



よ」

綺麗に開かれた鰻に次々と竹串が打たれた鰻を受け取り、素焼きの終わった方を用意されていた蒸籠へと入れていく。

蒲焼きは順調だなど一安心し、雛里と秋蘭の方から優しい甘い香りが流れてきて、俺はその作業を覗きこんだ。

「そっちはどうだ？ 二人とも」

「順調でしゅー！」

「しかし、この赤小豆餡は手間がかかるな。

茹でた赤小豆を何度も水で漉し、火にかける。簡単なようだが根気がいる」

量が必要なので何度も小豆を茹で、赤小豆を漉し、放置し、上澄みを捨てるという工程ごとでわけられているのを雛里が、最終段階である火にかける作業を秋蘭が行っていた。

見事な連携だと思いつつ、その作業が順調かどうかを確認して、俺も頷いた。

「砂糖を結構使うから贅沢品だけだな。

それで餅の方は？」

「姉者と季衣が表で用意している。

漉し餡だけでは足りそうと判断して、急遽お前が言っていた枝豆を潰し甘みを加えた餡を司馬の非番だった紅陽と青陽作っている。

厨房もここだけでは手狭でな、司馬家の方で作っているとのことだ」

ああ、だから炭火を用意してた時、激しい音が向こうから聞こえてたのか・・・

しかし、真桜もあの二人が割らない臼と杵をよく用意できたな。

「わかった。

じゃあ、俺は蒸し終わった鰻を焼き始めるから、こっちは任せた」  
第一陣が蒸し上がったらしく、流琉から鰻を受けとってから入口へと向かう。

「任せたぞ。

甘いタレのついた鰻が本当にうまいかどうかを、私達に認めさせて

みせろ」

「まだ疑ってるのかよ?!」

秋蘭の言葉に俺は驚愕し、おもわず怒鳴るように声が大きくなってしまふ。

そりや、こつちじや辛いタレは多いし、甘いタレなんてつけないけど、大抵のことを受け入れてくれる秋蘭がそういうのは想定外だった。

「当然だろう?」

「当然なのかよ!」

・・・って、雛里と流琉も!」

秋蘭のみならず、雛里と流琉も揃って頷くのを見て、俺はちよつと衝撃を受けてしまふ。

「甘味ならわかるんでしゅけど・・・ それをおかずにするのはちよつと・・・」

「甘辛いじゃなくて、あのタレは甘じよっぱいというか・・・ 甘すぎるような気がして・・・」

・・・うん、わかってた。

文化の全部が受け入れられるなんてありえないし、食べてない状態で受け入れてくれなんて言えない。

なら、食べてもらえばいい!

蒲焼きの焼ける匂いを、一度蒸すことでふんわりとした鰻がさらに焼くことによつてサクツとした食感を味わえ、それがご飯と組み合わせさせた時の言葉に出来ない旨さを!

「意地でもみんなにうまいって言わせてみせるからな!」

少しばかり意地になつて蒸された鰻を手にしてから、俺は真桜が待つ七輪の前へと向かった。

「おー、隊長。

それが蒸した鰻かいな?」

「これを今からタレをつけて焼くから、素焼きの方は任せた。

正直、うまく焼ける自信はないけどな」

『串打ち三年、割き八年、焼き一生』なんて言われるほど鰻を焼くのは難しく、相応の技量と経験が必要になる。

まあ、熟練の職人を目指していた訳でもないの、今回は焦げなければ良しとしよう。

タレは俺が作ったし、鰻の蒲焼きの味自体はわかってもらえるだろうし。

「隊長はホンマ、お祭り騒ぎつちゆうか・・・楽しいことが好きやなあ。」

月にいっぺんはなんかしらして、企画書やら準備やらであつちこつち走り回つとる姿は好きやけど・・・ウチらは隊長が倒れんか心配しとるんやで？」

作業で手を動かしつつ、真桜が向けてくる言葉は優しく、俺は嬉しくなって笑う。

「俺は別に、お祭り騒ぎが好きだつてわけじゃないさ」「は？」

真桜の理解できないという声に俺は腕を動かしつつ、流れてくる汗を防ぐために額に布をまく。

「俺にとつて重要なのは、みんなと一緒に楽しんで、笑ってくれることなんだよ。」

そのためにすることなんて俺にとつて苦労じゃないんだから、気にすんな」

左手で頭を撫でようとも思ったが、汗まみれだということに気づいて途中で手を止めると、真桜が自分から頭を摺り寄せてきた。

「真桜、汗つくぞ」  
注意すると真桜は呆れきった顔で見られ、俺はやや困惑してしま

う。  
「阿呆かいな、隊長。」

訓練とか散々つけられてきたウチらに、その手の気遣いとか今更やん」

「まあ、そうだな」

付き合いの長さで言えば一番は華琳と春蘭、秋蘭の三人だが、距離

感として一番近いのはきつと三人だし、今もそこに人は増えてはいるがあまり変わってはいない。

改めてそう感じて、真桜の頭をワシヤワシヤと撫で、俺達は笑い合った。

「兄様、そろそろお昼なので皆さんやってきます！」

そちらはどうですか？」

「そろそろ焼き上がるよ」

「じゃあ、一っだけそのままくださいますか？」

私達が食べてみるので、皆さんにその後提供します」

「頼む。」

麦飯にもこのタレをかけて、そのまま一緒に食べてくれ」

おかずとご飯を一緒に食べるといふ文化が大陸にはないことは知っているし、井の文化が日本独自の物だとわかっていても、おかずとご飯の組み合わせは最強だということをみんなにもわかってもらいたい。

ご飯とタレ、そして鰻が口の中に入った時のあの幸福感は食べなきやわからない。

「隊長、言葉になっとるでー。」

前からそうやったけど、隊長がおかずと一緒にご飯食うんはそういう理由があつたんかいな」

「つーか、俺の国自体に米がいっぱいあつたんだよ。」

国内的には狭いけど、水に溢れてて、水車とかも余った水の力を利用して作られたものだし」

焼けた鰻を流琉に渡せば、小さめのお椀にご飯を盛ったものを持った秋蘭と雛里が俺達の近くへ寄ってくる。

「火の近くだから暑いだろう？」

そっちの木陰で食べたらどうだ？」

俺と真桜が汗だくになりながら焼きの作業を続けている上に、空は見事に晴れ渡り、夏らしい陽射しが俺達を照らしていた。

わかりやすく言うと、超暑いです。

火の前に立つのが慣れている真桜に付き合っただけで貰っているが、熱中

症とかのことを考えて俺一人でやるつもりだった。

作る過程を説明したら、速攻で却下されたけどな！

「ここがいい・・・いや、違うな」

秋蘭が微笑んで、俺の肩をわずかに撫でていく。

「私達はここがいいんでしゅー！」

拳を握って雛里にしては大きな声で宣言されて、俺は少しばかり驚かされてしまう。

「兄様の傍で、笑っていたいんです」

とどめと言わんばかりに向けられた流琉の満面の笑みに胸がいつぱいになり、なんかもうこれだけで暑い中で鰻を焼いたことが報われた気がした。

ああくっそ・・・俺、最高に幸せもんだ・・・

「隊長、手がお留守になるでー」

鰻が焦げるでー。

火でも、陽射しでもなく、別の熱々にも焼かれとるのかもしれないけど

「おっと！ 危なっ!!」

嬉しそうに浸りかけて手元が留守になってしまい真桜の注意で慌ててひっくり返し、他の鰻も様子を見つつひっくり返す。勿論、タレをつけることも忘れない。

「焼茹いているのはお前も、だろう？」

「秋蘭様はうまいこと言うわー」

でも、それはありまへんわ。

やってウチらは三人で同じ人を好きになった時から、誰かに妬くとかそういう気持ちより、応援したい気持ちのが強いんですよ。

まっ、隊長が結局みんなのもんやってわかってるから言えることですけど」

この手の話題をされてる時、俺はどうすればいいかわからない上に無性にその場を去りたくなるんだけど、鰻が俺をこの場から逃がしてくれない。

ほらっ、雛里と流琉が顔を超真っ赤にしながらこっち見てるから！

俺も多分、熱とか羞恥とかで顔が真っ赤だから！

「とーーーーーうーーーーん!!」

「にーーーーーちゃーーーーん!!」

救いの神(?)がこっちに向かつて大声で駆けてきて、その手にあるのは白ごと抱えられた餅。

もう、白を軽々持ち運ぶなどかは言わない。でも・・・

「姉者季衣! 食べ物をもつて、走つちや駄目つて言つたでしよう!!」

俺が言う前に二人の保護者から注意が飛びました。

「突然、とまらないでその・・・ ゆっくり止まってください。じやないと餅が・・・」

「餅が?」

雛里の注意は既に遅く、餅は綺麗な弧を描いて塀の向こうへ飛んでいく。

「とんどるなあ」

「だなあ」

俺と真桜は綺麗に飛んでいく餅を見送り、聞き慣れた悲鳴が叫んだのが聞こえたのであと四半刻も経たないうちに声の主たちが駆けつけてくるだろう。

二人の保護者も説教する気満々の笑みだし、こりや昼は俺と真桜、それと雛里で回すしかないかもな。

「二人とも、お説教する前に感想聞かせてくれよー?」

「うまかった。」

が、もう少し辛みをつけてもいい気がするな」

「同じように蒸して、今度は揚げてから味付けしてみても面白いかもしれません。」

でも、美味しかったですよ。兄様」

説教状態になりかけているからか、感想が簡潔であり、なおかつ自分がどうするかというのを付け加えるあたりが二人の料理人の部分に触れた気がする。

「みんなに出しても?」

「それはまったく問題ないな」

「よっしゃー！」

二人から合格点を貰えておもわず俺は拳を握って喜びを表し、火の前に苦労をわかち合ってくれる真桜と手を叩きあう。

「よし、じゃあ俺はじゃんじゃん焼きまくるから、雛里が盛り付けてもらえるか?」

「はいー！」

「そろそろ他の餡が完成して紅陽達も来るだろうから、到着したら手伝ってもらってくれ」

返事もせずに厨房へと向かう雛里を見送り、俺は目の前の焼きに集中する。

「さあ、真桜ー！」

やるぞ!!」

「まっかせときー！」

焼いて焼いて焼きまくるでーー!!」

## 二周年

「皆、揃ったわね」

霸王たる彼女は今、街の中央である広場に用意された櫓からその場に揃った多くの者達を見て満足げに頷いていた。

「華琳様、いつでも開始できます。」

あとは冬雲達がこちらに運ばれてくるのを待つのみです」

さりげなく想い人を物扱いする荀彧へと溜息を吐くが、曹操は視線のみで彼女を労い、もうしばらくすれば影たる司馬朗が恋人と己の実弟、そして己の軍師の甥を運んでくることだろう。

「これを見たら、冬雲はなんて言うのかしら?」

霸王たる彼女らしくない、年相応の悪戯気な笑顔を零して、ただこの催しが始まる瞬間を待つのみだった。

見慣れた隠密装束の彼女達によって縄で縛られた状態でこちらへと運ばれてきますのは、今作の主人公である曹子孝。

二回目の人生を歩む北郷一刀こと赤の御使いであり、同じ時を繰り返す少女たちと共に日々いちやつきまくっている色情狂。

そればかりか二度目の人生を歩む中で他の少女達もおとして回り、そのハーレムの拡大は広がるばかり・・・たとえ両想い且つ合意の上でもハーレムが多すぎる! いい加減にしろ! この種馬野郎!! 「ちよっ?!」

「なんだよ、この紹介文!」

何やら叫んでいますますがそれはさておき、引き続き抱えられている者の紹介へと移ります。

その後ろから紅と橙の仮面に運ばれてくるは、霸王・曹操の実弟である曹子廉。

優秀な姉と比べられ、心的外傷並の自己評価の低さという欠点に目をつぶれば、容姿端麗、文武両道、家柄良好という完璧超人。

しかも最近、可愛い婚約者まで出来たことにより、暇さえあれば可愛い彼女との将来計画を妄想しているこの男。



あえて言おう。リア充爆発しろ！ 否、幸せにしなければ爆発させる!!

「そ、そんなことはしていません！」

「というか、爆発させるって何ですか?!」

言葉通り以外の意味があるわけがないというのに問い返してくる彼も放っておき、その次に見慣れた緑の仮面に運ばれてきますはこの男(?)。

さながら乙女のごとく線の細い体を持ち、化粧を施せば誰もが振り返るほどの絶世の美少女へと変わり、化粧を必要程度に落としても一般女性の会話へと違和感なく紛れ込めてしまう罪深さ。

好感度の高い彼女達にはもはや不可能となったドタバタ劇を行うために生まれ、こいつ一人がいるだけで笑いも、シリアスも何でもござれという非常に便利な存在。

最近の彼の成長は作者もあの海のり〇クの眼を持つてしても見抜くことは出来なかったほどであり、彼の人生は今後も面白おかしくなること間違いなし！

そんな彼の名は荀！ 公達!!

「ちよつと待て、ゴラァ！」

聞き捨てならないことだらけの上に、この紹介おかしいだろうが!!

「つーか作者！ 表出る!!」

生憎、私は作者ではございません。

記念すべき二周年番外によって生まれた意志持つ地の文、無礼<sup>ナレ</sup>と申します。

「ナレーというより、無礼<sup>ぶれい</sup>だろうが！」

その通り、私という存在はこの無礼講である今回の催しのために生まれ、今話のみのこれっきりの存在なのです。

何せ二周年記念。

いろいろあり、複雑な思いを抱き、七転八倒しながらもここに居る。

作者にとっても、読者にとっても感慨深い二周年なのですから。

『起き上がれよ?!』

珍しい三人同時のツツコミ、ありがとうございます。

「もういいかしら?」

おっと、霸王様がこちらを鋭い眼光で睨んできてらっしやるので私は語り手ナレーターの仕事を行うとしましょうか。

運ばれてきた御三方もそれぞれの置かれ方をし、そのまま座ったり、地面へと転がったり、一度跳ね上がったりなど個性が非常に豊かです。

「何でこんなことに・・・」

「作者め・・・!」

「華琳、状況がよくわからないんだけど、今回は一体なんなんだ?」

この人だかりもだけど、さっきの無礼ナレさんとか、いつも以上にいろいろとおかしくないか?」

二つの悪態が零れる中、事態の整理へと目を向ける彼の冷静さに霸王は微笑み、虚空を見ながら肩をすくめる。

私が呆れられたような気もしますが、気にしません。ええ、気にしませんとも。

「今回の催しは非常に珍しいものだからかしら?」

あの無礼ナレとか言う存在を見る限り・・・ 尽きが無い作者も羽目を外しているようね」

記念すべき二周年番外だからです。

大事なことから、何度でも言いましよう。記念すべき二周年番外だからです!

さあ、皆さんもご一緒に。二周年k・・・

「くどいのよ!!」

苟彘によって虚空へと放たれた鞭も実体のない私にとって無意味ですが、そろそろやめた方が無難ですね。

「今回の催しはある人物から匿名で送られてきた提案書を元に作られ、全員一致で可決されたものよ」

縄で縛られたままの三人が視線で『俺達は参加してないんですけど』という目で睨んだり、苦笑したりしていますが、そんなものは歯牙にもかけずに説明を続けられていきます。

「それと僕らが縛られている関係はあるのでしょうか?」

問いかげながらも荀攸は縄抜けをしようと足掻いていますが、如何に縛られるなど理不尽なことに慣れている彼であつても、隠密である司馬姉妹がしつかり結んだ縄はほどけません。二周年番外だから。「大有りね。」

あなた達は今回の催しの参加者でもあり、景品でもあるのだもの」「兄者はともかく、私達が景品？」

どういふことですか、姉者」

「いや、俺はともかくっていうのもおかしいだろ」

端的に告げられる曹操の言葉に曹洪は首を傾げ、曹仁はツツコミを入れますが、それを気にすることなく彼女は櫓の元に集まる人々を指差して示す。

そこに居る者は何故か全員顔の全面を隠す仮面をかぶり、当然三人はさらに困惑した表情を浮かべてしまう。

「なんなんだよ、これ。」

っていふか、どうしてあんな仮面被ってるんだ？」

まあ、集団全員が仮面被ってるのって普通に怖いし、警戒しますよね。

「といふか、嫉妬ってでかでかを書いてある仮面が特に怖いんですが・・・」

そう言つて曹洪の視線の先には、紫の地に白抜きで描かれた嫉妬の仮面。

額のあたりに小さな角があるあたりが作り手の遊び心が窺えますが、書いてあるのが『嫉妬』の二字でなければ子どもが被つていそうでした。

「あの薄気味悪い心臓形の仮面はなんなんですか!？」

しかも女性のみならず、男もつけてるようなんですけど?！」

荀攸の視線の先には、桃色の地に黒字で『愛』と描かれたデートマスク逢引き仮面。

そして、何故か後ろでは御三方を連れてきた司馬姉妹が黄色の地に『得』という赤字で描かれた獲得仮面を装備しています。

「丁寧な説明、ご苦労様」

いえいえ、これが仕事ですの。

では、僭越ながら私がこのまま説明してしまっても？

「ええ、かまわないわ」

霸王様によつて許可が下りましたので、改めましてこの無礼ナレが今回の催しの規則説明をさせていただきたいと思ひます。

この催しは仮面をつけている会場の皆さんが鬼となり、こちらの御三方が追われるという多対三による鬼ごつこととなります。

鬼側の勝利条件は、彼らを捕まえること。

追われる側である御三方の勝利条件は、日没まで無事に逃げ切ること。

「じゃあ、あの仮面は一体何なんだ？」

いい質問です、曹仁殿。

会場の皆さんには既に理解しているでしょうが、改めてそちらも説明しましょう。

男性の皆様が多くかぶられているあちらの嫉妬マスク仮面。

そちらを装備している方に捕まった場合、リア充の極みである皆様は文字通り嫉妬による拳を受けることとなります。

「はあ?!」

「え・・・」

困惑するのはわかりますが、私は途中で言った筈です。

今日、この日限定の無礼講。

慕うという想いに偽りはなくとも、嫉妬という感情を斬り捨てていくわけではないのです。

リア充への苛立ちを、立場が上ということを気にせずにつけるられるのは今日この日だけ。

安心してください。命に別状はありません。二周年番外ですから。

「えつと、じゃあ・・・ 向こうの桃色のはなんなんだ？」

そこで怒らずに他を聞くとは、余裕がありますね。

「まあ・・・ 気持ちの捌け口も必要だしなあ・・・」

「兄上、あなたのその余裕が少し憎いです・・・」

「右に同じく」

当然、あちらも容赦なく襲いかかってくるので、対処にも容赦など不要。

原則として武器は使用不可となりますが、流血しない程度なら落とし穴などの罠も可とします。

「匿名の提案者を探し当ててやる・・・！」

恨みがましい目で人だかりを睨んでいる方もいますが、引き続き説明を行います。

あちらの『愛』が描かれている仮面は逢引き仮面であり、捕まえた方と一日逢引きする権利を得ることが出来ます。

が、別段男女でわけているわけでもなく、希望する仮面を配布している・・・

「だから、男もつけてるのかよ!!」

おっしやる通り。

むしろこの大陸では恐ろしい女性より、同性を好む男性が多いのが実情です。おかしな点はないかと思いますが？

「お前の仕業かー！ー!!」

いいえ、熱烈な希望者の所為です。

誰とは言いませんが、大輪の薔薇のような真つ赤で情熱的な心を持った筋骨隆々な彼と彼に率いられた有志に頭を下げられてしまつたら、断ることなど不可能です。

「それでは春蘭達もあの仮面をかぶっているんですか？」

そちらの説明は、皆様の後ろにいる司馬姉妹へと視線を移してください。

将の方々が被っているこちらは獲得仮面と呼ばれ、捕まえた場合は逢引き仮面同様に逢引きなどの権利を得るというものです。

以上が、今回の催しである『あなたと私のドキドキ★鬼ごっこ』の説明となりますが、ご不明な点がありましたら、どうぞご気軽に私へとご質問くださいませ。

「ご苦労だったわね」

いえいえ、曹操様を除いた全員が参加者となる以上、私は役目を果たさせていただきます。

また、私はこの催しを公平に審判する立場でもありますので、全員に目を行き渡らせていることもお忘れなく。

「ええ、では・・・始めましょうか」

曹操様の言葉によって今、戦いの火蓋はきられ、それと同時に縛られていた縄から三名が解放される。

「さあ！ 年に一度の無礼講!!」

思いつきり楽しみなさい!!」

「見つけたか!」

「いや、こつちには居なかったぞ!」

「チツ! 流石曹仁様達だ・・・」

だが、今日だけは一撃入れるぞ。羨ましいぐらいいちやつきまくってる隊長に、今日という日を活かさないでいつ殴る?!

「樹枝ちゃんーん!」

俺が君を守ってみせる!!」

「副隊長! 邪魔するなあ!!」

「黙れ!」

お前らを倒し、俺が樹枝ちゃんを守る!」

「茶屋の先に行ったらしいわ。向かいますよう!」

「ええ!」

見つけたらわかってるでしょうね?」

「勿論。協力しても早い者勝ちの恨みっこなし、でしょ?」

たとえ親友のあなたでも、負けないんだから」

「上等よ!」

あの方達と逢引きできるなんて夢のようなこと、生涯に一度だけでもいい記念になるもの!」

「公孫贄様と婚約しやがった、曹洪様はどこだー!」

「俺だって、俺だって好きだったのに!!」

街を歩き交う言葉の数々、いやはや怖いですね。

「あんたは呑気で羨ましいですねえ!」

ええ、私は追いかけられる立場ではありませんので。

「表情なんてないというのに、余裕ぶっているあなたが見えるようですよね」

余裕ですから。

「っ！」

ほらほら、私へと殺意の視線を向けている暇があるのなら走った方がいいですよ？

「女装が似合うなんて、羨ましいんじゃないじゃー！」

女装希望の方とは・・・荀攸殿、あなたのお客さんのようですね。

「似合っても嬉しくねえよ！」

っ！か！ ならなんで、逢引きデートマスク仮面なんだよ?!」

化粧の秘訣でも聞きたいんでしょうか？

「あんた、もう黙れ！」

「樹枝！ 樟夏！ 作戦1を決行する!!」

樹枝は左へ、俺達はその先に回って援護に入る!!」

おやおや、短時間で作戦を練るとは流石魏の将ですね。

「気絶はいいんですけどよ？ 無礼ナレさん！」

はい、勿論。

「樟夏！」

曹仁殿が呼びかければ、曹洪殿が曹仁殿の手に飛び乗って屋根へと飛び上がり、両手には砂を掴んでいますね。

屋根へと上った曹洪殿へと手を借りて、曹仁殿も登れば、屋根の上の自由自在に走って、先程分かれた荀攸殿の元へと向かっていく。

鮮やかですねえ。ですが、屋根の上というのは目立つもの。

「いたぞー！ 屋根の上だ!!」

「ちいっ！」

樟夏、とりあえず樹枝を助ける!!」

必要ですかね？

ちよつと憂き晴らしのごとく、迫りくる逢引きハートマスク仮面の男どもをちぎっては投げしていますか・・・

「えっ？」

そう言つて曹仁殿が視線を向けた先には、額あたりに怒りの印をつけた荀攸殿が相手を体術のみで地面へと倒している姿。

「……兄者、樹枝を囿にして逃げませんか？」

「……そんなこと出来るわけないだろ！」

三人で生き延びるぞー！」

「今、迷いましたね？ 兄者」

嬉々として相手を千切つては投げを繰り返すあの姿を見れば、誰であつても迷うかと思いません。

そんな激戦を何度も繰り返し、時には互いを囿にしながら、追う側と追われる側の激しい攻防は続いていきます。

休憩など挟まれることもなく、多くの方が気絶や罨などにはまり、救護班へと回収されながらも制限時間の半分が過ぎていきました。

「で、どうして最初の時だけ僕達を逃がす手伝いをしたんです？  
無礼さん」

周囲が囲まれた櫓からの逃走なんて不利すぎて楽しくないので、最初の時点であなた方を逃がすことは指示に含まれていたんですよ。

かといって、司馬姉妹の皆様の今回は参加者なので補助に入れません。

二周年記念番外、今回限りの空間転移です。

「姉者の指示ですか？」

いいえ、作者の指示です。

今回、あの方も嫉妬仮面マスクを被って参加していますが、運動不足がたたつて今頃はその辺で息切れして倒れているんじゃないでしょうか。

「二周年だからつてはつちやけすぎだろ……」

多対三の鬼ごっこつて……」

こんな時もいいでしょう。

それにいい加減義弟であるお二人の視点も多すぎて飽き……ゲ  
フンゲフン

「今、なんて言いかけた?!」

いいえ、何も。

もつとも、私の手助けなどなくても、皆さん勝手に逃げられたので



しようけどね。

制限時間を半分ほど過ぎても、御三方は息切れもしてませんし。

「いや、精神的には結構きついけどな・・・」

しかも、春蘭達は互いの本気で潰し合ってるし・・・」

それは当然でしょう。

お互い厄介になる相手なんて一目瞭然ですから。

それに今回は皆で共有は出来ませんから、本気で奪い合っているのですよ。

逃げている最中、激しい爆発音のような物が数度響いていたでしょう？

「ああ・・・ ってまさか!」

ご明察。そちらの音が将の方々の試合の音となります。

今回は楽進殿有利ではありますが、元々の力がそれぞれ強いので勝敗は予測できませんね。

「本当に良い身分ですねえ!」

審判ですから。

さて引き続き皆さんのご健闘を祈りますが、多対三という圧倒的不利な状況下・・・ 作者の意図がわかりますか？

「いや、どう見ても嫌がらせにしか見えませんが・・・ それに『りあ充』? でしたか?」

兄者はわかりますが、どうして私までそれに該当するのかが・・・」  
何をおっしゃいますやら。

可愛らしい婚約者が出来てからというもの、連合においてあなたが卑下する場面など皆無。挙句、口癖であったあの言葉は荀攸殿と別れて以降一度も口にしていないという不思議事態を招いているのは無自覚のようで。

「なんだと?!」

この裏切り者があ!」

あー、ここらこら。

曹洪殿に掴みかかろうとする、あなたもそうですからね。

「僕にそんな美味しいことなどありませんよ!」

ほー・・・ こちらは無自覚。

だそうです。賈☒さん、どう思われますか？

「はっ？」

賈☒「って・・・ 詠さん?!」

「へー・・・」

そう言いながら荀攸殿が振り向く先に居たのは、何故か仮面を手にした賈☒さんの姿。

眉間に皺が寄り、手が震えているのは何故でしょうか？

「こんな催し参加しないで助けてやろうと思っただけど・・・ やっぱり僕もこいつを一発殴ることにするわ。」

無礼!<sup>ナレ!</sup> 途中参加も可能よね?」

勿論、老若男女問わず、参加意思があり、指定通りの仮面<sup>マスク</sup>を被っているのならば、この催しに参加することは認められます。

「ちよっ?!」

そんな助けを求めるような目で見られても困りますな、なにせ私は公平なる審判なので規定を破らなければ問題はありません。

『頑張って逃げてください』と追われる側に言うように、追う側にも『頑張って捕まえてください』というのが私の在るべき姿なのです。

「覚えてろー!ー!!」

いいえ、忘れます。

恨まれていることなんて、いちいち覚えていたら面倒じゃないですか。

「待ちなさいよ! 樹枝!!」

はい、本日のツンデレも頂きました。

いやはや、鈍感とはなんと罪深い。

「ハハハ・・・ 昔の自分を見ているみたいだよ」

「兄者にそんな頃があつたなんて、想像も出来ませんがね・・・」

さて、余裕ぶってるお二人にも少々私から贈り物でもしましょうか。

「えっ!」

さあ、種も仕掛けもございません。

そうして驚く彼らの足元に、突如穴が出現しました。

「うわっ！」

「ようやく来たわね、冬雲」

「か、華琳?!」

察しの良いあなたなら、私がここに落とす意図はわかりますね？

曹仁殿。

「あ、あのなあ！」

なんてカツコつけてみせますが、そこにいる霸王様に脅されたなんてことはありませんからね！

首にあてられた大鎌が怖かったんじゃないんだからね！

「華琳……」

「あら？ 主催者である私が美味しい所をさらっていくのが、おかしいことかしら？」

それとも…… 不満でも？」

そう言つて曹仁殿の上着から手を入れ、胸に直接触れていく霸王に嬉しそうに頬を染めて、試すように近づけられた顔へと吸い付くように唇は重ねられる。

「あるわけないだろう？」

だって俺の心も体も全部華琳の物であり、魏の物なんだから」

「当たり前でしょう？」

「久しぶりに二人つきりだな」

……これ以上、ここに居るのは野暮というもの。

馬に蹴られて死にたくも、地獄に落ちたくもないので退散するつもりでしょうか。

さて、視点を変えまして、こちらは曹洪殿です。

「あの……これは一体……」

そして、兄者はどこへ……？」

曹仁殿は曹操様の元へ転移させていただきました。

ちなみにその穴はあなたの奥方、公孫賛様による手製の罠でし

て・・・

「ば、白蓮が?!」

というより、参加しているんですか!？」

いえ、最後まで参加を拒まれ、終いには『か、獲得なんてしなくても、樟夏はその・・・私の、婚約者だからな』なんて惚気られましたよ。

ええ、正直やってられません。

「では、何故白蓮の罫が?」

何かしてくださいと言ったら、誰も嵌りそうもないこんな路地裏に落とし穴を作り、救護班の補助へと入ってしまったわけです。

ですが、嵌りましたね。ププ。

「あ、あなたは・・・」

ですが、これだけは面白くありませんし、他のお二人はそれぞれオチがついているので、あなた様にも一つだけオチをつけようかと。

「は?」

次は一体何・・・おう?!」

「え? あれ?」

私はどこ? ここは誰?!」

自分が行方不明になるとは貴重な経験をありがとうございます。

公孫賛様。

「は? 無礼?」

って、樟夏?!」

自分の手の中であたふたする公孫賛殿へと向ける曹洪殿の目は優しく、顔はいつもよりもずっと穏やかになっていきます。

あー・・・つと、ここでもお邪魔になりそうな予感が。

「は? じゃ、邪魔なんてそんなことないぞ?!」

なあ、樟夏?」

「無礼さん、仮面はありますか?」

あー、ハイハイ。獲得仮面ですね、わかっていますよ。この似た者兄弟共が。

「褒め言葉として受け取っておきましょう」

あーあ、結局誰も彼もが美味しい目にあっていますね。やってらないですよ、まったく。

嫉妬に狂った者に追われているにもかかわらず、それぞれの想い人と一緒に幸せのひとときを過ごすなんて、この夏が暑いのはきつと彼らの所為でしょうよ。

私としてはもう少しばかり痛い目にあってほしかったんですが、仕方がないですね。

二年前のこの日に外史の扉が開き、今に辿り着くまでのこの道に込められた願いはあの時から何も変わることはない。

そしてその願いは・・・

彼女達に笑っていてほしい、幸せになってほしいという細やかなものだったんでしょうね。

## 夏祭り

「どや？ 隊長」

「最高の出来だよ、真桜」

人気のない山の奥で続けられてきた作業の成果に俺は満足げに頷き、周囲にいる協力者達を労いつつ、肩を叩く。

「では明日、予定通りに決行してくれ」

「てか、ウチはまだしも隊長はこんなこととして平気なん？」

華琳様にも内緒なんやろ？」

真桜の言葉に俺は肩をすくめて、その反応に周囲の者の空気がわずかに変化する。

「まつ、こんだけのことをするんだ。

万が一のことがあったら、始末書だけじゃすまないだろうな」

でも、それも万が一の時だけ。

そのための協力者も居てくれることだし、あとは俺達がどんな結果を残すかにかかっている。

「でも、真桜なら・・・ 真桜率いる冬桜隊ならやれるさ」

何せ、俺の曖昧な知識でこんなものまで作りあげることが出来た。

ならあとは、その成果を見せるだけ。

「とーぜんやろ。」

ウチらを誰だと思ってるんねん」

俺の言葉に得意げに笑って、自分よりも逞しい男どもを従えた真桜に俺も同じように笑った。

「俺らは冬桜隊だぜ？ 旦那」

「あんな舐めてつと、鑿ノミと鉋カンナで削っちゃうぞ？」

「発案、実行、改善の三つの柱。

折れるもんなら折ってみやがれってんだ」

冬桜隊を支える筆頭職人である三人を見て、俺はその場で身を翻した。

「じゃ、俺は一足先に戻るよ。」

明日の準備もあるし、真桜もばれない内に戻ってくれ」

「はいな。」

明日はウチらが裏方で、主役やかなら

「ああ、頼りにしてる」

胸を張る真桜達をその場に残し、俺は明日行われる行事に胸を躍らせながら城へと戻って行った。

「隊長―」

活気にあふれる街を確認しながら、俺は今晚行われる余興が事細かに書かれた書簡を手に歩いていると凧が声をかけてきた。

「おお、凧。」

出店の設営はどうだ？」

「順調です。」

警邏隊の半分は天和達の舞台設置のために動いていますが、残り半分は設営などの雑事に追われています」

「よし、そっちは予定通りだな。」

沙和と真桜は？」

凧の報告に頷きつつ、他の状況を聞けば、凧はすらすらと答えてくれる。

「沙和は今晚、我々が纏うことになる衣装の件を無事に片づけ、現在は着物を普及するための貸し衣装屋の準備へと移りました。」

同じく真桜は神輿や簡易陣幕の設置に追われ、冬桜隊の指揮を行っていることと思われます」

「了解。」

さあ、準備が終わる昼までが勝負だ！

昼過ぎからは一般客も入ってくるし、子ども達も今日を楽しみにしてる。

それ以降も警邏隊は忙しいだろうが、絶対に成功させるぞ！」

街全体での祭りは、どれだけ管理していても問題が起こってしまう。が、これを成功させることは国の豊かさを周囲に示すことができ、商人達が見逃すわけがない。

楽しむということが第一だが、安全などの面も手を抜かないことで

民からの信頼も違ってくる。

「はい！」

では私も、警邏隊の指揮がありますのでここで!!」

「おう！」

城に集合する時間だけは忘れないでくれよ？」

「はい！」

だけど、豊かさとか云々もどうでもいいぐらい今を楽しむ、この瞬間を幸せだと思う。

祭りは行われる時も楽しむものだけど・・・

「準備段階の活気も含めて、楽しいもんだよな」

街にあふれる熱気・活気、そして高揚感。

この日を楽しみにしたんだという想いが、街全体を飲み込んでいるようだった。

「なーに、呑気なこと言ってんだよ？」 旦那」

少しの重みと共に頭の上から降ってきた言葉に上を見れば、そこには見慣れた三角の形をした宝篋が降り立った。しかし、何度見ても帽子みたいなのが折られたたまれて収まる姿が現実離れしてるな・・・

「おっと・・・ 宝篋。」

風のところに居なくていいのかわ？」

「今日は頭の上に居ても暇でしょうから、見て回ってくるといいですよー」とか言って、暇貰ったんだよ。

だから一緒にしてもいいか？ 旦那」

「かまわないけど、俺と居ても楽しくないぞ？」

今日の俺はほとんど全体的の見回りばかりで、仕事らしいことしないいな」

「そら、この祭りのために一週間ぐらい動きまわったりや、誰だつてその配置にするだろ。」

旦那が提案者とはいえ街の奴らに声かけやら、宣伝やらで頭下げて回るんだもんよ。

まったく、それがどんだけ異様なことかちつとは自覚しろよ。旦那」



頭の上で抗議されるように何度か跳ばれ、ちよつと痛い。

「提案者が頭下げないで、誰がやるんだよ。」

この二日間だけとはいえ、中央広場を使った特設舞台まで作るんだ。普段使ってる人達に迷惑かかることは間違いないし、出店で道幅も狭くなる。

その上、普段は静かな夜も騒がしくなるんだ。責任者が頭下げないわけにはいかないだろう?」

「そんだけじゃなくて、他の件だってそうだろうが。」

やれ神輿やら、衣装やら・・・ 実行は嬢ちゃん達が動くにしても、その発案は旦那だろ? どんだけ寝てねーんだよ?」

「それだって、俺が見たいから頼んだことだしな」

前回同様、俺が仮面を被つての行動もそれが理由。

まあ、俺が仮面被つてる理由なんてほとんどの人に知られているせいか、道行く民ですら俺に甘い物やら試作品を寄越してくるんだが。正直、それすら申し訳ない。

「で? いつも一緒に居る白陽の嬢ちゃんはどうしたんだよ?」

「今回は沙和と藍陽に連れ去られて、貸し衣装屋の手伝いに行ってる。

緑陽も今回はそっちで来てくれた人に化粧を施すらしい。あとの紅陽達は他の皆の伝達兵になってるな」

さつき貰った出来たての焼き菓子を口に入れ、宝譚にも渡せば俺の手からそのままかじりついていく。

こいつ、再会果たした時から思ってたけど、食事まで出来るって・・・

どういう原理なんだ?

「うん。うめえな!」

「華琳も来るかもしれないって言ったら、街の人達が安く質のいい物を作ろうと躍起になってたんだよ。」

華琳御用達とまでは行かなくても、少しでも楽しんでもらいたいてき」

向天の国こうの祭りの出店なんて空気を楽しむもので、味なんて二の次

だったけど、やっぱり美味しいにこしたことはない。

子どもも、大人も、勿論老人だって楽しめる夏祭り。

向こうで当たり前だった日常の一部だけど、こっちじゃそれは非日常で特別な日。

子どもの頃は自分にとってそうだったのにいつからか純粹に祭りを楽しめず、開催していることを知ってても、嫌な面や億劫になって行かなくなってしまう。

それでもやっぱり恋しくなるなんておかしなもんだなと思い、おもわず笑ってしまう。

「こんなことが、大陸中で当たり前になればいいよな」

「はあ？ 旦那。」

何、馬鹿なこと言ってるんだよ」

「馬鹿なことって・・・何が・・・」

宝譚が頭上で溜息を零し、抗議をしようとした時、俺の視線の先に映った霞がへらを持って手を振ってきた。

「おっ、冬雲と宝譚やないか！

珍しい二人組やん、どないしたん？」

鉄板の設置をし、額にねじり鉢巻きした霞の姿が似合いすぎる件について。

青い生地に雲の柄をした法被まで着て、まさにお祭りの姐さんという格好は霞にしっくりくる。

「俺が見回りしてたら、暇してた宝譚に乗られたんだよ」

「ハハッ、冬雲のことを足代わりとはええ度胸しとるやないか？ 宝譚」

「霞嬢ちゃん、どうだ？ 羨ましいだろ？」

「しばくで？」

最初は軽口だったにもかかわらず、霞の目は本気だ。

「そ、それはそうと霞は何の店をやるんだ？」

鉄板出してるってことは料理なんだよな？」

たとえ相手が宝譚だろうと容赦しないだろうから話を切り替えれば、何故か霞は満面の笑みになって、包丁とまな板を取りだして材料を刻みだした。

「冬雲が言っとった『お好み焼き』をやるんやけど」

「えっ?!

もしかして、最近流琉が熱心に聞いてたのって……」

休憩の時間にお茶菓子と共に書簡を持って、俺に熱心に聞きに来るなあとは思ってから作ってくれるのかと思ってたけど、まさか霞が作るなんて予想してなかった。

「おう、ウチが直接聞いたら祭りですることばれるやろ?」

だから、流琉に聞いてもろうたんよ」

「ソースはどうするんだ?」

あれが一番、難しいと思っただけ……」

「醬とかをうまいこと使って、他にも普段捨てるような海産物の煮汁とかをあたってみたんよ」

言葉とともに差し出されたソースを舐めれば、牡蠣油オイスターソースによく似たその味に俺は目を開いた。

「お、オイスターソースだと?!」

「旦那? 何、そんなに驚いてんだよ?」

だってこれ、一九世紀になって成分を調べたことからようやく作られたものなんだぞ?」

それを今の時代に作るって……人の食への食欲さを垣間見た気がする。

「あと、冬雲が言うのとった『まよねーず』ちゅうもんも作ってみたんよ。材料は酢と卵、油でええんよな?」

「ああ、そうだけど……本当に再現したのか」

マヨネーズを知っている人は多いが、作るのは意外と簡単なことを知っている人は実は多くない。

まあ、一般的に売られてるから、普通は作らないしな。

「ちつと味見していかへん?」

さつき、宝譚と話しとったことも聞きたいしなあ」

「大した話じゃないって。

これからも、こうした祭りが当たり前になればいいって言ったただけだよ」

話しつつも霞は慣れた手つきで具を刻み、山芋や粉とともにふんわ

りと混ぜ鉄板に載せていく。その上から肉をのせ、頃合いを見てひっくり返すのは凄く様になっていて、俺へと自慢するように視線を向けることも忘れない。

「ああ、そりや宝譚が正しいわ。」

冬雲の言葉が阿呆やわ、それ」

「だから、なんでだよ」

ジュウジュウと食欲のそそられる音と匂いをさせるお好み焼きにソースとマヨネーズがかけられ、鉄板の上で切り分けられ筐を加工したらしい船に載せられて渡された。

「なればいいんやない。」

ウチらがする、やる?」

右手のへらで俺を指し、左手で渡された湯気がたつお好み焼きに俺は笑ってしまう。

そう、そうだ。

夢を語るような希望ではなく、俺達の実現させる未来として語るべきだったんだ。

「ああ、そうだよな。」

俺達が来年だつて行こうし、大陸中をそうしてやるんだ」

箸を受け取ってかぶりつけば、まだ熱いお好み焼きに舌が火傷しそうだけど、具はふんわりとしていて、上に乗った豚肉はカリッとした食感とソースとマヨネーズがさらに味に変化をもたらししてくれる。

「うまいー!」

「そうやろ、そうやろ!」

「これは売れるでー!」

「商売樂しむのはいいけど、約束した時間には城に集まってくれよ?」

今の法被姿も似合ってるけど・・・俺は霞の着物姿、楽しみにしてるんだよ」

俺がそう言えば、霞は『言わせてやった』とでも言うかのようにニヤリツと笑って、背中を指差しながら、俺へと背を見せる。

「背中に背負ったこの想い、祭りに居る全員に自慢して歩いた後、キツチリ行くから安心せんかい」

そこに書かれたのは、真っ赤な字で『冬雲愛』。

ちよつ、こういうの天和達の売り物でもあるけど、自分がされるとくつそ恥ずかしいんだけど?!

「そ、それ・・・ 一体誰が作ったんだ?」

「とーぜん、沙和や!」

ちなみにウチら将全員に配られとつて、祭りじゃ全員これ着る予定やから、覚悟しときや。

まつ、全員ちゆうても冬雲愛しとるもんだけが着とるから、安心しいや。

千里はウチがなんべん頼んでも着てくれへんしー」

「だーかーらー、そんな恥ずかしい格好は勘弁だし、冬雲さんも困るでしょうが」

悪乗りするかと思つた千里殿がまともで俺は一安心し、肩を降ろす。

と同時に、そのことを知っていて言わなかつたであろう宝譚を軽く小突こうと手を伸ばしたが避けられる。

「千里殿は・・・ 霞の補助か?」

「そういうこと。」

あとは接客とお金の管理、霞はその辺り苦手だからねえ」

「ハハツ、千里殿に任せたら、安心だな。」

んじゃ、そろそろ俺も行くかな。」

二人とも、くれぐれも集合時間は忘れないでくれよ?」

「了解つと。」

冬雲さんが全員の着物姿見たいからつて聞いてるんだけど、本当?」

・・・間違つてないけど、そういう風に情報流すのやめよーぜ。誰とは言わないけども!」

「そうですよ!」

俺が皆の着物姿見たくて、沙和に頼み込みましたよ!」

でも、事実でもあるので俺がヤケクソ気味に叫べば、千里殿は樹枝をからかっている時のようにニヤニヤと笑つた。

「いや、やっぱそう言う所を見ると攸ちゃんの義理とはいえ、お兄さんなんだなあって思えるよ。」

まっ、あたしから沙和ちゃんにあることも頼んでおいたけどね」千里殿が上機嫌にしている理由にある程度察しがつき、俺は今頃出し物の調整を行っているだろう樹枝へと内心で手を合わせる。

「それじゃ」

「あとでなく。」

霞の嬢ちゃん、千里の嬢ちゃん」

二人に見送られながらその場を後にし、そうして昼から夕暮れまでの時間を潰すことにした。

その後は月殿と詠殿がやっている休憩処にお邪魔したり、桂花と稟が本営に居たのでお茶を差し入れたり、貸し衣装屋で働く白陽を微笑ましく見守ったり、舞台を成功させた天和達をどこぞの泥棒よろしく攫っていき、城の特等席である城壁へと連れ出すことに成功した。

「ほい、到着つと」

流石に三人を連れての逃走劇は厳しかったけど、司馬姉妹や宝譚の援護もあって無事逃げ切ることも出来た。

「ちよつと！ 冬雲!!」

舞台から攫うのはやりすぎよ！」

「そう？ お姉ちゃんは結構情熱的なカンジが好きだったかな？」

ほとんど息つく暇もなかったので地和からは文句を貰うが、これは承知の上だったから痛くもかゆくもない。

もうね、その後に来る天和の照れ顔とか、怒りながらも頬を染める地和が可愛すぎてつい頭を撫でるのは仕方ないと思うんだ。

「天和姉さんがそうやって甘やかすから！」

ていうか！ あんたも頭撫でてんじやないわよ!!」

「それに別にいいじゃないですか。地和姉さん。」

私達をファンからも攫ってくれるなんて、冬雲さんだけなんですか  
ら」

人和の嬉しい一言に、俺はつい抱きついてしまう。

「冬雲さん……もしかして酔ってませんか？」

「少しだけ、な……」

日が沈んだ頃から、あっちこっちで酒を開けだして、顔を出した俺を捕まえては酒を飲まされたせいもあり、俺は少しばかり酔っていた。

「旦那も断ればいいってのに、行く先々で貰った盃全部受けてくんだもんなー。」

まったく、お人好しだぜ」

「断れるわけないだろ……」

まあ、ここまで戻ってこれたし、良しとするよ」

若干ぐったりとしながら城壁に寝そべると、折り重なってこちらへと向かってくる下駄の音に無理やり体を起こそうとすれば、人和に額を押さえられてしまった。

「無理に起きないでください。冬雲さん。」

顔、結構青いですよ？」

俺の額を押さえつつ、俺の上へと回って頭の下に膝を入れて、再びゆっくりと倒してくれる人和が心配そうな顔をして覗きこんでいた。

「ん……ありがとう、人和」

「いえ、冬雲さんを膝枕するなんて早々できませんから、役得です」

頭を撫でられるのがまたいい感じに眠気を誘うが、まだ眠るわけにはいかない。

皆の着物姿は勿論、この祭りですらみんなに一番見せたいものが残っているんだから。

「さあ、全員揃ってるよな？」

俺は寝そべった状態で声を張り上げ、広がった夜空をまっすぐ指差した。

戸惑うような、何かを期待するような雰囲気の流れるが、俺はかまわず続ける。

「真桜！ 号令、任せた!!」

「はいなー!!」

今宵、冬桜隊が見せる最大の余興！

さあ、空に輝くんは星だけやない!! ウチらがこの夜空に、大輪の華を咲かせたるわ!

放てええー!!!」

真桜の言葉に続くように、高く高く光が空へと打ちあがった。

瞬間、体を震わせるような炸裂音が響き、そして夜空へと光の華が咲く。

色とりどりの光りは円となり、花開いては落ちていく。

夏の夜に一瞬だけ、幻のような花々が咲き誇っていく。

それと同時に悲鳴のような、歓声のような声があちこちから聞こえてくる。

「冬雲、真桜・・・」

あなた達、いつからこれを企てていたのかしら?」

華琳は俺達を責めるような声なのにどこか楽しそうで、そして俺を見下ろしている視線は・・・ 若干拗ねてる?

「夏が始まる少し前から、かな?」

打ち上げの方法から、光の配色・・・ その素材探しとかで結構戸惑ってたんだよ」

俺の曖昧な知識だと素材は鉱物の粉としかわからず、火薬以外の素材を集めるところから始まった。

にもかかわらず、冬桜隊は打ち上げ花火の形まで持っていく、完成させてくれた。

「今回の件、民への会話にあなたが赴いたのもこのためね?」

「ああ、いくら他の許可書とかに手を回してもらっても、こればかりは事後報告ってわけにはいかないからな」

警邏隊に頑張ってもらうって言っても、これをやるのは騒ぎが大きくなりすぎる危険性もあった。だから、俺自身が頭を下げたし、説明する場を設ける必要があった。

「あなたが酔っぱらってなければ、満点だったのに。

どうしてそう、最後まで詰めが甘いのかしら?」

痛い所を突かれ苦い顔をする俺の視界には、青地に白や淡い色の花を飾った着物を纏った華琳の笑顔が映る。



ああやっぱり・・・  
「どんな花だって、華琳には敵わないよな」

## 月 VS 桂花 【桂花視点】

「ちっ、やっぱりまだ起きてんのね・・・!」

陽はすっかり落ち、空の月は城を優しく照らしている中、私は目標の部屋を確認して舌打ちの混じった言葉を口にしてしまう。

まったく、あの馬鹿は・・・!!

「何度も徹夜なんかすんなって言ってるのに!」

時間も時間なので声量こそ押さえるが、苛々とした感情は収まることはなかった。

大体私達が夜通し作業しようとしたら何かしらの理由をつけて休ませようとする癖に、自分のことは完全に棚上げしてやがるんだもの。

本当にもう! これであの時みたいになんかしたらそれこそ大問題だっていうのに・・・!!

私の目の前で倒れたあの日を思い出して唇を噛み、右手に持った灯りがわずかに揺れる。あいつに仕事をさせないために夜這いなんて最初は馬鹿みたいって思ったけど、べ、別にあいつが嫌いとか、嫌とか言うわけじゃないわよ?!

誰に対して言っているんだかわからないことで表情が動いてしまつて、誤魔化すようにやや火照った顔に左手を当てて、溜息を零してしまう。

あいつは本当に、私達に何かを求めるようなことはしてこない。

傍にいて、仕事をしてくれるだけ、話すだけであいつは嬉しそうに笑つて、自分が誰かに与えることが当たり前だとしても言うように接してくる。

「でも、それは・・・」

与えられるだけの関係なんて、楽なのかもしれない。だけど・・・

「そうじゃないのよ・・・」

それだけじゃ、嫌。

ただ与えられるだけなんて、ただそれだけじゃ満足なんて出来ない。

私達だって、私だってあいつにその……よ、喜んでほしいし！  
求めてもらいたいのだよ!!

そんな私らしくもないもやもやとした感情を抱えながら、もう少しで冬雲の部屋という所で……

月明かりに照らされて映える淡い色をした髪、薄手の布で作られた髪と同色のねぐりじえを纏った小柄な少女が、今まさに冬雲の部屋の扉を叩こうとしていた。

「アンタが、何で、ここに、居るのよ?!」

自分とは思えないほどの速さで駆け寄り、肩に左手を置いてやや低めの声で問いかける。

冬雲の夜の番は私であり、他の連中は隙があれば邪魔をするけど『自分がやられたくなかったらしない。邪魔した場合は、自分もされる覚悟をすること』という暗黙の規則に則って行動しているから、鉢合わせすることはごく稀にあるけど基本はない。

「あ、桂花さん。こんばんわ。」

いえ、今宵こそ冬雲さんと夜を共にしようと思ひまして」

頬を赤らめつつ言う彼女から聞いているこちらが見惚れてしまうような色気が醸し出され、普通の奴ならそのまま許すんでしょうけど私はここで許すわけにはいかない。

というか、ここで引き返したなら、それこそあいつの夜の番なんて一生ありつくことは出来ない。なんたってウチは、この陣営華琳様を筆頭にそういう連中の集まりなのだから。

「そんなの許すわけないでしょ!」

そもそも今日は私の番だつてのよ!!」

自分らしくない発言であることは重々承知だが、夜を共にするのに限らずあいつと過ごす時間は本当に貴重。ましてや、それが二人つきりなら尚更。

まあ、あいつ自身そう言う時間を作ろうとした結果がこれ徹夜なんだつてわかってるけど、それで倒れたら元も子もないじゃない!

「そうなんです。」

その夜の番にどうしたら加えていただけるとかがいまいちわから

なくて・・・ 皆さん、聞いても答えてくれませんし、華琳様は『まず、私と夜を供にしましょう』とおっしゃられるばかりで答えははぐらかされてしまいました」

華琳様あああゝゝゝ！

嫉妬も馬鹿馬鹿しいとは百も承知ですけど、心の中で叫ぶ不敬をお許しください！

先日の関羽もそうですし、あいつも大概そうですけど、華琳様は節操がなさすぎです!! いえ、最愛の方が二人いる私もそうですし、私達はある意味全員で愛し合っているので『節操』なんて言葉とは元々無縁なんですけども!!

「来たばっかのあんたを、夜の番に加えるわけないでしょうが!」

夜の番は必ずしもそう言うことを行うわけじゃないし、発足した当初はあいつをどんな形であれ休ませることがきつかけだった。

言い出したのは華琳様だったことと、賛成した私達にもまったく下心がなかったとは言わない。

けれど、ただ疲れさせたりして眠気を促したり、お互い好意を抱いてる者同士が同じ部屋に居ればそう言うことになることが多いだけで、お茶や話し相手、軽い遊戯を行うだけの日もあるのも事実だった。「ていうか、普段あれだけ一緒に居る詠の馬鹿はどうしたのよ!」

あの子なら止めると思ってたのに、もう止めきれなくなったわけ?! 「桂花さん、愛しい方とそう言うことを行うのに友人を連れてくるわけないでしょう?」

それに詠ちゃんもなんだか最近悩んだり、忙しかったりするみたいで夜は考え込んだりすることが多いみたいなんです」

忙しい? そこまで過剰な仕事量は配分してない筈だけど・・・ まあ、そつちは後で樹枝でも使って調べさせておきましょう。それに千里とか、霞とか近い人間もいるわけだし、現状に個人的な不満があったら黙ってるような玉じゃないでしょうしね。

「では、そう言うことですので・・・」

さらっと部屋の扉を叩こうとする月の手をしつかり握って行動を防げば、月は不思議そうに首を傾げながら再びこちらを振り返る。

「へう？」

まあ、この子がやろうと思えば私の手なんか簡単に振り払えるんだけど、それをしないのはこの子の優しさなのかしら？

「だ・か・ら！ やらせるわけがないでしょー！」

「知っていますか？ 桂花さん。機会とはあるものではなく、作る物なんです」

手を軽く払って、優しく笑う月は私から距離を取るようにしつつ扉を叩こうと手を添える。

「得物は最終的に仕留めた方の物・・・簡単に言うなら、横取り上等です♪」

「へえ、言うじゃない・・・」

頬が引き攣り、皺が眉間に集中していくのを感じながら、同性から見ても魅力的な笑顔を振りまく彼女を見る。

ええ、認めてやるわよ。あんたは立派な競争相手であり、私達の仲間よ。でもねえ・・・

「ここじゃ、そんなの横取りの日常茶飯事なのよ！」

あいつの傍には常に白い陽が照らし、街では三羽鳥が集まり、厨房へと向かえば玉が二つ輝き、鍛錬場に行けば鬼神と大剣、神弓が揃い踏み、少し遠出をしたかと思ったら歌姫達があいつを歌い上げ、執務室に向かえば鳳と稲穂が揺れ、玉座には当然我らが霸王たる方が座している。

もつと言えば、いまだって誰がどこで横取りを狙ってるかなんてわかりやしないわよ！

つまり、ここでは大人しく譲った方が負けなのだ。

間に合わないかわかりつつも扉を叩こうとする月の手を防ごうと手を伸ばす。

が、月が扉を叩こうとするよりも早く、扉は開かれた。

「え？」

どちらにとっても予想外のことが起こりおもわず声を揃えてしま  
うが、扉から出てきたのは私達の得物である冬雲本人。

「ん？」

二人してこんな時間にどうかしたのか？」

少し眠そうに目を擦りながらも私達を認識して子どものように笑う冬雲は、当然の疑問を向けてくる。

「あんたの今日の夜の番は私よ！」

だから、襲いに来てやったわ」

「ああ、そっか・・・ って、はい?!

ちよつと待て! 夜の番って何?!

ちつ、いきなり言えばそのまま領くと思つたのに、案外冷静ね。

「私は夜這いに参りました。

どうか今宵こそ、冬雲さんにこの身を捧げたいと思います」

月も月で畳み掛けてくるし、これならいけるかしら?

「頼むからちよつと待ってくれ。

二人掛かりで言われると俺もどうすればいいかわからないし、俺にもわかるように、一つずつ説明してくれ・・・」

溜息も零さないし、頭も抱えるようなことをもしないまま、廊下で話すわけにもいかないので冬雲は私達を招き入れる。

普段つけている目を隠す仮面を外した姿も、最近忙しかった所為もあってなんだか久しぶりに見た気がする。眠気を振り払うように目頭を触れる動作もなんだか格好良くて、少しの間見惚れてしまった。

「桂花?」

「な、何でもないわよー!」

自分でも駄目だつてわかつてるのに、こういう時咄嗟にうまい言葉は出てくれないのは悪い癖。だから・・・

「ただ・・・ アンタが格好良かったから見惚れた! それだけよ!!」

ヤケクソ気味に叫んでから少しだけ冬雲を仰ぎ見れば、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして両手で顔を覆ってしまった。

「不意打ちに可愛いこと言うなよ・・・ 死にそう・・・

ごめんなさい、嘘です。みんなが可愛すぎて、生きるのが超楽しい」

後半一文に睨みをきかせ、即時撤回させておく。冗談でも、言葉の綾でも、それだけは言わせないし、許さない。

「白陽はもう今日は帰らせたから、俺がちよつとお茶を淹れてくるよ。椅子にでも掛けて待っててくれ」

「冬雲さん、私がしますよ?」

月がすぐに立ち上がるうとするが、冬雲は手でやんわりと制止し、首を横に振った。

「城の中とはいえ、こんな時間に女性が出歩くのはよくない。二人が相応の実力者であつてもだ。」

それに少し歩いて目でも覚まさない、ちゃんと話を聞けそうにな  
いないな

わざとらしく欠伸をしながら部屋を出ていく冬雲を見送って、残された私達は顔を見合わせて同時に笑ってしまった。

お互い夜這いをしようとするこの部屋を訪れ、互いに奪い合おうとしたつていうのに、二人揃つて奪い合おうとした本人の部屋に招かれ  
ちやうんだもの。

「ホント、あいつらしいわよ」

「ですね」

それだけ言つて部屋を見渡せば、あいつが使つてる机には書簡が山となり、寝台は乱れた様子もなく綺麗なまま。机の硯にわずかに残つた墨もまだ乾ききつておらず、ついさつきまで書簡しよりしていたことは明白だつた。

「アアンタは」  
桂花さん

私が口を開いたのと同時に同じように呼び掛けられてしまい、私はすぐに問いかける。

「なによ?」

「いえ、桂花さんからどうぞ」

なんとなくお互い聞きたいことが同じのような予感がする。それなら、譲り合うのはただの時間の無駄だろう。

「じゃあ、聞くけど・・・あんたはあいつのどこを好きになつたのよ?」

連合の折、危機を助けにいったということ考えれば好意を抱くのは不思議じゃない。だけど・・・

「あんたが求めるのは優秀な男？ それとも冬雲？

そしてそれは、涼州人の気質がそうさせたもの？」

ただ優秀な男を欲しているのなら、あいつじゃなくてもかまわな  
い。

そして、『あいつじゃなくてもかまわな』程度の思いだというのな  
ら前言を撤回し、この子を認めることは出来ない。

ううん、違う。

認めたくないし、許すことも出来なくなる。

「そう、ですね・・・」

英雄として彼の話を耳にした時は、そうだったかもしれません」

椅子に腰かけたまま、自分と同じ名を持つ空に浮かんだものへと視  
線に向けて、月は静かに目を閉じる。

一つ一つの何気ない動作が綺麗で上品で、神秘的にすら感じてしま  
う。

それは上っ面だけでは繕えない彼女の自然体の一つでありながら、  
彼女の中には涼州人の気質が染みついている。

「ですが、あの時・・・ 私は初めて、異性に支えられたんです」

神秘的だった表情はまるで花が咲いたみたいに綺麗に笑って、左の  
首元から頬に手を添えながら、白い肌は朱に染まる。

それは私もよく知っている恋する乙女の顔そのもので、この子をそ  
うさせた相手が誰かなんてわかりきっていた。

「守られて、抱きしめられて、そして・・・ いくつかのことを気づか  
せてくれました」

窓に向けていた視線を私に向け直し、花のような笑顔のまま彼女は  
告げる。

「優秀だからでも、強いからでも、英雄だからでも、ましてや後ろめた  
さからでもなく、彼が彼だから傍に居たいんです。

どこか危うさを持つ彼を今度は私が守りたい、支えていきたいんで  
す」

そんな惚気のような告白を聞いて、改めてあいつの手の速さ・・・  
というより、人の良さに呆れてしまう。



誰でも彼でも手を伸ばすのは良い所だって認めてあげるけど、なら怪我なんてしないで無事に帰ってきなさいって言うのよ。あの馬鹿。そんなだから、付き合いの短いこの子にも危うさとして言われてんでしようが。

「そういう桂花さんはどうなんですか？」

「私？」

「はい。」

桂花さんは冬雲さんのどこをお好きになられたのか、とても気になります」

「あー・・・ そうねえ・・・」

昔の私ならこうした問いに『あいつの事なんて、好きじゃない』と答えていたのだろうけど、夜這いに来たのにそんなことを言えるわけもないし、素直に口にする事が出来ないだけですつとあいつの事を私はその・・・好きだった。

「いつからなんて、わかんないわよ」

初めて出会ったのは華琳様に正式に軍師として登用される前、あいつもまだまだ下っ端中の下っ端で雑用をこなすのがやつとの時だった。

出会った後だって別に特別格好いいなんてこともなくて、馬鹿で、女たらしで、いつもヘラヘラしてて、武も一般兵並・・・ううん、以下しかなかった。

「ただやたらと、目についてたのよ」

最初はどうかかわからなくて、粗ばつかりが目についた。無駄のある行動にも、華琳様や他の子達との触れ合いには苛々させられた。どうして好きになったかなんて、むしろ私が聞きたいぐらい。

素直になれるかもしれないという時に居なくなつて、目で追う存在がいなくなつてようやく気付かされた無意識のうちの恋だった。

『もしかしたら、ずっと好きだったのかもしれない』

そんな想いを恋だと証明したのは再会を果たした時に溢れた涙と、言葉にまとめることの出来なかった感情達だった。

「ふふっ」

「何よ、突然笑ったりなんかして」

口元に手を当てて笑う月に、訝しげな視線を向けても彼女の笑みが消えることはなかった。

「いえ、ふふっ・・・すみません。」

桂花さんは冬雲さんに、一目惚れをなさったんですね」

「え・・・？」

私があいつに一目惚れ？

「あ・・・！」

顔が一瞬で熱くなつていくのを自覚しながら、これまで抱いた想いの数々が明確な答えという輪郭を得てあるべきところに収まっていくのを感じる。

「桂花さんって、可愛いですね」

からかわれるだけに耐えられず、私は机を叩きながら立ち上がり、樹枝を怒鳴りつける時のようにしっかりと息を吸い込んだ。

「ええそうよ！一目惚れよ!!」

初めて会った時から、あいつのことを好きで好きでたまらなくて、目が離せなかったわよ！なんか文句ある!？」

「あつ、冬雲さん。」

「おかえりなさい」

「話は最後までしっかりと聞きなさい！」

っていうか、そんな都合よく冬雲が戻ってくるわけ・・・」

私が怒鳴ったのも気にせずに、扉の方を向きながらそんなことを言う月に怒鳴つてから、私も扉の方へと振り返ると、そこにはお茶を三つお盆に乗せ、扉を開けた左手を気まずそうに宙に彷徨させたままの冬雲がいた。

「?!」

「えつと・・・その・・・」

その時、私の中で何かが切れた。

おそらくは羞恥とか、誇りとかの調整を担っていた何かが音をたててぷつぷつりと千切れ飛ぶ。

「もう、いいわ！私は今日、アンタを襲う!!」

アンタのことを超好きで、一目惚れして、普段素直になれない女が素直になるのよ！ 光栄に思いなさい!!」

「ちよっ?! 桂花!？」

その発言いろいろとアウトだし、俺への説明とか一切ないままなんですけど?! それにせつかく淹れてきたお茶が・・・」

「お茶の事なんて気にかける余裕、すぐになくしてやるわよ！ いいからひん剥かれなさい!」

「では、私も・・・」

「いいわよ！ まとめて相手してやるわよ!!」

もう恥ずかしいことなんて何もありませんんだから!」

私の行動と発言をあくまで止めようとする冬雲と、さらっと便乗する月も私は止めない。

この後？ 聞かなくてもわかんでしょ！ 察しなさいよ、馬鹿!!」

もしもまだ、こいつが消えるという可能性が欠片でもあるのなら、あの時はしなかったことを行う・あの時に残せなかったものを残すことでこいつは消えないんじゃないかと仮定する。

もう絶対、消させない。もう二度と、離さない。絶対に失わない。

一つの手段としても、一人の男を愛する女としても、私はこいつとの子が欲しいって心から思った。

## クリスマス 参 【華琳視点】

『クリスマス』

それは冬雲が天の向こうの世界から持ってきた文化の一つであり、今まさにこの魏で根付こうとしている文化の一つでもある。

将兵の皆が赤と白の鮮やかな服を纏い、馬達は冬雲が語った北方の生き物である馴鹿トナカイを模した飾りつけを行い、民達に贈り物プレゼントを配る。これによって警邏隊のみならず将兵と民の距離感は近くなり、私達の名声となって返ってくる。

親も親で普段何か買ってやることの出来ない子ども達に贈り物をする良い機会として利用し、翌朝には嬉しそうな顔をして街を駆ける子ども達も風物詩の一つとなっている。

そんなこんなで目の前には自分のことを顧みず、老若男女問わず笑顔と贈り物を振る舞う冬雲が今年の私のくりすます贈り物プレゼントというわけよね。

「ん？ 華琳と黒陽お?!」

まず黒陽が先行し、冬雲の口元や体を拘束。

「んー?! んんー?!」

続いた私が冬雲の全身を白い布で被せ、背後に來た布の端を掴んで持ち上げる。

「よいしょっと」

流石に重いけれど、成人男性を持ち上げるとは容易に出来る。

そして、さんた服の私と黒陽は何事もなかったようにその場を一気に駆け抜けていく。

周囲に数名の冬雲の部下が居たけれど私達の行動に驚きもせずに見送り、それぞれの職務を全うしている。良くも悪くも慣れているわね。

「か・り・ん・さ・ま? ね・え・さ・ん?

お二人揃っても、何をなさろうとしていらっしやるのでしょうか?」

当然、彼女が立ちをはだかることは予想していた。

冬雲の懐刀であり陰であり、右腕のような存在。そして、凧と共に並ぶ白き忠犬。

「華琳様、ここは私が」

私の前に立つ黒陽が白陽と相對するように立ち、私を庇うように手を広げた。

「姉さん、そこを退いてください。」

冬雲様は私とこの後も仕事を行うので」

「あらあら、白陽。」

最近はこの虎の影響で随分と独占欲が強くなったようね」

「それを言うなら姉さんも、でしよう？」

姉さんも随分積極的に冬雲様と接触を図っていますし、生きるために必要としか思っていなかった料理も随分熱心にされていますよね？」

ああ、だから最近黒陽から菓子や料理の味見を頼まれることが増えたのね。私に料理の話をしたりする機会も増えたし、やはりこの子も私なのね。

「ふふふ、人に関心を持たずに俯いて、誰かと話すことすら稀だったあなたが言うなんておかしいとは思わない？」

そんな姉妹同士の言葉での殴り合いが始まり、冬雲を背負った私へと飛びかかろうとした白陽が黒陽によって阻まれ、両手を掴みあい取っ組み合いへと移っていく。

この子達の仕合も興味深いけれど、今は逃げるのが優先ね。冬雲との蜜月を過ごす時間もやはり欲しいもの。

「華琳様、今夜は聖き夜。」

どうかごゆつくり、お楽しみくださいませ」

「させません。譲りません。」

それがたとえ華琳様であっても、今夜だけは！」

あらあら、本当に白陽は変わったわね。

この変化を含めて私はとても愛おしいと思うけれど、残念なことに私も今夜ばかりは譲る気はない。

これは君主と臣下は別次元の、女と女の戦いなのだから。

「ええ、あなたと黒陽、どちらが勝っても私のところまで来るといいわ。」

もつともその頃には、冬雲を私が美味しくいただいておくけれど」私の言葉に白陽がこれまで見たこともない怒りを宿した気がするけど、私はそれを受け止めながらも彼女の視界から消えていく。

冬雲達ほどではないにせよ、私がこの街で迷うことはまずない。特に今日は行事ということもあつて大通りにばかり人が集中し、脇道などに人気はほぼない。

「んー！」

「冬雲、少し静かになさい。」

少しばかり強引な手段はとったけれど、私はあなたを攫う理由なんて一つしかないでしょう?」

「もがつもがもがもがー!!」

仕方ないので口の布を外すと、冬雲は一度溜息を吐いてから私と視線を合わせた。

「言ってくれば普通についていったらろ・・・」

俺が華琳の誘いを蹴るとかありえないんだし、皆だって華琳がいたら遠りよ・・・」

「甘いわね、冬雲。貴重な砂糖をたっぷり使った菓子よりも甘いわ。」

今日は私達全員が認めた聖なる夜であり、年に一度特別な贈り物を渡される日。

そんな夜を成人した者達は恋人と逢瀬を過ごし、聖なる夜ならぬ性なる夜を過ごししていることでしょうか」

「いや、それはおかしいだろ?!」

恋人を持つ誰もがそんな夜を過ごししているなんてことはないからな?!」

冬雲が否定しているけれど、そんなことはないでしょう。

愛する者と共に時間を過ごしたのなら、その夜に結ばれたいと願うのは何も不自然なことじゃないもの。

「そんな日である今日は、普段は君主と臣下である私達もただの女へ

と変わる。

あなたと共に夜を過ごし、あなたを囲う数多の恋敵ライバルであり、同朋達からこの日を勝ち得るために私はこうした手段をとったのよ」

あの子達を出し抜くのならば、冬雲が部屋に入ってから行動を起すのでは遅い。

仕事の真つ最中、白陽という強固な守りを崩してでも奪い取る気概を見せなければ、他の子達に奪われかねない。

「だ、だからつてな・・・」

「さあ、年の暮れ。」

あなたと私、二人で愛の逃避行でもするとしましょうか」

「ちよつ、か・・・ふぐつ！」

「だから、もう少し黙っていて頂戴」

冬雲の口に右手を当て、左手で自分の口元に指を立てる。

「さあ、二人で共に楽しい夜を過ごしましょう」

そう言つて普段着ている服と真逆赤の色をした衣装を翻し、冬雲の入った白い袋を背負い直す。

「今日は素晴らしい、くりすますの夜。」

私が作つたこの国で、あなたが主催した行事の行われる素晴らしき日の一日。

私が私のために、あなたと共に築く毎日の一日」

鳴らないように細工していた鈴から留め金を外し、その鈴の音を聞いて控えていた絶影が飛びだしてくる。

夜闇にまぎれる黒い体を今日は赤と緑、白の飾りつけを行い、耳辺りには角飾りをしたその姿はとても可愛い。

「似合ってるわよ、絶影」

「・・・」

寡黙ながらもわずかに私に顔を寄せてくる愛馬を撫でてから跨ると、賑やかな街並みがさらに輝いて見える。

「華琳様？　こんなところでどうかしたんですか？」

しかも絶影まで着飾つてるなんて、これから街でも練り歩くんですか？」

「……あなたの空気の読めなさは、何なのかしら？」

ある意味、呪いなのかしら？

「ていうか、さつきから叔母上を始めとした将の方々があちこちで決闘を始めて大変なことになってるんですが……」

なんでも『今日、冬雲と共に過ごすのは私だー』とか口々に叫んでいるらしいんですが、華琳様は何かご存じありませんか？」

「あら、それは大変ね。」

けれど、それも今日のこの騒ぎじや誰も余興としか思わないでしょう？」

たとえ本気の仕合であっても、街を壊す馬鹿なんて私の可愛い臣下達にはいない。

誰が言いだしたかなんてわからない聖夜争奪戦を滞りなく行うために、風を始めとした軍師の子達も知恵を回してくれている。

もっとも競うのが武だけでは限らないし、私のように機を狙ってる子もちらほらいるようだけどね。

「それで華琳様、そちらのやたら動いている袋はなんですか？」

凄いもぞもぞ動いていて気持ち悪いんですが、まさか贈り物に生き物なんて入れていませんかよね？」

私が絶影の背に乗せた冬雲の入った袋を樹枝は覗きこみ、何度か眼を瞬かせたのちに一度袋を閉じる。袋の口を閉じた瞬間、冬雲の叫びにも似た声が聞こえたけれど、今は聞こえないということにしておきましょう。

「周りの決闘って……」

ま、まさか華琳様、散々呷った挙句賞品を持ち逃げする気では……」

「何のことだかわからないわね」

手を震わせ、私の正気を疑うかのように問いかける樹枝の言葉は私には届かない。

「……最近、いろいろと人数が増えたこともあり、兄上との時間がとれないと皆さん口々に言っていました、それは華琳様とて同じ。だからこそ今回皆さんを呷り、兄上を賞品として謳っておきながら、まさかの胴元である華琳様自らが不正などは……！」



「何のことだかわからないけれど、賞品を『冬雲』と明言してはいないわね。」

私はただ『特別な夜を彼と過ごしましょう』と銘打っただけよ。ただし、私がだけれど」

「それはいくらなんでも詐欺では?!

解釈の広さを利用し、賞品を明言しない点とか、完全に詐欺ですよ！ 華琳様!!」

樹枝の驚愕する表情を見つつ、私はいつものように微笑むだけに留める。

「これを聞いてしまったあなたがすることは、わかっているわよね?」  
「勿論、わかっています」

覚悟をした表情をして頷き、彼は一度大きく息を吸い込む。

「皆さーーん、華琳様が兄上を持ちにg・・・」

予想通りの反応に、私もまた控えておいた手札をきる。

「やりなさい、牛金」

「はい！ 華琳様!!」

袋を広げて飛びかかっていった牛金を避け、樹枝は叫ぶ。

「あつぶな?! 何で兄上の副官である牛金を華琳様が?!」

ていうか、なんで華琳様と同じ衣装を着て、袋を構えてんだお前えええー!!」

「悲しい・・・ 私はとても悲しいわ。」

まさか義弟に裏切られるなんて・・・」

「義弟って、まだ華琳様の弟じゃないですから！

裏切られるって、牛金がやってることの方がまさに裏切りじゃないですか!」

絶影の上で顔を伏せ、悲しそうな表情を作りながら樹枝を見やると、いつものように素晴らしい反応を返してくれる。

「樹枝、私はあなたに何をすべきかを確認したつもりだったのだけど」

「わかっていますよー！ 口を噤めっていうでしょう!!」

ですが、そんなことをしたら僕がしばかれるでしょうが!!

あの人数は流石にまずいんですよー!」

あら、また悲しいことが増えたわね。

「自分の命を惜しんで、義姉を差し出すなんて・・・ 私はとても悲しいわ」

「いや、愛しい男をふんじばって袋詰めになっている人が何言いますか!?!」

「んむー!・んむー!!」

同意するように背後の冬雲が暴れ出すけれど、暴れる体力はこの後のためにとっておきなさい。

「冬雲は私の物、あの子達も私の物。」

だからどうしようと、私の自由よね」

「最近、それだと收拾がつかなくなってるからこうなってるんですけどねー」

樹枝が何かを言っているようだけれど、それは主に舞蓮や月に刺激されているのは大きいわね。あの子達は私ですら嫉妬してしまうほど積極的で、彼女達に影響されて皆が女を磨くことに必死になっているのがまたなんとも可愛らしい。

どんな形であれ、あの子達に芽生えた向上心がより私の笑みを深ませる。

「それに、一つ訂正が必要だわ」

「はい?」

まさか運搬を手伝えなんて言いませんよね?」

「それは絶影で足りているもの。」

この後、あなたがすべきことについてよ」

「はい? 僕はこの後、華琳様の所業を皆さんに伝えて普通に寝ますか」

それはそれで寂しいくりすますだけれど、そんなくりすますに私が刺激を与えてあげましょう。

「あなたはこの聖なる夜を牛金と共に過性ごすのよ」

「だから従ってんのか! そいつはあああー!!」

「さあ、牛金、もう我慢することはないわ。」

あの子と共に情熱的な夜を過ごしなさい」

私の言葉と共に牛金が飛びだしていき、樹枝の悲鳴が木霊した。

樹枝がいなくなったことを確認し、私は一人呟く。

「まあ、たとえ二人つきりで夜を過ごせなくとも、あの子達をからかいつつ楽しく過ごせれば私はいうことはないのだけど」

「素直にそう言えばいいだろう、華琳・・・」

私の言葉に器用に口元の布を外した冬雲が呆れたように呟くけれど、誰かが呆れたぐらいで私が行動を改めるわけがない。

「それでも、刺激は必要でしょう？」

「それともあなたは異論があるのかしら？」

「いや、異論はないけどな？」

最近、毎朝木乃伊ミイラになるんじゃないかと不安に思ってるんだけど?!

まあ、あれだけ相手をしていればね。

「華佗がいれば、そんな心配もしなくて済むのだけれど」

「いや、困ってたからね?!」

陳留に居た頃に連日通ってたなら、流石のあいつも顔引き攣らせてたからね?!」

「あの時は仕方ないじゃない。

再会に喜んで、皆ついやり過ぎてしまったのだから」

「嬉しかったけど、毎日はきつい!!」

常人ならツツコミをいれるような言葉ばかりだけど、これが私達だからしょうがないわよね。

「さて冬雲、あなたがすべきことはわかっているわよね？」

逢引きデイトの基本は？」

「雰囲気作りから、だよな？」

「ええ、正解よ。

さあ、行きましょう。皆にばれない内にね」

こうしてくりすますの夜は更けていく。

私が冬雲との逢引きデイトを朝まで楽しんで言うまでもない。

来年はあの子達もさらに工夫を重ねてくることでしょうけど、それ

もまた一興ね。

日々楽しみが増える毎日、それも彼がここに居るから。

あの時から続く毎日を私達は描き、これからも続けていこう。

「次は何をしようかしら？」

横に眠る彼の頬を愛しげに撫でながら、こちらへと迫りくる気配に笑みを浮かべた。

後日、くりすますのさんは良い子達には贈り物を届けるが、悪い子は袋に入れて連れ去ってしまうという噂が流れたが今回のこととは無関係だろう。

## 法正

大陸の辺境である水鏡女学院には、普段は誰も近づかないところが二つある。

一つは、水鏡女学院の本来の主である水鏡スイキョウが居座る本館の奥にある寢所。

もう一つは、本館の中庭にある今は誰も使用することのない離れである。

「・・・ここに来たのは、随分久しぶりね」

「コケツ」

深い紺の髪を揺らし、杖をついて歩く女性が逞しい雄鶏と栗毛の馬を連れ、女学院の中庭にある離れを見上げた。

彼女の名は法正、またの名を『毒舌の法正』。

この学院の卒業生であり、天才と謳われる一方で残念と評される三人組の一人である。

その名の通り、彼女の言葉は真実という毒を宿し、向き合った者を刺し貫く。だが、毒とは使いようによっては薬にもなり、本来薬とは頼るものではなく、内にある力へと活性化を促すものである。

「コケー」

髪と同じ色の瞳はただ静かに建物を見つめ、法正を促すように雄鶏は先を歩きだす。

「ええ、わかっているわ」

法正もそんな愛鶏の後に続き、本館側や中庭からは見えない離れの裏側へと回っていく。

「・・・」

これは・・・」

「コケツ、コッコー!!」

表情を崩すことのない法正が目を開き、林鶏も驚くような、歓声のような雄叫びをあげる。

そこにあつたのは、一面の花畑。

花々は甘い香りを放ち、それぞれの配置なども気にすることもなく

咲き誇る。

そんな色とりどりの花が地面を覆い隠し、中央にある石碑への道を作り上げていた。

「似合わない気遣いね」

誰に対しての言葉なのかをあえて特定することはなく、法正は静かに花を見つめる。

女学院の近隣に咲く花のみならず、どことも知れぬ異国の花、海辺に咲く花などが多くみられ、そのどれもが美しく咲き誇っていた。

「相変わらず、素直じゃありませんね。法正」

「これが私の素直な感想よ、水鏡」

突然背後に現れた水鏡ミカガミに驚くことも、振り向くこともなく、彼女は素っ気なく返す。だが、水鏡ミカガミは法正の言葉になれているのか、気を悪くした様子はなかった。

「あなたならそうでしょう。」

ですが、あの方自らここに足を運び、気まぐれに水や肥料を与えては彼女へと語りかけていますよ」

「日常的にここを維持し、あの二人が送りつけてきた種を播くのはあなたの役目。という所かしら？」

まるで全てを見てきたかのように語る法正の言葉に、水鏡ミカガミは当然だとばかりに頷き、誇らしげに微笑む。

「ええ、当然でしょう。私もまた水鏡スイキョウであり、あの方は私の全てです。

あの方が願うことを行い、女学院メコウケンの管理の全てを担うこと。それが私の行うべきことであり、あの方の一面となる。

私は、そのために在るのですから」

「あなたも相変わらず質が悪いわね」

「当然でしょう？」

だって私は司馬微ですから」

法正の皮肉に対して、彼女は再び誇らしげに微笑む。

かつて、この深い山野に捨てられ、真名を残して何もなかった少女がいた。

気まぐれで、適当で、情など欠片しか見当たらず、ただ自分のため

だけに少女へと様々なことを教え込み、挙句自分と同じ存在になることを許した存在がいた。

だが、そのとんでもない存在は紛れもなく少女の世界の全てだった。

「そうだったわね」

法正はそれ以上に何も会話することがないとも言うかのように、再び石碑へと向かって歩き出す。

主人の会話の邪魔にならぬように石碑の前で静かに座る林鶏、その瞳にすらそこに眠る誰かを悼むような真剣な眼差しのように感じられる。

「慧扇」

法正の目の前にある石碑には名前は彫られておらず、ただ一輪水仙の花と泡のように上から下へと向かう円がいくつか点々と彫られているのみ。

だが、それこそがここに眠る少女が最も愛し、少女を示す意匠であることをこの石碑へと手を合わせる者は知っている。

「今、帰ったわよ」

家に帰った時のように告げる法正の言葉を返す者はなく、石碑はただ静かに佇んでいる。

いいや、きつと言った法正自身も返答など期待などしていなかった。

返答がないとわかっていてなお、法正はいつも少女へと向けていた言葉を口にしてしまっていた。

「しばらく見ないうちに、随分華やかな所になったわね」

それ以上、何か言葉を続けることはなく、法正は静かに杖を握る。ここに居ない存在に語りかけることに意味はなく、過去に起こったことはもう変えることは出来ない。存在しなかった未来を描くことは、法正にとって残された己へと慰みにしか思えない。

「隣、失礼するわよ」

石碑の隣へと腰かけ、花畑を見つめる瞳は優しく、石碑へと触れる指先もまた優しい。そこに毒と呼ばれる法正はおらず、姉として妹の

傍に立つ法正へと戻っていた。

否、『戻る』とは適切ではない。

彼女にとつて、これもまた意識的に使い分けているものではない。紛れもなく、法正という彼女自身の一面だった。

「慧扇、あなたが眠ってからいろいろなことがあったわ」

だから彼女はかつてのように、生前の妹にしていた時と同じように語りかける。

『失くした』という過去でも、ありもしない妹との未来ではなく、自分が歩いてきたこれまでとこれからの話を。

「あの後、劉璋の元を離れた私は、平のようにあちこち渡り歩いたわ。もっともあの子ほど自由に歩くことも出来ないし、瑾のように一つの目的に絞ることは出来なかった」

自分が歩いてきたこれまでを見つめるように、法正の視線は遠くへと向けられていた。

「私は本当にただひたすらに知識を集め、大陸を見て回り、医術と名のついたものに片端から目を通した。

そして、それも行き詰まり始めた頃、瑾を経由して孔明に雇われたわ」

「コケツ」

林鶏も羽を広げ、何度か足を振る動作をしながら、石碑へと何かを教えているようだった。

「あの陣営の者達については、また今度。

私はそこで、大陸の名医・華佗に会えた。

ある意味で、彼に出会えたからこそ私は自分のやるべきことの正しい形を見出せたのでしょね」

あたかも自分の道に明確な答えなどなかったかのように告げる法正は、一度深く目を閉じた。

「私はあなたに何も出来なかった」

こんな言葉に意味はないことを、口にした法正は誰よりも理解している。

『何も出来なかった』という事実を口にすることに、何の意味もな



い。

だが、『守る』という言葉は酷く傲慢で、その後ろに居る者を自分が守らなければいけない弱い者とする事は、病で自由に動くことも叶わなかった妹への最大の侮辱だった。

「あなたの最期が微笑みで終わっても、私は納得することは出来なかった」

短い生を受け入れ、己の体を蝕む病を憎まず、自分の生きた証を残すように筆を執り、物語を残した。

そして、今なお物語は語り継がれ、多くの者が手に取って楽しまれている。

彼女が没しても、彼女の名はこの大陸に生き続けている。

「私は平のように、あなたの替わりに全てを貪欲に楽しもうとする自由の翼を持ち得ない」

自由奔放を体現し、大陸中を好きなことをして回る友の姿を脳裏に描きながら、法正はわずかに目元を緩める。

「私は瑾のように、自分の立場を最大限に利用してあなたの名を大陸に刻み込む権力を持ち得ない」

夢現ゆめうつの世界を愛し、自分の欲をけして誰かに譲ることもない。それでいて、無情と言うにはどこかおかしな友を法正は笑う。

「ならば私は、あなたの奪った病へと立ち向かいますよ」

それは強大な敵への宣戦布告。

「慧扇、これはあなたのためでも、あなたの所為でもないわ。

私達がやりたいからやることよ」

そうして法正は、杖を使いながら立ち上がる。

背筋を伸ばし、前を見つめ、足に不調を抱えても、その立ち姿は誰もがおもわず目を取られてしまうほど美しいものだった。

「あなたの死で、私達は立ち止まらない。

あなたの生が無であったなんて、誰にも言わせない」

叫ぶわけでも、怒鳴っているわけでもないにもかかわらず、彼女の言葉には強い力が宿っていた。

## シンデレラバスト

始まりはそう、とある陣営のとある御使いの言葉から始まった。

「天の国ではシンデレラバストと言ってなあ……」

「てめーが元凶だろうが！ このクソ兄上!!」

いつも通り、自分の部屋で仕事をしていると樹枝が大声で叫びながら扉を開き、俺へと飛びかからん勢いで机を叩いた。

「は？ 一体何のことだ？」

「とぼけてんじゃねえぞ、てめえ！」

ネタは上がってんだよ!!」

ネタが、あがる……

「鮪が手に入ったのか?!」

やっぱり、食べたくなるんだよな。寿司。

まあ、口にしないとってなんだけど、回遊魚の上に海水で生きてるから無理ってわかってんだけどな!

でも、食べたいよなあ。赤身! トロ! 大トロ!!

「話が噛みあっていない気がするんだが、どちらも何の話をしているんだ?」

樹枝が入ってきた扉から顔を覗かせた秋蘭が俺達の不一致を指摘するが、内容も話さずに元凶と言われたからなあ。最近したことと言えば、華琳と沙和と協力して全員分の紐ビキニを用意したぐらいしか心当たりがない。

「樹枝の分は、俺は用意してないぞ」

「何をだ?!」

それはそれで凄く不穏な気配がするんですけど、今の僕の格好を見て何か思わないんですか?!」

「何か……何か?」

樹枝に言われ、改めて上から下まで確認すると……

樹枝の体を包むのは若草色のドレス。

袖口は肩までしかなく、その分露出をってしまった腕を肘のあたり

まで薄手の手袋が隠すように包み込む。

腰辺りはいつもより気持ち細く、肩から胸のあたりを見せるように開かれている。

スカートはふんわりと広がっており、ドレス全体を黄のフリルが彩っている。

その上本来短い筈の樹枝の髪があからさまに増え、貝のようにまじめあげられていた。そして、最後の仕上げと言わんばかりに額の近くをティアアラが飾っていた。

「いつもより、フリルが多めか？」

「額のていあらしも似合っているな」

「うがー！ー！ー！」

秋蘭と共に素直な感想を口にする、樹枝は雄たけびをあげる。

「だから、あんたが元凶なのかつつてんだろ!？」

「いや、だから・・・何の？」

その恰好は樹枝の趣味だろ？ 俺のところまで駆けてくるぐらいだし」

元凶元凶言われても、さっぱり内容が掴めずに問い返せば樹枝は怒りで顔を真っ赤にする。

「んなわけあるかー！」

趣味じゃねえし、着替えたらもつとやばいことになるからですよ!!

というか、本当に何も知らないんですか?!」

「だから、何の？」

「・・・ああ、なるほど」

俺と樹枝が何度目かのやり取りをしている中で秋蘭が何故か突然微笑み、俺達の間に入って入る。

「ところで冬雲、巷で噂の『しんでれらばすと』という言葉に聞き覚えはあるか?」

「ないけど」

シンデレラバスト? 聞いたことがあるような、ないような・・・

でも、シンデレラ? 何故、シンデレラ?

「嘘ついてんじゃねえよ!」

この言葉を広めたのは御使いだって、ネタはあがってんだよ!!」  
ああ、それでネタに繋がるのか。

「で、秋蘭。そのシンデレラバストってなんなんだ？」

いや、皆が俺にとってお姫様だっていうのは間違いないんだけど」  
十二時になっても帰す気はないけどな！

「簡単に言えば、胸囲がある一定以下の女性のことだな」

「は？ そんな名称があったのか？」

秋蘭から告げられたとんでもない内容に、俺は呆れ半分驚き半分  
だった。

というか、それだけで何故俺を犯人にした？

「しらばっくれるのもそこまでだ。兄上！

華琳様を始め、姉上や月さん、風さん、稟さん・・・この大陸に  
名立たる貧乳女性達を囲っているアンタ以外にありえないってこと  
だ!!」

「違う！俺は貧乳だから愛してるんじゃない!!

皆が皆だから愛してるんだ!!」

一番譲れないところを訂正させるために俺は叫ぶが、樹枝も一歩も  
譲る様子はない。

「やはり、話が噛みあってないな」

隣で秋蘭が呆れている気がするが、俺もこれは譲れない。

「ところで樹枝よ、それが今のお前の格好とどう繋がるというんだ？」  
「そうなんですよ、秋蘭さん！」

しんでれらばすとなんて名称を知った千里さんと緑陽に襲撃され、  
僕は朝からこんな恰好にされたんですよ!!」

「バストも何も、お前男だろ・・・」

胸はあってもただの板、着飾っても男は男。

「その言葉を全員に伝えろー！！！！」

「また話がずれたな、冬雲」

こんなことにずっと付き合ってくれる秋蘭の優しさが沁みるけど、  
絶対楽しんでるよな？

「まあ、大体言いたいことはわかったけどな。」

俺は広めてないぞ？ 意味だって、たった今知ったぐらいだし」

「そんなことを言っても、他に広めそうな御使いなんて……！」

「はぁ……」

樹枝よ、御使いは二人いるぞ？」

「だからと言って、向こうの御使いが広めるなんて想像できません！

大体、彼の周りにいる女性は皆巨乳じゃないですか!!」

だからって、何で俺が広めたことになる？

というか、今日の樹枝の発言はさつき名前を挙げた誰に聞かれても  
まづいぞ。

「冬雲の元に美しく着飾った女性が入ったと聞いたのだけど……」

「それで来るのもどうかと思うぞ、華琳……」

いや、華琳らしいからいいんだけど」

何事もないかのような窓から侵入する華琳を苦笑いで迎えば、華琳  
の視線は樹枝で止まった。

「あら、美しくなったじゃない。樹枝」

「嬉しくありませんよ！ 華琳様!!」

華琳の褒め言葉に樹枝は絶叫で返し、華琳はさらに言葉を続けた。

「それはそうと、さつきまで随分好き勝手言ってくれたじゃない？

私が貧乳とか」

「ないものはないじゃないですか」

正直は美德。

だけど、それを理由に殺されないとはい誰も言っていない。

「フツ、そうね。ないものはないわね。」

ないなら増やせばいい。それを今日、あなたで試みましょうか」

そうして樹枝は華琳によって、どこかへと引き摺られていった。

以降、一週間は樹枝の姿を見ることはなく、一週間後に現れた樹枝  
の胸は赤く腫れあがっていたという。

なお後日、この『シンデレラバスト』という言葉を広めたのが白の  
御使い殿であることが判明した。なんでも孔明殿と喧嘩をしている  
際に口走った言葉を懇切丁寧に喧嘩中に説明し、民にも定着してし

まったのだとか。

この事を知った樹枝は俺に謝罪し、まだ見ぬ白の遣いへと激しい怒りを抱いたという。

## オリジナルキャラクター設定 参

### 【曹操陣営】

姓：牛ギョウ 名：金キン 真名：薇猩ラシヨウ

髪：なし 禿頭

瞳：樹枝しか映っていない

### 《備考》

曹仁隊・副隊長であり、現在は本編・番外のあちこちで登場し、そのキャラの濃さ・登場回数もあつて真名を命名された。冬雲は勿論部下からの信頼は厚く、実力主義の曹操陣営において副隊長を任されているというだけで彼の実力が窺える。だが、想い人である樹枝が関わってくるると一途すぎるが故に暴走を開始する。

真名の『猩』は『猩紅』という黒味を帯びた鮮やかな紅色のことを指し、『薇』は『薔薇』の一字から取られた。そして、赤い薔薇の示す花言葉は「あなたを愛しています」「愛情」「美」「情熱」「熱烈な恋」。

真名に薔薇を採用した理由はもう一つあるが、それは瞳を見れば一目瞭然だろう。

姓：曹ソウ 名：嵩スウ 字：巨高 真名：万年青オモト

髪：金

瞳：青

### 《備考》

史実においては曹騰の養子だが『再臨』においては実子とし、華琳と樟夏の父である。曹騰について今回は語らないが父である曹騰もまた『四英雄』と呼ばれ、霊帝時代に五胡の侵略から漢を守った英雄である。彼には『英雄の息子』という肩書きに見合うだけの才はなく、傍から見れば妻と共に洛陽から逃げ出すように父から与えられた陳留の刺史を務めた。

妻の死後、落ち込んでしまった子どものために女装し、母親と父親の二役をこなして家庭を支えたが、母親という役割が自分にあつていることに気づき、仕事を華琳に譲った現在は母親の姿で日々を過ごす

ている。

名の由来は『オモト』という植物からとり、花言葉の一つに『母性の愛』がある。

また、彼を出す案は複数あり、その内の一つでは『彼を故人とし、華琳の思考や樟夏の性格に影響を及ぼす』というものもあつた。が、現在使用している案の方が奇抜であり、秋桜や柳など『父親を殺しすぎている』という意見から不採用となつた。

真名：鳳華ホウカ 故人

髪：直毛で金

瞳：青

#### 《備考》

華琳と樟夏の母であり、万年青オモトの妻。前述した曹嵩の備考欄にあるように既に故人である。万年青にとっては自分を変えた女性であり、華琳にとっては魅力的な母であり、樟夏にとってははかすかに記憶のある美しい母であつた。

名の由来は『ランキユラス』の和名・『花金鳳花』から来ており、花言葉は「晴れやかな魅力・あなたの魅力に目を奪われる」。

彼女については話の都合等もありあまり詳細を語ることは出来なかつたが、真名を付けた以上は今後番外などで登場する可能性は高い。

#### 【孫陣営】

姓：祖ソ 名：茂モ 字：大栄 真名：秋桜シュウオウ 故人

髪：金 背中中央までの長さ

瞳：海色

武器：大剣『東海武王』 細剣『西海優王』

#### 《備考》

孫堅四天王の一角であり、舞蓮の亡き夫。そして、雪蓮達の亡き父。彼の名前はこれまで明言してこなかつたが、孫堅四天王の一角である祖茂である。



以前の設定にも書いた通り、当初は彼がここまで登場する予定はなく、最早孫家のみならず陣営を語る上でなくてはならない存在となった。言葉足らずで穏やかというよりも無関心に見えるような男であり、考えることは得手とせず、黙って行動に移すことが多かったとされる。

また、秋桜にとって祭は舞蓮を任せられる存在であり、木春は良き友であり、銀葉は舞蓮とは違う意味で危なっかしく放っておいてはいけない妹のような存在であった。当然、言葉にすることは生涯なかったが彼もまた呉を、同朋達を深く愛していた。

名前の由来は『桜』だが、「秋」の一字があるように彼は秋咲きの桜が名の由来である。秋咲きの桜はいくつかあるが『四季桜』なら『想いを託します』、『十月桜』なら『神秘的な心・寛容』、『子福桜』なら『純潔・愛は死より強し』、『寒緋桜』なら『艶やかな美人』となる。

姓：韓<sup>カン</sup> 名：当<sup>トウ</sup> 字：義公 真名：銀葉<sup>ギンヨウ</sup>

髪：橙

#### 《備考》

孫堅四天王の一角であり、女性。現在は引退し、夫である程普と共に子や孫に囲まれ、余生を楽しんでいる。また、孫陣営では珍しく装飾などに拘るお洒落な女性である。

かつては舞蓮や祭と同様に秋桜を狙い、秋桜の誰に対しても対応の変わらないところに惹かれていた。が、秋桜が自分をどう見ているかを理解してしまい、恋愛を断念。以後は頼れる兄のように秋桜を敬愛するようになった。そして、秋桜と同じように自分を『孫堅四天王の一角』でも、『多くの男にもてはやされる女』と見なかつた程普に恋をした。その結果、舞蓮と祭と同世代でありながら現在は三歳になる孫を持つ祖母である。

真名の由来は『リューカデンドロン』という花の和名・『銀葉樹』からきており、花言葉はいくつかあるが彼女の名に込められているのは「閉じた心を開いて」である。

姓：程テイ 名：普フ 字：徳謀 真名：木春モクシュン  
髪：薄い黄と白髪混ざり

#### 《備考》

孫堅四天王の一角であり、男性。現在は引退し、妻である韓当と共に子や孫に囲まれ、余生を楽しんでいる。

かつては舞蓮に恋慕の情に近いものを抱いていたらしいが、その詳細は定かではない。荒くれ揃いの孫堅四天王の中の頭脳と隠密を担い、七乃や明命、思春の指導なども行った。また、隠密ゆえなのか、生来の特徴なのか異様に影が薄く、よほど勘のいい存在にしか彼の居場所は掴みにくいようだ。そんな中で必ず自分を見つけてくれる四天王とその主たる舞蓮に対し、特別な感情を抱いてしまうのは必定だったのかもしれない。

真名の由来は『マーガレット』の別名である『木春菊』からきており、花言葉は「真実の友情・愛の誠実」。彼の名には友情を背負わせたかったのは作者のこだわりである。

#### 【その他】

姓：劉 名：弁 真名：八重

髪：淡い桃色

瞳：淡い緑

#### 《備考》

少帝弁であり、劉協の父違いの姉。劉協にとってはよき姉であり、月たちにとつて守るべき大切な友人であり主君。現在、公には死亡扱いとされ、月たちによつて今は劉協と共に洛陽を離れている。

だったが、水鏡女学院にて千重に対して『姉』をしているところを目撃した多数の女子生徒により『お姉様』と呼ばれ、もてはやされ、そう在ろうとしているうちに彼女は目覚めた。故に彼女は自らが似合う衣服を纏い、優雅に、艶やかに、舞い踊るように。そして、妹達を守れるように刺突剣を振るう。

現在、『劉弁』として死亡し、『ただの八重』として・・・否、『妹達へと愛を振りまく愛の伝道師』となつて恋達を連れ、大陸のどこか

を放浪している。

姓：劉 名：協 字：伯和 真名：千重

髪：やや濃い桃色

瞳：淡い水色

### 《備考》

献帝であり、『前日譚』が書かれる以前から名前のみ本編に登場をしていた。が、真名を考えた当初、登場する予定はなく、『前日譚』ではそこに収まるのが当然のように違和感なく収まった。その後、無事本編登場及び冬雲との再会を果たし、彼女もまた記憶所持者であったことが明らかとなった。

前日譚にて恋に自覚したのが遅かった所為もあって積極的であり、現在は陳留の街で歴史を残すことを熱心に行っている。作家というには歴史に重きをおき、文化や経済、政や環境などは彼女によって残されていくだろう。

姓：法ホウ 名：正セイ 字：孝直コウチヨク 真名：緋扇ヒセン

髪：紺

瞳：紺

武器：杖『黎杖韋帯』レイジョウウイタイ

### 《備考》

真名を『己の生き様、死に様を描くもの』と重要視し、真名を交わすことは滅多にない。が、白本編にて紫苑・璃々とは真名を交わしていることが窺える。

そして番外にて、ようやく彼女の真名は明らかとなった。本編の『38』において杖の意匠を描いたのはこれの伏線であり、真名の由来となった檜扇の花言葉である「誠意・個性美」は彼女の生き様を描く上で指針となった。

現在は水鏡女学院に戻り、植物を用いた薬学から医術の道を切り開こうとしている。

真名：慧扇スイセン 故人

《備考》

真名の由来は水仙。花言葉は多数あるが彼女の名に込められているのは『尊敬』である。

彼女は法正を書くことが決定した時から誕生していながら、伏線などを一部に書くのみ、およそ二年もの間作者の脳内のみにとどまっていた存在である。伏線として書かれていた『泡沫水仙』という名は彼女の筆名ペンネームであり、スイキョウによって贈られた二つ名である『泡沫の慧扇』からとつた名である。

本編四十七話の千里視点において千里が見かけていた人物も、槐が呉にて増版を企てた本の著者も、白本編において何度か登場している『泡沫水仙』も全て彼女のことを示していた。

『泡のように儂く、慧星のように通り過ぎ、水仙のようにその身に毒を宿して、自らが生きた証を大地に残していく』

スイキョウが口にしたこの言葉こそが、慧扇の生涯を短く表したものである。

《『残念天オ三軍師』及び『泡沫水仙』 追記（というか ほぼ雑記）》

この四名の設定は登場を決めた時から設定が四名で完成し、完結していた。そして、本編とは独立して完成しきっていたが故に『本編では明かせない』という結論が早い段階で出ており、結果として慧扇の存在は本編で匂わせることは出来たのが精一杯であり、番外にて法正の真名と慧扇は登場することとなった。

だが、彼女達の役割とするところはあまりに大きく、真名への価値観の差、友という存在への価値観の差異、桃香達を始めとした劉備陣営への教育及び原作においての疑問点の解消など、本当に多くのことを担ってくれた。

法正達三名の関係についても多くの疑問や不満が出ていたが、互いに真名を許すことなく、油断することなく向き合っている、言葉に一切の容赦がなくとも、彼女と王平と諸葛瑾の関係を誰が『友』と称さずとも彼女達の関係は特別なものであり、誰にも入ることは許され

ない。そして、そんな関係の中に入ることの許されていた法正の実妹であり、王平の友であり、諸葛瑾の愛した作品の著者は既にいない。慧扇の存在は法正達を語る上でなくてはならない存在であり、三人の潤滑油であり、心の抛り所とも言える場所だったのかもしれない。本編に関わることはなくとも、武だけが大陸に名を残す方法でないことを彼女の名が示すだろう。

姓：司馬 名：徽<sup>キ</sup> 字：徳操

#### 《備考》

彼女達は少々特殊なため、これより下に真名・備考欄のみを記す。

真名：スイキョウ

#### 《備考》

水鏡女学院の創立者であり、この世界のバグのような存在。

彼女が理解できないことはなく、この世界が所詮一つの可能性であることすら見通し、日々を布団の中で過ごすニートである。女学院を辺境に創立したのも煩わしい人間関係から遠ざかるためであり、学院を開いたのは定期的な収入を得るためである。ごく稀に自分に気づいた存在や将来有望の存在には悪戯に二つ名をつけ、二つ名を付けた者は女学院から卒業という形で外に出される。

退屈だから死ぬという考えはせず、退屈だけど生きているんだから最期まで生きるし、死ぬことすら億劫という横着者。気持ちよく眠り続けるために環境を整え、ごく稀に外に出ては日向ぼっこをするのが日課である。最愛の存在は彼女特製の羽毛布団であり、気まぐれに名前を付けては彼らに包まれている。

真名：ミカガミ

#### 《備考》

表の司馬徽であり、主な女学院の管理は彼女が行っている。

スイキョウが辺境に建物を作った頃に拾った少女であり、スイキョウが育てたとは思えないほど常識人に育った。定期的に水鏡女学院から離れ、各地から才ある子を見つけては女学院へと勧誘する。

が、常識を持ちながらその考え方はスイキョウ中心であり、己が司

馬微であること・スイキョウの表の顔であることに誇りを持っている。

《報告者 宝譚》 他から見たあの子 〽 白陽 〽

「呼ばれて飛び出て俺、登場！」

目の前にある扉を勢いよく開き、俺は華琳嬢ちゃんが待っているだろう旦那の部屋へと飛び込んでいく。ちつと入り方が雑かもしれないけど、黒陽嬢ちゃんに注意されるぐらいで済むだろ。なんてっ たって今日の俺は、風にも言っちゃあなんねえ密命を受けてんだからな。

んで、なんで旦那の部屋かつつうと旦那と一緒に報告を聞くてんで、その間は茶でもしばいて待つって言われたんだよ。

が、俺の目に飛び込んできたのは想定外つつうか、ある意味華琳嬢ちゃんらしい姿だった。

「あら、案外早かったわね」

空中で止まったままの俺に悪びれることもなく旦那の体に密着した状態を続け、それどころか旦那の服を脱がすことをやめようとはしない。

「ちよっ、華琳?!

宝譚が来るまでって約束だし、今はお茶だけで我慢するって……」  
「そうね。なら今夜、いつもの場所であなを待つことにしましょうか。」

黒陽、あなたも同席するでしょう?。」

「ふふっ、あなたがそれを望むのなら」

密着した体を離しながらさりげなく旦那と夜の約束を取り付け、しかも黒陽嬢ちゃんごと美味しくいただく気かよ。つつか黒陽嬢ちゃんも笑顔で受け入れんじやなくて止めるよ?! 結局、主従で似た者同士かよ!

「華琳嬢ちゃん? そろそろいいか?。」

「ええ、かまわないわ。」

思ったよりも仕事が早かったけれど、仕事に漏れはないでしょうね?。」

早くても雑な仕事に意味はないことと、そうであった場合はたとえ

置物の俺でも容赦なく罰してくんのが華琳嬢ちゃんだ。

が、俺がそんなことをする筈がないし、風の一部じゃなく俺を俺個人として扱って能力を買ってくれたんだから、すげえ張り切って仕事をしてきたしな。

「そういえば宝譚に、一体何をさせてたんだ？」

「あん？　旦那は何も聞いてねえのかよ？」

旦那の思わぬ発言に俺が旦那の方へと近寄って、右肩に乗って頬を叩くと軽く指で遠ざけられる。

「いつもの朝に仕事を始めるまでの間をまつたり過ごしたら、突然黒陽率いる紅陽達によって白陽を拉致されて、華琳がお茶やらお菓子やらを持ってきて『宝譚が報告に来るまでお茶をしましょう』と言われて今に至るな」

旦那も華琳嬢ちゃんに振り回されることに慣れてるよな。

普通はもうちつと取り乱したり、怒ったりするもんだけど、嬢ちゃん達に対してだといろいろ緩いつつうか、正直異常だろ。まあ、あんな経験してたら納得だけだな。

「華琳嬢ちゃんから、今の面子と前の面子の関係を調べるように言われたんだよ。」

いつもなら隠密やつてる司馬嬢ちゃん達に頼むんだろうけど今回ばっかしは完全に個人的なことだし、俺だったらこの仕事に向いてるしな」

俺が自分の胸部をたたきながら得意げに言うのと旦那は納得し、華琳嬢ちゃんも俺の言葉に頷いた。

「あの子達の交友関係を知っておきたかったのだけど、黒陽達もその対象である限りは本人達に調べさせるわけにはいかないでしょう。」

だから適度に手が空いていて、かつての私達と今の面子と関わり合いがある宝譚が適任だったのよ」

「まあ、確かに宝譚なら誰とでも仲がいいから適任だろうけど、俺でもよかったんじゃないか？」

「冬雲様でしたら確かに目的を達することが出来るでしょうが、日数はこれの倍・・・いいえ、倍程度で済めば早い方ですね」



「どういう意味だ？」

うん、俺様蔑ろにされすぎて泣きそう。

いや、旦那と華琳嬢ちゃんと黒陽嬢ちゃんのトリオ相手にしたらこうなるって、わかってんだけどな？

「まっ、とにかくくだ！」

第一回目である今日は、旦那の影にいつも侍ってる白陽嬢ちゃんがどう思われてるかを調べてきたぜ！」

俺は秘密空間から白陽嬢ちゃんの姿絵を取り出して旦那に持たせると、わざわざ樟夏の旦那に書かせた姿絵に旦那が感嘆の声を漏らす。

こりや早いところ真桜の嬢ちゃんにカメラ作ってもらって、全員で写真撮んなきゃ駄目だな。俺達全員が写ったのとかかすげえいい思い出になるし、どんな些細なことでも記録に残しておいてやりてえ。魏国のパパラッチに俺はなる！

「当然、俺様が言われたことをそのままやるなんて芸のないことはしねえ。

最近入った面子に対しては、対象である白陽嬢ちゃんからどう思ってるかを聞いてきたぜ」

「上出来だわ。」

そのままでもいいから、報告を続けなさい」

旦那の肩に乗ったままドヤ顔をすると、華琳嬢ちゃんは足を組んで俺の報告を待つ。黒陽嬢ちゃんはその隣に立ち、涼しい顔をしている。

「つうわけで、報告を始めるぜ。」

始めは春蘭嬢ちゃんと秋蘭嬢ちゃんなんだが、春蘭嬢ちゃんは『正直よく知らんが、良い奴だと思ってるぞ。いつもあいつの傍にいるのはずるいと思うがな』つつつてた。春蘭嬢ちゃんとはどうにも関わりが薄いみてえだけど、仲自体は悪くないみてえだな。

秋蘭嬢ちゃんは『冬雲の傍に白陽のような存在がいると思うと心強い。だが、やはり狡いな』だそうだ。春蘭嬢ちゃんに比べりや気質が近いのか、はたまた文官を兼任してる分関わりがあるからか結構親し

いっぱいいな。凧嬢ちゃん達ほど頻繁じゃねえが、サシで酒盛りをしてるらしいぞ」

俺がそこまで言うとは旦那は安心したように息をついて、嬉しそうに笑ってやがる。黒陽嬢ちゃんも心なしかいつもの作り物みてえな笑みじゃないような気がした。

まっ、旦那は白陽嬢ちゃんの間人間関係は特に気にしてる傾向があるし、黒陽嬢ちゃんは口にもこそ出さねえけど白陽嬢ちゃんを含めた姉妹のこととなると結構過保護だ。白陽嬢ちゃんよりわかりにくいだけで、ちゃんと姉ちゃんやつてんだよなあ。そんな中、華琳嬢ちゃんは一人当然と言わんばかりに得意げにしていた。

「んで、桂花嬢ちゃんは『隠密としても、補佐としても過剰なくらい仕事をしてくれてるわよ。非の打ち所がないぐらいにね。』けど、距離が近いのよ』、なんつうかいつも通りだな。こっちも春蘭嬢ちゃんと同じで距離感は遠いみてえだけど、仲は悪くねえな。

張三姉妹の天和の嬢ちゃんが『藍ちゃんと緑ちゃんのお姉さんで、沙和ちゃんの親友！ あんまり知らないけど、すっごい良い子って聞いているなあ』だよ。直接的な関わりこそねえけど、妹達と関わりがあるから悪く思ってるってことはなかったぜ？ 今度、沙和嬢ちゃんを通して交友の輪が広がると思うぜ！

地和嬢ちゃんは『大体姉さんと一緒だけど、やっぱり狡いのよね。』一日ぐらい代わってほしいし、違う目の色とかちいの方が羨ましいことばかりよ』だそう。天和嬢ちゃんと同じで悪い印象はねえみてえだし、口にもこそ出さねえけど体型的な意味での仲間意識もあるみたいだ。地和嬢ちゃんと会わせると、白陽嬢ちゃんもアイドルデビューさせられそうで面白そうだな。

人和嬢ちゃんはずばく考えてたみてえだけど、『最初に会った時お世話になりましたし、とてもいい方だと思います。今度、冬雲さんも交えて食事の席を設けたいです』だってよ。人和嬢ちゃんも悪い印象はねえみてえだし、楽しいと思うぜ？」

俺がそこで一度区切ると、旦那は安堵の表情を苦笑いに変えてやがった。

「皆、狡いって言葉が多すぎだろ・・・」

「それは当然でしょう」

旦那の発言を速攻で二人で返してるんで、俺が口を挟む隙なんてなかった。

まあ、今回は報告だから仕方ねーし、まだ終わってねえんだよなあ。むしろあの華琳嬢ちゃんが旦那と一緒にいて、黙って報告を聞いてくれているのが奇跡にちけえし。今回は白陽嬢ちゃんのみ分だけだけど、人数多いから何度かに分割しねえとなあ。

「報告を続けるぜー」。

霞嬢ちゃんは『うへへへ、風と揃うと可愛くてたまらんわあ。二人揃ってわっしわししたる!』つつて手をわきわき動かして、ちっと人に見せらんねえような顔で笑ってたな。白陽嬢ちゃん自身は霞嬢ちゃんのことを嫌いとは思ってねえみてえだけど、どう接していいか困ってるっぽいな。まあ、あそこまで開けっ広げで好意を示されることなんざさうあるもんじゃねえし、慣れてねえだけだから心配はないと思うぜ?」

風は『風達ではどうしてもお兄さんを守ってあげられない部分があるので、そのあたりのことには本当に感謝してるのですよー。でも、やっぱり距離が近すぎると思うんですよねえ』。まだまだ日が浅いのもあって風とは直接的に関係はしてねえみてえだけど、やっぱり旦那を守ってるって意味で悪い印象は皆無。それは白陽嬢ちゃん自身も同じみてえだぜ?」

稟嬢ちゃんは『黒陽殿とは親しいですが、白陽殿のことはあまり知りません。ですが、黒陽殿は自慢げにかた・・・』。『つてあぶねえ?!』俺を狙って飛来した飛び道具を間一髪のところまで飛んで避けると、黒陽嬢ちゃんが冷たく笑ってやがる。すっげーこえーんだけど?!

てか、一步間違えば旦那にあた・・・んなへましねえよな、ある意味で黒陽嬢ちゃんって隠密筆頭だし。

「稟殿にもお話がありますが、稟殿の言葉をそのまま報告しようものならどうなるか・・・ わかりますよね?」

「いやいやいやー」

俺はただ稟嬢ちゃんの言葉とかを報告してるだけだから！ 俺は全然悪くねーから!!」

いや、確かに普段全くデレることのない黒陽嬢ちゃんが稟嬢ちゃんと仲良くなつて、挙句妹のことを手放しに誉めてたことは意外だったけどな？

そんなことを一言でも口にしたら俺は粉々にされそうだから絶対に口にしないが、別に馬鹿にしたりしてるとかじゃなく、黒陽嬢ちゃんもやっぱり普通の女の子なんだなって・・・

「それ以上、私に関して思考しても破壊しますよ?」

「ひい?!」

「黒陽、勘弁してやれよ。」

宝譚、俺の顔に縋りつくのはやめろ。地味に痛い」

旦那の顔にへばりついてしていると旦那が黒陽嬢ちゃんを諫めてくれた上で、きつちり苦情も言ってくる。おっと、角でしがみつくとやっぱりいてえよな。

「妹を手放しに誉めるあなたは、まだ見たことがないわね。」

今夜、私にも見せてくれるのかしら?」

「華琳・・・勘弁してちょうだい」

手で顔を覆って溜息をつく黒陽嬢ちゃんに、華琳嬢ちゃんは心底愉快そうに笑うのみ。なんつうかひつでえけど黒陽嬢ちゃんも拒まないあたり、華琳嬢ちゃんに惚れてんだろうなあ。

「そんなだから稟嬢ちゃんは白陽嬢ちゃんを悪いようには思ってたねえし、旦那との件で今後は連携を取っていくことになるだろうとか言ってたな。」

季衣嬢ちゃんは『よく兄ちゃんと一緒にいて、何も言わないけど優しい目で見えてくれるいいお姉ちゃん』で、流琉嬢ちゃんは『料理を熱心に学びに来てくださるので、今度一緒に市場に行く約束してるんです』だよ。やっぱり妹もいるからか自分より年下相手だと白陽嬢ちゃんは優しいみてえだ。だから、仲は良好みたいだぜ」

料理を学びに行っている辺りで『愛されてんなあ』という意味を込めて旦那の頬を突つくと、俺が言いたいことを察して顔を赤くして

やがる。

そうやって飽きるほど幸せになりや良いんだよ、旦那は。

全部幸せにして、全部と幸せになっちまえばいい。旦那の我儘なんざ、華琳嬢ちゃんの我儘の前じゃ何ともねえんだからよ。

「んで、ここからは白陽嬢ちゃん自身から聞いたあん時いなかった今の面子に対しての印象とかを報告していくぜ」

結構報告してきたつてのに、ここでやっと折り返し地点だつっうんだからスゲーもんだよなあ。そして俺様の記憶力、超すげえ。

そんな俺の労をねぎらうように旦那が頬あたりを撫でてくれるんで、ちつと疲れが癒えた気がする。野郎の手でも、女の手でも、撫でられるつっう行為自体が嬉しいし、好意の現れだよなあ。

「樹枝のおかまちゃんと樟夏の旦那は一緒くたで『お邪魔む・・・失礼、華琳様と桂花様、冬雲様の弟君であり、最近妹達がお世話になっているようですので今度話し合いを行います』つてつたなあ。嫌いじゃねえけど、やっぱいろいろと目につくところが多いみたいだぜ」  
「いや、おかまちゃんつてな・・・普通に兄ちゃんとか、旦那とか言えよ・・・」

「これでも姉ちゃんと兄ちゃんて迷ったんだぜ？」

「いや、迷うなよ・・・」

譲歩してるし、街の中でも結構おかまちゃんについても聞いたけど、『たまに女装している方』つていう印象が染みついてやがったしな。華琳嬢ちゃんの父ちゃんに至っては完全に主婦仲間に馴染んでて、そういう存在として認められてる。

それにしても旦那を受け入れた件といい、華琳嬢ちゃんの革新的な考えについてきたことといい、ここの民つて心が広いつつうか、受け入れることに慣れてるように感じるんだよな。

案外俺らみたいに民も記憶を持つてんじゃね？ まあ、流石に考えすぎだし、ありえねーだろうけど。

「雛里嬢ちゃんに対しては『趣味は理解できませんが、妹を救っていただいた恩があります。これからも良き友として妹をよろしく願います』だと。妹の友達つっうだけで信頼がおいてるし、雛里嬢ちゃ

んは凧嬢ちゃん達と組むことが多いことを知ってるからな。普段接してなくても、信頼はすげえみてえだわ。

斗詩嬢ちゃんに関しては接点がほぼ皆無で、いにくそうにしてたけど、最後には『冬雲様が救った女性の一人です』だど。嫌いじゃねえし、沙和嬢ちゃんつう共通のダチもいるけど、いまいち話題が合わないみたいだな。

舞蓮姉さんについては油断ならねえと思ってるみてえだから『敵』の一字で、敵意バリバリだったな。まああれは舞蓮姉さんがわりーし、白陽嬢ちゃんに限らず、似たようなこと思ってる嬢ちゃんが多かつたぜ。

月嬢ちゃんと詠嬢ちゃん、千里嬢ちゃん、紫苑姉さん、千重嬢ちゃん、赤根嬢ちゃん、白蓮嬢ちゃん、星嬢ちゃんについてはまだよくわからねえみてえで特に何も言つてなかつたな」

ようやく終わった報告に俺は一息ついて、用意されてたお茶をすれば華琳嬢ちゃんがうんうんと頷き、どうやら俺の報告で満足してくれてたみたいだ。

「よくやつてくれたわね。けれど、今日はここまでいいわ」  
「あいよー。」

とりあえず今回の白陽嬢ちゃんの奴は書簡にまとめて、華琳嬢ちゃんの机の上に置いてあるから読んどいてくれよ」

報告書があるんならそれを渡しやよかつたんだけど、華琳嬢ちゃんは口頭で報告しろつってたからな。

「あら？　あなたの手では筆が持てないでしょうっ。」  
「どうやって書いたかは秘密だぜ！」

んじゃ、今度また報告に来るぜ！」

俺はそう言つて浮かび上がって扉の方へ向かい、旦那に一言いうのを忘れていたことを思いだして振り返る。

「旦那あー！」

「うん？」

穏やかな顔で俺を見返す旦那に、俺はいい笑顔で腕を前に突き出す。

「今夜はお楽しみだな！」

「なっ!？」

下世話なことと言ってないでさっさといけ！ 馬鹿宝譚!!」

「ははははは、そーするぜー！」

馬に蹴られて死にたくねえからな！」

俺は飛んでくる書簡やらを避けながら、次の情報を求めて街へと繰り出していった。

## 秋桜

「秋桜、準備が出来たそうですよ」

友の気配と声に俺はあえて振り向かず、俺の真名と同じ名を持つ木の下でじやれあう猫達を見続ける。

樹上を得意げにする猫、それを心配そうに仰ぐ猫。二匹にかまわず根元で眠る猫。

「秋桜、嬉しそうですね」

「む？　そうか？」

木春に指摘され自分の顔に触れてみるが、表情が変わった様子はない。

「わかるわよく。」

だって、あなたのことだから」

背に抱き着いてじやれつき、俺の左腕から顔を覗いてくる銀葉の頭を撫でる。気持ちよかったのか銀葉は目を細め、さらに俺の体に頭を押し付けてくる。

「銀葉、あまり秋桜にじやれついていると・・・」

「あーら、銀葉。」

私の旦那に羨ましいことしてんじやない？　私も混ぜなさいよー」

「いいや、右腕は儂が貰う！」

「・・・遅かったですね」

背中に小蓮を背負い、左腕に蓮華を抱えた舞蓮と銀葉に対抗するよううに右腕を絡ませようとする祭を避け、すり寄ってくる銀葉を一度抱えて木春へと手渡す。

「ぎゃつー！」

もう！　抱き上げるなら言つてよ！　兄様!!」

「それは悪かった」

銀葉の『兄』という言葉に陽だまりのような温かさを感じながら、俺は桜の方へと歩み寄っていく。

風が花を散らし、足元を散った花々が包み込む。歩むたびに花が浮き上がり、俺の足に絡んでいく。それを見ていると、案外散るとい



ことは物悲しいだけではないと感じる。

「散るもまた在るべき姿、か・・・」

儂さを感じさせながら、散りゆく姿は次代のために何かを成し、残した者達の有終の美。

舞う花の美しさは知っているつもりだったが、儂いものの全てが弱い。いわけでも、個の力で守り切れるようなものではないのかもしれない。

「父様！」

「なっ?!」

「あん?」

桜の木の上から飛びかかってくる雪蓮に冥琳が驚き、柘榴が目覚めますが、雪蓮の飛距離が足りない分だけこちらが歩み寄る。飛びかかってきた雪蓮も俺がそうすることをわかっていたのか、俺の首を支えにしつつ肩へと移っていく。

「雪蓮！」

秋桜様が歩み寄ってくださいったからいいものの、落ちて怪我でもしたらどうする!」

俺の足元で雪蓮を注意する冥琳に舞蓮を注意する祭の姿を重ねつつ、俺はただ肩に乗った雪蓮の好きにさせる。

「そんなへま、しないわよー」

「そんなへまは、ついこの間私の目の前でやったもんなー」

「ちよっ! 柘榴!!」

それは言わない約束でしょ!」

羞恥からか顔を赤くする雪蓮に対し、柘榴が悪びれることはない。

これが俺達の次、か。

「秋桜様?」

向ける視線に気づいたのか、冥琳が俺を見上げ、艶やかな黒髪を梳くように撫でる。

今はまだ未熟なれども雪蓮の武が、冥琳の智が、柘榴の柔軟さが生涯において役に立つ日が来る。道半ばで朽ちたとしても、この子らの道に悔いなきことを祈るのみだ。

「しゅ、秋桜様……！」

撫で続けていると何故か冥琳の頬は赤くなったので手を止めると、安堵するような寂しそうな顔をする。

「飛、翔」  
フエイ ショウ

短く呼びかければ、桜の木から少し距離を取った場所から見守っていた白虎と大熊猫が巨体を起こして近寄ってくる。

二頭は俺の意図を察し、飛は柘榴の首根っこを啜えて自分の背に放り、翔は我が子をあやすように冥琳を抱きかかえた。

「私達そんなガキじゃねーっすよ、旦那」

飛の上で俺から視線をそらしながら柘榴が不平を漏らし、冥琳も同意しようと口を開こうとするがそんな二人の頭に手を置き、黙らせる。

「もうしばらく、子どもでいろ」

雪蓮も、柘榴も、冥琳も既に次代を背負う者としての鍛え、学び、育てられていることは重々承知だ。

そう遠からずして子どもであることを許されぬような選択が迫られ、大陸の光と闇の中を歩いていかなばならない。

だが、今はまだ……俺達の前でくらいは子どもであっていい。

「なら父様は、もうしばらく私専用の物見台ね！」

「雪蓮!!」

「じゃあ、私にもその半分貸せよ」

「柘榴、お前まで一緒になるから雪蓮の行動が……」

「あーあー！ 聞・こ・え・ねー!!」

柘榴は冥琳の説教を自分の大声と耳に手を当てることで聞かない姿勢に入り、雪蓮も俺の右肩によって前へ足を投げ出す。どうやら俺の肩は木の枝と大差ない扱いを受けているようだ。

「いいわよー」

左は貸してあげる」

「おう、あんがとよ」

っーわけで飛の旦那、ちっと飛ぶわ」

言うが早いか柘榴は飛の背から飛んで俺の肩に移り、雪蓮と同じよ

うな姿勢になる。

「まったく、お前らは・・・」

翔の上で溜息を零す冥琳に飛と翔が何故か視線を向け、その後には俺を見てくる。

木春曰く、俺と同じで口数も少なければ、感情をあらわにすることの少ない二頭。

だが、それでも長く付き合っていると行動の意図は伝わってくるものだ。

「翔」

俺の呼びかけに翔が笑った気がしたが黙殺し、腹の上に抱いていた冥琳を俺に差し出してくる。

「しよ、翔殿？ いったい何を・・・ 秋桜様?!」

当然、俺は翔から冥琳を受け取り、左腕は膝裏を右腕は冥琳の背中を支えるように抱き上げる。

子ども三人分くらい支えることは容易だが、これが出来るのは肩の骨が自分で落ちないように調整しているからだろう。

「?!?!」

何故、冥琳が顔を真っ赤にしているのかわからず首を傾げるが、考えてもわからないことは考えても無駄だと切り捨て、先ほどから静かな舞蓮達へと振り返る。

「子どもの特権って、たまに狡いわよね・・・」

「秋桜に妹扱いされとるおんしは、ほぼあの扱いじゃがな。」

友という立場が今ほど憎いと思うたことはないわ・・・」

「でっしよー?」

強くてかっこよくて子守も出来て、獣と意思疎通が出来るなんて・・・ 私の旦那ってば、完璧じゃない?」

「そりゃ、舞蓮あんたと意思疎通できるんじやだから、それぐらい出来るじやろうよ」

「ういふいふ。」

その喧嘩、言い値で買うわよ?」

三人がいつもの睨み合いを始めたのを確認し、もう少し時間を稼い

だ方がいいだろう。木春が最初に言ったように食事の準備は出来ているのだろうか、三人のじゃれあいを邪魔する気はない。

「秋桜」

止めないのかと視線で問うてくる木春に視線を逸らすことで答えとし、俺は肩と腕にいる雪蓮達と飛と翔をつれ、再び歩き出した。

歩き出すといつても別段あてがあつたわけではなく、ただ周囲をうろつくだけ。そうしていると最初こそ顔を赤くしていた冥琳も落ちて着きを取り戻し、俺の腕の中で景色を楽しんでいる。

「ぶー！ 冥琳、そろそろ交代しなさいよー」

「雪蓮の頼みでも、ここは譲れんよ」

「諦めろって、雪蓮。」

今回ばかりは旦那の腕の中は冥琳のもんだ」

楽しげにじゃれあう三人の声を聴き、桜並木を歩き続ける。

「・・・随分、遠くに来たな」

俺達はかつて舞蓮の元に集い、力を手にしていただけの賊と何も変わらない存在だった。

強くなり、多くの豪族達を力で黙らせ、気づけば土地を持ち、管理や維持を行うようになった。当然、力ばかりで全てを黙らせたわけではなかったが、それは俺の管轄外であり理解できぬ領分だ。

「父様？」

力しかない俺の道を、一つの華が彩りを与えた。

友を、妹分を、妻を、娘を、仲間を、部下を・・・ 力以外のものを教え、守るべきものをくれた。

「これが幸福、か」

舞蓮と共に歩む道すがら、何を感じたかわからない心が満ちるという感覚。

「悪くない」

「なーに、一人で浸ってんのよ」

背後からかけられた声にわずかに驚くが、今回は久方ぶりに木春の指摘が通り、じゃれあいも長引かなかったのだろう。

「秋桜！」

花見の宴はまだ始まったばかりじゃ、儂の自慢の料理をしつかり堪能せい」

俺に想いを抱き、背を預けることの出来る友が。

「兄様つてば、子ども達連れてフラフラどっか行っちゃうとかやめてよね。

まったくもう、しつかりしてる兄様まで舞蓮と祭の悪影響受けちゃったの？」

妹のような存在であり、いつの間にか俺を追い抜かんばかりに成長した者が。

「秋桜。」

今回はどうにか止めて見せましたよ」

俺には出来ぬことを補い、影を背負いし無二の友が。

「ほら、行くわよ！ 秋桜。」

あんたは私の隣にいればいいのよ、ずーっとな

最後に俺をここまで引つ張ってきた虎であり、華であり、妻である女が笑う。

ああ、本当に…… こいつには獣のような笑みがよく似合う。

如何なる謀があろうとも私は武人として生きて死ぬ、この人生に悔いはない。

そして、その悔いなき人生を過ごせたのはお前がいたからだ。舞蓮。

もはや告げることの出来ない言葉を心のうちに留め、今日も楽しげに笑い、街を駆け回る姿に思わず笑みがこぼれた。

「それでいい」

じつとしているなんて、お前らしくない。

「思うがままに舞い続けろ、舞蓮」

## 水仙と蓬

「ねー、<sup>スイ</sup>彗ちゃん」

私はいつもと同じように彗ちゃんの隣にいて、笑って、たくさんのことを話す。

って言っても、まだここを卒業してないから行動範囲なんて限られてるし、その辺適当に回ったり、女学院の他の子達の話を持つてくるだけ。

「なあに、よーちゃん」

水鏡<sup>ミカガミ</sup>ちゃんが作った角度を変えられる寝台の上、正ちゃんお手製の肩掛けをかけて穏やかに笑う彗ちゃん。

正ちゃんよりも色の薄い瞳と青と白が混ざり合わせたみたいな綺麗な髪、私の真名に愛称をつけて呼んでくれる優しい声がなんだかくすぐったくなつて、おもわず小さな体を抱きしめる。

「今日は甘えん坊さんなんだね、よーちゃん」

抱き着く私を嫌がりもせずに抱きしめ返してくれる彗ちゃんを優しく撫でてから離れ、彗ちゃんは小さく溜息を零した。

「姉さんも私にこうして甘えてくれたらいいのに」

「あははー」。

そんな正ちゃん想像できないし、もし現場を目撃したら記憶なくするような事されちゃいそー」

「そうかも・・・でも、ちよつと見てみた・・・っ!」

怖い怖いと肩をすくめて見せれば彗ちゃんもくすくす笑つてたのに、突然口元を抑えて激しく咳き込みだす。

「っ!..(っ)ほっ... (っ)ごめ、よー... ちゃ...」

謝りながら、口元に当てた手についている血の存在を知ってるのに、私は見ないフリをする。

彗ちゃんは特別であることなんて望んでなくて、弱い者なんかじゃないから。

望んでるものは私にはわからないけど、私は私らしく彗ちゃんの隣にいて、したいようにするって決めてるもん。

「すーいちゃん」

わざと明るい声を出しながら、私に血がつくことを嫌がつて離れようとする彗ちゃんをぎゅっと抱きしめて、その背中を優しくさすってあげる。

「ゆっくり深呼吸しよー」

ほら、いーち、にーい、さーん」

心配したって、体はよくなならない。

私が狼狽えちゃったら、きつとこの子は無理にでも微笑もうとする。

『大丈夫？』なんて、大丈夫じゃないから苦しんでいる人を前にして言えるわけがない。

「すーいちゃん」

親が子どもをあやすときみたいに背中をたたいて、彗ちゃんの呼吸が整うのをのんびり待つ。

「ありが、とう・・・ごいす」

「ぶー」

友達のけーご、きらいー」

呼吸を整えてる最中なのにお礼を言う彗ちゃんの律儀なところは好きだけど、随分前に治ったと思った敬語が出てきちゃったから、私はぶーたれる。

「お礼とか言いたいんなら、ちゃんと呼吸整えることー」

そのまま息が整うのを待つて、彗ちゃんをそつと寝台に横にしてあげる。寝台を平坦にして、血に汚れた口元は正ちゃんが部屋を出る前に用意してた水桶で布を濡らして拭いてあげる。

「よーちゃん、そこまでしてもらわなくても出来るから・・・」

「ふふふ、たまにはいいじやーん」

苦笑はしても拒まない彗ちゃんにいい子いい子しながら、布をゆすいでかけておく。

「彗ちゃん、寝る？」

そうじゃなかったら、もうちよつとここで話してってもいい？」

「よーちゃんは優しいね」

「そう？ 私は全然優しくくないよ？」

彗ちゃんの言葉を否定しつつ、私はまた寝台の隣の椅子に座って笑う。

「私が話したいからここにいて、本当は休まなきやいけないような子をおしやべりにつきあわせてるだ・け」

「そういうところが、優しいの」

白くて細い手が私の顔に添えられて、その手が気持ちいいから自分からもすり寄れば彗ちゃんもふわりと笑う。

「姉さんも、槐さんも、よーちゃんも、とつても優しい。」

ちよつとわかりにくいかもしれないし、三人とも根は頑固で、言葉も強いかもしれないけど・・・」

「わかりにくくて、頑固で、言葉が強いって、それだけで十分厄介じゃない？」

私が茶化しても彗ちゃんの笑顔は変わらなくて、私の短い髪に触れたがってるのがわかったから椅子から降りて寝台に寄りかかる姿勢に変えてあげる。

「・・・だったら私は、とつても運がよかつたのかも。」

姉さん達の優しさを、私はちゃんと受け取ることが出来たから「そーかなー？」

私も正ちゃんも謹ちゃんも、特別彗ちゃんに何かしている意識はない。

正ちゃんはそもそも自分の内に入った人には優しいし、謹ちゃんだつてお気に入り著者を無下にすることはないし、少しでも長く書いてほしいとか思ってるだろう。

「彗ちゃん、眠かったらちゃんと寝るんだよ？」

「なんなら子守歌でも歌ってあげよつか？」

「んで、それは私も同じ。」

大事な親友が他と同じ扱いなわけがなくて、彗ちゃんと一緒にいることが好きで、話すことが大好き。

「よーちゃんは、夢の中まで私を守ってくれるの？」

「うん、彗ちゃんのことを悪い夢から守ってあげる」



本当に守りたいのは、悪い夢からなんかじやないけど。

「私の歌って、結構人気あるんだよ？」

水鏡ちゃんミカガミと会うまでは、旅芸人みたいなことしながらお金稼いでたくらいだしね。でも、子守歌は彗ちゃんだけ特別」

私の言葉に不思議そうに首を傾げるから、聡いこの子に、自分の気持ちが見えてしまわないように私は笑って言葉を続ける。

「だってお客さんが寝ちゃったら、商売にならないでしょ？」

「私が今日のお客さん、かな？」

「じゃあ、お代は次のお茶の約束で」

私の言葉の最中に彗ちゃんはまた咳き込んで、今度の吐血は私から隠すことの出来ないほど多くて、私はなんてことないように布で拭きとっていく。

「ほら、苦しいならもう寝ちゃおう」

私達は縫って泣くことをしちやいけなくて、病気を代わることも許されない。

神様なんて憎んでもしょうがないし、病気の体を憐れむなんて以ての外ほか。

ただ私は馬鹿みたいに明るくする方法しか持ってなくて、いつものように接することしか出来なくて、それでも私は話したい自分の欲を優先してる。

彗ちゃんは私を優しいなんていうけれど、やっぱり私は優しくなれない。

ただの自分勝手に自己満足、自分一人で完結してしまっている欠陥者。

「うん、ありがとう。よーちゃん。でも、これはどうしようもないものだから」

私の何かを見透かしたのか、彗ちゃんは突然私の頬を引っ張っていく。正直、力なんて全然ないし、引っ張る力も弱くて少しも痛くない。

「よーちゃん、知ってる？」

人って文字はね、一画目を支えるように二画目がくるの」

私が少しだけ目を開くと、彗ちゃんは体を起こしながら言葉を続け

ていく。

「二画目がなかったら文字は始まらなかつたけど、二画目がなかったら完成もしなかつたのが『人』っていう字。

人は一人一画目だけじゃ足りなくて、二人二画目でいたから人になったって考えれば、人は一人じゃ欠陥品なのかもね。一人じゃ何か足りないから他を求めて補って、支えたり、刺激しあったりするって考えたら、人ってとっても素敵だと思わない?」

そう言っただけじゃなく、笑う慧ちゃんはとっても綺麗で、泡か、霧のように透けて消えて行ってしまうような気がした。

雪のような白さをもって冬の終わりから春の初めに咲く華は、周囲に甘い香りを広げていく。儂い容姿と甘く濃厚な香りとは裏腹に、その身に毒を持つ。

私はとつさに慧ちゃんの体をぎゅつと抱きしめた。

「よーちゃん……」

嫌だよ、慧ちゃん。

泡のように消えないで、彗星のように通り過ぎたりなんてしないでよ。

「少し、痛いよ……」

ずっと、ここにいてよ。

ううん…… ここだけじゃなくて、四人でいろんな所に行こう?

正ちゃんも、謹ちゃんもあんなだからいろいろ大変かもしれないけど、きつと四人なら楽しい。

いろんな気持ち溢れてて、ある筈もない未来理想が次から次へと生まれてくる。

「よーちゃん……」

逝かないで、離れないで。生きていて。

「慧ちゃんはね、ここにいてよ」

いっぱいある私の我儘を飲み込んで口に出来た言葉はそれで、私はやっぱり慧ちゃんに笑顔を向けた。

「うん、そう。」

私はここに生きてるの」

長く病魔に侵され、死を受け入れている慧ちゃん女。

「幸せだよ、とつても」

「・・・そっか」

正ちゃんは凄いなあ。

慧ちゃんの自由を殺さずに、自分が納得してないことも、考え方すらこの子の生き方として受けとめてる。

「じゃあ、夢の中でも幸せにしてあげる」

謹ちゃんだって凄い。

一読者として慧ちゃんを支えて、慧ちゃんの書を広めるためとか言って写して、著者としての慧ちゃんの名を広めようとしてる。

「ありがとう、よーちゃん」

ゆつくりと眠る体勢に入っていく慧ちゃんの隣で歌を歌いながら、その温もりが消えてしまわないように手を握る。

いや、ちよつと違うかな。私が自分の気づかないうちに、この温もりが消えちゃうことが怖いんだ。

でも多分、私は慧ちゃんの最期を看取ることは出来ないし、何もしないで女学院こにいるなんて駄目。何よりも慧ちゃんがそれを拒むだろう。どれだけ私の意志だつて言ったとしても、これはきつと認めてくれない。

「慧ちゃんも正ちゃんに負けず劣らず頑固だからなー」

慧ちゃんの寝息を確かめてから、私は座っていた床から立ち上がる。

安らかに眠る慧ちゃんはやっぱり綺麗で、少しの間見惚れてから髪を乱さない程度に撫でてから離れる。

「慧ちゃん、良い夢を」

女学院を卒業してから私は謹ちゃんに続いて女学院を出て、あちこちを渡り歩いた。

足の向くまま気の向くまま、自分の好きな物を布教したり、旅芸人をしたり、時には商人の護衛として雇われたりもした。

そこから女学院にいる慧ちゃんと正ちゃん宛てに手紙を書いて、そ

れだけじゃ味気ないから植物の種を適当にとつては水鏡ミカガミちゃんの伝書鳩に持たせた。

そんなやり取りをしながら同じ季節が二度巡った頃、その知らせは訪れた。

書簡の見える位置に書かれた正ちゃんの字。

「あーあ、ついに来ちゃったか」

書簡を開いて流し読めば、彗ちゃんが亡くなったことが簡潔に書かれてて、実に正ちゃんらしい手紙だった。

「彗ちゃん」

この大陸のどこにもいないあの子のために、流す涙を私達はもう持っていない。

だって、あの子は泣くことなんて望まない。それに破ったら正ちゃんと謹ちゃんにきつついお仕置きされそうだしねえ。

「彗ちゃんはね、ここにいろよ」

だから、私は笑う。

彗ちゃんが残したものを私達は確かに知っていて、それぞれがちやんと受け取ったから。

「でも、彗ちゃんの二胡が聞けないのはちよっと寂しいなあ」

## 擘扇と槐

ほとんどのものが近寄ることのない庭の離れ。

私はいつものように階段を上り、いくつかある部屋の内で日当たりと景色のいい部屋の扉を叩く。

「擘扇、入らせてもらおうわよ」

「どうぞ」

部屋の主の許可をもらって入室すれば、彼女は寝台の上に小さな机を置いて何かを書き綴っていた。

「おはようございます。槐さん」

「そのまま続けなさい」

私が告げた言葉に一瞬彼女は驚くけれど、すぐに意味を理解して置いた筆を持った。

「ふふっ、ありがとうございます。」

もう少しできりがいいところまでいくので、そこにあるのは良ければ読んで待つててください」

「ええ、そうさせてもらおうわ」

書き手として机に向かう彼女に私は窓際に置かれた安楽椅子に腰かけ、おそらく考えの段階で筆が止まった書きかけの書簡に目を通していく。

恋愛や軍略にも似た物語、架空の世界・生物を描く物から大陸に実際にあるとされる旅行記、人物の心情に重きを置いた作品以外に、あえて淡々と記された物語など本当に様々。書簡という束になつていない一本の棒きれのようなものには、彼女が日常で感じたことを書いた詩が描かれていた。

自分を試すように様々な文体で書かれたそれらを、たった一人の少女が書いたなど多くの者は信じないだろう。けれど……

私は物語から視線を上げ、彼女を見る。

集中する横顔は姉の法正によく似ていて、いつもは優しく映る顔が少しだけ厳しい。にもかかわらず、目の前の物語に集中しているのか彼女の手が止まることはなかった。

「楽しそうね・・・」

この子の目に世界はどれほど美しく映っているのか、どんな鮮やかな色をしているのか。それらは問うまでもなく、全て物語へと現れていた。

世の悲しみや理不尽、無常や虚しさを知っている筈のこの子が、どうしてこんな世界を書けるのだろう。

「はい。」

だって、槐さんがそこに来てくれますから」

かえってくると思つてなかった言葉と、その言葉の不可解さに私は思わず目を開く。

「は・・・？」

私が正気を疑うような視線を送つても、慧扇は他の子達のように視線を逸らすことも、逃げることもなく、いつものように微笑む。

「だって、一番好きなことをやってるだけじゃなくて、それを読みた作品がってくれる人愛好者さんがそこで待っていてくれるんですよ？」

嬉しくて、楽しくて、幸せすぎてどうにかなっちゃいそうです」

訂正、その微笑みはいつも以上に緩み切っていて、私は椅子から立ち上がり彼女の額を指で弾いた。

「痛いですよ、槐さん」

「痛いようにしたのだから、当然でしょう？」

額をさすつて痛みを逃す彼女に、私は肩をすくめながらいつもは平が腰かけている椅子へと座った。

「私といて楽しいなんて言うのは、あなたぐらいなものね」

「そんなことはないですよ。」

よーちゃんも、姉さん口には出さないだけでそう思ってます」

あの二人が、ね・・・

今も敷地内のどこかで何かをしゃかしているだろう同期生を思い出し、私は彼女の言葉を鼻で笑う。

「口に出さない思いが本当なんて、誰も信じないわ」

「形に見えない世界を書くのが、書き手の務めですから」

どこか誇るように胸に手を当てて応える慧扇の額をもう一度弾い

てから、頭を掴んでそのまま揺らす。

いくら拒んでも、どんな言葉を向けても、彼女は私から逃げない。それどころか彼女の物語は私を魅了し、私を手の中に納めてしまった不思議な子。

「本当に、あなたは不思議ね・・・」

真っ白な肌と細い体、発作のように血を吐いて、恐怖する筈の死と隣り合わせでありながら、彼女はその死を運ぶ死神にすら微笑みを向けている。

「あなたを見ていると・・・」

居る筈もない死死を呼ぶ存在すが、泣いているように見える。

「見ていると、なんですか？」

物語の中こそ美しいと信じてやまない私にも、世界が綺麗だなんて思ってしまうそうになる。

「あなたにどうして物語が書けるのか、不思議でしょうがないわ」

けれど、それは言葉になんてしてあげない。

聞きたいのなら、どうかわたしを変えてみせて頂戴。

「ふふっ、私もそう思います。」

こんな私からたくさんの物語が生まれてくれて、たくさんの子達が出てきてくれる。見たこともない景色が頭の中にあって、もつと見てみたいことが溢れてしやうがないんです」

年相応に瞳を輝かせて語る姿はこの子の書き手としての姿で、人を楽しませる以上に自分が楽しんでいることがよくわかった。

「けど、私が書き手として在れるのは槐さんのおかげなんですよ？」

「はあ・・・」

再び不可解なことを言われ、私はわざとらしく溜息をつくことを答えとした。

「私はあなたの書く物語が読みたいだけ、それ以上でも以下でもないわ。」

正のようにあなたに付き添い続けることも、平のようにあなたのことを友として思いやることも出来ないし、していませんしよ」

私があざわが離れに足を向けるのも彼女の書いた作品の一部を讀

むためにすぎず、妹と土元が書いたのを持ってくるのも新しい書き手を読み手として増やしたいだけに過ぎない。

あえていうなら、正も平もこの子に対して異様に甘く、やや過保護と言ってもいい。

『読みたい』って、思ってくることが嬉しいんです」

ついさつきまで書いていた書簡を愛おしげに見つめ、書簡の端を撫でながら、彗扇は頭を押さえたままだった私の手を掴む。

触れてみれば冷たいと感じる手の指は細く、非力な私ですら強く握ったら折れてしまいそうなほど儂いというのに、指先には胼胝がついていた。

「私だけの物語が……いいえ、私と姉さんだけで終わってしまったたかもしれない物語を、槐さんが広げてくれたんです」

違う。それは違う。

あなたが書いていたから。あなたが私に差し出してくれたから。あなたが私に手を伸ばしてくれたから。

あなたが私に向き合い、正があなたをつれてきたから、あの平の居場所を与えてくれたから。

「泡沫の名をくれたのは水鏡先生スイキョウですけど、『泡沫水仙』を書き手にしてくれたのは槐さん、あなたなんです」

「やめなさい！」

私の言葉に彗扇は驚くことはなく、むしろ私自身が自分の出した声の大きさに驚いていた。

けれど、私の口は自分の意志に反するように言葉を止めることはなかった。

「私がああなたの想いの一因になっていたとしても、あなたに書くことを願ったことが力となっても！　あなたが書いていたから私はそう思えた!!」

ああなたの描く世界が素晴らしいと、あなたの言葉が、文章が私にそう思わせたのよ！」

鶏が先か、卵が先か。生き物はそうだったとしても、書き手と読み手はそうではない。



書き手が生み出したからこそ、読み手は物語を手にする事が出来ていた。

「あなたは自分が優しさに包まれていると、幸せだというけれど、それは正しくもあり、間違ってもいる。」

あなたがいたから、私達があなたの生み出すものを感じていたいと思ってるからそう在りたいのよ！」

優しさなんてものも正も平も、ましてや私すら信じないし、認めない。私達の行動は自分のためであり、他の誰かに尽くすための手段ではない。

人に尽くすなんて殊勝な思いを抱くような人間は、女学院にいるにはあまりにも弱すぎる。

「私達は、あなたがいたから人間らしさを捨てずにいられたのよ……」

家族に興味がなく、物語に全てを捧げんとする私。

家族もなければ、繋がりもない。自由というより虚無に近い平。

己の道を通し、他者を認めるからこそ遠ざかる正。

「それでもね、槐さん」

こんな私にすら、この子は平気で触れてくる。体にも、心にも触れて、私が人間であることを思い出させる。

嫌悪や嫉妬を抱いた時もあった。けれど、それ以上に心地よいと感じてしまう己に気づかされた。

「槐さんが言うような私で在れて、笑っていられるのはやっぱり皆のおかげだから」

透き通るような瞳は死すらも受け入れて、それでもなお生を諦めることはなく、懸命に生きようとする姿も。ただ生きているだけで、私達のような人間すら心地よい居場所となれることも。私にはひどく眩しかった。

「槐さん、泣かないでください」

「これはわたしのじゃないわ」

私の顔に触れている彼女の指先がわずかに濡れているが、私はそれを自分のものとは思わない。

「これはあなたのものよ」

もつと、生きたい筈なのに。

もつと、書きたい筈なのに。

もつと、傍にいたい筈なのに。

「聡すぎるが故に夢すら見ずに全てを受け入れてしまったあなたが・・・本来なら流すべきだったものよ」

多くの物語を描きながら、この子は自分の夢も、理想も語らない。『死にたくない』と叫ぶことも、『楽になりたい』と望むことも、何もしてはくれない。

「・・・っー」

喉から今まで一度も出したことのないような声が漏れだし、椅子に座つてることが出来ずに寝台に寄りかかるように体重をかける。

「どうして、あなたなのよ・・・！」

何故、この子が死ななければならない？

どうして、他の誰かじゃなかった？

何で神は、この子を私達から奪うというの？

「槐さん・・・」

「私はただ・・・」

あなたの作品を、ずっと読んでいただけなのよ。

それだけなのに、それすら叶わない。

あなたの命を、ここに留める手段が見当たらない。

「槐さんの真名って、縁起がいいですよね」

子どもをあやすように私の頭を撫でながら、彗扇は突拍子もないことを言い出す。けれど、私はこの子の言葉に耳を傾け、彼女が紡ぎだす空想に期待していた。

「だって、エンジユですよ？」

『寿』命を『延』ばしてくれそうで素敵ですし、咲かせる黄色の花は上品で見ている側をとつても幸せな気持ちにしてくれるんです」

あたかも私がそうであるかのように告げる彗扇に肯定も否定もせず、彼女の分の涙はまだ止まらない。

「あなたと過ごした日々が、私の命を伸ばしてくれたんです」

「槐、入るぞ」

扉の前から聞こえた冥琳の声に私は許可を出すことも、視線を向けることもなければ、顔を上げることすらしなかった。

「お前に手紙が来ていた。」

『法正』という名に聞き覚えはあるか?」

「ええ。」

既に中身は確認済みなんでしょうから、内容だけを簡潔に言ってくれないかしら?」

「知っていたとしても、私が告げるべきことではないな」

はぐらかすこともなく手紙をわざとらしく私の机中央に置く冥琳を睨みつけ、私はあえて書簡を開くことはなかった。

「開かないのか?」

「冥琳、あなたは人を一生生かし続ける方法を知っているかしら?」

私の突然の問いかけに冥琳は驚くが、どこかの虎によって無茶ぶりに慣れていることもあり、すぐに答えを出した。

「不老不死は人の夢だが、わからぬからこそ夢なのだろう」

「・・・そうね。」

用が済んだなら、さっさと虎の世話に戻った方がいいんじゃないかしら?」

昨日、いつもの木の付近で密談する虎が二頭ほどいたそうよ」

「何だと・・・?!」

血相を変えて部屋を飛び出していく冥琳を見送り、机の上に置かれた手紙を開かずに撫でた。

「あなたの命を、私は終わらせないわ」

## 紅火 【紅火視点】

「んじゃ、まずはお互いの得物はこれねー」

王平隊長にそれぞれ投げ渡されたもんは、あいつが『木刀』とかいう片刃の剣を模して木を削ったようなもんで、俺はそこらにある樹の枝だった。

「王平さん？ 王平さんって俺のこと馬鹿にしてます？」

「馬鹿にしてるっていうか、現役武将と現役君主の模擬試合なんだから相応の手加減だと思っよう？」

周倉ちゃんはなんか文句あるー？」

「俺はねーっすよ。」

右手一本で相手するつつつたし、審判は王平隊長なんすから任せます」

王平隊長に噛みつく君主様は放って置き、俺は何度か枝を振ってしなり具合と強度を確認する。

あれをまともに受けて防ぐとかは出来なさそうだな。まっ、どーせ俺の戦法じゃまともに相手の得物を受けてやることなんざ滅多にしねーんだけど。

「二人揃って馬鹿にしゃがって・・・」

「むしろ、俺を馬鹿にしてんのはお前だろうが」

ぐちぐちぐちぐち言う君主様に俺は苛立ちのまま枝を向けて、一瞬風を切るような音を立てて集まってきた暇な兵ともども黙らせる。

「お前がどこで武を習ったか知らねーけどよ。」

んなもん、知ったところで大して興味もねーし」

つうか俺自身、こいつがこの大陸じゃないどこかから来たなんて信じてなんぞいない。あいつが着てる服がこの大陸以外のどこかになんかという確証もねーし、知識やら歴史やら宣っていることが全部出鱈目だったのも十分ありうる。

口からいいもんだけを吐き出して金をとる奴なんざ巨万ごまんと居るし、体すら狙ってくる奴だって少なくてええ。

「お前にとつちや俺なんてつえー愛紗様達にも及ばねー弱い奴かもし

れねーし、実際俺はこの中で一番よえーよ」

愛紗様にも、愛羅様にも、鈴々殿にも、華雄様にも、王平隊長にも俺は届かない。

自分が一番弱いことなんざわかってるし、だからこそこいつにもどっかで舐められてることも知ってる。

「けどな、お前はわかってねーよ」

生きるために奪って、生きるために襲って、生きるために強くなつた。

そんな俺の背中には気づけば他の奴らがいて、そいつらを養うために強さを求めた。

そこに誇りも、義も礼も、頭も夢も必要ねーし、ここに生きていることに意味がある。

「俺がどんだけ生きることには貪欲で、強さにどんだけ焦がれたか」

強ければ奪われない。強ければ飯に困らない。強ければ、明日を生きていける。

泥をすすつても、草の根をかじつても、誰かを殺して奪つても、罵られても、それは絶対だった。

「俺の武は生きる術で、お前の武は生きる道。」

術として身につけなきゃ生きていけなかった俺と、道として志して別にしなくても生きていけたお前じゃ必死さがちげーんだよ」

こいつが語る夢物語のような世界が妬ましかった。

「紅火・・・ お前・・・」

君主様はなんか驚いてつけど、知らねーな。

「愛羅様がお前を見限らない限り、俺はここに居る。オメーが君主だつっうなら、最低限の礼儀も払う。」

それでも俺はお前に心酔したことはねえし、する気もねえ。あの毒舌女と同じ意見になるのは癪だが、現実味がまったくない夢が実現するとも思っただけよ」

生きることが当たり前で、よほどのことがなきゃ飯にも困らない。水にも困らねえし、ただの切り傷で死ぬ心配もねえ。誰かのもんを奪う奴がいたり、誰かを騙したりする奴はいるらしいがそれも半ば愉快

犯。必要だからじゃなく、楽をしたいからやる塵共だ。

「俺とお前は相いれねえ。」

お前がどうあがいてもそれは変わらねーし、俺も変える気はねえ」  
これは嫉妬で、こいつの弱さを許せない俺の身勝手な感情。

でも、人間てのはそういう生き物だ。知<sup>もん</sup>つてか知らずか自分の我だけを通して、他を押しつけて生きていく。

「俺は、俺の惚れた強さについていくだけだ」

愛羅様がいたから、俺はここに居る。それ以上でも以下でもなかった。

「周倉ちゃんがここまで北郷としゃべるのつてめつずらしー」

「あつ、すみません。王平隊長」

試合だつてことは忘れてなかったが、王平隊長についてはすっかり忘れちまつた。周りの奴らも俺が話してる時は意外と静かだったし、それどころかなんか気合の入った眼をしてやがる。演習ん時もそんなくらいの顔しろよ、お前ら。

「いいよ、別に。」

だつてそれ、周倉ちゃんの本音だろうしー」

笑顔を張りつかせたままの王平隊長は俺と君様を交互に見つつ後ろに下がり、俺達の間を遮るように右腕を下ろした。

「決まり事は特になしで、周倉ちゃんは勝手に右手しか使わないつて言ってるけどそれは決まりじゃなくて勝手な宣言。得物しか使っちゃ駄目なんてこともないし、場所も時間の制限もなし。勝利条件はどつちかが得物で一撃入れたらでいいよね？」

私が腕を上げて、声をかけたら始めてねえ。」

俺達が頷くのを見れば、王平隊長は満足そうに笑つて片目を閉じた。

「はい、どうぞ」

言葉と同時に拳がった右腕に俺はあいつとの距離を詰め、枝が折れない程度の力で袈裟切りをするように叩きこむ。

「!? はやつ・・・!」

「チツ」

驚くあいつの顔なんざ気にもせず、初撃を受けられ舌打ち。それにかまわず、俺は勢いに任せて同じ速さで何度も打ち込んでいく。

「え、ちよっ・・・この速さな・・・?!」

間一髪で受けられていることに驚くが、目で追い切れてるかは怪しいとこだな。来るところに当たりを付けてるのか？ いや、最初の形が他の行動をとりやすいようにしてんのか？ だとしたら、この形を崩さなきゃいけないーか。

「オメーがおせーんだよ」

一度距離を取り、軽口を叩きつつ考えを巡らせる。

だけど、形を崩すのは片手で行けるか？・・・いや無理だな、右手の範囲だけで死角はつけねーし。

あいつの方へと視線を戻せば、あいつはすぐさま形を最初の物に戻してやがる。習慣になつてる以上、連撃じゃねーとあいつの形は崩せない。なら、正面突破やめっか。

「紅火は誰かを好きになつたりとか、夢中になつたりとか、しなかつたのかよ！」

言葉と同時に単純な動作で木刀をふるってきたので、俺は横に避けつつ、足をかける。

「好きになるほど強い異性を見たことがない上に、生きること必死だった俺に他の何かなんざなかつた。

そもそも！ 他の何かが出来るだけの余裕がある奴は、山賊になんざならねーんだよ！」

恋だの、愛だの、家族だの。お洒落だとか、物に拘るだとか、そんなもんは余裕のある奴の特権でしかない。んな余裕、俺には端からなかつた。

言葉と同時に、俺の足を飛び越えながら通り過ぎていく奴の頭をめぐがけて杖を振る。背後から卑怯？ 背中見せる奴がわりーに決まってるだろ。

「あつぶな！」

とつさに体を倒して避けるが、馬鹿かこいつ。

「倒れた相手を攻撃しないなんて、誰が決めたんだろうなあ！」

倒れた君主様目掛けて、俺は一切の容赦なく杖を振り下ろし、木刀で受けている部分から真逆の方向や何度も執拗に同じ場所を打ち込んでいく。

が、体を回転させて逃げることで奴も逃げ、俺から距離を取って立ち上がってみせた。

「俺はあるんだよ！」

俺には何か足りなかったのかもしれないけど、俺は・・・俺は法正さんのことが本気で好きだったんだ!!」

「お前のその言い方が・・・！」  
足りない？

そのお前に好意を抱いてる人がいるってのに、『足りない』つつたか、この野郎。

「下らねえって言うてんだよ!!」

苛立ちのまま、再びあいつとの距離を詰めて、奴が握ってた木刀ごと腹へと蹴りを叩きこむ。木刀に防がれはしたが、俺の目的は腹への攻撃じゃないから十分だ。

「いったいどこが・・・！」

「てめえは、そいつについてるもんだだけで好きになつてんのか？」

強いだけの奴なら、巨万といた。

純粋な力という意味でも、権力という意味でも、金つつう経済的に有利なもんで金と食糧で働いて、なおかついつ捨てても代わりがいるような俺ら山賊を取り込んで子飼いにしようとした奴もいた。

その中で俺は自分が負けて、今とは違ってどこか影を背負った愛羅様についていくことを選んだ。

「美人で、頭のいい、武だつて申し分のねえ。大勢の部下連れて歩いて、判断力もある。なおかつ人を伸ばすことがうまくて、どんな奴にだつて友好的に話す奴がいたら、誰も彼もがそいつに恋をするのか？」

「それは・・・」

「んで、だ」

俺はもう一度、今度は脇腹目掛けて蹴りを叩きこむ。



再び木刀で防がれて足が痛むが、こんなもんは試合でも当たり前だ。

「それを全部なくしたら、そいつに恋してた奴らは消え失せんのか？」  
「！」

「オメーが言ってるのはそういうことつたる？」

鼻で笑って君主様を見下せば、何も言えずにあいつは俺を見ているだけだった。

「自分が悪い？ 足りない？ もっと早く想いに気づけば？」

俺からすりや全部、ただの言い訳に過ぎねーよ」

振られた奴が振った奴の顔色窺って、自分を見てくれるのを期待してるようにしか見えねえ。

「別れて自覚する想いを、恋だの愛だの言うんじゃねえ。

そんなもんは、落とした菓子に大泣きするガキと変わらねーんだよ」

「うっわ、周倉ちゃんきつっー。

ていうか、恋したことのない周倉ちゃんがそれ言うんだ」

外野つうか、王平隊長が笑ってる気がするが、気にしない。

「誰かの傍に居たいと思うことに理由や利益を求めたら、俺はいつか離れる自信しかねーっすよ」

実際、俺の部下にもそういう奴がいなかったわけじゃあない。

俺がすべてを成功していて、ついていけばそれだけで食うに困らないと思っただけ利益だけを求めた馬鹿どもは俺から離れ、今はどうしてるかもわからない。

「失くして初めて大事にすりゃよかったなんざ、遅すぎんだよ」

愛羅様がそうだったことは知ってる。その上で、愛羅様が後悔したことも知ってる。

けど、大事なことを知らないまま失ったことよりも

「大事だってわかってんのにそれでも守るだけの力がなかった馬鹿なんざ、この大陸に溢れてんだよ」

英雄のような存在は、どこにでもいるわけじゃあない。

全員が全員、自分の大切な者を自分の身を挺してまで守れたわけ

じゃない。

誰かが救いの手を伸ばしたわけでも、神がかり的な奇跡が起きたわけでもない。

「紅火は・・・誰かと別れてきたのかよ？」

奴が動こうとすれば俺はいつでも蹴りを入れられるように足を動かす。そうすれば、奴の動きは自然と止まる。

「過ぎ去った日を振り返る余裕なんざ、俺にはない。

振り返ったところでそこにあるのは、一面の焼け野原さ」

何もない以上、振り向く意味もない。

なら、力を求めて前を向いてた方がずっと有意義だ。

「で、だ。

結局のところお前は、あの女に抱いた憧れだか尊敬だかの想いを愛紗様に向けられた恋心と同じかもしれないって思っていてえだけだろ」

俺が常々思っていたことを正直に言葉にすれば、さつきとはまた違った意味で場が凍り付く。けど、まったくかまわない。

「それは・・・そんなことは！」

「なら、どうして今も迷ってる？ どうして愛紗様の想いを断らない？」

愛紗様はこいつしか見てない。こいつ自信が足りないとか抜かすもの、全てをひつくるめて好んで。だからこそ、俺は気に入らない。

俺はそこで枝が折れることも気にせず、あいつの頭目掛けて枝を振り下ろす。

「お前の居たところじゃ」

木刀で防がれるがかまわない、隙が出来るまで叩き込むだけだ。

他人から欠点すら含めて愛されてるなんて幸運を幸運と思わず、どこか当たり前とすら思っているように見えたこいつが気に入らなかつた。

「そんなに全てが幸福だったのかよ！」

必要とされることが当たり前なのか？ 生きることが当たり前なのか？ 愛されることが当たり前なのか？ 誰かのために生きることが当たり前なのか？

「・・・!!」

学べるだけの身分が、商人の血が、士官を相手にされるだけの相応の地位が、夢物語のような人生全てが俺には妬ましい。

こいつらは俺には、俺らにはどうあがいても手に入らないものを生まれながらに持っていった!

「けどな! お前が今生きてるのはここだ!!」

明日生きてる可能性も、全てがうまくいく保証もどこにもない!」  
枝が折れ、俺は宙を舞った枝の先端を左手でつかみ取る。

「過ぎた後悔する暇あったら、行動してから後悔しろ!

その上で、行動した奴の想いをよく考えやがれ!!」

出来なかつたことばかり、やれなかつたことばかりを数えたって何も出来ないままだ。

失敗した<sup>後</sup>ことばかり気を取られて、また足元がお留守になつて同じ失敗を繰り返す。そんなもんに意味はない。

「愛紗のことは考えてるよ!」

受けばかりだった木刀がついに俺の枝を弾き、驚くだけだった奴もようやく声を大きくする。

「けど俺は! 俺はまだ何も・・・!」

「出来てねーんなら、とつくに全員見限つてんだよ! カス!!」

頭の良い上の連中が、いつまでも何も出来ない奴の傍にいるわけがない。そこで審判やつてる王平隊長がいい例だ。

少しずつ守りだけだった木刀が攻めに代わってきてるが、おせえ。その上真つ直ぐすぎて狙いが丸わかり。

「てか、正ちゃんはやるべきことをやってから帰つたつて言つたじゃん。

これで『何も身についてませーん』とか言つたら、失笑もんなんだけど?」

「そう、だけど!」

まだぐじぐじと続けようとする奴に、俺はついに木刀を弾き飛ばすことに成功した。両手を頭の上にあげた状態でから空きになった胴に枝を叩きつけ、その場に跪く奴を見下ろした。

けど、結果的には俺の負けみたいなものだった。

「左手使っちゃったねー、周倉ちゃん」

「チツ」

反射的に左を使って、宣言通りに加減できなかった時点で俺の負け。

何より、試合だつつうのに熱くなりすぎちまったのも馬鹿丸出しだ。

「お前らにこの大陸がどんな綺麗なもんに写ってるかは知らねーし、命がただだけ眩しく尊く見えてんのかもわからねえ」

消えて当たり前で、殺される前に殺せ。生き抜くためなら手段を選ばない。それが底辺にいる俺達の日常。

血に塗れたぐらいで悲しみに暮れる奴が兵なんてやれねーし、生きることには貪欲にならない奴に明日はない。

「けどな、『変えたかった』じゃ、お前の夢は一生叶わねーよ」

そういつて俺は周りの兵を散らすためにそいつに背中を向けて、吐き捨てる。

「北郷、俺<sup>底辺</sup>らを幸せにしてみせろよ。」

それがお前らの言ってる夢の形なんだろう？」

理想を夢に進むこいつに愛羅様が賭けたんなら、俺はついていくだけだ。

## 策士 【朱里視点】

「やつほー、孔明ちゃん、玄德ちゃん。」

袁術軍撃退の報告書提出ついでに世間話でもしない？」

扉の前で入室を知らせることなく、右手に報告書、左手にはお茶とお菓子持った王平さんが入ってきました。

え？ 両手がふさがってるのにどうやって扉を開けたですって？

いいですか、あの王平さんですよ？ 女学院に通っていたにもかかわらず文官じゃなく武官になるような脳筋ですよ？

「朱里ちゃん、そっち終わった？」

「あ、はい。もうすぐ終わります。」

それからこの辺りは後でご主人様に届けた方がよさそうですね」

「ああ、名士さん達からの奴だっけ？」

私が行った方がいいかな？ それとも誰かに頼んじやっても平気？」

「いえ、私が行きます。」

ご主人様の発想から生まれた商品について、いくつか報告がたまっているのよ」

個人的に言いたいこともありますし、成果の報告もかねて私が行くとしましよう。というか、桃香様も王平さんのことを完全に無視するとか、随分強くなりましたよね。」

「うーん、玄德ちゃんの成長を見守りつつ、正ちゃんから若干影響を受けて黒く育っちゃったことは複雑かなー」

「その影響を与えた人の自称親友（さん）に言われても」

仕事をひと段落させてから王平さんの方に視線を向ければ、既に窓際に置かれた小さな机にお茶会の準備が整えられていました。

普通に有能の筈なのに、普段の行動が全てを台無しにしてるなんて惜しい人ですよね・・・」

「あはははー、孔明ちゃんってば思ってることが全部顔に出てるよ？」

でも、完璧な人間がいたらそれはそれで一步距離を置いちゃうと思っうけどね」

「王平さんが狙ってる英雄さんは完璧な方だと思えますけど・・・？」  
自分の席の周りをわかりやすく整理してから窓際に向かえば、桃香様もどこからかとりだした干果を手に席に着くところでした。

「朱里ちゃん、曹仁さんの話なんてしたら、王平さんの年上語りが始まっちゃうからやめようよ。」

それで王平さん、いつもはほとんど寄り付かないこの部屋に来るなんてどうかしたんでうすか？」

「否定はしないけど、玄德ちゃんってば本当に強かになったよねー。まあいいけど。」

それより聞いてよ、昨日あったことなんだけどさー」

褒めているのかよくわからない感想を言いながら、王平さんは先日あつたご主人様と紅火さんの模擬試合について語ってくれました。もつとも王平さんが言っているので多少大袈裟に語っている部分もあるんでしようけど、それを差し引いたとしても・・・

「でさー、孔明ちゃん。玄德ちゃん。なんか知らない？」

続いた言葉に少しだけ驚いて王平さんを見れば、さつきまでと変わらずににこにここと笑ったままでいまいち何を考えてるのかがわかりません。

基本脳筋の癖に時々妙に鋭い所があるから苦手なんですよ、この人。

「言葉の繋がりがわからないんですよ？　王平さん」

「疑問は話題から突然切り込んでいくものだから繋がるようなものじゃないし、むしろ断ち切るものだよ？」

桃香様も桃香様で笑顔のまま私達のやり取りを見てますけど、あなたも当事者の一人ですからね？　他人事にしないでください。

「だって、考えてもみてよ。」

いくらここを袁術軍が攻めてきたって言うてもあつちは全兵力じゃなかったし、ぶっちゃけそこらの野盗が一回り大きくなったぐらいの兵力しかなかった。それに対して関羽ちゃんと関平ちゃん、華雄ちゃんっていう人選はいくら何でも過剰戦力じゃない？」

人のことを指さしつつも、王平さんの口は止まらない。

「北郷は自分が指示したとか言ってたけど、実際のところはどうかかなーって。」

それにさつき話した模擬試合の時、なんかやたらと十人長や百人長が暇を持て余して観戦しに来てたんだよね。まあ、さつき話した面子だったら兵の数なんてそんなにいらないし、そうすると彼らが暇になるのは当然と言えば当然なんだけど・・・流石に兵の配置に偶然っていうのは無理があるよね？」

・・・ここまでわかっているなら答えわかっているようなものじゃないでしゅか。というか、わかかって悪乗りしたなら、王平さんの方がずっと性格悪いですよね。

「そうなんですよ、王平さん。聞いてください。」

朱里ちゃんの黒い企みのせいで私の仕事が増えちゃって増えちゃって。いつもなら十人長さんとかがやってくれる兵士さん達の装備とか全部私がやることになっちゃったんですよ」

「私だけのせいにはしないでください！ 桃香様!!」

あたかも自分は被害者のように語る桃香様共犯者に注意すれば、桃香様は舌を出して悪戯気に笑うばかり。

ですが、文句を言う割にはちゃんと仕事はこなせてましたし、予想よりも私の負担も少なく済んでいたの、これに関しては仕込んでくれた法正さんに感謝感謝です。

「あはははー、やっぱり仕組んでたんだ。」

さっすが孔明ちゃん、水鏡ミカガミちゃんに褒められてただけはあるね」

「私だけの策じゃありませんし、大体先生にちゃん付けしないでくださいってあれほど・・・!」

「そりゃそうですよ、王平さん。」

文官仕事やらなかったり、策を考えない朱里ちゃんなんて、ただの八百一本作家じゃないですか」

女学院時代から何度言ったかわからない言葉を繰り返そうとすれば、そんなことはお構いなしに桃香様がしやしり出てきて、失礼な発言していきます。

本当にいい覚悟してますね、桃香様。世の中には男体化というもの

がありました、女性をわざわざ男にして妄想・・・ もとい空想世界を広げる方法があることを次回作にてお見せしましょうかねえ！

「玄德ちゃん、『胸がない』が抜けてるよ？」

「ああー、『身長が低い』もでしたね」

二人揃って手を叩いて頷き合っていますが、絶対に登場人物として書き綴って差し上げましょう。生粋の自由人に主人公が弄ばれたり、幼馴染で気の置けない存在だった親友に襲われる主人公とか書いてあげますよ！ ええ!!

「頭の栄養が揃って胸と背にいつた挙句話題にしている企みに一枚も二枚も噛んだ方と、察していながら煽った方は言うことが違いましたね！」

「あはははは。私が馬鹿なのは認めるけど、それはないかなー。

だって謹ちゃん、頭いいのにそこそこ胸あるしー」

「法正さんは胸はあんまりありませんけど、身長高いですもんね」

「いやいや、正ちゃんはサラシを巻いてるだけで実は結構・・・ あいてっ」

まだ言いかける王平さんの頭の上に何故か突然柵の上にあつた書簡が落ち、言葉は強制的に中断させられてしまい、見れば書簡の表に書かれた文字は明らかに法正さんのものでした。

法正さん、居ずにしてツツコミを入れるなんて・・・

「はあ・・・ 話を元に戻しますが、ああでもしないと紅火さん達は納得しないじゃないですか」

王平さんの言う通り、私は桃香様と共謀してご主人様と紅火さんを接触させ、何らかの形でご主人様のことを百人長や十人長に見せようとなりました。

が、私達に出来たのは精々紅火さんとご主人様が接触しやすいように状況を作る程度で、あとは完全に運任せという策というには烏滯がましいものでした。実際ご主人様自身が法正さんが出て行つてから引き籠りがちな上、王平さんがどういう行動するかなんて読めませんし、紅火さんに至っては会議や報告の場以外では極力私と桃香様を避けていますしね。



「傍<sup>はた</sup>から・・・っていうか民から見れば能力高い女の子達に囲まれてる北郷ってなんもしてないように見えるだろうしねー。

白の遣いなんて呼ばれてるから自然と赤の遣い殿と比べられるし、どうして特別扱いされてるのか納得できない人はいて当然。その中でも周倉ちゃんは考え方があれだからねえ」

『強い者が正しい』という紅火さんの考え方は過激ですし、本人も愛羅さんがいなければどうなるかわかりません。一応真名は預けてくれています。私は桃香様やご主人様のように彼女に全幅の信頼を置くことが出来ずにいます。

「でも、そうした感情を貂蟬さんの存在や朱里ちゃんの本で少しは緩和されてるんですけどね。

実名を使つてないとはいえ、ほとんど容姿をそのまま採用された同性愛の本を書くことを許可するだけじゃなくて、まさか販売まで許しちゃうなんて出来ることじゃないもん」

「今後のことを考えればご主人様が民と行動する機会はどうしても多くなりますし、この一件でわずかでもご主人様への悪印象を減らし、今後の最悪の事態が起こる可能性が小さなものに出たら御の字です」

追い詰められた者が何をしでかすかはわかりませんが、当然ご主人様の周囲には誰か一人は信頼のおける方を配置しますが、物事に絶対はありません。

「まあね〜。

でも、今回の模擬試合で北郷のことを見直した人は結構いると思う

よっ。」

「えっ？」

手加減された上に負けちゃったのにな？」

話が進む中で机上のお菓子は姿を消し、お茶だけが残されても桃香様の言葉の容赦のなさは消えませんでした。まあ、桃香様のいうことももつともなんです。

「その通りなんだけど、あそこにいるのは弱くはない人達だからねー。他とはちよつと捉え方が違ったと思うよ。

結局周倉ちゃんは左手使わなきや一本とれなかつたし、北郷の最初の構えを崩すのだって手こずってたもん。しかも試合が終わった後、『竹刀』とか言う演習用の新しい道具まで用意して私や周倉ちゃんに持ってきたくらいだし」

「しない？」

首を傾げる桃香様に対し、私は頭を抱えて深いため息が零れてしまいました。あれだけ発明品は会議を通せと言ってるのにこれですか、ご主人様。思い立ったらすぐに行動に移す姿勢は素直に尊敬できますけど、もう少し周りを見て行動してほしいというか、何かをする前に誰かに声をかける習慣をつけて欲しいものでしゅ……

他の方がご主人様をどう思ったかについては、現段階では何とも言えませんが様子見るしかありませんね。

「なんか竹と皮と糸をうまいこと使って作られた軽い棒みたいな奴なんだけど、あとで実物持ってくるよ。二人の反応見るにこっちは通してないみたいだし」

「そうしてくれると嬉しいです……あと、その作成に関わった方のことは何か言ってみましたか？」

「うんにゃ、言ってなかったね。」

「そこらへんは本人に直接聞いた方が早いんじゃない？」

発明品について話すことがまた増えましたけど、鍛錬用の棒なんて必要なんですかね？　というか需要があるのかが私だといまいちわからないんですけど。

「朱里ちゃん、眉間に皺寄ってる」

この後行うことの順序を考えていると、桃香様が私の眉間に指をあてて少しだけ力を込めて伸ばされていきます。少し痛いです。

「いろいろ考えることがあるのはわかるけど、一人で抱え込んだり目だよ？」

それぞれ得意分野があるから皆で考えるのはちよつと難しいかもだけど、一人で考えるよりも視野が狭くなるなんてことは絶対ないから」

眉間を押されながら聞こえてきたのは桃香様らしい励ましの言葉

で、ついつい抱え込もうとしてしまう私の悪い癖を見透かして正してくれました。

以前のように自分の意見を持たず、私や愛紗さんに流されていた桃香様は居らず、ちゃんと自分の足で立って私や愛紗さんの手を取って歩く一人の——ご主人様と二人で君主なので、これは少し違いますね——君主がそこにはいません。

けれど、桃香様は何故か突然嘔き出し、私の体のある部分と眉間を交互に見て余計な一言を口にしました。

「胸は寄せるほどないのに眉間の皺は寄るだけあるなんて……朱里ちゃんって残念だなあ」

この君主様は少し見直そうとするとこれですか、そうですか。

「体型も、性格も、一般男性の理想にもかかわらず、口を開いたら残念な桃香様には負けますよ！」

なので私も、もはや日常となりつつある一切容赦のない言葉を桃香様へと叫んでいました。

## 雪の日

世界の全てが白く染まり、今なお空から白が降ってくる世界の様子を俺は城壁の上に立って静かに眺めていた。

「冬雲様、体が冷えます。」

「どうか、室内へ」

「いや、警邏隊の皆も働いてるし、俺もこの光景を見ておきたいんだよ」

白陽の気遣いの言葉を断り、街で雪下ろしや炊き出しに精を出す警邏隊を見ていた。

「やっぱり、雪は大変だよなあ」

天向こうの国でも大雪の際は何かしらの被害をだし、交通を滞らせ、あちこちで多くの被害を出していた。どれほど人間が発達しても天災には勝てないということは、向こうが証明している。だが、被害を軽減することへの努力を人間がしなかったら、ここまで発達することはなかっただろう。

「ですが、皆様の迅速な対応により凍えて死ぬ者も、飢えて苦しむ者も確実に減少しています。」

民も皆、天災から己を守ってくださる皆様に感謝を捧げることでしよう」

「なら、良いんだけどな」

これぐらいしか出来ない。これしか出来ない。

税を貰ってる俺達が行える精一杯をやっているつもりでも、まだ納得できない。

「他に何か・・・出来ることはないかな・・・」

雪の中、武官の皆は警邏隊が配布する物を倉から運びだし、文官の皆はそれらの数などの管理を行っている。

俺は小休止の時間を見つけて、こうして城壁に立っているわけだが、俺の持ちうる知識で何か出来ないかを模索する。

人の気分を変えることの出来ることで雪、か・・・なら、やっぱり・・・

「・・・白陽」

「はっ」

「真桜はどこにいるか、わかるか？」

「冬桜隊を率い、工房で火鉢の作成、樟夏殿と共に炭の手配を行っている筈です」

真桜は仕事で忙しい。そして、他の部隊も、皆も忙しい。そして、やりたいことを熟知しているのは俺一人だけ。これは良い機会チャンスかもしれない。

「白陽。」

今夜も俺の無茶に付き合ってくれるか？」

そう言っつて悪戯気に笑っているだろう俺に、白陽は優しく微笑んで頭を下げる。

「冬雲様の御心のままに」

俺は最高の協力者を得て、いったん仕事場に戻って大人しく夜を待つことにした。

夜の闇を白い雪が照らし、いつも以上に静寂に包まれた街を通り抜け、俺は広場の中央で白陽を待っていた。あまり俺と白陽が二人つきりで行動していると、すぐに察しの良い皆にばれてしまうので待ち合わせをしようと白陽が提案してくれたことだったが・・・

「白陽が時間に遅れてくるなんて、珍しいな」

吐く息は白く染まり、ふわふわと降り続ける雪が肩に積もる。

「多すぎても見えないのに一つだけじゃ保ってられない、か」

空から落ちてくるこの白い粒を、一体誰が近くで見ようと思っただのだろうか？

小さな粒が六角を基礎にして、水蒸気や塵、温度によって形を変え、空から舞ってくる。近しい形はあっても、二つとして同じものはない。

「そういえば、『六花』とも言ったっけなあ」

六角形の結晶を『花』と称するロマンチストな日本人。

だからこそ短歌や俳句が発展し、平仮名や片仮名を作り上げ、言葉

に多くの意味を託した。

「寒いけど、やっぱり雪景色は綺麗だよなあ……」

動かずに待つのもあれだし、やりだすかー」

スコップと同じ形の円匙えんしを手に俺はまだ柔らかい雪を取って、始めは握り拳ぐらいの雪玉を作る。これを転がして徐々に雪玉を大きくしていくんだが、一つの方角だけじゃ不恰好になるので全体が均等になるようにばらばらの方向にも転がしていく。聞くだけなら簡単そうだが、綺麗な円形を作るのは難しいし、技術がいる。そして俺は雪国出身ではないので、形は歪だ。

……まあ、俺が作るのをお試してみたいなもんだし、真桜が来るから大丈夫だよな？

「さっむいし、冷てー」

でも、無心に雪玉を転がすのはやっぱり楽しくて、自然と笑みがこぼれる。雪像とかかまくらとかも出来ればいいけど、俺には難易度が高すぎる。

どうにか体となる雪玉を作り上げ、転がらないように地面を覆う雪に同化させるように足元を固めていく。

「さっ、もう一個作らないとな」

今度は体よりやや小さめに雪玉を作り、その途中で腕や目にするための枝を集めていく。

しばらく無心で何体かの雪だるまを作っていると、突然背中に雪玉がぶつかってきた。

「ん？」

白陽はこんなことするとは思わないので誰が来たのかと思って振り向けば、今度は顔にあたった。

「さっすが、秋蘭さん！」

「ふふ、千里。褒めても何も出ないぞ？」

顔の雪を払いつつ、雪玉が投げられた方向を見てみれば秋蘭と千里殿のみならず、樹枝と緑陽、霞と真桜が立っていて、その端には今まさに秋蘭へと雪玉を投げようとする白陽がいた。

「秋蘭様、お覚悟を」

「甘いな、白陽」

雪玉を暗器のように投げける白陽と的当てが得意な秋蘭による壮絶な雪合戦が勃発し、千里殿はうまいこと避けつつも囃し立てて始める。

「隊長、水臭いなあ。」

「こういうことはウチの十八番オハコやろが」

俺が作った雪だるまを見てニヤリと笑う真桜が雪を手早く人型に固めていって、何故か鑿を取り出して削り出す。

「ウチと隊長の結婚衣装の雪像を作り上げたさかい、期待しててや！」

「真桜〜？」

他に見られたらどーなるか、わかって行動しいや？」

霞の一言に真桜の動きが止まり、何故か人型の数を山のように増やしていく。

「樹枝殿、どうぞかき氷です」

「はい?! それ、その辺の雪を器に盛っただけの物でしょう!？」

大体、かき氷と言いながら、甘い蜜も何もかかっていないじゃないですか!」

「いえいえ、少しの砂糖を水で溶かした蜜がかかっていますよ。」

冬雲様曰く、『雪』と呼ばれるかき氷だったはずです」

樹枝と緑陽はじゃれ合い、樹枝は俺の体を盾にし始めた。

「兄上! 兄上からも緑陽に何か言ってください!!」

「ま・・・ まあ、ほどほどにな」

「その止める気の薄い言葉はなんですか!？」

実際、止める気ないしなあ・・・

形は少し違うけど緑陽が樹枝にしていることは俺がかつて桂花にされていたことに近く、それはつまり緑陽が樹枝のことを憎からずと思っている可能性があるということ。

命が危なくなったら話は別だが、司馬姉妹がそんなへまをするとは思えないし、もし緑陽が樹枝に好意を抱いているなら・・・今のこうしたやり取りすら愛しい思い出になる。

「大体、兄上は女性に対して甘すぎです！」

恋人である華琳様達ならともかく、向き合った女性に対し平等に優しさを振りまくということがどういうことかを一度ですわね……！」  
耳が痛い……うん、寒さのせいだな。そういうことにしておこう。

だが樹枝よ、最近のお前を見ているとお前も結構俺や樟夏と似たり寄ったりだからな？ 反董卓連合から戻ってきたかと思ったたら、詠殿や千里殿はどう見てもお前のことを……

「冬雲殿……？」

何か一言言おうと思って口を開きかければ、千里殿から俺に注意が飛んできた。口元に指をあてて、『内緒』と示す。

俺は溜息をつきつつも、千里殿へとしつかり頷いた。

「……俺は女にも男にも優しいぞ。」

なんせ今日のお前の部屋の周りを雪かきしたいって言った薇猩を止めて、お前が午後には外回りする時に使うだろう道を重点的に雪かきさせたんだからな」

「ありがとうございます！ 兄上は誰に対してもとても優しい方です！！」

薇猩だからしないとは思いますが、覗きとか許可されたらするぐらいの勢いはあるからなあ……

直属の部下と義理の弟がくっついていかまわれないのだが、本人達の意志が伴ってないのは駄目だと思う。

「冬雲様、今宵薇猩様はどちらへ？」

「今日は日勤だけだから、飲みにも行っていない限りは宿舎だと思うぞ？」

といっても、案外薇猩は真面目なので飲みに行くなんてめったになく、部屋で筋トレか、寝てるかなだけだな。飲みに行くのだったって同期や部下の話聞いてやるため、本人はあんまり飲み食いしないし。

改めて考えると、薇猩って樹枝のこと以外は本当にまともだよな……



「いえ、樹枝殿の今後の日程をお伝えする約束があったので… おつと」

「あなたの所為かあ!!」

道理で最近、僕が仕事に行く先々にあいつが待ち構えてるわけだよ!!」

千里殿しかり、薇猩しかり、緑陽殿は樹枝周辺の人と友好関係築くの早いなー。友人関係が広がるのはいいことなんだろうけど、樹枝にとっては危険極まりない。

なんか手が空いてしまったので雪を握って雪兎を作り、大きさもいろいろ作っていく。

「雪兎、か…」

「白と緑と赤、三色だけなのにとても冬らしい色。」

「なんだか華琳みたいだ」

小さくて可愛くて、雪の中で隠れるように本当の自分を隠す。

自分は冬でもたくましく生きる狼だと言わんばかりに立ち上がり、多くをつれてその頂点に立つ。

「なんて… 聞かれたら怒られるんだろうなあ…」

「そうだな、我々がいるのにもかかわらず華琳様のことを想ってばかりいるお前には罰が必要だな」

「げっ、秋蘭」

肩に腕を絡ませながらも恐ろしいことを言う秋蘭に顔を青ざめつつ視線を向ければ、雪玉を握っていた冷たい手を俺の顔に押し付けてきた。

「冷えすぎだろ…」

「どっだけ白陽と雪合戦楽しんでたんだよ」

温めたいけど、俺の手も雪兎を作っていたので冷えている。

「少しばかり白熱してな。」

勝負は結局白陽の試合放棄によってつかなかったが、なかなか楽しかった」

「試合放棄?」

真面目な白陽らしからぬことに首を傾げれば、秋蘭が指さした方向

には雪でかくれんぼしたり、鬼ごっこしている樹枝と緑陽に参戦し、樹枝へと雪玉を投擲している白陽がいた。時には氷柱すら投げてる気がするが、それは緑陽の驚くべき早業で砕かれていた。

「白陽、姉妹のことになると過保護だからなあ……」

自分の手を裾の中にひっこめてその上から秋蘭の手を包んで熱を持つように擦り合わせてると、秋蘭は真面目な顔をして白陽達を見守っていた。

「私とて相手がお前でなければ、白陽と同じことをしていたさ」

「真面目な顔していることかよ……」

「そうした点では、姉者の方が私よりもずっと大人びているよ。」

なんだかんだで私は、白陽と同じ『嫉妬深い妹』さ」

秋蘭の手を擦っていた俺の手を裾から引つ張り出して、頬に当ててくる。

「冷たいだろ」

「いや、温かいさ。」

この温もりが、お前が傍にいることを実感させてくれる」

じやれついでくる猫のように抱き着く秋蘭を受け止めて、しばらく抱きしめ合う。

「温かいな」

「そうだなあ」

今度沙和に恋人用の長いマフラーでも依頼しようかと考えつつ、俺は上着を秋蘭の方にかけて皆へと振り返った。

「さて、これだけの人数がいるし、真桜がいるんだから『かまくら』でも作ってみるか！」

正しい作り方はよくわからないが、真桜や皆の知恵を借りればどうにかなるだろう。

「冬雲殿、あれは放っておいていいの？」

熱心に魏将の雪像を作っている真桜の隣で、いくつかの可愛らしい動物の雪像を作っていた千里殿が樹枝達を指さす。

そんな千里殿の後ろには動物の雪像以外に薊猩と樹枝が絡み合っている雪像があるような気もするが、気のせいだということにしてお

こう。

「あれはあれで需要があるんやし、ええんやないか？ 冬雲」

「・・・俺は何も言っていないし、何も見てない」

今言っても、明日言っても樹枝の絶叫は間違いないし、雛里の布教活動により魏は順調に腐の需要が出てきているのも事実。だから俺は、何も見てないんだ！

「いやー、なんでも出来ちゃう自分の才能が怖いねー！」

得意げに言っているのにその横顔はどこか寂し気で苦笑まじり、それはもう一人の義弟を浮かべる表情に似ていて、何も言わずにはいられなかった。

「なあ、千里殿。

真桜はしばらく手が空きそうにないし、ちよつと知恵を貸してくれないか？」

「うん？ 冬雲殿が頼みごとなんて珍しいねー。」

私でいいの？」

言葉の節々からの予想でしかないが千里殿は樟夏と同じ想いを抱いている、そんな気がした。

「頼みごとなんて珍しくないさ、だって俺は皆に頼ってばかりだからな」

俺一人で出来たことなんて、何も無い。

きっかけは確かに作ったことがあるかもしれないけど、そこから完成形に持って行くのには多くの人の協力があったることだった。

「この雪で寒さをしのげるようなものを作りたいんだ」

「へえ、この冷たい雪を利用して、そんなことが出来たら最高だね」

千里殿と俺がいくつかの枝で図式を描いていくと、横で霞がニヤリと笑った。

「二人して面白そうなことしてるやんか、ウチも当然混ざるで？」

まっ、ウチは二人と違って知恵だせんけど」

「じゃあ、霞はとりあえず雪をかき集めて四角い塊にしていってくれる？」

で、これが崩れないように積んでいくとして、均等の厚さにしない

と崩れるよね・・・ 冬雲殿、枝をいくつか同じ長さに揃えておいて！」

「おう」

何に使うかまいちわからないけど、千里殿の頭には既に設計図が出来上がってるようなので言われた通りに枝を集め始める。

「だ・か・ら！ 何で寒いのにそんな丈の短い女性用の下履きを履かなくてきやならないんですか!!」

「似合うからですよ、樹枝ちゃん」

「樹枝ちゃん、言うなあ!!」

「では、海和ちゃん」

「だあーまあーれえー!」

「何ですか？ 見せつけですか？ 私の可愛らしい末の妹と随分楽しくじゃれ合っているんですね、そうですね？」

フフフフ・・・ さあ、この美しい雪景色の中、楽しい鬼ごっこをしようじゃありませんか!」

「これがそんな微笑ましいやり取りなわけあるかあ!!!」

樹枝達が戦力には・・・ まあ、あと四半刻三十分くらい経ったら、協力してくれるだろう。もし終わらなくても、かまくらとかを作り終わって温かい飲み物を用意する頃には止めてやるかな。

「皆、喜んでくれるといいなあ」

完成させた後のことを考えて頬が緩み、明日が楽しみでしょうがない。

「そのために、頑張りますかね」

だが、この時の俺は知らない。

皆の笑顔を見ることなく、極寒の寒さの中を薄着で作業していた馬鹿俺が風邪で寝込むことを。

風邪が完治したのち、玉座にて全員から説教される未来を。

## 義兄弟の恋模様 【樹枝視点】

「はあ、あとは誰でしたっけ？」

城の廊下でいくつかの名前が並んだ書簡に目を通しながら、僕はそこに並んだ名前の多さにおもわず溜息を零してしまいました。

「・・・結構な期間留守にしてしまったとはいえ人増えすぎでしょ、この陣営」

連合の際に月さん達四名、水鏡女学院からお連れした劉協様と黄親子三名、幽州から避難してきた白蓮殿ら五名。そして、隠居していたとはいえご挨拶が遅れてしまった華琳様と樟夏の父・万年青様<sup>オモト</sup>。

顔見知りである月さん達はともかく他の方々には一言挨拶をするのが礼儀であり、僕はようやく得た休日を使って挨拶周りを行っているわけですが・・・

「ほとんどの方が捕まらない・・・」

捕まえるって言葉も語弊ある気がしますけど、実際捕まらない人が数名いるんですよ！

先日、街のど真ん中で華蝶仮面とか愉快的な珍劇を繰り広げた自由人とか、何故か堂々と女装をして主婦談議に混ざったり、安売りに混ざってるあるお方の御父上とか。あとはまあ・・・場所はわかってるんですけど話しかけにくいというか、世界で二人つきりになってる成立したての恋人達とか・・・華琳様と兄上と一緒にいてなぜか幸せそうに鼻血噴いて倒れた方とか、真名通り風のようにあちこちふらふらして捕まらない方とか・・・

まともに話が出来たのが赤根さんだけとか、おかしくないですかね・・・？

「樟夏めえ・・・！」

兄上同様義兄弟として幸せになってほしいという気持ちはあるにはありますが、同時に言いようのない苛立ちが生まれてしまうのも仕方ないというもの。

「樟夏が女装して潜入すればよかったのに・・・」

万年青様の女装も周囲に溶け込むぐらい違和感がないし、髪も綺麗

にしてあつて高身長。佇まいだつて華琳様の実弟ということもあつて優雅だし、女装すればそれこそ華琳様よりも美しいんじゃない．．．  
「なーに、しけた面して歩いてるんや！ 樹枝い!!」

後ろから突然かけられた言葉に僕が振り向くより早く、背中に平手が落ちる。

「つたあ!？」

一瞬、呼吸が止まってしまいそんな衝撃が背中を襲つて、僕は原因となつた霞さんへと視線を送る。だけど、霞さんは視線なんて気にするわけもなく、『さつさと答える』と言わんばかりに僕を見て笑つてます。

「霞ちゃんん？ 春蘭ちゃん達にやるような威力で人を叩くのはよろしくないと思いますよー?」

「風、樹枝にはそういう心配はいらんわ。」

何せあの呂布の一撃を躲すだけの実力もつとるんやし、季衣やら流琉の拳喰らつても擦り傷で済んだ。しまいにや、惇ちゃん達と日常的に追いかけてつこやで？ ウチのただの張り手ぐらいじゃどうつてことないわ」

．．．改めて言葉にされると僕ってそんなんばっかりでしたね。

それでもあえて霞さんの言葉に付け足すなら、不意に飛んでくる姉上の鞭や千里さんの精神攻撃やら、白陽さんの暗器やらを躲し、牛金から逃げたり、追いかけてたりする日々．．．

「おやおや、泣き出してしまいましたよ?」

風達の義弟ちゃんになるんですから、もつと可愛がつてあげないと駄目ですよー?」

目元に布が当てられる感触と近くなつた距離でようやく声の主が風殿だと気づき、さつきまでは霞さんの背で見えてなかったのかと納得しました。

「痛かったですねえ。」

大丈夫ですよー、風お義姉さんが守つてあげますからねー」

ですが、その．．． 姉上とほぼ同格に等しい方なので言葉にしづらいたのですが、僕へと頑張つて腕を伸ばす姿はとても幼く見えま

す……『姉』という言葉がここまで似合わない方はそういないのでは……

そんなことをちらりと考えてしまいましたが、僕の知っている姉と呼ばれる女性を思い浮かべてみる。

華琳様：容姿的に姉と言い難く、性格に難あり

姉上：同上

黒陽殿：容姿に問題はないが、愛情表現が難解。妹への対応も不明

白陽殿：妹達に対しては問題なく、他から見ても姉をしている

春蘭殿：悪くいえば脳筋。むしろ妹に諫められる人

劉弁様：男装変態且つ重度の妹好き

天和殿：妹達との関係も友好に見えるが、姉としてはどうかという  
と不明

……『姉』という名称が似合う方なんてほとんどいませんでしたね  
!

「そろそろやけど、身内だからこそ遠慮もなんもいらんやろ？」

大体、今のそいつの顔は風に対して失礼なことを考えてる顔やで  
？」

「そ、そんな滅相もないー！」

だから、どうしてこの陣営の女性陣は勘が鋭いんですかね！

「ふふふ、風は気にしないのですよ。」

樹枝ちゃんの正直なところは美点ですし、それが霞ちゃん達の心を  
開かせる要因になっていたのなら、義理とはいえ流石お兄さんの弟で  
すねえ」

掴みどころのない笑みを浮かべながら風殿は僕の服の裾を掴み、廊  
下から見える中庭をすつと指し示しました。

「これから霞ちゃんと風は中庭の四阿でお茶にするのですが、樹枝  
ちゃんもお茶会に参加しませんか？」

「い、いえ、僕はまだ挨拶をしなくちゃいけない方々がですね……」

適当なことを言って断ろうとすると、霞さんはそんな僕を見透かし  
たようにニヤリと笑っていて、洛陽で嫌というほど見てきたその笑顔  
に嫌な予感しかしてきません。

「なら、ちようどええやん。

風もどーせその一人なんやし、三人でのんびり茶でもしばこうや」「しばかれるのはお茶じゃなくて僕の間違いでは……」

「そーなりたいんやったら、お望み通りしばいた後城門の外まで飛ばしてもええで?」

霞さんはどこからどこまでが冗談かわからない上に、実行できるところが質が悪いですよね!

「樹枝ちゃんと霞ちゃんが仲が良いことはわかりましたけど、そんなに顔を近づけると接吻してるように見えてしまいますよー?」

二人が接吻をした、なーんて噂がたったらお兄さんが倒れてしまう可能性がありますがねえ」

「兄上がそんな玉ですか! 僕が殺されますよ!!」

あの人、実はかなり嫉妬深い上に姉上たちのこととなると目の色変わって、いろいろ暴走しだすんですから!!」

贈り物やら、行事やらに向けられてる行動力や情熱が殺意に変わったらどうなるか。想像するだにすら恐ろしい。

「ハッハッハ、それもそれで見てみたい気もするなあ」

「いや、一度してますからね?!

黄巾の乱では英雄として綺麗に片づけられましたけど、あれは戦だったから許されることであって、平時であんなことされたら恐ろしすぎますから!」

状況が状況だったために兄上の行動は英雄として認められましたけど、あの時の兄上勝手な行動しすぎでしたから!!」

道を開けることは許可しても、誰が本陣まで白陽殿と二人つきりで突っ込む馬鹿がいますか。というか、誰も実現できるなんて思っただけなら、白陽殿と二人つきりで戦場のど真ん中で大立ち回りとかふざけるな……ふざけんな……!」

「ふふふふふ、それほど風達がお兄さんに愛されてるということですよ」

本音を隠すような先ほどもまでの笑顔とは違い、風殿は誰から見ても幸せだとはつきりとわかるとろけるような笑みを浮かべ、それは姉上



達の話をしている時の兄上の笑顔に酷似していました。

「勿論、風達もお兄さんに負けないぐらい愛していますし……」

「冬雲に命の危機が迫ったら、そんなくらいしたるけどな」

微笑ましい気持ちが一瞬で吹き飛び、得意げにサラッと行ってしま  
うところなんてまさに……

「前言撤回！ 表情だけじゃなくてヤバさもそっくりですね!!」

「霞ちゃん、嬉しいですねえ。褒められちゃいましたよ?」

「そら、恋人も夫婦も似てくるもんやし、うちらが大陸一の熱々夫婦な  
のは言うまでもないことやけど、改めて言われるとやっぱ照れる  
なあ」

「照れるところじゃありませんから！ 褒めてませんから!!」

一瞬でも微笑ましい気持ちになつた僕の感動を返せ!

というか、一夫多妻で熱々とか鬱陶しいことこの上ない!!

「では、お礼もかねて風と霞ちゃんのお茶会にご招待するとしましょ  
う。

お菓子は季衣ちゃんおすすめのお店から調達した物と、流琉ちゃん  
が作ってくれた新作お菓子・まどれえぬですよー」

「そら、楽しみやわー」

風殿の言葉に返事をする暇もなく、僕は霞さんに担がれてしまう。

「ちよつ、霞さん?!」

僕はまだ参加するなんて一言も……!」

「樹枝も観念しいや。」

「こういう時の風には華琳かて敵わんわ」

豪快に笑ってますけど、華琳様すら敵わないってどういうことだ  
か?! 誰なら勝てるんですか、それ!?

「霞ちゃん、余計なこと言うお口は縫い付けた方がいいですかねー  
?」

「じょーだんや、じょーだん。」

風には感謝しとるわ、いろいろとなー」

かつてのこととかで僕の知らないことがいろいろあるんでしよ  
うし、口を挟んじやいけないとは思いますが!

「大人しく参加しますからおろしてくださいよ！」

が、僕の言葉は当然聞き入られるはずもなく、中庭の四阿まで担がれていくことになりました……

「さて、お茶とお菓子も揃ったことですし、風は可愛い義弟ちゃんにあれこれ聞きたいことがあるのですよ」

「お茶を淹れたのは僕ですし、参加者霞の一人は酒を飲んでますけどね……」

じろりと霞さんを睨んでも、こちらを見すらしないで朗らかに笑い続けている。休みたいだからいいんですけどね……

「細かいことは脇に置いておくとして、風は樹枝ちゃんのことはお兄さんや桂花ちゃんから少し聞いているだけでほとんど知らないのが実情なんですよねー。」

連合でも会いませんでしたし、樟夏殿は樟夏殿で白蓮ちゃんずっとあの調子ですし」

「あー…… お疲れ様です……」

なんか、義兄弟がすみません……」

「樹枝ちゃんが謝ることじゃないですし、あれは白蓮ちゃんも白蓮ちゃんですからねえ……」

連合の際は別陣営で面識はなく、僕も水鏡女学院などで出払っていたり、風殿も幽州のことで忙しく動いていたので会議以外で顔を合わせず、こうして話すこと自体初めてのこと。

が、共通の関係者である樟夏お花畑があの状態であり、同じ苦勞を負う者同士同時に溜息が零れました。

「カッカッカ！ 初めての恋人なんて皆浮かれてしまうもんやし、しやーないやろ。」

ウチらかて仕事ないんなら、冬雲の傍を離れたないしなあ」

「はあ…… かまいませんけどね、あれが樟夏の今の仕事のようなものですよ」

自然と言葉に棘が混ざってしまいますけど、経理の仕事はきっちり終わらせているので文句も言えません。

「あれじゃ、兄上と同じじゃないですか・・・」

「冬雲と同じでなんか問題でもあるんかー？」

大体、樹枝かて冬雲に似てるところいっぱいあるやないか」

聞き捨てならない言葉に突っ伏していた顔をあげて霞さんを睨むと、霞さんは持っていた杯を僕へと向けていつもとは少し違う笑みを向けていました。

なんでしよう、この笑顔・・・？

楽しんでいるようなのに、少しだけ複雑そうにも見えますし、よくわからないですね。

「僕が兄上に似てるところなんてありませんから。

誰かのために命知らずなことすらやるような真似なんて一つもしてませんし、人を誑し込むようなこともしてません」

「ほーう、それはそれは・・・」

では、洛陽での働きを見ていた霞ちゃんに判定を」

否定する僕に対して、風殿はお茶をすすりながら判定を霞さんにゆだねました。

「千里が認めるほどの文官としての資質に、魔王軍の武将にひそかに認められとった胆力。警戒心のめっちゃ強い詠に信頼を寄せさせた実力やで？ まーだ樟夏のこととはあんま知らんウチからすれば、昔の冬雲見とるようやったわ。

まっ、その割には発言が阿呆やけど」

「褒めるか貶すか、どっちかにしてくれませんかね!？」

おもわず机をたたいて立ち上がる僕に、霞さんは不思議そうな顔をしていて、また意地の悪い笑みを浮かべました。

「冬雲に似てるなんて、最上の褒め言葉やん。

それともなんや？ 詠やら千里には男として意識するような言葉でも言うたことでもあるんか？」

「はあ?!

どうしてそういう話になるんです!？」

悪い笑みの理由はそういうことか!

質が悪い霞さんから逃れるために比較的まともそうな風殿へと助

けを求めようと視線を向ければ、風殿はお茶を置いて目を怪しく光らせる。

「その辺りは風も気になりますねえ。」

義姉として、義弟の将来のお相手はとても気になりますし、恋愛模様には個人的に興味もあるのですよ」

くそつ、この人も千里さんと同類だった！ 逃げ場がない!!

「兄上達じゃあるまいし、僕に恋なんてしてる暇なんてあるわけないでしょう！」

大体、この陣営の女性に恋情なんて抱かれるなんて・・・」

『ありえない』と言いかけた瞬間、何故か詠さんと千里さん、そして緑陽が脳裏にちらつき、僕はすぐさま首を振る。

詠さんはともかく、千里さんと緑陽は僕をからかって遊んでるだけだろう！ しつかりしろ、僕!!

「どうかしましたか？」

それとも・・・ 気になるあの娘の顔でもちらついたりしました？」

風殿まで意地の悪い笑みを浮かべはじめ、僕はなかなか散らない三人の姿と浮かび始めた汗を誤魔化すように布で顔を拭う。

「そ、そんなわけないでしょう！」

僕なんて倒しても起き上がる子どものための玩具みたいなもんですし、牛金に追いかけられるような同性愛の被害者ぐらいにしか思われっこありませんから!!」

それに年頃の男性にありがちな僕の思い込みも十分あり得る。異性にちよつと優しくされたり、話しかけられたりすると意識されてるんじゃないかとか、好意があるんじゃないかとか期待してしまう夏風邪みたいなもので、実際相手は何とも思っていないとかよくあることじゃないか!!

そう、絶対にそう！ そうに決まってる!!

「そ、それではお茶会の途中ではありませんが、僕は用事を思い出したのでこれで失礼します！」

「おー、逃げるんかー？ 鈍感男ー」

「逃げますとも！」

それから誰が鈍感ですか!! それは兄上専用の言葉でしょう!」

「いえいえ、お兄さんは鈍感ではありませんよ?」

・・・つと、もう行ってしまいましたかー」

後ろから聞こえるお二人の言葉にかまわず、僕は激しくなる鼓動を運動したからだと思いい込むために自室まで全力疾走を続けることになりました。

## 擘扇と緋扇

「擘扇スイセン、あなたがしたいことは何かしら？」

私はあの日、寝台へと体を預ける妹へと問いかけていた。すると妹は書き途中であつただろう筆を置いて、これまでも何度も見てきたあの困つたような微笑みを私に向けてくる。

——— この子はいつもそうだった。

「擘扇」

誰よりも自分の病を知り、医者が匙を投げた時すら家族の誰よりも現実を見据えている妹のことを両親は『強い』と称した。嘆き悲しむだけで何もしてやれない、楽にしてやることすら出来ない自分達は弱いのだと。

けれど、それはおそらく間違っている。

——— 病に身を削られているにもかかわらず、気遣いや優しさを持ち合わせ

「あなたが望む本当を、口になさい」

病により自由に歩出すことすら叶わず、ごく稀に外に出ることが叶っても人目を避けて日没前か日没後に限られる。日中の多くを寝台の上で過ごし、これまで過ごした人生の大半を気休め程度の薬と眠りで過ごす。

幼い頃から遊ぶことよりも読書を好む大人しい子ではあつたけれど、草花を好んでいた妹にとって今の生活が辛い筈がなかった。

——— けして、弱い所涙を見せてはくれない。本当の望みを口にしてはくれない。

「姉さん……」

私の言葉にさらに困つたような顔をする妹から、私はけして目を逸らさない。

——— この子が何を望んでも、私は受け入れるだろう。

「擘扇、決めるのはあなたよ」

卑怯な問いかけであり、この子がこの問いかけの行える限界を熟知しているながら、それでも私は問いを取り消すことはない。

私でも、両親でも、他の誰かではなく、この子自信が選ばなければ意味がない。

—— たとえ選ばれたのが死であったとしても、それがこの子の選択なら私は躊躇わない。

「そんな泣きそうな顔をしないで？　姉さん」

「していないわ」

私の顔に触れようとする妹の手を拒むことなく受け入れながら、妹の言葉を否定する。

—— 私が泣きそうな顔をしているなんてありえない。

「私にそんな感情、必要無いもの」

私の言葉に困ったような顔を続ける妹から伸ばされた手に触れ、握る。

白く、細く、冷たい。非力な私ですら強く握ったら壊れてしまいそうで、書き物をしていただけ墨に汚れていた。

—— 妹一人救えない愚か者には涙を零す権利など不要であり、悲しむ理由を持つ価値もない。

「姉さん……」

気持ちの全てを見透かすように私を呼ぶ妹に私が望むのは、年相応の我儘を口にする事だけ。

—— 悲しいなら悲しいと言ってほしい。辛いのなら辛いと呼んでほしい。

その体に理不尽を背負わせた多くが憎いのなら、恨んでほしい。

そして、病を患うことなく生きる者<sup>私達</sup>が恨めしいのなら、嫌ってほしい。

「私の勝手な望みであることはわかっているわ、慧扇」

自分の体の限界を知っている妹に、人の心の機微に聡いこの子にとっての無理難題。

「やめてよ、姉さん……」

私を呼ぶ声にようやく、病に患う前の妹の姿が見えた気がした。

「何をかしら？　慧扇」

酷い問い、妹の言葉が何を示しているのかを私は知っていないながら追及する。

「私は・・・生きてるだけで幸せって思わなきや、いけないから」  
「慧扇！」

妹へと初めて荒げた声に自分自身で驚きながら、つとめていつもの声に戻して言葉を続ける。

「私が聞いているのは、あなたが思わなきやいけないことではないでしょう。」

「あなたが本当に望むことよ」  
すると妹は俯き、ほんのわずかに動かした視線の先にあったのは書簡。

先ほどまで書いていたもの、書き途中でやめたもの、ある程度書いて棚に納められたもの・・・山のように積まれたそれらはありませんない架空の物語。

「書いていたい・・・」

望むことを恥じるように、言葉にすることを躊躇うように小さな声で紡がれた思いを私は聞き逃すまいと耳を傾け続ける。

「ずっと・・・ずっと書いていきたいの」

一つ、二つ・・・ 掛布の上に水滴が落ちていく。

落ちていく水滴を妹が拭いても瞳から止まることはなく、体を震わせ、次第に嗚咽が混じっていく。

「私はいろんな所に行くことも出来ないけど、私の書いた物なんてどこにも残らないでなくなっちゃうかもしれないけど・・・ それでもいい」

叫ぶというにはあまりにも小さく、けれどそれこそが妹にとって最大の声量。

「何も書ききれずに終わるかもしれない。何一つまともに形にならないのかもしれない。けど、それでもいいの」

現実からの逃避、その末の都合のいい夢物語。ありもしない幻想生物、美しい景色、暖かく優しいだけの人々。

見たことない筈の世界を描いているにもかかわらず、その世界は優



しかった。

けれど、ふとした時に混ざる現実味のある物語は、それらと違う恐ろしさすら感じるほどのものだった。

「馬鹿みたいって言われるかもしれない…… だけど、姉さん。私は自分が死ぬその一瞬まで、ずっと書いていたい。」

私は…… この生の全てを書くことに使い果たしたいの」

—— やつと…… やつと言ってくれたわね。

言葉が終わるか終わらないかのところで、私は妹を固く抱きしめていた。

「ねえ、さん？」

妹の驚きに応えることもなく、私はただ妹を抱きしめ続ける。

—— やつと、泣いてくれた。

「その望み、私が叶えてあげましょう」

—— 愛する妹のささやかな望み、叶えないなんて姉が廃るというものでしょう？

「対価は…… そうね、あなたが幸福であり続けることよ」

—— どうか、その終わりまであなたが幸せでありますように。

そして、それが<sup>別れ</sup>少しでも遠くありますように。

「その幸福のためにはこの部屋は狭すぎるわ、それにもう少し簡単に知識を集められる場所へ移りましょう」

抱きしめていた妹を離し、私は懐からいくつかの書簡を取り出す。

「えっ…… 姉さん、これって」

驚く妹におもわず口角が上がるのを感じ、目を細めてしまう。

—— ああ、本当に今日は嬉しいことばかり。

「明日までに持って行きたいものを書簡に記しておきなさい」

「はいっー」

「ただし、無理はしないこと。」

楽しみすぎて睡眠をとらなかつたり、何か浮かんだからといって物語を書き続けないこと。いいわね？」

最愛の妹の気持ちのいい返事が出来たご褒美に頭を撫で、軽い注意も促しておく。

「姉さん、私はそんなに子どもじやないよ」

そう言いながらも慧扇が私の手を振り払う様子はなく、むしろ気持ちよさそうに身をゆだねてくる。

「子どもだとも、子どもでいて欲しいとも思わない。」

けど・・・あなたが私の可愛い妹であることはずっと変わらないでしょう?」

何が変わっても、始まって、終わっても、それだけは変わらない。

「あなたは生まれた瞬間から・・・いいえ、その命が母に宿った時からずっと私の大事な存在だわ」

——— この子の笑顔が、驚く顔が、鮮やかに変わる表情が、こんなにも愛しい。

そうして私は妹を実家から連れ出し、水鏡女学院へと移った。

そこで私は腐れ縁とも言える同期と出会い、慧扇はその腐れ縁であり私から見ても変人である二人を『素敵な友達』と呼び、その縁を喜んだ。姉としてはあの二人から悪影響を受けるのではないかと心配したけれど、慧扇が喜ぶ顔を見てしまうと何も言えなくなってしまうた。

平と謹が慧扇をどう思っていたか、慧扇が二人をどう思っていたかを私は知らないし、二人から聞くつもりもない。わざわざ言葉にせずとも二人にとっても慧扇の存在は代わりの居ない『何か』であったことは、妹が死してなお女学院へと送られる名も知らぬ花の種と大陸中へと広がる<sup>夢</sup>としている妹の物語が言葉より雄弁に語っていた。

「あなたが<sup>夢</sup>と諦めたことを、あの二人がこんな形で叶えるなんて・・・」

おかしなものね、慧扇」

諦めた夢から描いた世界が夢となり、夢へと進む中で二人と出会った。

そして、その二人は慧扇自身がとうに諦めた夢を叶えた。

「あなたの夢は、全て叶ったのよ」

もつとも平も謹にもそんなつもりはなく、自分がしたいように行動

した末の結果だろう。

「ねえ、慧扇」

死者は何も返してはくれない。

こうして語り掛けることも自己満足で、自分自身を慰めるためのものだとわかっている。

「……………」

何を語るといふのだろう。

生きていてほしかったとも、生き返ってほしいとも違う。

二人が誇らしいと胸を張るのも違う。その功績は本人達があの子の墓前で口にするから意味がある。

「あなたにとつての私は…… 自慢の姉だったのかしらね？」

結局口にしたのは、本当に意味のない言葉だった。

慧扇のことを知っている者は女学院ですらごく一握りであり、私に妹がいたことを知っている者も同様。これによって周囲から見ても、私が『自慢』あるいは『良い姉』だったと称する者は皆無と聞いていいだろう。ましてや慧扇自身が亡くなった今となつては誰もその答えを知ることではなく、両親に判断を問うたとしても結果は公平なものにならない。

「コケエー……………」

「林鶏<sup>リンチー</sup>、あなたからの評価も公平にはならないわよ」

死期を悟つたあの子が水鏡達に頼んで手に入れた卵から孵した雛、それが林鶏だった。

卵を孵すなんて奇跡を成し遂げ、孵した親である慧扇の望んだ以上に強く丈夫に育つた。育ての親としての鼻肩目もあるだろうが、連合に溢れていた脳筋達よりもはるかに賢いだろう。

「コケツ」

「林鶏……………」

寢床としている箱から立ち上がった林鶏が扉まで走り、机に向かつていた私に振り返る。ただ外に出たいだけなら林鶏は窓から勝手に出入りするため、扉を使うのはほとんど私だけだ。

私が真意を掴みとれないまま観察していると、林鶏は足を数度床へ

とぶつけたことで私もようやく理解する。

「あなたが私に『ついてこい』なんて珍しいわね」

「コケッ！」

軽く机を片づけ、林鶏に示されるがままに扉まで歩いて開けてやる。すると想定通り、林鶏は私を置いて廊下を駆け出していき、私を待つように立ち止まった。

「そういうえば、あの子が書いた作品の中にも動物に導かれるなんて場面があったわね」

数ある作品の一場面を思い出し、私は林鶏の後を追った。

林鶏が足を止めたのは、私が使っている離れの二階にある彗扇の部屋の前だった。

「林鶏、どういうつもりかしら？」

言葉が通じているといってもいいほど察しの良い愛鶏に溜息を零して問うても答えは返ってこず、開けろと言わんばかりに扉を数度つつく。

「わかったわよ……」

扉へと開けばそこには他の部屋同様、寝台や小さめの机、いくつかの棚などがあり、部屋の主がいなくなった今も配置が変わることなく並んでいた。

しいて他との違いをあげるとするなら、角部屋であるこの部屋は窓が多いことや部屋の主であったあの子が書いた物や資料を置くための棚や立てかけが多いことだろうか。

「それで林鶏、私をここに連れてきた理由は何かしら？」

問いかける私に一度振り返りながら、林鶏は忙しなく首を動かして寝台の隣に置かれた筆筒周辺をうろつき始める。そこで上から下を見渡し、五つある収納の二段目を蹴り飛ばす。

「林鶏、開けるならもつと他の方法があるでしょう」

蹴られた勢いで飛び出す筆筒の収納を拾い上げると、その中にあつただらう数本の古い書簡に気づく。

「彗扇の字ね」

泡沫水仙の名がつける前のものなのか、作品の目印としていた水仙の意匠も彫られておらず、読む順らしき漢数字だけが彫られているだけ。何度も読み返したのか閉じている紐には癖がついており、いつも手をかけていただろう場所はやや滑らかになっている。

「これを見せたかった、というの？」

私の問いかけに林鶏は応えず、慧扇が使っていた寝台の上に座ってすっかり落ち着いていた。

「あなたはあの陣営に悪い影響でも受けてきたのかしら」

今日何度目かの溜息を零し、私はかつて定位置だった窓の近くの椅子へと腰かけ古びた書簡を開く。

そうして落ち着いたところで、ふと気づいた。

「あの子の作品を読むのは、いつ振りかしら」

自分だけの空間においてわかりきっていることを呟きながら、私は書簡を開いて文字を追った。

そこに書かれていたのは、大陸を舞台に繰り広げられる架空の物語。

一人の少年が遠い未来から迷い込み、多くの者と出会い、立ちはだかる困難や現実によって成長していく。そんな少年に姫武将達は時に救われ、期待し、先の見えぬ将来に希望を見出す。だが、その終わりは幸せな終わりを好む慧扇らしくない姫武将と少年との永遠の離別で締めくくられていた。

「ふうん？」

勧善懲悪というには明確な悪がなく、恋愛物語というには悲恋すぎる。謹が世に広めようとしている作品に比べれば物語の構成はいいけれど作者側の技術である文章事態が拙いように感じられる。もつというなら、私が読んできたどの作品よりも未熟な印象を受けた。

と考えると同時に、ある答えに行きつき私は目を見開く。

「まさかこれは・・・あの子の処女作なの？」

あの子が物語という形を持たせた初めての作品だというなら、文章

の拙さや何度も書き直された痕跡にも納得できる。

「謹の耳に入ったら、大変なことになりそうね……」

慧扇の文章の全てを好む謹ならこれも世に出そうとするに決まっている。あるいは、個人的に楽しみたいがために引き取りたいと申し出てくる可能性もある。私個人としては一向にかまわないが、慧扇が隠していたことを考えるのならこれは世に出すべきではないのだから。

「慧扇……」

また、意味もなくあの子の名を呼ぶ。物語の向こう側にはあの子がいる、そんな身勝手な考えすら脳裏をかすめていく。

物語を最後まで読み切った最後に書かれていたのは物語ではなく、慧扇自身の言葉だった。これが初めて形に出来た物語であることや作中でのこだわり、この作品は自分以外が読むことはないだろうという予想というより宣言に近い言葉の数々。そして、もうじき終わるといところで慧扇はこの作品の今後についても触れていた。

『もし少年が帰って来れたなら、もう一度彼女達と再会出来たなら。あるいは少年が誰か別の姫武将達と出会っていたら、この物語は全く別の物へと変わっていたことでしょう。』

何かが変わっていたら、他の誰かが現れていたら、導く人がいたら、忘れたくない記憶を抱き続けていたら……考え出すときりがないほど、物語は様々な広がりを見せてくれます。全てを試して書き綴りたい気持ちもありますが、この作品の幕は一度ここで閉じ、そうした物語はまた機会があつたら書き綴ることでしょう。もしかしたらそれを書き綴るのは私ではなく別の誰かかもしれません。

ですが、現実は今として物語よりもはるかに奇妙であり、数奇な運命を人へと運び込むもの。

病にかかった時点で殺される可能性もあった私がここまで生き永らえ、一つの部屋の中で終わりを迎える筈だったにもかかわらず、こうして物語を書き綴ることの出来る環境で優しい姉と素晴らしい親友を得られたように。

この物語は書簡の中にとどまらず、現実へと飛び出して行ってしま  
うかもしれません。

私から初めて生まれた物語と最愛の姉と最高の親友達に感謝を込  
めて 彗扇』

「ふ、ふふ・・・ あははははは」

この作品自体を仮に処女作品とするなら、おそらく最後に書かれた  
後記は彗扇が後になって書き足したものだ。そして、見せるつもりはな  
いと記しながらも、誰かが見つけてくれることを願っていたのだろ  
う。

ああ、けれどもしあの子の言葉通りに全てを受け取るのなら、私達  
はなんて酷いのだろう。

「彗扇。」

あなたが望まなくとも、平はあなたとの思い出を抱いてあちこちへ  
訪れ、あなたの元へ花を届けるでしょう」

私達は誰一人として

「彗扇。」

あなたが嫌がったとしても、謹は自分の生ある限りあなたの作品を  
残し続けるために動き、可能な限り永久にあなたの名を残し続ける」

あの子が望んだことを実行せず

「彗扇。」

あなたが望まなくとも、私はあなたを殺した病を許さず、この病に  
打ち勝ちましょう」

望んだことを叶えず、自己満足と身勝手を突き進み続けている。

「ねえ、彗扇。」

あなたが生きていたことは、誰にも消せないわ」

何故だろう？ 平も、謹も、身勝手に動き続けているだけなのに。

そんな二人に対して私は、感謝に近い想いを抱いている。

「あなたが望まなくとも私達はあなたのことを想い、身勝手な行動を  
し、自己満足を行い続けるでしょう」

妹はもう、ここに居ない。大陸のどこを探しても存在しない。

あの子へと向ける笑顔も、涙も、もう意味も価値もない。

あの子へと向ける言葉はただの音となって風が掻き消し、行動はもはやあの子のためにはなり得ない。

けれど、そんなことは関係ない。

私達はただ自分のやりたいことを、気が済むことを行っていくだけなのだから。

ふと、あの子が最後に望んでいたことを思い出し、私は表情を変えていく。

「あなたがなんと言おうとも、私はあなたの姉で在れて幸福だった。

私は・・・ 私達はあなたと共に過ごさせて、楽しかった。

生まれてきてくれてありがとう、慧扇」



## 作者登場回　く宝譚といっしょく

さあさあ、読者の皆様お久しぶりです。皆様ご存知再臨シリーズの作者・無月でございます。

今回は以前より考えておりました作者登場回、何人かの存在と私による疑問やら作品のこぼれ話などを熱く語っていきたいと思います。

記念すべき第一回のお相手はこの方(？)、再臨の電波塔、宝譚！

「なんで俺から?!　いろいろとおおしくね!?　もつと他に話すべき相手いるだろ!」

主人公  
冬雲だと私が殺されかねないから☆

「オメーがやったことが鬼畜過ぎるからだろうが!」

後悔はしてない。いつだって私は、私に正直に書いてきた。

あと、予定している面子の中でお前が一番最初に登場してるからなんだよね。

「あー、俺早かったもんなー!」

なんてつたつて風と一緒に登場してつから本編一桁からだもんな!」

はい、得意げな顔しなーい。

そんな顔してるけど、お前を個人としてしっかり書こうって決めたのって前日譚からだからねー。

「はあ?!　おまつ、それ以前から結構俺にいろんなことさせてたよな?!」

させてたねー、ヘリコプターにしてみたり、お茶くみさせたり、お菓子作らせたり、挙句矢の代わりにしたり・・・　うん、我ながら自分に正直に生きてる。

『自分』と『正直』の間に『欲望』忘れてんぞ、馬鹿作者!」

欲のない人間は人間ではありません(▽)(▽)

「開き直んな!!」

んで、宝譚から私に疑問はないの?

「唐突だな、テメーは!」

話ぶった切ってんじゃねーよ!」

私が欲望に忠実なのはお前ら書き出した時からわかってることだし、大体そうでもなきやいろいろ言われることが確定してる恋姫二次なんて書かないっの。

凹んだり、書けなくなったり、忙しくなったりして大変だけど、改めてお前らと話しながらお前達のことを考えたいと思ったのよ。だって大好きだからねえ。

「・・・オメーは真面目なのか、不真面目なのかわかんねーよな」  
さつきから自分で言っつてんじゃん、私は自分の欲望に正直だ。

お前達が好きなことを隠したこともなければ、後悔したこともないし、これからも誰よりも好きなのは私だよ。

「お、おう・・・」

じゃあ、まずお前に言いてえのはよ」

ん？　なんでそんなに顔を近づける？　お前とキスしても嬉しくないし、何かのドアアップってなんか苦手なんだが・・・

「なんで俺、土産物屋で十年待たされたんだコノヤロー」

ああそれ？　番外でそれ一本で書こうと思ったこともあるんだけど、文字数稼げないから延期してたら書くタイミング逃しちゃったんだよね。

「良いから説明しろや！」

こちらに再現VTRをご用意してありますので、どうぞ。

「はあ?!　っーかそれ、再現じゃなくて、お前の生録・・・」

はい、黙ろうねー。

××

「あ×あ×ら、夢那ちゃんったら魏のご主人様を追いかけていくなんて悪い子ねえん」

「そう言いながらもお主も愉快そうではないか。

ん？　貂蟬」

「ん・ふ・ふ・ふ・ふ♪　夢那ちゃんが何をしてくれるか、楽しみだもの。けどまさか、程昱ちゃんが亡くなる直前になってこの子宝に魂譚が宿るなんてねん」

「ほう、そやつか。程昱殿が頭に載せていたそのものか。

愛された古道具には命が宿するというが、まさかこやつに宿るとは…… 奇跡と言わざる得まい」

「そうかしらん？」

「む？ どういう意味だ。貂蟬よ」

「この世界では『名』こそが全てを示すものよん、卑弥呼。

物とはいえ名を与えられ、程昱ちゃんはずっと共に過ごしてきたこの子だもの。命が宿っても不思議なことはないわん。『言』葉を理解する聡とくも賢とい『宝』のような子、それがこの子の名に込められた意味だとするなら、必然と言ってもいいわん。

夢那ちゃんが戻ってきた時、きつと何かをしてくれるでしょうし、

その時は私達の力でこの子もそこにいれてあげましょ♪」

「ふむ、それは素晴らしい考えだな。貂蟬よ」

× ×

「なかなか本題にたどり着かねーんだけど?!」

× × まあまあ、もうすぐだから。

× × 「ふむ、それはそうと貂蟬よ」

「あらん、まだ何かあるの？ 卑弥呼」

「程昱殿とそやつはどこで出会ったか、お主は知っているのか?」

「……? あら、そういえばいつなのかしらん?」

「儂が今、程昱殿を覗いて見たが彼女の頭には湯呑が乗っていたのだ  
が……」

「とりあえず、彼女がいつか来そうな土産物屋にでも置けばいいんじゃないかしらん?」

「夢那ちゃんがこつちに戻ってくる十年前ぐらいから用意して置けば大丈夫でしょ♪」

「うむ。」

では儂は、程昱殿がこの街に近づいたと同時に頭上の湯呑が割れるような呪いを仕込むとしよう」

「卑弥呼！」

「貂蟬！」

『漢女羅武爆我ー、注入!!』

××

と、いうわけだよ。

「前半のいい話はどこ行った?!」

上げたら落とすは基本です。

「オチ扱いか！」

だって、いつから使ってたとか言及なかったんだもん。

かといって一族に代々あんなもんが受け継がれてたらシユールだし、だったら土産物屋とかで出会うのが自然かなと思っただよなあ。

「十年もの間、売れないで土産物屋に置かれ続けた俺の身にもなれ!!」

捨てられなくてよかったね!

「てつめー、覚えてろよ！」

おう、覚えてる覚えてる。明後日ぐらいまでは。

「ぬがー！」

お菓子かな？

「っ！ あー、もうキリがねーから次の質問すんぞ」

どーぞどーぞ。

「白蓮嬢ちゃんに優男の旦那をやるうって決めたのはいつだ？」

樟夏の性格が私の中で完成した時だから、かなり初期から白蓮と樟夏はくつつけることを決めてた。

『道中』の稟視点でわかるように私は白蓮ちゃんのことをかなり高くかつてるし、幸せにしたかったんだよ。

「だから、俺らを白蓮嬢ちゃんに配置したのかよ」

そつ。それに加えて白蓮ちゃんが前に立つても任せられる優秀な妹ちゃんもね。前日譚から誕生した子だけど、この子も愛されっ子なんだよね〜♪

「だから、最初らへんの幽州視点で赤根嬢ちゃんいねーのかよ・・・」

居なかったっていう不自然を補うために赤根には他民族との交流を役目にしてもらったからね。

実際、軍略の稟と経済やら軍略もなんでもできる風、武の星と文武両道な白蓮ちゃんがいるなら幽州は十分だった。なら、赤根ちゃんがすることは他との和を保つことじゃないかなーと。

「けど、あの性格はねーんじゃね？ 豹変しすぎだろ……」

心配と疲労と怒りで振り切れたものだからねえ……

真名に採用した茜も見た目は凄いい味だし、綺麗な茜色を出すのだって根だから地味だよ。

「んじゃ、なんでそれ赤根にしたんだよ」

花言葉もあんまりいい言葉がなくてね、『私を思っ』『媚び』『誹謗』『不信』……あと『傷』だったかな？

「ロクな言葉がねーじゃねーか！」

でも、茜は時代を超えて日本で愛されてきた。万葉集にも歌われたし、薬としてもとても役に立ち、茜色はとても鮮やかで、虫にだってその名前を与えられるぐらい身近だった。

「んで、本音は？」

白蓮ちゃんが白で夏の花なら、妹は赤で秋の花かなあと。

あと、呼びやすい名前がいいなって考えたら割と即決だったね。

「建前いらなくね？」

どっちが建前かなんて私にしかわからないからいーんだよ。

赤と白は意識してたけど、読者が蓮根姉妹って言った時は素直に驚いたわ。その考えはなかった！

「その名称で地味さが増したぞ?!」

姉妹ってだけで派手になる子達が多いからちようどいいんじゃね

? 張三姉妹とか、桃園姉妹とか、虎三姉妹とか……春蘭秋蘭も派手だしねえ。

「それでもしねーと個性に埋もれんだろ、あの中じゃ」

天和と桃香だけやたら似てるし、性格も近いけどな！

「それ、禁句だからな?!」

司馬八達なんて瞳の色以外ほぼそっくりだから私が言えた台詞

じゃないんだけど！

「オイッ！　じゃあ、司馬八達とかどうやって見分けたよ！」

これは私の経験談も入るんだけど、見た目が凄く似てても意外とその人が纏う雰囲気で見分けられるもんだよ？

「いきなり感覚的になったな」

んー・・・　まあ、わかりにくいことだとは思うわ。自分でも『なんとなく』としか答えられんし。

司馬八達に関してはたびたび話してるけど、白陽以外は最初登場させるつもりなかったしね。一応白陽を出した時に全員分の真名は考えたけど、ここまで動いてくれるとは思わなかったし、個性を持ってくれるとも思ってたなかった。

「あの姉妹、自重って言葉知らねえもんな。」

紅陽嬢ちゃんとか、青陽嬢ちゃんとか大人しめの嬢ちゃんらが心配になるくらいに」

マッドサイエンティストな灰陽、ストーカーな橙陽、おしゃれ好きを通り越しても特殊メイクもこなしそうな藍陽、時々とんでもないことをしてかしてくれる緑陽。

素晴らしい、真名通り色とりどりじゃないか！

「自画自賛してんじゃねーよ！」

黒陽も真名通り、ほんのり黒くしつつも黒という色が持つ上品さや他の色と合わせた時の茶目っ気を出せたと思ってる。

「茶目っ気なんて可愛いもんじゃねーだろ、アレ・・・」

黒は白同様に万能色だけどね、白が他の色に合わせつつ強調させるのに対し、黒は自分の色を主張して対立することで他の色を強く見せると私は思ってるよ。

実際、本編・番外問わずに誰と絡ませてもうまくあしらってくれるから助かってる。稟の親友が増えたのも嬉しい誤算だったし、秋蘭と会話させてる時も楽しいからね。

「オメーはよう・・・」

んで、最後の質問いいか？」

ああ、まだあるのね。言ってみ。

「星嬢ちゃんの出番が少なくてね？　っーか、弄られすぎじゃね？」

原作はむしろ弄る側だったじゃねーか」

まずは簡単に答えられる方からいくけど、星が再臨でいじられっ子になったのは口で軍師二人に勝てるとは思えなかったから。むしろ稟と風に弄られたから他を弄るようになったのかなーって考えたら、意外と自然だった。真面目に仕事させたのも二人が仕事しないで遊び呆けるのを許すとは思えなかったからなんだけど、そのせいでツッコミ役が赤根ちゃんになっちゃったんだよなあ。白蓮ちゃんは樟夏と婚約してからはすっぴんラブラブしちやってるし。

「意図してなかったのかよ・・・」

お前、マジで考えて書いてんのか？」

考えながら書いてるよ！　全体の動きを見つつ、個々の性格を崩さないでそれぞれのらしさを全開にする行動を常に考えてる。

再臨の華琳はあくまで私の感じた・考えた華琳でしかないし、私は自分の感じたようにしか原作キャラを書けない。外史の数だけ原作キャラはいると思ってるよ。

「オリキャラも多いかな。」

どの外史でも有名どころは大概出てくるし」

それも語りだしたら長くなるからとりあえず置いとくけど、もう一つの質問は星の出番のなさだっけ？

「そーそー。」

そもそも俺らも合流したばっかだから出番少なくてもおかしくはねーんだけど、星嬢ちゃんは特に少なすぎじゃね？」

ぶっちゃけるとさ、原作でも言えることなんだけど魏組と蜀組の精神年齢に差がありすぎるのが問題なんだよね・・・

「あー・・・」

再臨は白北郷や桃香の成長を促したから原作ほど酷くはないんだけど、それでも魏の中じゃ星の行動って子どもっぽ過ぎて扱いづらい。

ただでさえ皆精神的に老け・・・大人びてるところに華蝶仮面とか、警邏隊に通報されても仕方ないよね！

「けど、その割にや樹枝の兄ちゃんや星嬢ちゃんって仲悪いよな。

優男の旦那とは可もなく不可もない関係だつづうのに」

初対面の人間がいきなり親しい知人ぐらいの行動とつたら、お前は  
どう思う？

「・・・なるほど」

わかったならよし。あと何か質問は？

「あとは・・・ さつき、オメーのポケットから落ちた紙切れに書かれてる『連合I F・宝譚合体ロボット案』と『連合I F・林鶏vs宝譚  
く闘鶏のおこり』ってなんだ？」

連合を考えてる時に出たいくつかのボツ案です☆

「お前、こんなもん本編に書くつもりだったのかよ!？」

え？ こつちがよかつた？ 『腐で結ばれる大陸平定』

「は？ なんだ、そのタイトル・・・」

おおっと、用事を思い出したー。

なので今回はここまで！ このシリーズはあと何回か続く予定なので、また次回く。

「はっ?! おまつ、最後まで勝手気まますぎんだろ!？」

趣味ぐらいは我が道を行こうぜ！